ISSN 0288-688X

北の今・人・明日

Hoppoken 夏

季刊|北方圏

2002.SUMMER.Vol.120

創刊30周年記念特集号

阿蘭陀北方圏

国立極地研究所北極圏環境研究センター助教授 伊藤 一

タクラマカン砂漠横断探検隊

坂東商店代表取締役 坂東 招造

Northern Regions Center (NRC)
社団法人 北方圏センター
(http://www.nrc.or.jp)

京都・桂坂西 CED 1998

街づくりも、ミサワホームの環境保全活動です。

ミサワホームは、住まいをお届けする企業として、街という生活環境のこともトータルに視野に入れています。その土地の気候風土や地形・地勢、生態系・植生、さらには土地の歴史などを把握することにより、自然の摂理に沿った環境をデザインする。それが、ミサワホームの環境調和型の街づくりです。たとえば、写真の「京都・桂坂西CED」。開発にあたっては、電気・電話・テレビ配線および電柱の埋設や、ランドプランニングといった環境設計を重視。住まい手の“街を育てる”という意識の高揚と、街そのものの不動産価値の維持・向上をはかることも、街づくりの大切な要素であると考えるからです。このような街づくりへの取り組みは、各方面から高い評価をいただいており、「京都・桂坂西CED」では「第2回京都市都市景観賞」を受賞しました。さらに10年の歳月を経て、自然が美しく育ち、良好な街並みや住環境を実現した「オナーズヒル新百合ヶ丘」が、99年度「グッドデザイン賞」に選ばれています。また、いち早く取り組んだ定期借地事業という街づくりも、業界No.1の実績。ミサワホームでは、こうした優良な社会資産として次の世代に残せる街づくりを、これからも積極的に推進していきます。

京都・桂坂西 CED 1989

ミサワホームは、地球環境大賞を受賞しました。ミサワホームは、環境保全に貢献できる住まいづくりとライフスタイルの提案をはかってきました。その姿勢と成果が認められ、98年度「日経地球環境技術賞」、99年度「地球環境大賞」などを受賞しました。

ホームページでは、ミサワホームの環境への取り組みや、住まいづくりに役立つ情報を詳しくご紹介。ぜひアクセスください。

インターネットで資料をご請求の方は www.330.co.jp　土地情報をお求めの方は www.mrd330.co.jp

ミサワホーム北海道

本店 www.misawa.co.jp/HOKKAIDO/
〒003-8558 札幌市白石区東札幌2条6丁目8-1 011-822-1111

函館支店
〒041-0832 函館市神山1丁目9-1 0138-55-1611

旭川支店
〒078-8231 旭川市豊岡1条4丁目1-15 0166-35-3300

ミサワホーム帯広
〒080-2470 帯広市西20条南5丁目42番18号 0155-35-3383

釧路ミサワホーム
〒085-0833 釧路市宮本2丁目5番1号 0154-42-0111

住まい3代・100年のおつきあい

MISAWA

ミサワホーム

〒003-8585札幌市白石区東札幌2条6丁目8-1
ミサワホーム寒地研究所

タクラマカン砂漠横断探検隊

※本文84～88ページをご参照ください。

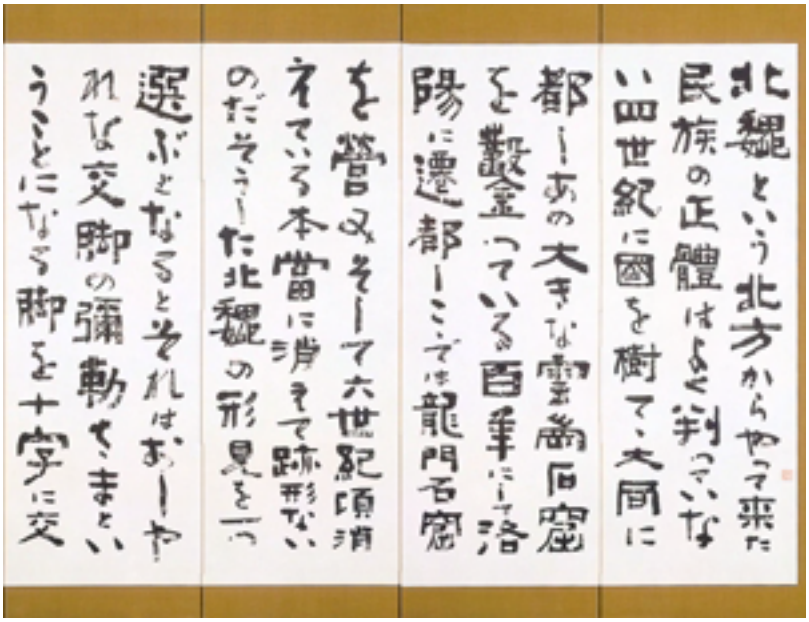
夕ぐれ時、ラクダのシルエット

高い砂山を目指して、右側白いのは残雪

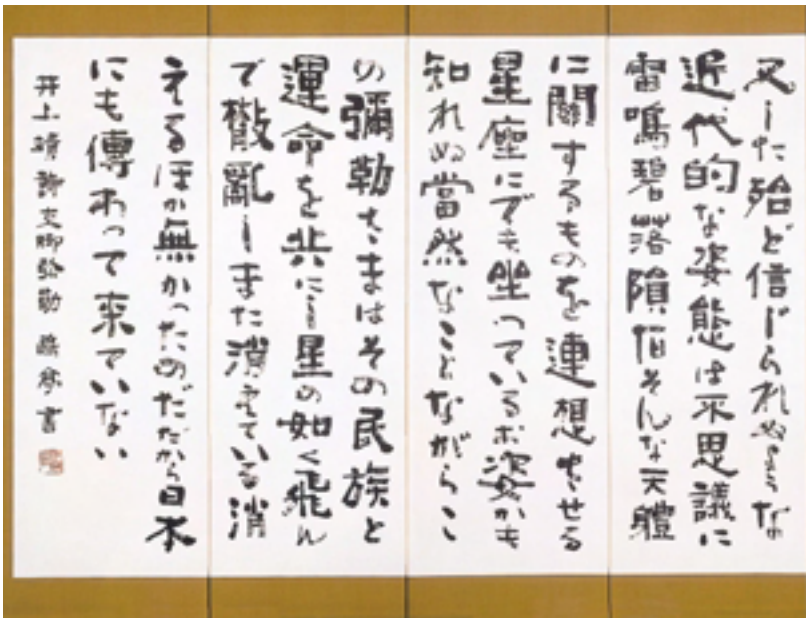
高い砂山を乗り越えて、やっとの下り坂だ

75頭のラクダのキャラバン

まだまだ続く砂山



北魏という北方からやって来た民族の正体はよく判っていない。四世紀に国を樹て、大同に都し、あの大きな雲崗石窟を鑿っている。百年にして洛陽に遷都し、こゝでは龍門石窟を営み、そして六世紀頃消えている。本当に消えて跡形ないのだ。そうした北魏の形見を一つ選ぶとなるとそれはおしゃれな交脚の弥勒さまということになる。脚を十字に交



又した殆ど信じられぬような近代的な姿態は不思議に雷鳴、碧落、隕石、そんな天体に関するものを連想させる。星座にでも坐っているお姿かも知れぬ。当然なことながら、この弥勒さまはその民族と運命を共にし、星の如く飛んで、散乱し、また消えている。消えるほか無かったのだ。だから日本にも伝わって来ていない。

金子 鷗亭
「井上靖詩 交脚弥勒」
1986年（昭和61年）
138.0×416.0cm
屏風八曲一隻
（実際の作品は８曲が連続している）
北海道立函館美術館　蔵

金子 鷗亭
「井上 靖詩 交脚弥勒」

金子鷗亭は1906（明治39）年、松前郡雨垂石村（現・松前町静浦）に生まれた。小学生のとき担任教師に激賞されて書に関心を寄せ、札幌の鉄道教習所にすすんでからは大塚鶴洞に習い、古典の書を直接学ぶようになる。初めて臨んだ古典は北魏時代の楷書。活字とは異なり一字一字が表情豊かで複雑な構築性をもつことに驚いた鷗亭はその後、川谷尚亭の指導も受けて様々な古典を臨書し、各書体の書法や造形美を追究していく。

本格的に書家の道を歩む契機となったのは生涯の師・比田井天来との出会いである。師風伝承を嫌い、書に芸術性を求める天来の思想と人柄は鷗亭の心を動かした。上京後、同志と研鑽を積みながら学生時代からの関心と研究に基づいた「新調和体」論等を発表。現代人が読み親しめる題材を多様な書体と線表現の可能性をもった漢字を基調に書くべきという主張は、今や現代書の一大ジャンルとして確立した「近代詩文書」理論の根底となる。鷗亭は書法の異なる漢字と仮名を調和させるため、古典の研究とともに「近代詩文書」の創作に長年の試行錯誤を重ねた。書業60年の集大成ともいえるこの作品は、昭和61年度毎日芸術賞を受賞。「芸術として今日性がある」隷書体を基調に、字体や字粒に変化をつけた構成は読みやすく、しかも生命感とリズム感に溢れている。井上靖の文学のなかでも、古代中国文化への憧憬に満ちたこの詩文には強い共感を覚えたのだろう。推敲を繰り返して書いた一点は、書の美しさと逞しさが見事に融合し、鷗亭の代表作となった。

当館はこの年開館、同時に鷗亭記念室が開室し、以来、寄贈された作品や古美術を常設展示している。今年度は、昨年11月に逝去した鷗亭を偲び、四季を通じて書業を回顧する。夏期は「書家・鷗亭の歩んだ道」として上述した3人の師の作品とともにこの作品を紹介する予定である（7／16～10／27）。鷗亭80歳の渾身の大作を、是非ご覧頂きたい。

（北海道立函館美術館学芸員 齋藤 千鶴子）

同美術館鷗亭記念室では左記のとおり、年間展示を予定しています。

春　松本春子と金子鷗亭（～7／7）
夏　書家・鷗亭の歩んだ道（7／16～10／27）
秋　鷗亭が見た中国（11／3～1／13）
冬　鷗亭―近代詩文書を創る（1／19～3／23）

Art of the North

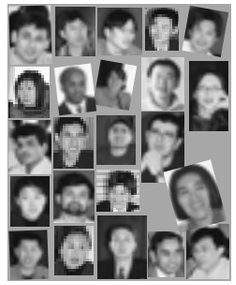
北海道立函館美術館
〒040-0001　函館市五稜郭町37番６号
TEL0138-56-6311
FAX0138-56-6381
http//www.dokyoi.pref.hokkaido.jp/hk-hakmu
開館時間　午前10時～午後５時（ただし、展示室への入場は４時30分まで）
休 館 日　月曜日（祝日と重なる場合は開館）／祝日開館に伴う振替日／年末年始／展示替期間など
観 覧 料　常設展：一般100(80)円、大学生60(40)円
所蔵品展：一般300(250)円、大学生150(100)円
いずれも、小中学生、高校生、65歳以上の方、身体に障害のある方などは無料
特別展：別に定める
交通案内　JR函館駅前から函館バス105系統／106系統で「五稜郭公園入口」下車、徒歩３分。函館駅前から「湯の川方面行き市電「五稜郭公園前」下車、徒歩７分。

北海道立函館美術館紹介
北海道立函館美術館は、函館および道南地域における美術文化のセンターとして1986年に開館。以来、常設展示室では、道南の美術および現代の美術を展示し、鷗亭記念室においては書家・金子鷗亭を中心として日本の書や中国・朝鮮の書、絵画、陶磁器などを含む東洋美術のコレクションを紹介するなど。近代以降のすぐれた作品を収集する一方、さまざまな時代、分野にわたる企画展を開催している。
また、講演会や、講座をはじめとする多彩な教育普及活動を展開している。

〔表紙題字は毎日書道展審査会員の加藤幸道氏〕

CONTENTS

＜表紙説明＞
創刊30周年記念号の特注版。北方圏センター事業部が主催する「留学生フォーラム」に参加した留学生23人の表情豊かな顔をコラージュ風にアレンジして、一つの群像に表現した。23人の国別は、多い順に中国８人、韓国４人、バングラディシュ３人で、計11カ国。在籍学校別では、北大、帯広畜産大、北見工大、北海道教育大札幌校、苫小牧駒沢大など11大学・大学院と２高等専門学校。



巻頭辞 「Hoppoken」創刊30周年に寄せて ……北海道知事 堀 達也 10

カメラ・ルポ タクラマカン砂漠横断探検隊 ……3

創刊30周年記念特別企画

「Hoppoken」創刊30周年に当たって ……㈳北方圏センター会長 泉 誠二 13

「北方圏と私」
新たな世紀に新たな脱皮を ……㈶北海道環境財団理事長 辻井 達一 14
浸透する市場経済 ハバロフスクでの観察 ……北海道大学名誉教授 望月 喜市 16
北方圏センターは独創的な一大プロジェクト ……在札幌ノルウェー王国名誉領事 滝澤 靖六 18
発想を鍛えるのは継続する力 ……元毎日新聞北海道支社報道部長 武田 文也 20

特別寄稿／12年目を迎えたデンマーク鉄道との姉妹鉄道提携 ……北海道旅客鉄道㈱会長 大森 義弘 22
座談会「異文化理解」 ……司会 札幌大学文化学部教授 御手洗昭治 24
留学生フォーラム●「北海道へのメッセージ」～北の大地の留学生から～ ……34

「北方圏と私」
私と北方圏諸国とのかかわり―カナダ、カナダの20年― ……道都大学美術学部教授 佐藤 勝泰 42
地球の上の方で ……家具デザイナー 伊藤 千織 44
アルメフォースご夫妻のこと ……旭川大学教授 川村 喜芳 46
「北方圏」から知恵を頂いて ……元北星学園大学講師 伊藤祐紀子 48
私と中国のかかわり―10年の活動を省みて― ……江別日中友好の会会長 長谷川 享 50

特別寄稿／北方圏フォーラム子供環境会議 ……北海道総務部知事室国際課主査 江本 健道 52
特別寄稿／北方都市市長会議の20年 ……札幌市総務局国際部交流課北方都市市長会担当係長 角田 貴美 54
「Hoppoken」の30年、表で見る ……58
「海外レポート」寄稿者によるインターネット会議 ……114

北欧から探る北海道活性化のヒント PART2 ……北海道東海大学教授 川崎 一彦 64

アルヴァー・アールトの住宅 北海道展を開催して ……北海道展実行委員会委員長 圓山 彬雄 68

阿蘭陀北方圏 ……国立極地研究所北極圏環境研究センター助教授 伊藤 一 72

タクラマカン砂漠横断探検隊 ……北見市在住 坂東商店代表取締役 坂東 招造 84

チリ、ボリビアフォローアップ調査に同行して（ボリビア編） ……北方圏センター国際協力部 新矢 泰久 94

世界はひとつ 民俗学の周縁から **アイヌについて④** ……北方圏センター調査委員 山中 文夫 98

わがマチの国際交流
●北広島市／カナダ・サスカチュワン州サスカツーン市 サスカツーンのさわやかな風を感じたい ……90

SAPPOROの熱い7日間 ……82

北方圏センター・法人会員紹介㉙ ホクレン農業協同組合連合会 ……106

連載
アングル⑩ ドロミティ峡谷の四季 ……撮影・文 綿引 幸造 81
北の街角30 ……絵と文・画家 大久保一良 76
ルーツで語る北海道の人物 ……苗字研究家 岸本 良信 96
漫画・そのうちロシアへ行く君へ ……ナカムラ・ジュンコ 113
こんにちはイランカラプテ ……道都大学教授 飯部 紀昭 104

海外レポート
サンチョ・パンサの帰郷 ……ロシア・ハバロフスク市在住 岡田 和也 122
日本着想庭園 ……デンマークの日本庭園 小野寺綾子 124
オスロの五月 ……ノルウェー・オスロ市在住 木村 博子 126
マスカラの強み？ ……ラトビア・リガ市在住 黒沢 歩 128
「ミートアンドポテト」地域とバレエクラス ……アメリカ・デトロイト市在住 鈴木いづみ 130
カナダの平原州に住んで ……カナダ・サスカツーン市在住 高谷 尚子 132
ケベックってどんなとこ？ ……カナダ・オンタリオ州在住 田中 勉 134
ブルース・フェスティバル ……スウェーデン・ティンメナッベン在住 藤倉・カールソン・篤子 136

NRCだより（総会報告） ……149
編集後記 ……150

連載㉕新・北の美 ……6
北の自然 …文・小川 巌 写真・山田 良造 80
連載・第49回 Mr.ターノフのちょっと気になる 102
北の花 ウイキョウ ……105
さる～ん ……149

「Hoppoken」創刊30周年に寄せて

北海道知事　堀　達也

季刊誌「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」の創刊30周年を心からお祝い申し上げます。

季刊誌「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」は、北方圏センターの前身である北方圏調査会の機関誌として創刊されて以来、道内の国際交流の情報誌として、会員の皆様はもとより広く国際交流に関心を持つ道民の皆様に親しまれてきました。

この間、北方圏センターは、北海道の北国らしい豊かなアイデンティティーの創造を目指し、民間における北方圏交流の担い手として、積極的な交流活動を展開してこられました。

最近では、平成８年から国際協力事業団（ＪＩＣＡ）が設置した「北海道国際センター」の管理運営の受託や、平成10年には北海道の国際交流・国際協力の中核的組織として「地域国際化協会」の認定を受け、北方圏のみならず世界各国との交流や、開発途上国から

●巻頭辞

の研修生の受け入れなど、国際協力の推進にも積極的に取り組まれています。

こうした北方圏センターの活動は、北国の冬や雪に親しむ生活意識の定着や道民の国際性の涵養にとどまらず、本道のまちづくりや新しい生活文化の創造の礎となって、北海道の振興に大きく寄与してこられたものであり、歴代の会長を始めとする役員、会員の皆様の御尽力に対して深く敬意を表します。

21世紀を迎え、世界では経済や社会、文化などあらゆる分野においてグローバル化、ボーダレス化が進み、様々な面で世界との相互依存関係が深まっております。

このような中で、北海道は北方圏とアジア・太平洋地域を結ぶ北の交流拠点としての地理的条件や、多様性を認め合う開かれた地域社会などの特性を生かしながら、世界の人々が集う場として、国際社会の平和繁栄に貢献していくため、一層の国際交流や国際貢献に取り組んでいく必要があり、北方圏センターへの期待とその果たすべき役割は益々高まってきています。

道としても、姉妹交流などの友好親善交流を始め、北方圏の国際的な地域連合ともいうべき「北方圏フォーラム」への参加などを通じ、経済や環境、学術、文化など世界の様々な国や地域との交流・協力に取り組み、道民の皆様とともに北海道の一層の国際化に努めていきたいと考えています。

結びに、創刊30周年を契機として、北方圏センターが北海道における国際交流・国際協力団体の中核として、益々充実、発展され、幅広い貢献をされますよう心から御期待いたします。

お取引に応じて、お得なサービスがステップアップ！

道銀取引優遇サービス［ステップドゥ］

ステップDo

ATM時間外手数料無料［他行ATMを利用した場合の時間外手数料は対象外です］	振込手数料無料［キャッシュカードによる道銀本支店あてのATM振込に限ります］
国債・地方債 保護預り手数料無料（年間1,260円〈消費税込〉）	抽選プレゼント最高3万円［当選金の20%は税として源泉徴収されます］
提携加盟店での優待サービス［最大20%OFF］	他行ATM利用手数料キャッシュバック［1回につき105円］
テレバン（インターネット・モバイルバンキング含む）年間会員手数料（1,260円〈消費税込〉）無料	道銀カード利用額に応じて0.5%をキャッシュバック
トラベラーズチェック発行手数料 50%OFF	外貨両替手数料（米ドル現金）1ドルにつき1円優遇

［ステップドゥ］にはお取引条件があり、お申し込み手続きが必要となります。

ケータイで手軽にお取り引き。道銀のモバイルバンキング。

mode　EZweb　SKY

道銀の「モバイルバンキング」は、「iモード」「EZweb」「J-SKY」でご利用いただけます。

■携帯電話でできるお取り引き

残高照会　取引明細照会　振　込　振　替

24時間ご利用いただけます

■振込手数料（電信扱）〈消費税込〉

道銀本支店あて	105円	他行あて	420円

■会員手数料〈消費税込〉　年間 1,260円

※道銀の取引優遇サービス［ステップDo］のファースト・セカンド・サードのいずれかに該当するお客様は、年間の会員手数料が無料でご利用いただけます。

「モバイルバンキング」「インターネットバンキング」「テレホンバンキング」同時申込OK！

好評受付中！お申し込みはカンタン！

詳しくは店頭の説明書および当行ホームページでご確認いただけます。

平成14年7月1日現在

北海道銀行
http://www.hokkaidobank.co.jp

北方圏センターで、札幌プリンスホテル直営のおいしさをどうぞ。

「レストランプリンス」のランチメニュー

ランチタイム:11:30A.M.～2:00P.M.

洋食・中華・和食を週替わりでご提供いたします。

バラエティランチプレート

（お料理とスープ・サラダ・ライスのセット）¥800（税込）

下記の順で、週ごとにお料理が替わります。

洋食メニュー → 中華メニュー → 和食メニュー → 洋食メニュー ……（繰り返し）

ランチメニューご利用の方は、コーヒーを100円（税込）でお召しあがりいただけます。

［メニューの一例］

洋食の週

●カレー風味のオムライスとボイルソーセージ

●サーモンステーキと帆立貝、エビフライ

中華の週

●鶏のから揚げピリ辛炒め・エビ入り春巻

●五目野菜入り焼きそば

和食の週

●天丼と十割そば（道産そば粉）

●鮪の山かけとサバのみそ煮

■アラカルトランチメニューも多彩にご用意しております。［11:30A.M.～2:00P.M.］

ご会食にもおすすめです。スペシャルランチ　落ち着いた雰囲気の個室をご用意いたします。　1名さま…¥3,000　※料金には税金・サービス料は含まれておりません。※前日までのご予約に限らせていただきます。

営業時間　11:30A.M.～5:00P.M.
定休日　土曜・日曜・祝日

北海道庁別館12階北方圏センター内
RESTAURANT PRINCE

札幌市中央区北3条西7丁目　〒060-0003
TEL.(011)271-6857

「Hoppoken」創刊30周年に当たって

㈳北方圏センター会長

泉　誠二

北海道と気候風土を同じくする北方圏諸地域との交流を盛んにし、北国、北海道にあった生活文化、経済社会を創造するという先駆的な「北方圏構想」、その担い手となる「北方圏調査会」(北方圏センターの前身）が誕生したのは、国際都市・札幌の黎明となる札幌冬季オリンピックの前年でした。

以来30年、北方圏センターは国際交流推進、北方圏調査のシンクタンク・データバンクとして、北海道の国際化に大きく貢献してきました。

現在の北海道を取り巻く環境は非常に厳しいものがありますが、自立した北海道を創造する動きの萌芽として、各地でたちあがっている産業クラスターを構想する契機となったのも、フィンランドのオウルをはじめとする北欧先進地域の成功例でした。そのフィンランドはこの10年間で国際競争力が世界のトップクラスに躍進しており、経済構造転換の成功要因等について北方圏に学ぶことは、今の北海道にとってますます重要です。

北海道の国際化が多様化する中で、北方圏センターはこれまで蓄積した知的資源を北方圏以外の地域との交流に活用することが求められており、南米や東南アジアとの交流、開発途上国からの研修員受け入れなど、事業の拡充・強化を図っております。これもひとえにこれまで皆様に支えられて進めてきた北方圏交流が高く評価されたことの現れであります。

季刊誌「Hoppoken」も創刊以来30年を迎え、国際交流を通じて北海道の活性化を考える人々の集いの場となり、北海道の未来に向けたアイデアが生まれる場となりますよう、内容の充実に努めて参りたいと思います。

この場を借りまして読者の皆様に感謝申し上げますとともに、より一層のご声援をお願い申しあげる次第でございます。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

新たな世紀に新たな脱皮を

(財)北海道環境財団理事長
辻井 達一

私とＨｏｐｐｏｋｅｎとの関わりは、北方圏センターの創立そのもの、その創世紀から、ということになります。つまり「北方圏センターを創る」ということから始まったわけです。北方圏調査会からは30年、そして北方圏センターが設立されて25年ですから、当時は私も（そしてもちろんそれに関わった人たちも）共に若かったのはもちろんです。その若き仲間だった熊谷直勝さんも、伊藤隆一さんも、鬼籍に入ってしまいましたが、彼らと最後には支笏湖畔に合宿して議論し、構想をまとめ上げたのが、つい先頃のように思い出されてなりません。

そもそも北方圏とはどういう圏域として捉えるか、というのが最初の問題でして、寒冷な冬はあるとは言っても、夏には稲が育つ北海道をどうして北方圏として位置付けるかは、実はなかなか難しいことでした。しかし、これは亜寒帯性の針葉樹林とそれに基づく生物の環境があることで何とかクリアしました。

同じ北方に位置する地方が、必ずしも國という形や中央政府を介さずに、直接情報交換をするべきだ、というのは、今でこそ地方の時代とか分権とか言われますが、当時としてはかなり画期的な論理だったのです。北九州の東南アジア構想とか、新潟などの環日本海構想なども、これに触発されたものですから、私たちは先見の明を誇ってもいいので、北方圏センターもまたしかり、その活動はもっと評価されていいはずではありませんか。

さて、その活動の一つで、私の関わった事業に「北海道アラスカ少年交流キャンプ」というのがあり、昭和57年（１９８２年）でしたか

カナダ道路環境調査で大きなサポートを受けた平塚保之氏（エドモントン在住）。北海道で公私にわたって援助を受けた人も多い。（右は筆者）

ポーテージ氷河のアラスカ少年交流キャンプ一行（1982年）

ら、これも20年前のことになり、参加した子供達にしてもその多くは30歳を越しているはずで、今、会っても到底、判らないでしょう。実際、時折り、「一緒にアラスカへ行きました」という人に出会うたびにびっくりするものです。

この時はデナリ（マッキンレー）国立公園でヘラジカやムースにも会いましたし、ポーテージ氷河では大人はウイスキー、子供はジュースに氷河の氷を入れてそれが弾ける音を楽しんだりもしたものです。アンカレジではアラスカの子供たちと野球をしたりもしました。その写真を1枚ここに掲げておきます。顔は豆粒ほどにしか見えないと思いますが懐かしく思い出す人がいるでしょう。

このキャンプは、アンカレジが北回り空路の要衝だった時代でもあったこともその実現を可能としたものでした。アラスカ在住の日本人や商社の方々も大いに協力して下さいました。シベリア上空が飛べるようになり、また、飛行機の航続力も増してアンカレジ経由の必要が無くなり、それはそれこそ北方圏を近づけたわけですが、アラスカに関しては反対に交通の点で遙かに遠くなってしまったのがいささか寂しいことだと思います。

さて、最近、やや専門の立場から北方圏センターの活動にお手伝いする機会が出てきたのは私にとってうれしいことでした。例えば北欧やカナダなどをテーマ・エリアとしての農村地域の道路整備や景観の問題とか、北海道の農村の活性化事例を発展途上国への参考とする研究などがそれでして、センターの若いスタッフと共に事例を集めることは、楽ではないにしても面白い仕事だったのです。冬のカナダではひどい吹雪の中でドライブをしたり、同行のスタッフの一人、高桑さん（紀和・前北方圏センター調査研究部）が熱を出してダウンしたりという事件もありました。こうなると命を賭けて、というのも大げさではなさそうです。

北方圏域の研究というのは、いわば自前でもずっとやって来ていまして、中国東北部の大興安嶺の森林調査、東シベリアのサハ（ヤクート）共和国の森林と湿原調査、それにサハリンの海岸草原調査などもそれです。私の北大在籍中には千島への渡航はまだ困難でしたが、今は若い研究者がほとんど毎年のように出かけるようになりました。

そもそもシベリア、サハリン、沿海州、大興安嶺、モンゴル、千島列島、そしてカムチャッカやアリューシャン列島など、まさに極東の北方圏は北海道の研究者にとっては昔から大きな、そして興味あるフィールドだったのです。その時代からの資料や標本の集積は膨大なものです。

それを活用しない手はないはずですし、相互に大きな効果をもたらすでしょう。こうした資料の集積はこれからも続けるべきですが、集積だけなら大学でもできることですからセンターとしてはリファレンスサービスが必要でしょう。折角、優れたホームページが出来たのですからそれを活用すればいいわけです。

この稿を書くにあたって、北方圏センター10周年記念（平成元年）の記事を読み返してみました。それには当然の事ながら発足当時のさまざまないきさつが述べられています。古いことを書くとなるとしばしば回顧録的になるものですが、それはそれとして懐かしがっているだけでなく、次の時代に私たちがどう動くべきかを考えるべきでしょう。Ｈｏｐｐｏｋｅｎについてもしかりで、30年を区切りと考えるならば、新たな世紀に対応できるような変身ないしは脱皮を期待したいと思います。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

浸透する市場経済

ハバロフスクでの観察

北海道大学名誉教授
望月 喜市

日本から一番近いロシアの大都市はハバロフスク市である。アムール、ウスリー、松花江の3大河川の合流点に位置し、河川交通と極東航空の拠点となっている。新潟空港から1時間40分程で行くことができる。この都市の近郊にある経済研究所との付き合いはもう15年ほどになる。都心から研究所までバスで40分以上かかる。周辺には食堂や商店がほとんどないので、研究所内の宿泊施設に滞在すると、毎日都心行きバスや電車に乗らなければならない。この街にどのように市場経済が浸透していったのか、バスや電車をとおして観察してみた。

ロシアは発足直後価格を自由化した。そのため今まで抑えられていた国定物価が堰を切ったように暴騰し、人々の生活をめちゃめちゃに破壊した。市場経済化はそこから這い上がることから始まった。バス・電車の最初の変化は、切符乗車が始まったことである。ソ連時代は多額の補助金をベースに極端に安い運賃が設定され、その支払いは乗客の自主性に任されていた。市場経済化とともに多数の無賃乗車を見逃すゆとりが市当局になくなった。車掌が乗り込み、バス内で切符を売るようになった（受益者負担原則の浸透）。つぎに国有企業の民営化政策が始まると、市バスに並んで個人バスが同一路線に参入してきた（起業の自由）。おかげでバスの待ち時間が短くなった。当時の運賃は個人バスのほうがちょっと高かったが、人々は個人バスがくれば、安い市バスを待

筆者の原稿を掲載する40号

つことなしに、さっさと乗り込んだ。これは意外だった。個人バスは、ライセンスをとった運転手がどこからかポンコツバスを探し出してきてバス路線に参入したものだ（営業の自由）。多くの個人バスは天井が低く腰掛も窮屈で汚いが、ドレスアップした美人もさっさと乗り込んでくる。最初は運転手自身もしくは助手が、運賃を降車乗客から現金で受け取っていたが、これでは売上税がとれないとあって切符販売が義務づけられた（税制整備）。バス停に屋根がつくようになり、ついでパンの出店を併設するバス停も現れた（隙間産業への参入）。出店は鉄格子でガードされ盗難に備えている。鉄格子スタイルは街の新聞・雑貨売りの小屋（キオスク）でも同様だ。客にとっては雑誌や新聞を選択するのに窓口が小さいので真冬はとくに不便である。しかしカネが万能の世の中になって窃盗犯が激増したので、鉄格子は不可欠なのだ。空き地の一部を囲い込んで有料駐車場を経営する商売も登場した。空き地利用でカネを稼ぐことは、ソ連時代には夢にも考えられなかった（効用の販売、レント経済の発生）。そのうちバスや電車が車体に広告を付けて走るようになった。電車・バスとまったく無関係な広告は、人々に違和感があった。現在ではテレビはもちろん新聞・雑誌のいたるところに広告が氾濫している（需要の発掘）。驚いたのは幹線道路沿いに、約10メートルほどの高さの縦横4×8メートルほどの広告専用の鉄塔が次々に出現したことである。この事業が成立するためには、鉄塔の作成と看板をプリントする大型コピー機械への設備投資が必要であり、持続的に広告主が現れるという経営上の見通しがなくてはならない。一方、費用対効果を睨んだ広告の発注者と、広告のデザイナーも必要だ。われわれにとっては見慣れた広告塔でも、その背後にはこうした関連産業の浸透がある。

極東はプーチン政権が設定した7つの連邦管区の1つ極東管区になり、その首都としてハバロフスク市が指定された。その前後からイシャーエフ現知事は、ハバロフスク市に帝政時代の歴史的建造物を再建する観光政策を開始した。ハバロフスク駅の改修、ロシア正教会の復元（半年ほどで完成）などの他、中央広場に美しい噴水公園を造り、市民に憩いの場を提供した。ショッピング街には、モスクワのミニアルバート街を模した街灯を設置し、色彩煉瓦を歩道に敷き詰めた。ネオン広告も登場し、ウインドウショッピングを楽しむことができるようになった。ハバロフスク市は現在も絶え間なく変貌し、美しくなっている。この都市は一見の価値がある。

ところで、このような機会なので、北方圏センターへの期待を付言したい。それは、研究調査機能の拡充整備である。「センター」はここ数年燃料エネルギー関連の優れた調査を実施してきた。こうした資料の活用を道民に奨めるだけでなく、研究調査スタッフ自身がこの問題の専門家として、今後の調査方向を決め、研究をリードする力量を発揮していただけないだろうか。また研究スタッフが、他の研究機関と連携し、北海道と北方圏諸国・諸地域を巡るホットな課題研究の優れた組織者になって欲しい。北海道の生き残りをかけた看過できないたくさんの問題を解決する先進的事例や経験、国際関係問題が山積している。調査研究部は良き研究者であり、同時にすぐれた研究組織者であってほしいものだ。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

北方圏センターは独創的な一大プロジェクト

在札幌ノルウェー王国名誉領事
札幌オーバーシーズ・コンサルタント社長
滝澤　靖六

季刊誌「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」が創刊30周年を迎え、心よりお祝いを申し上げます。

新千歳空港に発着する航空機から、何度も北海道の美しい大地を目にしたとき、私の心には数え切れないほど訪れている北方圏の国々の冴え、澄んだ風景が重なります。38年前、初めて海外出張し、到着したのがデンマークのコペンハーゲンでした。北方圏とのお付き合いの始まりです。

この街にすでに１００回は行っているでしょう。この頃は東京にでも出かけてくるという、身近な気分になっています。それほど、北方圏の国々には親近感があります。

私自身は北海道の経済人として、いわば草の根の「民間外交」の一端を微力ながら担っている自負があります。国や人種、言葉を超えて基本は人と人の付き合いです。当然ながらいろいろなエピソードも飛び出します。いくつか紹介しましょう。この頃、日本の国会議員や外務省など政界・官界が大騒動となっています。眉をひそめている人も多いでしょう。ノルウェーのフィヨルドと青空の美しい港町・オーレスン市を訪れたとき、水産加工会社の女性社長と会食する機会がありました。同社は日本はもとより世界各国に輸出し、業績は好調です。

加工工場の視察も終わり、街で歴史のあるレストランで女性社長はサーモンなど持参し歓待してくれました。女性社長は日本でいえば政務次官クラスの政府高官の職を辞し転身

友人の船で小旅行。初夏のストックホルムにて

した方です。私は「どうして、政府高官を辞退され、私企業の社長になられたのですか」と聞きました。

女性社長は「どうしても政府高官の立場が長くなると、その立場からだけ考えてしまい、民間の人々の心を忘れてしまいます。私は人そのものと、家庭を大切に思います」と笑みを浮かべました。正直なところ、水産物の輸入だけでなく、このような考え方も輸入した方がいいのでは、と私は思った次第です。

ところで、北欧といえば、サウナを連想する方も多いでしょう。スウェーデンの冬は、ウメオ市、キルナ市に出張のたびに誘われます。オフィスの地下にサウナがあり、時差ボケを直し、疲れをとるには良いものです。

ノルボッテン県の知事が公邸に招待してくれたときです。てっきり夕食会と思って出掛けたら、「本日はサウナパーティー」といわれ、びっくり。サウナに入ってみんなで汗を流し、コミュニケーションを取る。社交の場なんですね。日本でいうなら、さながら腹を割って話す「裸の付き合い」です。「郷に入れば郷に従え」といいますが、日本人は公衆浴場や温泉地で大勢の人と一緒に入浴することは一般的ですから、こうしたサウナの付き合いはそれほど苦にはならないでしょう。私もじっくりと汗を流し、楽しみました。

ゴルフでこんな事もありました。6月末のストックホルム郊外のゴルフ場で、妻を同伴でプレイしたときです。妻の乗ったカートが下り坂を池に向かって驀進、池に突入しました。妻は直前で飛び降り、危うくセーフ。カートはブクブクと沈みました。

驚いた私は気が動転し、そのうち人がどんどん集まってくるし。幸い、妻はけがもありませんでしたが。駆けつけてきた人たちに、私は苦し紛れで「ストックホルム　イズ　ホット。ソウー　マイ　カート　イズ　スイミング」（ストックホルムが暑いので、私のカートは泳いでいるんだ）。

後日、妙な日本人夫婦の話が地元の新聞記事になり、私の元に当地の友人から送られてきました。これも四角四面と見られがちな日本人に親近感をもってもらえる民間外交の一つと、私は自分にいい聞かせています…。

個人的な失敗談にまで話が行ってしまいましたが、北方圏交流は北海道が独自に世界に発信した道民の知恵です。日本という国の枠にとらわれず、ともすれば中央に依存しているといわれる北海道が自ら種をまき、育ててきた独創性のある一大プロジェクトです。

発足当時に考えた北方圏の意義や課題も30年を経て、多様な面で変化もあるでしょう。しかしながら、激動する世界にあって、いかなる国も変化への対応を逃れることはできません。これは知恵を絞って対応していかねばなりません。また、北方圏交流は世界に目を開く、精神的な支柱にもなり得ます。当然ながらこうした国際交流は世界平和に資するものです。その時その時の掛け声はいいが、短期間で看板倒れ、頓挫する一過性のプロジェクトとは質を異にしています。

私は日本の国の外交がこれほどまでに世界に問われているとき、北海道、道民が30年間、築き上げてきた北方圏センターは非常に価値あるものだと思います。前身の北方圏調査会の活動から紐解くと、支えてきた人たちの取り組みはさらに長期にわたっており、その努力に心より感謝したいと思います。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

発想を鍛えるのは継続する力

壮大な実験はやっと本題に

元毎日新聞北海道支社報道部長
武田 文也

茶の間の主役は真っ赤に燃えるまきストーブだ。家族はそのストーブを囲んで「石炭とは違ってふっくらした暖かさがいいんだよなぁ」なんて具合に団らんを過ごす。でも玄関に通じる背後のガラス戸が屋根の雪の重さでゆがんでいるのだろう。背中の方はすき間風がすうすうと。「今夜もしばれるぞ」「春はまだ遠いなぁ」……。

昭和50年11月末。毎日新聞北海道支社の会議室では新年の連載企画で「北方圏」を取り上げようと煮詰め作業に入っていた。「首をすぼめて寒い冬が通り過ぎるのを待つ」――少年時代から聞かされてきた冬の生活の知恵。そのことが戸惑いとともに私の脳裏をかすめた。なにせ「冬の寒さを嘆いても仕方ない。むしろ利用して楽しもう」という発想だ。室内にこもりがちな従来とは全く逆、衝撃的だった。

題は「北からの出発」と決まった。北方圏センターの前身である北方圏調査会の設立は昭和46年4月であり、「北方圏」はまだまだ、ごく一部の人たちの用語でしかなかった。だから北方圏交流推進委員会の動きなどを盛り込んだ内容なのに、あえて新造語は避けた。「発想を変えよう」という部分に力点を置いたわけだが、何のことはない、それは読者より前に自らに向けられた言葉であった。

あれから30年近くが過ぎた。季刊誌「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」の年輪と重なる歳月である。それにしてもその後の展開はダイナミックであった。北方圏センター設立10年を記念して昭和63年春に刊行した「新　北方圏時代」では取材・編集に携わった。冒頭の戸惑いはすでに霧散していた。取材の中で目の当たりにしたの

筆者が取材・編集に携わった「新 北方圏時代」

は、人々の思考力と果敢な行動力だった。北の冬を楽しみ、風土に根ざした生活の仕組みを作りあげようとする想像力と熱気。北海道のあちこちで展開される試みが、私の従来思考をあっさり一蹴した、と言ったほうが正確だろう。

歩くスキー。北海道教育大の今村源吉教授（故人）は北国の生活スポーツとして着目し、昭和40年代の初めから研究と実践を繰り返していた。その慧眼が普及をしっかりと支えたことは言うまでもない。池田で滝川で常呂で、カーリングは地域の人たちが主役だった。ストーンは小型のガスボンベをつぶして使い、ブルームは竹ぼうきで代用した。全国の耳目を集めた長野の冬季オリンピックの活躍に先立つこと18年、笑えない草創期のエピソードである。昭和30年代の半ばまでノコクズやモミガラは住宅の保温材（断熱材）としてはっきり位置付けられていた。こんな時代を動かすのに費やした人々のエネルギーも垣間見た。

北海道は確かに変わった。

ひと世代の歳月は、北方圏構想を大きく育んだ。

しかし今、あの時の熱気を探すのは難しい。北方圏という言葉にひところの躍動感はない。北方圏センターの会員も減り続けている。すっかり定着したと言うのか。目標に到達し、その役割りを終えたということなのか。

北方圏構想は国際化とか意識の変革といった言葉で表現されることがある。国際化の線上には地域の国際交流、国際理解があり、後者には風土・環境に対する認識の変化、発想の変換、生活の変革がある。生活の変革は北海道の自立を促す経済の確立へ進み、いつか社会全体を組み替える力になるだろう。温帯・本州とは異なる亜寒帯・北海道が取り組む独自文化・経済の創造。壮大な実験である。わずか数十年で完結する、ちっぽけな実験ではないはずだ。「変わった」と過去形で語るにはあまりに早計。せいぜい「変わりつつある」ではないか。

そう思って落ち着くと、再び見えてくるものがある。学習するに足るお手本が北方圏諸国にはまだたくさんある。例えば北海道科学技術総合振興センターの戸田一夫理事長が北海道経済連合会会長時代に提唱した産業クラスター構想。産学官を巻き込んで次第に形を整えつつあるこの構想は、フィンランドの取り組みがモデルだと言う。地域経済が自立する構図とそれを可能にする土壌をそこに見たに違いない。

フィンランドの国土はわが国をひと回り小さくしたほどだが、５１０万の人口は北海道と同規模だ。帝政ロシア時代から隣国の脅威にさらされながらも独立を勝ち取り、自主独立路線を堂々と歩んでいる。20年近く前、この国を駆け足で回ったとき、ヘルシンキの港で砕氷船の建造技術について説明を受けた。「自然環境が高い技術を育てた」と言うのだ。そして現在、フィンランドはＩＴ分野で世界のトップを走る。私はこれらについて分析する能力も資格もない。が、共通する動機が隠れている気がしてならない。厳しい自然環境、地政学的環境をしっかりと受け止め、自らの将来は自らが切り開くという、ある種の覚悟である。長い歴史の中で結実したスタンス、コンセンサスだ。

北海道は幸運にも北方圏という座標軸を見つけた。現実を変える成果も少しは手に入れた。が、そのスタンスが身につくまでには至っていない。北海道にいま必要なのは継続する努力。壮大な実験はやっと本題に入ろうとしている。

創刊30周年記念企画・特別寄稿

12年目を迎えたデンマーク鉄道との姉妹鉄道提携

技術・人材交流、確実に成果を結び

北海道旅客鉄道㈱会長　大森　義弘

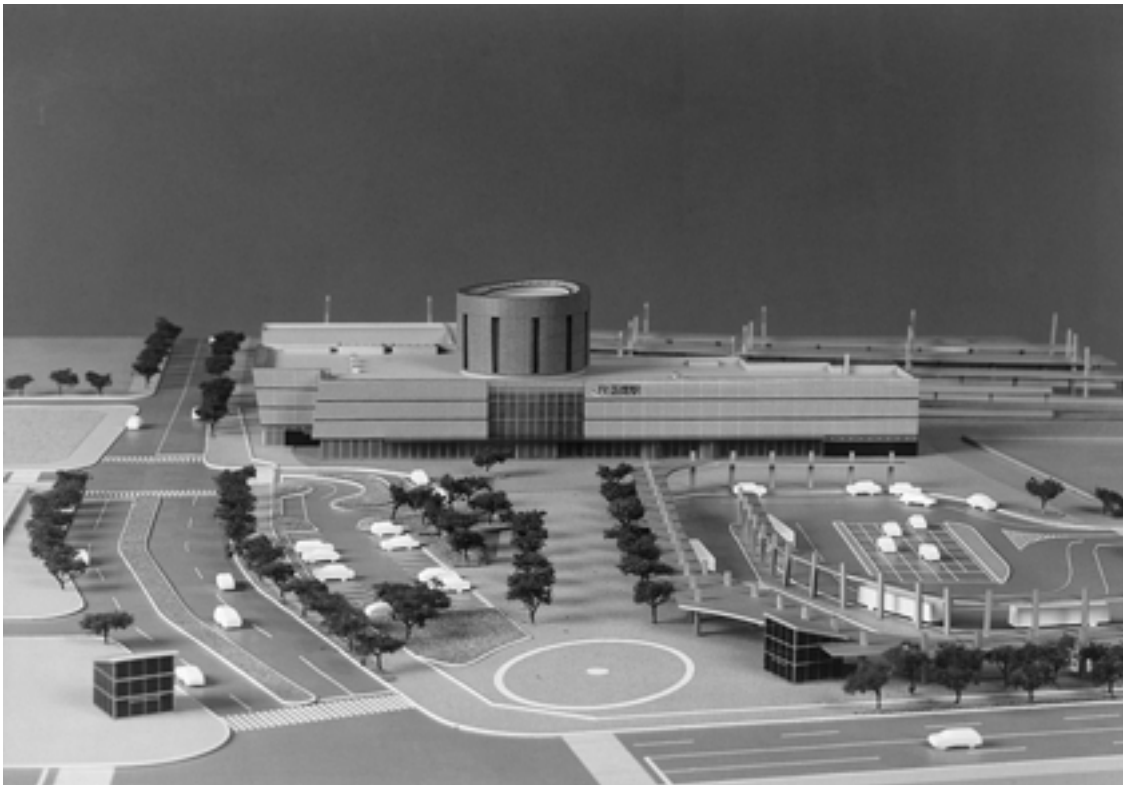
DSBとの共同デザインワークにより製造した「スーパー宗谷」

ＪＲ北海道とデンマーク鉄道（以下ＤＳＢ）との間で姉妹鉄道の提携を結び、今年で12年目を迎えます。

ＤＳＢとの姉妹鉄道の提携については、デンマークと北海道が人口をはじめ気候風土、社会環境がよく似ていることに加え、ＪＲ北海道とＤＳＢが鉄道営業キロ数、駅数、社員数等において類似しており、鉄道会社として経営や技術面等の共通課題を多く有していると考えたことが始まりでした。私も姉妹鉄道提携にあたり、デンマークを訪問しましたが、平坦な地形や樹木等が北海道に似ていることに大変親しみを覚えるとともに、優れたデザインを鉄道事業に積極的に取り入れようとする姿勢、顧客のニーズに応えようとするソフト面でのサービスの質の高さに感銘しました。この訪問により、ＪＲ北海道にとってＤＳＢとの姉妹鉄道の提携が有益であることを改めて確認しました。

姉妹鉄道の提携後、駅舎・車両の共同デザインワーク、テーマ別の相互研修など様々な交流を行ってきました。特に、ＤＳＢのデザインは、「自然との調和」、「環境との調和」、「デザインの統合性」をデザインコンセプトとして、世界的にも高い評価を受けており、今まで、新千歳空港駅、小樽築港駅、現在建設中の新しい函館駅の駅舎デザイン、宗谷線札幌～稚内間の「スーパー宗谷」の車両デザインについて、ＤＳＢとの共同デザインワークにより実施しています。なかでも新千歳空港駅については、鉄道の車両や施設を対象とした国際デザインコンテストのブルネル賞の奨励賞を受賞するなど国内外から高い評価を受けています。また、現在建設を進めている新しい函館駅の周辺地区は、広域交通機能、教養・文化機能を集積する国際交流都市函館のシンボルゾーンと位置づけられており、新駅舎のデザインにおいて、駅と駅周辺施設の特徴を生かし、都市景観と調和したデザインとするためにＤＳＢとの共同デザインワークを行っているところです。

共同デザインワークの他にも、テーマ別に研修を設定し、双方で社員の派遣、受け入れを行っており、現在は列車の定時運行に関するプロジェクトとして、乗務員の養成計画や車両保守の品質管理等について、意見交換を行い、両社の定時運行に反映させています。また、社員の欧州研修の行程にＤＳＢ訪問を設定し、施設等の見学やＤＳＢ社員との意見交換会も行い、交流を深めています。このように、12年目を迎えたＤＳＢとの姉妹鉄道の提携は、技術交流、人材交流において、確実に成果を結びつつあると考えています。



DSBとの共同デザインワークにより建設中の新しい函館駅（完成予想図）

デンマークに学べ
質の高いサービス・付加価値の提供

ＪＲ北海道とＤＳＢとの姉妹鉄道の提携について述べてまいりましたが、次に北海道の国際化の観点から、デンマークという国について若干触れたいと思います。

デンマークは冒頭でも述べましたが、北海道と非常に類似した環境にあり、北海道の国際化を考えるうえで、国と地方自治体という違いはありますが、デンマークから学ぶことは数多くあるように思います。

デンマークは、天然資源に恵まれず、人口も530万人程の小国ですが、国際競争力において、高い評価を得ています。北欧４カ国の例え話として、「原料はフィンランド、工場はスウェーデン、運搬はノルウェー、そして商売はデンマークである」と言われているように、デンマークは北欧の総合商社的な役割を担っています。デンマークの強みは、このような自国の果たすべき役割を認識しているところにあります。すなわち、国際間のニーズを的確に把握し、顧客のニーズに対応するためのソフト面でのサービスのレベルアップと製品等に付加価値をつけることを自国の役割と捉え、国際社会に積極的に参入していることがデンマークの強みであると言えます。前述したＤＳＢのデザインについても、この考え方が根本にあり、デザインを製品等の重要な付加価値と考え、デザインの質の向上に積極的に取り組んでいます。

北海道においても、例えば、観光などのサービス分野において質の高いサービスを提供することや、生産分野において付加価値をつけた一次産品の提供を行うなど、国際的な視野で北海道としての役割を明確にしていくことが必要であると考えます。

今後、ＪＲ北海道とＤＳＢの間において、今まで行ってきた分野における技術交流、人材交流のみならず、様々な分野で有益な相互交流が生じてくるものと考えます。ＪＲ北海道とＤＳＢとの姉妹鉄道の提携が北海道とデンマークのより一層の国際交流並びに、北海道経済の発展に貢献できることを願っています。

また、はからずも平成12年６月には在札幌デンマーク王国名誉領事に任命されて今日に至っておりますが、両国の友好関係の維持発展のため一層微力を尽くしたいと考えております。

創刊30周年記念企画

座談会「異文化理解」

◇出席者
札幌大学文化学部比較文化学科
3年　瀬戸　宏佳さん
3年　呉　雄偉さん
道都大学美術学部デザイン学科
2年　神田　彩加さん
同経営学部　2年　朴　学鎮さん
北海道教育大学札幌校国際理解教育課程　3年　遠藤　雄平さん
2年　七田　えみさん
2年　東山　弥生さん
北海道東海大学国際文化学部北方圏文化学科　4年　狭間　伸治さん
4年　高原真奈子さん
◇司会
日本交渉学会副会長
札幌大学文化学部教授
御手洗昭治さん

司　会　それでは、異文化理解の座談会を始めたいと思います。非常に抽象的なコンセプトである異文化というものについて、皆さんの考えなどお聞きしていきたいと思いますが、その前に皆さんの自己紹介をしていただきたいと思います。

瀬　戸　御手洗先生のゼミに所属していまして、基本的には異文化コミュニケーションを勉強しています。他国の文化、また日本のアイヌ文化など、いろんな国の文化を勉強しています。

呉　御手洗先生のゼミに所属し、比較文化、異文化理解とかをやっています。ほかに、イギリス文化もちょっとだけ勉強しています。

神　田　西洋史とか、宗教画とか哲学的なこともやっています。世界のいろんなものをスライドで見せてもらったりしています。

朴　中国のハルビン市の出身です。飯部（紀昭）先生のところでマスコミ研究部に所属して、学校の新聞とかを出したりしています。ほかには、去年まで、旭川とか、ちょっと山の奥の小学校へ行って、インターネットが使えるようになるようにネットを接続するボランティアをやっていました。

司　会　呉君は中国でも上海だから、暖かいところだね。中国の南北の文化ですね。中国の異文化ということで。

高　原　先住民族のことに興味を持っています。北欧のサーミ民族とか、アラスカの民族とか日本のアイヌとか。それから、ゼミでは国際関係というところに所属しています。

狭　間　研究していることは、フ

手前右から
・瀬戸広佳さん
・呉雄偉さん
・神田彩加さん
・朴学鎮さん
・高原真奈子さん
・狭間伸治さん
・遠藤雄平さん
・東山弥生さん
・七田えみさん

ィンランドのベンチャーについてやっています。ノキアを始めとする、その辺の地域一帯のことを研究して、北海道にどのように導入できるかということをやっています。もう一つは、自分で学生ベンチャーとして企業を立ち上げて、インターネットでショップをやっています。

遠藤 ゼミで学んでいることは国際協力についてで、個人的には国際協力といっても奥にある、人と人とのかかわりみたいなものに興味があって、答えはないのですけれども、自分で一生懸命考えるのが楽しいなと思っています。

東山 国際協力を勉強しています。現在、ゼミでは、みんなで一つの教材をつくる、世界の子供というプロジェクトみたいなものをやっていまして、私のグループでは、ストリートチルドレンの問題に焦点を当てて、特にフィリピンのストリートチルドレンについて調べている段階です。

七田 私も東山さんと同じゼミなので、教材づくりなどをしているのですけれども、ふだん勉強していることは国際協力とか開発教育とかです。私のグループがつくろうとしている教材は、ウガンダのエイズ孤児に焦点を当てたものです。

司会 皆さんいろいろ分野が違って、まさしくこれは、マルチといいますか、国内の異文化から見ると非常に多様性のあるグループだと僕は再認識いたしました。

私は、日本人は一番これが苦手じゃないかという、交渉学というものを研究しているのですけれども、異文化コミュニケーションの中で一番難しいのは、多国間の交渉と異文化の交渉ではないか。ビジネスで成功するか成功しないか、そういうのにも関係する学問だと思います。

きょうは異文化理解というテーマですが、理解をする前に3段階ある。まずは文化に対する認識というものがある。英語でレコグナイズという言葉がありますけれども、異文化に対する知識を頭で理解しようとするのが一つですね。例えば本、文献を見ながら理解する方法。ところが、二つ目として言えることは、文献で理解しても、実際に異文化の人と遭遇したり、一緒にプロジェクトなり、目的を持って滞在する場合、実際に感情のレベルで、本当にその人たちと一緒の目線で見たり同じように感じるというのがなかなか難しい。三つ目に、実際に異文化の人と一緒に仕事をしたり、プロジェクトとか、目的を持って何かを北海道のために行う。さっきの国際協力じゃないですけれども、エイズの問題に取り組む。これはなかなか難しいことです。

そこで、お聞きしたいのですけれども、七田さんの場合は、国際開発でウガンダについて。それはどういう動機ですか。

七田 どうしてウガンダを対象に選んだかというと、エイズ孤児について調べようと思って、アジアかアフリカかというふうに最初にグループ内で話し合ったのですけれども、アフリカの方はもともと最初からエイズが多くて、あと、ウガンダはほかの国と違って国のプロジェクトとしてエイズ対策が進んでいるということなので、そこの点でウガンダにしようと思いました。

司会 カンボジアにも行かれたということですが、どういう動機で、期間はどのくらいですか。

遠藤●国籍とか地域とかというのじゃなくて、自分と違う考えとか感じ方は自分にとって全部異文化なのかな

高原●1対1のつきあいだけでは見えてこない、人がまとまった時に出てくる壁を溶かしていくものは、一人一人がつくっていくもの。一人一人がつくった関係は基本じゃないかなと

七田 大学1年の夏に、札幌にある自由学校「遊」のスタディツアーで、カンボジアのバッタムバンというところに10日間行きました。農村に滞在して、現地で活動しているNGOの活動を見て、農業とか、女性たちのグループの取り組みなんかを。

司会 東山さんはどうですか。インドネシアの方に行かれたと。

東山 私がインドネシアに行ったのは今年の3月の春休みですけれども、大学で国際理解教育課程に入って1年間、途上国の問題、南北問題、開発の問題についていろいろ学んでいて、それで途上国の問題について興味を持つようになって、自分が考えているだけではわからない部分もあるし、実際に行ってみたらどうなんだろうとか、いろいろ思いまして、それで行ってみたいという気持ちがありました。スタディツアーというのは、ただの旅行では見られないNGOの協力の部分とか、私が行ったスタディツアーでは農村プログラム、都市プログラムが半々ぐらいで、農村では農村にホームステイをして、小学校、診療所などいろんな施設に行ったり、都市の方ではストリートチルドレンの収容施設や都市スラムを見学したり、さまざまなプログラムで、そういうのはなかなか見られない側面だし、行ってみたいと思いまして。

司会 文化ショックが大き過ぎたのじゃないですか。

東山 そうですね。ショックを感じたのは農村よりも都市の方です。首都のジャカルタには高層ビルとかがすごくいっぱいあって、一方で、同じようなところにスラムがあってと、そういうスラムに一番ショックを受けました。

司会 やはり日本は恵まれているなと思いましたか。

東山 そうですね。スラムに暮らしていたり学校に行けない子供たち、ストリートチルドレンの子供たちを見ていたら、私たちは普通に学校に行けて、普通に家があって生活ができる。でも、その子供たちには学校に行くということが選択肢になかったりして。そういう子供たちと自分との違いは感じました。

司会 遠藤君はどうですか。

遠藤 先生がおっしゃった、異文化理解には三つの段階があると。最初はまず理論、頭でと。僕も最初はそれが異文化（理解）だと思っていたのです。僕はカンボジアが初めての海外だったので、かなりショックを受けたのです。頭でわかっているつもりが、そうじゃなくて、実際に自分の目で見てそこで生活すると、感覚が全然違う。帰ってきた後、北大の留学生と一緒に、国際交流をするという目的で、北大のすぐ近くに「地球倶楽部」と「アパトゥリダ」というのがあるのですが、僕は去年までそこで代表をやっていたのです。その中で感じたのは、最初はやっぱり、国籍の違う人とかかわることが異文化理解かなと僕の中にもあったのですけれども、つき合っていくうちに、国籍は余り関係ないのですね、僕にとっては。日本人でもいいやつもいれば嫌なやつもいる。気の合うやつもいればそうじゃないやつもいる。全く同じ感覚で、留学生とつき合っていく中でも、本当に親友になった人もいるし、また、そうじゃない人もいたり。そういうふうに思うと、異文化というのは、国籍とか地域とかというのじゃなくて、僕の中では、今のとらえ方ですけれども、自分以外のだれか、自分と違う考えとか感じ方を持ってる人は、自分にとって全部異文化なのかなと思いました。さっき先生がおっしゃった、まず認識というところで、どういう違いがあるのだろうみたいなものがわかった上で、そこから何か学べるものがあるのかなというようなつき合い方をしていくのが、自分にとっての異文化理解なのかなみたいな感じで今はとらえているのですけれども、皆さんは異文化理解というのをどういうふうに考えているのか、違う意見を聞きたいですね。

司会 狭間さんは異文化理解という言葉を聞いて、最初に何を思い浮かべましたか。

狭間 異文化理解というのは、私にとっては理解が難しいのですけれども。バリアがないと思って接しているので。異文化理解って、バリアがないなと。別に意識してないということです、私自身は。

高原 高校のときに少しだけフィンランドに留学していたことがあって、ただ、そのときは、細かい、例えば習慣の違いというのに直面することはあっても、特別、異文化だ

とか、何か違うという印象を受けることは余りなくて。日本とフィンランドがもともと似ていると言われるせいもあったのか、余り特別。人ってどこも同じなのかなというのが一番大きな印象でした。その後、日本の中でも、全く違う土地、最近しばらく沖縄の端っこの方に行っていたのですけれども、そのときに感じたのは、人と人というときには1対1の関係だから余り文化というものは感じないのですけれども、自分がどこかの地域に入っていくときには、やはり、その地域性というか、そこにあるものというのは、どうしても頭に浮かんでくるというか考えてしまうというか、そういうのがあるなと思いました。

司　会　異文化といったら外国と思うというのが一般的だと思いますけれども、国内にだって異文化がたくさんあるわけですね。世代が違えば異世代の、インタージェネレーションというのですか、そういったことも言えるし。北海道と沖縄の文化ですね。国内文化の中にもいろいろある。それも異文化と定義はできるわけなのです。朴さんはどうですか。

朴　異文化という言葉自体は、僕のとらえ方は皆さんと違うかもしれないですけれども、やっぱり異文化というのは生活の中で出てくると思います。僕は今日本に来て3年目なんですけれども、日本人との生活の中で、少しというか、結構溶け込んでいると思うんです。最近、僕の友達が日本に来ているのです。瀋陽から来たのですけれども……。それで、部屋探しのことなのですが、最初に不動産屋さんに行ったときから、手続きとかをするときも、中国人ですと言ったら、まず、だめです、と。10カ所ぐらい僕は不動産屋さんやいろんな会社に行ったんですけれども、最終的には1軒だけ、結構やさしい人で受け入れるという話で。そんな簡単ではなかったです。

司　会　異文化は理解したいけれども、感情レベルでの拒否でしょう。

朴　はい。学校からも何か保証人みたいな―日本では、保証人がいないとまず部屋に入れないという形になっているんです―それで、友達3人は日本語しゃべれないから、僕がつれていって、学校でやってくれないですかと僕は言ったのですが。学校としては、保証はしているんですけれども、部屋は自分で探せという。3人は日本語もしゃべれないし、どうやって……。最終的には学校で保証人の印鑑をもらったのです。印鑑をもらって不動産屋さんに行ったら、それではまだだめ、ちゃんと先生の名前ないとだめ。それで僕は頭下げながら、よろしくおねがいしますと頼んだ。

司　会　オーケーでしたか。

朴　最終的にはオーケーだったですけれども。

司　会　なかなかの交渉者じゃないですか。ネゴシエーターだな。

朴　僕も初めてなんですけれども。3人とも、10回、20回ぐらい走りながら、それでやっと。そこから見出したのは、僕、中国人としては、外国人、中国人はだめというところが、異文化というか、理解が違う。そういうところで僕は認識した。

司　会　神田さんは、ハワイに3回ぐらい行かれたと。

神　田　そうです。ハワイは観光する方に対してとても親切で、旅行会社からもらったパンフレットに、やってはいけないマナー事項というのがちゃんと書いてあるのです。日本人は何か言葉が食い違ってトラブったら嫌だなと思う気があるのか、マナーについて説明しない節があると思います。でも、ハワイの方は全然違って、私が家族で珊瑚礁の海に行ったときに、珊瑚の上に乗っかってはいけないのです。それが英語が読めなくて、乗っちゃったら、すぐに、全然知らない、多分カナダかどこかからいらっしゃっている方だと思うのですけれども、「ノー・ストップ・イット！」。絶対乗っちゃだめ。でも、日本ではそういうのは全然ないですよね。

司　会　今のは、自分が外国の異文化圏に行った場合にぶつかる問題ですね。各文化に、言葉では言わない「暗黙のルール」というのがあるのです。文化人類学では、文化というのは無意識のうちに自分が身につけてしまった物の考え方とか行動の様式だという定義があるわけです。文化というのはシステムなんですね。相手の文化のシステムというのはなかなか見えない。ただ、その文化に生まれた人はそれを無意識のうちにインプットされているわけだか

瀬戸●（文化というのは）遺伝子的なものじゃなくて、生まれ育った環境が文化をつくるんだなと

朴●日本に来て3年目なんですけど、やっぱり異文化というのは生活の中で出てくると思います

ら、どこかがおかしくなったらわかるのですけれども、外国から来た人というのはそういうのがなかなか読めないですね。それが一つの異文化ショックになる。

ところで、美術を研究されているということですけれども、美術の点で異文化を理解するというのは。

神田　そうですね、現代アートとかは結構ボーダーレスで、例えばニューヨークのテロでもそうなのですけれども、光でツインタワーを建てるモニュメントみたいなものをやったりとか、そういうコラボレーションなどは、今はどこの国を見ても余り民族性とかが見えてこなかったり。それは、多分私が未熟な面も……。

司会　だんだん薄れてきているのじゃないですか。呉君はどうですか。

呉　僕は日本に来て一番感じているのは、日本のサービス業、これは全然僕の国と違いますね。日本のお客さんへの対応は、お客様ですから、絶対に怒ってはいけない。でも、中国の方では、客と自分とは上と下がないのです。みんな平等ですから。英語で言うとフェアですから。日本の方も中国に旅行する人が結構多いので、中国に行って帰ったら、みんな、何で中国のサービスはそんなに悪いのかと時々文句を言いますね。あと、言葉が通じないとき、時々怒られることもあるようですね。

司会　お客さんの方がね。

呉　ええ。お客さん、怒られます。それは日本では絶対ないことですね。

司会　今の例もそうですよ。各文化によって、文化が何に中心を置いているか、文化の価値が違う。ある意味では、人間関係をどう見るかですね。これはクラックホーンという人類学者が考えたモデルがあるのです。彼は、カルチュアルオリエンテーションという言葉を使って、五つの項目に分けています。人間というのは自然をどう見るのか、これは文化によって違いがあると。人間関係や人間対自然、人間の行動とパーソナリティーをどう見るのか。また、時間のとり方ですね。

瀬戸君はどうですか、異文化と聞いた場合。

瀬戸　やはり文化というものは遺伝子的なものじゃなくて、遺伝子的なものは、外見、姿とか目の色とか、そういう部分だけだと僕は思います。今年の春に、インターナショナル・ナイトという留学生とディスカッションをする場所に行かせてもらったのです。そのときに教育問題についてディスカッションしたのですけれども、カナダの留学生が、日本は授業中に人前で話す機会が少な過ぎると。外国だったら授業中でもディスカッションする時間がたくさんあるらしくて、そういう生まれ育った環境が文化をつくるんだなというのを。

司会　瀬戸君のお宅にはカナダの人がホームステイで泊まったということだけれども、誤解とか失敗談はなかったですか。

瀬戸　そのころ僕はまだ高校生で、それほど異文化に対する意識が高くなかったせいか、そのころの自分は、人類皆友だちと。そういう、まだ甘いというか、考えが乏しかったので、それほど違和感があるというのはなかったですけれども、年をとって人と話す機会がふえるほどに考えることで、文化の相違など、そういうことがだんだん見えてきた感じがします。

司会　文化とは何か。文化とはシステムであって、無意識のうちに身につけてしまった学習された人間の行動パターン。それはコミュニケーション・システムだという人もいるわけです。各文化、いろんなコミュニケーションのスタイルがあって表現の仕方も違うと。さっきの瀬戸君の例じゃないですけれども、それは文化の価値にも関係があります。有名な劇作家のバーナード・ショーが、同じ言語を使いながら文化的に全く分かれている国というのがアメリカとイギリスだと。イギリス文化というのは、社会の構造を見ても人間の行動パターンを見ても、役割分担でも、こう行動すべきですよというのは、アメリカほど明確にされていないわけです。どっちかというと、アナログ的に解釈する。ところが、アメリカ文化というのは、多様ないろんな民族がいる国だから、民族と人種の問題があります。そういった国というのは、規則とかルールがデジタル型に分かれているわけです。しかし、対人関係においてはイ

ギリスよりも非常に非公式でインフォーマルだと。皆さんの中で、マクドナルドとかでアルバイトをしている人は、どんな人が仕事に入ってきても、やめても、次の人ができる。そういった体験がありますね。マニュアルがあるのです。ある意味ではデジタル化されている。アメリカ人とイギリス人が時々ぶつかり合うというのは、文化の価値が違うからです。

そこで、さっき狭間君がベンチャー企業を興したとおっしゃいましたね。フィンランドがいい例で、どうですか、若者として、今北海道は文化的には豊かだけれどもどうも経済的に元気がない。経済も文化の一つなのですけれども、そういうときに、ベンチャー企業としてどういう考えを持ちますか。

狭　間　私が魚屋さんと共同で「小樽はっかく屋」というのをオープンしたのです。八角というのは、北海道にしかいない魚です。北海道の地域性を生かして何か北海道から発信できるものがないのかなということで、まず私が考えたのは、八角というのを、しかも、小樽では冬が一番おいしいのです。それに目をつけて、この地域の産物を生かしていこうということで。5月2日にオープンしたのですけれども、売れ行きが芳しくなくて、試行錯誤しながら今やっています。

司　会　小樽でしかとれないというのは、これはもっと宣伝していいのじゃないのかな。国内異文化じゃないですけれども、例えば、焼酎といったら大体九州というイメージがあるでしょう。ところが、北海道の、羊蹄山の水の焼酎なら飲みたいと言う九州人がいる。九州の焼酎よりずっと薄い味ですよと。ですからこれも、北海道にしかないよと、道庁を超えて宣伝やアピールを行った方がいいですよ。

異文化というのは、国内でも国外に関してでも、問題になる点というのは五つあるわけです。一つは、言葉。二つ目は、非言語。言葉では表せない、暗黙のルール。三つ目は、先入観です。さっきの朴さんの場合と同じように、中国の留学生ですけれども部屋を借りたいのですがと言ったら、えっと。ということは、なれていないということですね。近所に中国の人がいていろいろ接していると、ある程度なれてくる。だから、先入観を解くにはやっぱりなれが必要なのです。四つ目は、人間はとかく、相手をすぐ判断し、評価してしまう。あの文化というのはこうじゃないかと。皆さんが楽しいこと、例えば留学生同士が集まって国際交流パーティーをしましょうと。食べたり飲んだり、何かお国柄の演奏を聞いたり、民族衣装を着て楽しいことをやっている時は、異文化の接触、それに一筋縄ではいかない交流というのは問題になりません。何か危機や問題が起きた時、あれは日本人だからとか、あの人は日本文化を背負っているからと。何か事が悪くなった時に、文化（の違い）のせいにしたがる。お互いにそうやって評価しちゃうわけです。五つ目は、緊張感。この五つの領域があって、これをある程度解きほぐしていく訓練をすると、異文化というのは見えてくると思います。

それで、どうですか。今の五つの視点から、どうでしょう。何か意見があれば。

東　山　言語のことで思うのですけれども、私は、高校生のときにスーパーマーケットでレジ係のアルバイトをしていて、私は小樽市なのです。小樽市にはロシア人の人がいっぱい来ていて、そのスーパーのレジにも結構ロシア人の人が買い物に来るのですが、言葉がわからないから、みんなロシア人が来たら自分のレジには来てほしくないという感じがあって。

司　会　頭ではわかっているけれども感情レベルではこうだと。先入観が。

東　山　私もそうだったんです。（ロシア人は）レジに表示された数字は読めるので、言葉が通じなくても困ることはなかったのですけれども、一度、言葉が通じなくて、衝突が起こったのです。

司　会　どういう衝突ですか。

東　山　たしかロシアのお金しか持ってなくて。店長が対応していたので詳しいことは聞いてないのですけれども。それで、言葉が通じないから、店長が何か言っても向こうもわからなくて、トラブルが起こってしまって。それで、その後、ますますみんなロシア人が来たら嫌だという感じになってしまって。言葉とい

東山●言葉はなくてもできるけど、やっぱり言葉が壁になってぶっかってしまうことを経験しました

狭間●学生ベンチャーとしてインターネットでショップをやっています。北海道の地域性を生かして発信できるものを。それで八角というのに目をつけて

うのは、言葉がなくてもできるけれども、やっぱり、たまに言葉が壁になってぶつかってしまうということを経験しました。

七田 私は出身が稚内なのですけれども、高校が札幌で。小樽ほどではないと思うのですけれども、稚内もロシア人の方がすごく多くて。銭湯の問題とか、小樽ばかり取り上げられていたのですけれども、稚内にもそういうのがあって、稚内の方は言語というよりも先入観の問題だと思うのですけれども、ロシア人は暴れるだとか、そういうイメージばかりが先行していて、かかわりたくないから。だから、いろんな催しが開かれたりはするのですけれども、参加する人はそんなにいなくて。避けている感じがします。

司会 解決策として、ボランティアとかでロシア語をもっとポピュラーにして、町内会で習ったり、そういった試みというのも国際理解の一つの草の根運動というか。

七田 札幌とか大きな都市になれば、いろんな人がいるからできるのでしょうけれども、稚内はそんなに……。

司会 今、一つ興味深い点を言いましたね。やはりローカルだからと。でも、今は「脱グローカル化」になりつつあるというのが僕の意見です。そこで大事なのは、ローカルからリージョナル、リージョナルというのは地域ですね。例えば、ロシアを含んだ環太平洋では今、八つの国があるのかな。カナダ、アメリカの西海岸の一部。アラスカなんかもそうです。ロシア、中国、モンゴル、韓国、日本、北朝鮮なのです。この八つで北太平洋的な構想がある。ただ、残念なことに北欧というのが抜けているね。

遠藤 僕は今のお話を聞いて一つ言いたいことがあるのですけれども、先生は国だとか地域だとか、結構大きな意味で文化というものを言っている。瀬戸君とか、僕の考えが甘いと思ったらみんなもどんどん言ってほしいのだけれども、僕は去年の夏、北東アジア米国学生集中講座という、札幌国際プラザが主催して、アメリカ、韓国、中国、ロシアと日本の学生が4人ずつ集まって、2週間ぐらい一緒に寝泊まりをして、経済と地域紛争、地域の問題と環境について、ずっと一緒に過ごしながらディスカッションをしたりしたんですけれども、一番思ったのは、やっぱり最初は、理屈というか頭で、さっき言っていた先入観、言葉、暗黙のルール、評価、緊張があったのです。でも、その後にあるものは、やっぱり1対1の個人的な人間関係だったのです。僕は、韓国の人と朝の3時か4時ぐらいまで、ちょうど中国とか韓国の歴史教科書の問題が上がっていたときなので、そういう話になったんです。彼らも頭で日本に対していろんなイメージを持ってきていて、それをポンとぶつけてきて、僕はそれに対して―受験では表面的な、何年に何があったと。でも、彼らみたいな歴史教育は全然受けていなかったので―すぐどうという答えはできなかったのです。でも、最初はぶつかり合う意見だったけれども、その後にあるのは、さっき言っていたような国とか地域のバックグラウンド、先入観じゃなくて、こいつはどういう人間なんだ、そこからどう考えて何をしたいのかというようなところで話し合ったときに、国とか地域じゃなくて、彼の人間性みたいなところで、彼も僕のことを認めてくれて。そうなったときに、異文化理解というのはもしかしてこういうことなのかなと。感情とか偏見とか先入観の奥にある、そいつを一人の人間として認めるというか。

司会 おもしろいですね。1対1で人間に接していくと、だんだん理解度が、認識から理解にいく。それこそ、コンタクト、接触から始まって、コミュニケーション、それから交流になると思います。同じ目的意識を持って何かをやっているときというのは、人間はまた違うのです。観光でどこかに行ってたまたま知り合いになる人と違って、お互いに共通の目的があって、理解というのは深まる率が高いです。(一方で)いろんな場面の遭遇―家族といるときは、何歳になっても皆さんはやっぱり子供なんですね。一歩自分の住んでいるところから出ると、市民です。市民としての顔をつくらなくちゃならない、キャンパスを離れてアルバイトに行ったら、またいろんな顔があるとか―そういった、家族のレベル、組織のレベル、ローカルな

レベル、リージョナルなレベル、それからインターカルチャー、クロスカルチャー、それから今度は自分の文化を超えなさいよと、トランスカルチャーの時代に入っている。こういった視点で見ていくと、最終的にはやっぱりローカルに戻ってしまう。行ったり来たり人間はしていると思うのです。だから、ローカルだからという見方は余りしない方がいい。小さなコミュニティーから始まって段々段々発展するのだから、「脱グローカリゼーション時代」（ローカルからグローバル化へ）と呼ぶことにしましょう。

高　原　さっきから異文化理解の話を聞いていて考えていたんですけど、確かに、1対1のつき合いだけでは見えてこない、人がまとまった時に出てくる壁だとか、そういう固まりというのはあると思うのです。固まりといっても、その境界線というのははっきりしているわけじゃなくて、そこはぼやけているというか、流動性がある。例えば、地域の中で育った人だって、外へ出ていく機会があったり、また戻ってきて固まった文化をつくっていく一人になったり、流動性はあって、だから、その間をつなぐというか、壁を、氷を溶かしていくものというのは、境界がぼやけているところに一人一人がつくっていくものどゃないかという感じがすごくします。一人一人の間でつくった関係というのは、パッと見た感じは、それだけでは大きな固まりというものには対抗できないような感じがするけれども、地に足をつけて1個ずつ崩していくという意味では、そういうのがやっぱり基本なのじゃないかなと思います。

司　会　呉君はどうですか。上海という町はいろんな文化がクロスカルチャーのようになっていますけれども、ローカル、リージョナルで見た場合の上海はどうですか。上海と北海道を比べたらどうでしょうか。例えば、北海道に残ってビジネスをしようという気持ちはありますか。

呉　上海と北海道は全然違うんですね。ビジネスは、国際貿易みたいな仕事をしたいのですけれども。上海にもすごく貿易会社とかがあるので、北海道と上海の間で何かやりたいですね。

司　会　神田さんはどうですか。絵画とか美術とか、芸術の面で、いろいろ北海道から提供できるもの、また向こうから学べるもの、芸術家を呼ぶとか。

神　田　この前、新聞を見たときに、ポケモンカードという子供のおもちゃがあるんですけれども、それはアメリカでも日本でもはやっていて、じゃ世界選手権をしちゃおうと。子供たちだけ集めて世界選手権をしていたのが新聞に載っていて、これはすごいと。子供って余り先入観がないじゃないですか。だから、世界から子供たちを集めて、壁画とかワークショップなんかをやりたいですね。まだちょっと温めているんですけれども、できればぜひやってみたいです。

司　会　いろいろ独自性を出して、地域性を生かして何かをつくり上げるというのを北海道はできると思うのです。高原さん、どうですか。実際に北欧なんかに接点を見つけたいとか、そういうのはないですか。

高　原　北海道にいて、北海道にもたくさん外国の人が来ている、また、北海道に住んでいる人が外に行く機会というのはすごくたくさんあると思うのですが、自分からアンテナを張っていないとそこからいい影響は受けられないということもあるし、それから、いろんなところにあるいい影響というのを広める。いろんな人がいい経験をいっぱい持っていると思うのですけれども、それを周りにうまく影響として広めていくというネットワークがもっとあったらいいなと思います。ちょっと抽象的な話になっちゃうのですけれど。

朴　僕は、北海道は自然とか水とか空気とか、日本で多分一番だと思うんです。温泉とかも。僕、温泉好きですよ。大好きです。それで、こっちは、ビジネスとかそういうものじゃなくて、環境としてどうやって世界に発信するか、それが一番大事だと思います。工場だとかが入ったら、多分環境を汚染したり。そういう環境問題に取り組むというか、環境を発信するのが一番大事だと思います。僕は、東京には二、三回行ったのですけれども、交通とかは発展しているんですけれども、やっぱり住みにくいというか、人が多くて。

司　会　時々僕は「北海道の人は

呉●国際貿易みたいな仕事をしたいです。北海道と上海の間で何かやりたいですね

神田●世界から子どもたちを集めて壁画とかワークショップなんかやりたいですね
ちょっと温めているんです

北海道のよさを知りませんね」と本州の人から言われることがある。東京の人から見たらうらやましくてしようがない、しかし、北海道の人というのは北海道のよさをわかっていない人が多いのじゃないですかと。これは本音だと思います。ですから、北海道の人も、一回どこか別の地域に行ってみて初めて自分の文化というのが見えてくると思います。それも、修学旅行とかそんなのでなくて、目的を持って行う短期・中期ボランティア研修とか学校から単位や成績やアルバイト料も得ることのできる「インターシッププログラム」などですね。

遠藤　僕は、高原さんがさっきおっしゃったことにすごく共感できて、ああそうかも、と思ったのですけれども、地域だとか、文化にもいろんなレベルがあると言いましたね。その時々によって、同じ人間でもどこにいるか、どんな状況かで違う。でも、その境界線がぼやけているから、そこをつなぐのは一人一人の人間だ、みたいなことをおっしゃった。例えば、イスラエルとパレスチナが対立していて、今まで悲惨な歴史があっても、1対1の人間関係で、そこに本当に何か強いきずながあったら、楽観的な考えと言われればそれまでですけれども、そこに何か可能性があるのじゃないか。人間のプラスの可能性とマイナスの可能性、二つあったとしたら、そこでプラスの方向を大事にした方が。ますますいろんなひずみとか矛盾だとかというのが出てきている今だからこそ、そういうことを考えていけたらなと。高原さんが、その後で、そういう一人一人が受けた影響だとかというのを、できれば一人で納めるのじゃなくて、共有してネットワークができればというお話をしていたのですけれども、今、北大の方で、国際協力だとか、いろんな異文化だとか何かについて、このままじゃいけない、何かしようと思っている学生が、大学の枠を超えてネットワークをつくって、お互いにいろんな経験だとか考えがあるから、それを共有してそこで何か輪をつくろうみたいな感じのネットワークができ上がったんです。もしそういうのが徐々にいろんなところでできていって広がっていけば、もしかして、すごいプラスの可能性が生まれるのかなと思ったりします。

司会　それでは、最後に一言ずつ何か言ってお開きにしましょう。

東山　私も、高原さんが言ったことにすごく共感できて、国と国とは文化が違ったとしても、一人一人というのは、同じ人間同士のかかわり合いで、地域に入ったときに個人とは違う固まりとの衝突とか違いはあると思うのですけれども、一人だれかほかの国の人と接すると、その人を通して国を見ちゃう部分はあると思うんです。今まで、例えば韓国の人が日本に反日感情を持っていても、たまたま知り合った日本人がすごくいい人だったら、その人を通して、日本という国のイメージがそれだけで変わってしまう。政治的なことというのは、歴史にしても、できてしまった意識とか歴史は変えられない部分もあると思うので、それをどうすればいいかといったら、個人のところから広げていければと。それが一番というか、可能性としていいことなのじゃないかと思います。

司会　ありがとうございました。七田さん、どうですか。

七田　私も国際協力を学んでいるのですけれども、助けるために何かしたいというのじゃなくて、途上国に限らず、人と国としてじゃなくて、自分がかかわりたいというか、今、東山さんが言ったように、そこから広げていければいいなと思っています。

司会　わかりました。遠藤君。

遠藤　僕は、きょう皆さんといろいろなお話をして、先生からもお聞きして、すごくいいヒントがたくさんあったので、今後に生かしたいなと思います。今まで出会ってきたいろんな人との出会いをこれからも大事にしたいし、まだ出会っていない人もいると思うんです。出会っていても、こうやって話しても、言葉にしてそれを相手に伝えたつもりでも相手はそれを僕が思ったとおりには理解していないだろうし、向こうのことも理解できていないというのはわかるのですけれども、でも、それを乗り越えて、見えてないものを見ようというか、当たり前だと思っていることを、さっき言った先入観というのが一番大きいんですけれども、こうだというイメージじゃなく

て、本当はどうなのだろうという意識を持ってこれからもいろんな人と出会っていけば、どんどん自分の器が大きくなって、いろんなことができるのじゃないかなと思うのです。

司　会　狭間さん、どうぞ。

狭　間　私は北海道経済のために一言言いたいのですけれども、ロシアと北海道の橋をつくればいいと思うんです。稚内からサハリンまで44キロぐらいなので。私たちは北の人間なのだから、もっと自覚、アイデンティティーを持って、東京なんか見ることはないんだと。北からの発想を……。

司　会　ありがとうございました。高原さん、どうぞ。

高　原　一つの地域の中に住んでいると外に出ていくのが怖くなったりとか。出ていくときは、自分一人が外にさらされるんじゃないかという怖さみたいなものもあるし、それから、もっとどこかほかの地域に行くというときも、そこの土地の人とわかり合えるのだろうかという怖さがある。でもやっぱり、自分が北海道の中に住んでいるにしろ、外に出てどこかに行って住むにしろ、今まで何人かの人が言ってきたみたいに、自分の生身でぶつかっていくということを積んでいかないと、自分の中に何もたまっていかなくて、何も話せないなという感じがすごくします。

司　会　ありがとうございます。朴さん、どうですか。

朴　僕は、3年前に日本へ来たんですけれども、最初に来るときは、日本というイメージだけで、ああ昔戦争あったな、日本は悪い国とか、そういうように、最初はみんなそう思っていた。小さいときから、歴史の中でもそういうように覚えて考えて。実際こっちに来てからは、皆さんと触れ合いながら話し合ったときに、すごく文化というのは大事だなとか、そう思っていました。

司　会　神田さん、どうぞ。

神　田　今はすごく開かれた時代だと思うんです。地球の裏側のブエノスアイレスともネットでつながったり、小学校のころから英語の教育ができたり、遠くの方とも気軽に友達になれちゃうことは、すごくチャンスがあるというか、幸せなことだけれども、トラブルとかも頻発しちゃうから、逆に、とても広い真っ暗な部屋の中に放り出されたような感じがします。手探りで行かなきゃいけないようなこともあるけれども、でも、遠くまで見通せるということは、自分の国というのを逆に外側から客観的に見詰められるということで、本当に幸せだと思うのです。でも、その幸せにおぼれないで、ちゃんとお互いのことを考えていくというのが大事だと思います。

司　会　呉君。

呉　僕は北海道の経済の面で言いたいのですけれども、北海道は日本の北にあるので、ほかの国との経済の交流とかはすごく少ないと思います。特に中国とか。自分のふるさと上海から千歳への直行便は去年の8月に開通したのです。上海はずっと前から日本といろいろな経済的な交流があったけれども、北海道に来ることはめったにないのです。大阪や東京とばかり交流していますので。北海道にはいろいろないい面もありますので、経済も元気になるように、いろいろ国際的な交流がなければならないと思いますので、自分はこの面でも頑張りたいと思います。

司　会　ありがとうございます。最後の締めを、瀬戸君。

瀬　戸　6月には、ワールドカップが札幌でも3試合行われる。観光客というか観戦に来る人には、雪祭りとかＹＯＳＡＫＯＩ祭りよりは少ないらしいのですが、でも、札幌をよく知ってもらういい機会じゃないかなと思うのです。先ほど皆さんが言っていた、人と人とのつながりでいろんなことを理解できる。人が、札幌や北海道をいい街だったと自分の国へ帰ったときに人に伝えるということは、一番の広告塔だと思うのです。そのためにも……

司　会　きょう私が非常に勇気づけられたのは、若い人というのはいろんな意見を持っていますね。今後、北海道を活性化し、よくするためには、ただビジネスだけじゃなくて、ビジネスプラス環境の問題とか、また国際協力じゃないけれども、いろんな恵まれない人がいるんだと、そういったことも念頭に置きながらいろいろやっていけば捨てたものじゃないということを私は今日学びました。長い間どうもありがとうございました。

七田●途上国に限らず、自分がかかわりたいというか、個人のところから広げていければいいなと

創刊30周年記念企画

留学生フォーラム「北海道へのメッセージ」

～北の大地の留学生から～

司　会（新井進・北方圏センター事業部長）：本日のフォーラムですが、留学生の代表の方々に集まっていただいて、相互の理解を図っていただくとともに、日ごろ考えていることを「北海道（民）へのメッセージ」として発表、発信しようというものです。テーマとして挙げていますのは、第1に北海道・日本との出会いと地域の人々との交流について、来た当座、どの様な心境あるいは印象を持ったのだろうかということ、第2として時間を経るに従って、異文化としての北海道と出会い、その中でいろんな人々との交流や自然の中での体験がどのように自分を変えていったか、その変化についてのこと、第3に留学したからこそ得られた経験、人々とのつながりとか、あるいは社会環境で培ってきたものをどのような形で将来生かしていくかということについて話し合っていただきたいと思っております。

出席者

ザキール・ホセインさん（33、北海道大学水産学部研究生）

エイ・サンダー・ウインさん（37、苫小牧駒沢大学国際文化学部２年）

シン・トウ・ニチさん（29、北海道教育大学札幌校大学院修士課程２年）

【テーマ1】北海道・日本との出会いと地域の人々との交流についての印象

司　会　それでは、テーマ毎の討論、意見交換にに入りたいと思います。バングラデシュからのザキール・ホセインさんからお願いします。

ザキール・ホセイン　私は日本に来て5カ月です。この5カ月間は、私自身の問題としての日本語の漢字や言葉の問題を除いて、私は今まで面倒なこととか問題のあることに遭っていないのです。北海道の人々は親切で、みんな私がどうしたらよいか困っているときには手伝ってくれます。研究の仕事とか他の面でも、先生方や学生方もみんな協力しながら手伝ってくれています。そして、みんなで、例えば食事に行ったり、他のところへ行くときには、私のまだ残っている仕事を早く全部を終わらせたり、実験などの仕事の場面でも手伝ってくれています。だから、日本人に対して私が思うことは、日本人は心広くて親切で、まじめな人たちだということです。

司　会　続いて、ミャンマーからのエイ・サンダー・ウインさん。

エイ・サンダー・ウイン　私は苫小牧に住んでもう2年ぐらいになります。特には嫌だったことは本当に少ないです。ちょっとはありましたけれども、今考えてみれば、ほとんど市民の方はいろいろすごく親切にしてもらえます。「留学生として苫小牧で勉強しています」と言っただけで、例えば、たくさんの荷物を持ってタクシーに乗ることになったとき、３０００円ぐらいの距離の所だったのですが、そのときタクシーの運転手さんは「そうなの、じゃ１０００円割り引してあげるよ」と言ってくれたこともありました（笑）。ただ、北海道に住んでちょっと辛かったことは雪と寒さです。私、国では雪とか氷は一度も見たことなかったから。アイスバーンになったときにロボットみたいな歩き方しました、滑らないように、転ばないように。それだけは辛かったし困ったです。

司　会　続いて、中国からのシン・トウ・ニチさん、お願いします。

シン・トウ・ニチ　来日後、それまでとは一変した周りの人々と接しながら、日本語が少ししか聞き取れなくて、交流がなかなかできなかったことです。そのとき、もちろん生

ハリ・スティアワンさん（22、釧路工業高等専門学校４年）

チェ・ヨン・ウさん（29、帯広畜産大学大学院博士課程１年）

バルジンニャム・エルデネチメグさん（31、旭川医科大学大学院博士課程２年）

ゲタテュウ・アスゲドムさん（36、北海道大学大学院博士課程１年）

ゲオルギエヴ・ゲオルギさん（21、北海道大学工学部２年）

活の面でもいろんな不便がありました。しかし、最初、寮に入ったとき、日本人の学生たちはみんな家族みたいに親切に迎えてくれ、寮のいろいろな決まりやルールを教えてくれたし、私がそのときできなかったことを手伝ってくれたし、言葉についても、わからないところ、うまく説明ができなかったりすると辞書も持ってきて読んでくれたりして、何とか第一歩を踏み出すようになりました。だからこそ今日まで留学ができるようになったと思っています。

司　会　次は、ブルガリアからのゲオルギさんにお願いします。

ゲオルギエヴ・ゲオルギ　私は、日本に来たときにも、今までにも問題や嫌なことは全然ないと思います。その理由は、多分、私は1年間留学生の専用の大学で勉強しましたから。そこにいた先生の仕事は留学生が日本に住むための準備を手伝ってあげることでしたから。私はそのおかげで今まで全然問題はありませんでした。そして、普通は問題がある人は、多分言葉がわからないことと自分の持つ文化と、日本の文化が違うということがわからないからだと思います。私は違う国の違う文化を理解するのが好きですから、それも楽しかったです。

司　会　今度は、エチオピアからのゲタテュウ・アスゲドムさん、よかったこと、嫌だったことなど。

ゲタテュウ・アスゲドム　最初来たときいろいろびっくりした。来る前は日本人、日本語しかしゃべれないということは知らなかった。いろいろな言葉もしゃべると思って来たから、そんなに考えなかった。だから、こっち来ては、大学でも日本語、勉強も日本語ということがわかりました。日本来て大体4年目終わって5年目ですけれども、それしかないことも慣れましたし、今は大体全部わかります。文化違うというのは、どうやって説明する、とても難しいけれども、どっち文化もいいけれども、システムが違う。最初は理解するまでは難しいけれども、よく理解すると、この文化もよいとわかると思います。留学生ともいろいろ話しているとき、いろいろな国の文化もわかるし、だから、日本来て日本の文化、自分の文化だけではなくて、大体世界の文化わかるようになった、これすごいよい点と思います。

司　会　モンゴルからのバルジンニャム・エルデネチメグさん。

バルジンニャム・エルデネチメグ　私は日本に来てもうすぐ4年たちます。この4年間は、寂しいとか悲しいとか思ったことより、うれしかった、楽しかったことが多かったような気がします。日本人はすごい働き好きできれい好きで、あと親切にされたことがたくさんあります。日本人の友達もできて、お互いに何回もホームステイしていて、友達がモンゴルの私の家にもホームステイしたことがあります。困ったことといったら、初め、日本語がわからなかったときはすごく辛かったです。今は少しわかるようになってきたから。それだけかな。すみません、よくしゃべれなくて。モンゴル語も余りできない方なのですよ（笑）。

司　会　続いて、韓国からのチェ・ヨン・ウさん、お願いします。

チェ・ヨン・ウ　私は日本に来て今4年目になるのですけれども、最近の私の日常生活では、これは不便だということはそんなに深くは認識していません。実は、認識することがだんだんなくなってしまった感じがするのです。ということは、そういうところが解決されたというよりは、最初日本に来て間もないころは、日本の人々の考え方、私の文化とのずれはどこでもあり得るわけで、そこの違いがわからなかったときまではお互いに合わなかったところがあったと思うのですけれども、考え方の違いがだんだん生活しなが

らわかってくるのです。そうするとそこからの対処方、違いは違いでそのまま受けとめればそこからの問題はなくなると思います。やっぱり違いを受け止めればそのままでいいと私は思うのです。もう一つのことは、私は専攻が農業経済学なのですけれども、韓国の講座だったら、1年生から4年生までは、お互いにみんな先輩、後輩の関係で、よく知っている。そういう環境に置かれていたのですけれども、ここに来てみたら、同じ講座でも研究室が違っていれば、私が最初思ったことよりは交流が余りなかったのです。来て間もないころは、それが、日本の学生とつき合うことの機会としてちょっと残念だったなということは思っています。

司　会　続いて、インドネシアからのハリ・スティアワンさんです。

ハリ・スティアワン　日本はとても便利な国だと思います。交通機関の電車はいつも時刻通り来ています。また、バスも大体時刻通りです。そして、コンビニがどこでもあるということで、自動販売機とか、それはいろいろで、本当に便利な国だと思います。そして、やっぱり生活がいい。ゴミ分別とか、それは何か文化のように日本人がいつもやっていること。そして、今はもう、私の大好きな冬のスポーツが体験できるようになりました。逆に、嫌だった、嫌いだったことは、物価がちょっと、いやだいぶ高いと思います。皆そう思いますと言う。それからもう一つ言いたいのは、同じ学校に勉強しているのに、日本の学生は大抵、自分達だけで固まっている。留学生にもっと知りたいという気持ちを持ってもいいのではないかと思う。そして、これは多分最初のころ、日本に来たときの問題だと思います。それは日本語の問題。多分みんな来たときはちょっと辛かったかもしれない。

司　会　日常生活の違いや文化の違い、さまざまな経験を通して感じた北海道の印象についてお話しいただきました。それぞれに北海道の自然や人々に対して、温かさを感じてくださったことがとてもうれしいと思いました。

【テーマ2】異文化としての北海道との出会いで生じた自己の変化

司　会　第2のテーマに入りたいと思います。異文化との出会いの中で生じた自己の変化、心の中がどの様に変化したかについて話し合っていただくものです。最初は、中国からのジョ・メイ・レンさんです。

ジョ・メイ・レン　私は、2年前北海道に来て、そのとき言葉が余りしゃべれなかったです。2年たって日本語がだんだんしゃべれるようになりました。そして、日本語ができる様になったことのおかげで中国語に対しての大切さもわかるようになりました。言葉は、毎日使っているのだけれども、どういうふうに正しいか、どういうふうに相手にわからせるようになるかということが大切だと思いました。それが変化の一つです。私は中国人ですから中国語大丈夫だと思いましたけれども、でも、中国語はまだまだですということもわかりました。自分の変化としてもう一つあったのは、物に対しての感謝の気持ちです。例えば、中国では、ご飯を食べる前に「いただきます」、ご飯終わった後には「ごちそうさまでした」とは言わないのです。日本人の友達の家に遊びに行ったとき、どんなに小さい子供でも「いただきます」「ごちそうさまでした」と、しっかり言うことがわかりました。そのとき、その声聞いたとき感動しました。自分の親に対しても感謝の気持ちを持っている。これから生活に対しても感謝の気持ち持って、このことは多分人生がすごく幸せになれると思います。

司　会　続いて、バングラディシュからのラーマン・ムハッマド・ミザヌルさん、お願いします。

ラーマン・ムハッマド・ミザヌル　日本へ来る前、日本についていろいろ本を読んだり、日本の映画「おしん」を見ました。これを通じて、日本人はみんないつも着物を着ているという感じを持ちました。そして、みんな生の魚や、貝とかカニを食べたり、それは〝はし〟でみんな

ジョ・メイ・レンさん（24、苫小牧駒沢大学国際文化学部２年）

ラーマン・ムハッマド・ミザヌルさん（24、苫小牧工業高等専門学校４年）

ショウ・ソウ・エンさん（21、北海道文教大学外国語学部３年）

司会をする新井事業部長

キム・サン・イルさん（27、北見工業大学大学院修士課程１年）

アラム・ムハマッド・マハブーブさん（30、北見工業大学大学院博士課程１年）

ジャン・エン・ファンさん（30、北海道東海大学旭川校芸術工学部３年）

パク・ス・ボムさん（29、酪農学園大学大学院修士課程２年）

食べている、そういうことを知って日本に来ました。どうやってはしで肉を食べるのか、信じていませんでした。そして、生の魚、生の貝、生のカニは絶対食べるものか、そういうのも思っていました。母に話すと、母は心配してしまいました。私の息子は日本に行って何も食べれないかもしれない、と(笑)。日本に来てから、今、はしを使えるようになって、刺身、すし、そういうものが大好きなのです。それはとても大きな変化と思います。今では、僕は母に嫌われるかもしれないのですけれども。

司　会　次は、中国からのショウ・ソウ・エンさんにお願いします。

ショウ・ソウ・エン　私は、中国にいるとき、2年間日本語を勉強しました。そのとき、いつも先生からは「日本人はとてもあいまいである」ということを聞きました。そのとき、私は〝あいまい〟ということは一体どんなこと、はっきりわかりませんでした。日本に来て、たくさんの日本人とつき合ってから、だんだんわかるような気がしました。日本人の友達、いつも自分の意見とかはっきり言わなくて、いつもあいまいの表現で言ってくれて、私とても困っていました。友達を呼んで私中国料理を作ったことあります。そのときの私の料理は、ちょっと失敗して本当にまずくて、自分では食べたくなくなってしまったけど、みんなからおいしい、おいしいと言われた。私は皮肉だと思った。とても悲しい気持ちでした。でも、今だんだん友達の優しい気持ち、わかるような気がします。みんな私のことを傷つけたくないと思ったからそう言ったことがわかったのです。私も今では、はっきり良い悪いと言わなくて、私もだんだん優しい気持ち持って、あいまいかもしれないけれど、いいな、いいなとみんなに言って、だから自分も優しい女の子になれた気がします。とてもうれしかったです。

司　会　続いては、韓国からのパク・ス・ボムさんです。

パク・ス・ボム　私は、日本に来て6年過ぎました。大きな変化がありました。日本に来て2年くらいたってからなのですけれども、そのときまでは、韓国人は大抵日本に対していろんな偏見を持っていますが、私もそうで、日本に対する偏見がありました。ここでは一々言えないのですけれども、日本で暮らして日本人といろいろ生活してみたらその偏見がなくなって、この人たちはこの人たちなりの文化があって、私はこの人たちを責めることができないということを感じるようになりました。それで、私たちは、韓国には韓国なりの文化があって、日本には日本なりの文化がある。それを責めてはいけない。みんな違う文化なのだから、そのことを認識すること、さらに、それをお互い理解し合うと何も問題がないのではないかなということに気づいて、今では、日本の文化、ほかの国の文化も理解しようと努力しています。

司　会　続いて、中国からのジャン・エン・ファンさんです。

ジャン・エン・ファン　日本に来て結構いろんな変化ありました。例えば、いつの間にか納豆が大好きになってきて、床生活がなれてきて、中国に帰ったらちょっと困るかなと思うときも結構あります(笑)。あと、これよりもっと、一番うれしい変化があります。それは、中国にいたときには、何か一つのことについて考え方は一つしかないと思っていることでした。それが、日本に来て、日本はおもしろい国かなと思って、日本の文化もおもしろいところをいろいろ考えたり探していくと、いろいろありました。例えば、一回中国に

帰って、友達に何か日本料理つくってくれないかと言われて、つくったのはカレーでした。自分もちょっと不思議。何で日本料理でカレーかなと思って。あとで考えて、いろんな国のもの吸収して日本風に、日本人に合うように改造して、それこそ日本文化かなと思います。北海道に来て、いろんな文化と少し触れ合ってというか、いろんな人と出会って、しゃべって、交流して、考え方が結構前より柔軟になってきました。そして考え方が広くなってきました。これはとてもうれしかった、すごくいい変化かなと思って…。

司　会　続いては、バングラデシュから来られたアラム・ムハマッド・マハブーブさんです。

スン・リィ・クンさん（31、室蘭工業大学大学院博士課程１年）

ユン・ミン・ソクさん（26、小樽商科大学商学部交換留学生）

アラム・ムハマッド・マハブーブ

【テーマ3】北海道での留学経験を将来どのように生かしていくか

日本に来て3年です。今ですと日本とはいろいろ文化が違いありますことがわかりました。まず、温泉について話します。最初に来て、温泉のホテルに行きました。研究室の人と温泉のお風呂に入るのとき、ほかの人の恥ずかしいところ見たら、僕はお風呂に入れないで帰りました（笑）。バングラデシュでは温泉ないです。あとびっくりしましたことは、日本では先生の前で学生もスモーキング、エンジョイします。もちろん授業のときでなく、いろいろの活動のとき。学生がスモーキングしていても先生は何も言っていないです。それがバングラデシュでは全然だめ、すごく先生に失礼のことです。あと、講義のときは後ろの人がスリーピング、寝るします。バングラデシュでは、学生がだれでも寝るができないです。

司　会　このテーマでは最後になりましたけれども、韓国からのキム・サン・イルさんです。

キム・サン・イル　日本の生活で新しくできた私の考え方とか態度について話すのですけれども、私は、二つです。結果から言うと、心の余裕ができたことと、もう一つは、もっと韓国人ぽくなったということです。心の余裕は、皆さんが今日、いろいろ言っていたことです。大自然、本当に広い北海道、人口密度が低いからもっと広く見える北海道から感じたのが、私自身の心の余裕です。二つ目の、もっと韓国人ぽくなったということは、韓国にいるときには本当に日本人ぽい韓国人でした。韓国は、知り合いと一緒に食べたり遊んだりすると、先輩とかそのときおごる人が、一人がほぼお金を払うのです。だけれども、日本へ来て、毎日自分のものは自分が払っているから、いや本当にこれ冷たいなと、そう思ったのです（笑）。やっぱりたまに辛くてもおごりながら、回りながらおごる方がいいのではないかなと、そう思っていると、やっぱりおれは韓国人だな、そうしてどんどん韓国人ぽくなったということです。

司　会　日本文化、北海道文化との接触は、皆さんの新しい変化をもたらしたものと思いますが、大切にする部分はぜひ大切にしていただいて、捨てる部分は捨てていただいてご自身のパーソナリティーを高めていただきたいと思います。

スン・リィ・クン　私は日本に来てから日本のいろいろな組織や日本の人々とつきあってきましたが、日本と中国の間にはいろいろな誤解があることがわかってきました。ここで二つの例を挙げたいと思います。室蘭に小さな組織の基金があります。中国の山奥の、お金がない、学校に行けない子供たちのために、募金している民間の組織です。1年に何回か中国にお金を送っているのです。このことは、中国では知られていません。私は室蘭に来て知って感動しました。また、室蘭は小さい町ですが、中国が大好きという方がいます。その方は新彊、シルクロードについては私より詳しいです。ですから、こんなに中国に対して優しい、親切、好感を持っている人、あるいは組織が、日本にある、日本に

タブ・シラトさん（31、帯広畜産大学大学院修士課程１年）

カマル・スリ・カルナゴダさん（39、帯広畜産大学大学院博士課程２年）

マオ・ジ・ゼさん（25、北見工業大学大学院修士課程１年）

ルステム・ムスタファ・アクデステさん（25、北海道大学大学院修士課程１年）

アンドラデ・アトス・ブシンゲル・スピノラ・デさん（20、北海道大学法学部２年）

ゴ・キさん（32、北海道教育大学札幌校大学院修士課程２年）

いらっしゃるということを日本に来る前には全然知らなかった。私は帰国してから中国の人たちに教えたいと思います。これが一つです。あとは、日本と中国は、まさに一衣帯水の隣国ですから、私は中国に帰ってから、両国の誤解を解くために、両国の関係が長く続くために、日本と中国との間に「橋をかける」という仕事がやってみたいと思います。

司　会　続いて、韓国からのユン・ミン・ソクさんです。

ユン・ミン・ソク　私の専攻は経済です。けれども、経済よりは、もともとからレジャーとか観光とかに興味を持っていました。韓国には日本に興味を持っている人がたくさんいます。それは片思いではなくて、日本の場合も韓国に興味を持っている人が多くなって、例えばビビンバとかカルビとか韓国の料理、あと韓国を学ぼうとしている人もたくさんいるし、あるいは韓国に旅行したりする人もたくさんいます。だけれども、北海道と韓国と交流をしてから余り長くないのです。最近から始まったのですけれども、両国の間に、交流の仕事やる人が余りたくさんではないのです。ここに来て、これは私、自分として本当一生の仕事にする機会だと思いました。それで、もっともっと日本語の勉強とか、あるいはいろんな人脈を生かして、韓国に帰ったらその人たちと交流して、韓日の中で役に立つ何かになろうと決心して、今、頑張っています。

司　会　続いて、中国からのゴ・キさんです。

ゴ・キ　私は、もともと中国で日本語の教師をしていました。帰国しても教師という仕事を続けたいと思っています。将来、日本で経験したことを学生に伝えたいと思っています。今は情報社会ですが、もちろん情報を得る手段はいろいろありますけれども、私の生の経験、学生たちに話したいと思っております。私は、自分が当たり前だと思っていることは、ほかの人、必ずしも当たり前と思っているとは限らないということ、これ日本での留学生活を通してわかるようになりました。例えば、日本には、さっきお風呂の話いろいろ出てきましたけれども。今、世界交流・国際交流と叫んでいますけれども、ささやかなこと、文化、お互いに違いがあるということをまず理解してもらって、国際交流につながっていくのではないかと思っております。また、帰国したら、日本で経験したことを生かして、もし国際的な仕事、国際交流と関係がある仕事、そういう国際交流に役立ったらうれしいなと思っています。

司　会　次は、ブラジルからのアンドラデ・アトス・ブシンゲル・スピノラ・デさんです。

アンドラデ・アトス・ブシンゲル・スピノラ・デ　交流ということはすごいおもしろいことです。どの国でもいいことと悪いことあります。私たちは、いいことと悪いことの間で、自分の国でも日本でも、ほかの国でも変わります。まず、僕が思うのは、必要で大事なことは、いいことを守ることです。どんな国でも、いい経験とかそれを守って、悪いこと、それについて考えて、そういうことはしたくないとか。私たち、選択の自由あります。だから、いいものを選んで、僕は考えて、皆さんの意見を聞いて。ブラジルのいいもので守りたいことは、ポルトガル語、それはまず忘れることはできないけれども、ブラジル人の明るさとか優しさも。僕はアメリカンスクールにいたからアメリカの自由のこともあります。そして日本。それはまず日本語。帰国するときに日本語を守りたい。日本人を探して、自分の国で

話して、メールを書いて。自分たちは選択の自由がありますから、日本の好きなものを守って、自分の国の好きなものも守って、そういう話をちょっとしたいと思いました。

司　会　今のお話は、日本に来たら日本のよいところをどういうふうに守っていくか、もちろん自分の将来に向かって。さらに、自国のよいところを残していったらいいのかを考えるべきだということ。そして、外国で住むことによって、自国との違いを知る。その全てが良い経験になる。自分を見直すキッカケになる、というように感じました。続いて、留学での経験をどのように将来に生かすかについて、トルコからのルステム・ムスタファ・アクデステさんです。

ルステム・ムスタファ・アクデステ　私はロシアで生まれて、両親はアゼルバイジャン人でトルコ人です。ちょっと難しい(笑)。生まれてからソ連に住んでいて、その後はアゼルバイジャンにいて、その後、トルコに行きました。だから別の国に住んでいて、別の国の国籍を持っていて、別のナショナリティー持っています。トルコはアジアとヨーロッパの間の国で、ヨーロッパとアジアのいろいろな習慣と文化がある。もちろん日本の北海道に来て、私費で来たからいろいろなアルバイトをしましたから、すごいいっぱい経験持っていると思います。これからのことでは、私はいろいろな国の経験もあるので、わかり合えることも多いと思ってます。だから、いろいろな国の間に立って、国際的な協力をする仕事で、頑張りたいと思っています。

司　会　次は、中国からのマオ・ジ・ゼさんです。

マオ・ジ・ゼ　僕の日本の留学生活はそろそろ1年半になります。時間は長くないですけれども、新しい環境に鍛えられて、いろいろな文化とか習慣とか見学して、自分の自信が感じてきた。僕が言いたいことは、これは全部僕の留学生活の経験から得られて、将来に役立てることだと思っています。全部で四つあります。1番目は自信ですね。全くわからない環境で過ごせると、そういう自信。2番目は、自立性と独立性ですね。留学生として日本に来て、やらなければならないことがいっぱいあります。難しいけれども、でも、やらなければだめだよね。一方では、留学生としては、新しい国に来て、人との交流をしなければならないですよね。僕感じたものは、交流は難しいですね。文化も違うし習慣も違うし。でも、僕は今、レベルを上げてちょっと上を見て、自分中心じゃなくて相手を中心にして、あとはやること、はっきり考えて交流していきたいと思っています。これは3番目です。最後は。寂しさだけど、僕の考え方は、留学生として一番寂しいことは何か。しゃべられないこと、そのことです。僕はこういう健全な人で、中国語もぺらぺらで、何でしゃべれないのかですね。口を開けられないかですよね。これはやっぱり日本語ができないからです。でも、これは全部昔のこと。今僕は皆様の前でしゃべっていて、すごく幸せかなと思っています。以上の四つのことが僕の留学生活の経験から得られて、僕の将来のこととか絶対役立てられると思っています。最後にもう一言、実は恥ずかしいのですが、僕、「お前はえらいな」と言われたくなってきますね。そういうことです。

司　会　最後の「お前はえらいな」の部分、これは言われたいのじゃなくて、自分が自分に言っていることなのだろうと思いますが…、いかがですか。これは、北海道で頑張っている留学生の皆さん全員が感じていることなのではないかと思います。続いて、スリランカからのカマル・スリ・カルナゴダさんです。

カマル・スリ・カルナゴダ　私は、日本で今まで習ったこと、学んだことをどうやって将来に使いますというテーマで少し話したいですけど。私、日本に来る前にスリランカの農林省に7年間勤めていました。国の農業政策を決めるとき、いろいろな研究をやって政府のいろいろな相談を受けたりとか。だから、私、日本で学んだことで一番大事なことは、ここで学ぶことはそのまま国の発展に使うことができるのが一番いいことだと思っています。もう一つ、私はスリランカでスリランカ語と英語だけ使っていますけど、このことは、私、今は正しくないと思います。できるだけほかの言語も勉強した方がいいと思っています。スリランカにも日本語を学びたい子供がたくさんいます。だから私は、日本にいる間に学んだこととともに、私が覚えた日本語を、子供たちが日本語を習うために手伝ってあげていきたいと思います。もう一つは、日本人の環境に関したいろいろな考えや研究していることや実際にやってい

ることにも私驚いた。今、スリランカにも環境の問題がだんだん多くなります。だから、スリランカでも将来紹介していく大事なことだと思います。

司　会　発言者の最後になりました。ダブ・シラトさん、中国からの留学生です。

ダブ・シラト　僕は日本に来て勉強になったことがたくさんありました。今日はその中から、環境を守って自然をきれいにする、そういうテーマを取り上げて話をさせていただきます。まず、僕が初めて日本に来て一番感動したのは、日本の自然は緑がすごく多いことです。日本に来る前は、日本は島国で人口密度が非常に高いと聞いて、自然はそんなにそのまま残っていないと思っていました。それが緑が多くて本当にびっくりしました。今、世界的に一番大きな問題になっているのは環境問題ですね。今も窓の外を見ればわかりますけれども、この黄砂は中国から飛んできています。日本にだけじゃなくて、地球の裏側にいるアメリカ人のところにも、中国の黄砂が飛んでいっている。そういう話を聞けば、中国人としては本当に申しわけないなと…。なぜ、中国の内モンゴルでは自然がそんなに悪化して砂漠化が進んだかといえば、それは自然のものを人間が勝手に使った。伐採とか、勝手に放牧をして、草地と家畜のバランスが崩れたからそういう自然悪化という現象が発生したのは事実と思います。日本に来てから、日本人は一人ひとりが責任を持って自然を守っている。社会や経済の発展に従って建物がだんだん建っていきます。それに従って緑が少なくなります。でも、人間は動物と同じで緑からは離れられない。だから、日本人の緑を愛する、自然を愛する、そういう責任感や気持ちを中国に帰ってから中国の子供、大人、あらゆる人々に伝えて、きれいな環境をふるさとにつくりたいと思っております。

司　会　専攻する学問の成果を国で役に立てたいとの意見は、テーマ3を担当していただいた皆さんの共通した将来像としての認識となっていることを知りました。皆さんそれぞれに母国と日本との間に立って、相互の理解に向けての架け橋として両国の交流の進展を図っていただける力強いメッセージを感じさせてくれました。このテーマを担当されなかった方たちも、同じご意見だと思います。ありがとうございました。

北の大地の留学生から北海道へのメッセージ

私たちは、北海道の人々が優しく留学生を迎えてくださること、そして豊かな自然の中で勉強できることを心から感謝申し上げます。

私たち留学生は、一人一人が母国の誇りと思う伝統と文化を持っています。また、日本にもすばらしい伝統文化があることを承知しています。世界にはそれぞれに違う伝統や文化のあることをお互いに理解しなければいけないと考えています。

母国を離れての生活の大変さは日本の学生よりもつらいものがあります。日本で勉強し続けたい私費留学生にとって、アルバイトはどうしても必要です。誠実に仕事しますので、チャンスをもっと与えてください。

留学生にとって自分自身で解決できないことに住まいの問題があります。外国人という理由だけで入居が難しい場合もあります。皆様のご協力をお願いします。また、外国人留学生というだけでマイナスイメージに結びつけるような偏見はやめてほしいと思います。

もしあなたのそばに留学生がいたらオープンな気持ちで声をかけ、会話をしてください。ささやかことでも、一人で頑張っている留学生にとってどれほど幸せを感じることでしょう。

私たちは北海道の美しい自然が大好きです。留学生として初めてここを訪れたとき、本当に感動しました。この美しい北海道の自然をいつまでも守り続けてください。

私たちは北海道の人々の優しさが大好きです。しかし、若者たちにはお年寄りに対する優しさが感じられません。優しさをお年寄りを大切にすることにも向けてください。

北海道の人たちはもっとオープンな気持ちで接してください。特別扱いのお客としてではなく、ときには叱り、そして喜びを分かち合える兄弟や姉妹のようにつき合ってほしいです。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

私と北方圏諸国とのかかわり

カナダ、カナダの20年

道都大学美術学部教授
佐藤 勝泰

国際交流：その基本は、やはり人

20年前、建築学会の北米カナダの寒地住宅・研修ツアーに参加したのがきっかけとなり、外国に出かけるようになった。ヨーロッパ・北欧に3回、アジアに3回、そしてアメリカ・カナダが10回。そのうちカナダでの視察・調査は7回、述べ滞在日数は70日を越えた。私にとって北方圏で一番お世話になった国は、カナダになる。

住宅や住生活の資料を集め調査し、比較する国は、歴史の長さが北海道と似ていることも大切なのでは、と私は思っている。カナダの建国は1867年。北海道に開拓使が置かれ本格的に日本人が定住し始めたのは1869年。そして、カナダは同じ移民国として百年ほど早く国造りをはじめたアメリカの失敗例と成功例を確かめながら、慎重に国造りをすすめているようにも見える。外国から何かを持ち込もうとするとき、そのルーツがしっかりと見えたほうがよい。アメリカは特に戦後、日本人にとって強く理解を求めさせられた国のひとつである。その弟ぶん的存在のカナダの情報は、北欧諸国に比べわかりやすい。

私の本格的な調査の期間は、1992年から9年間足らず。テーマは「戸建て住宅の地下室」、「庭での生活実態」、「高齢者居住施設」、「環境共生建築と住宅」の4種類。それでも調査対象の住宅や施設の数は70を超える。随分とずうずうしく調査をさせていただいたものだと、今さらながら思うのである。

戸建て住宅の調査では、まず家の各階の間取りをスケッチする。つぎに家具や生活用具の配置をチェックし図面に書き込む。次に住み手にアンケート調査を含めて生活観など、いろいろな質問をさせていただく。さらに、お断りして写真を撮り、ビデオ撮影もする。ちょっと視点を変えると「泥棒の下見」だと言われても反論の余地はない。このような危険をはらみながら1999年、サスカツーンにて「庭での生活実態調査」をしているとき、調査対象住宅

2000年８月「高齢者居住施設調査」エドモントン・センタベリーコート

1992年12月エドモントンシティ・ホールの「アトリウム空間」

の隣家に本物の泥棒が入ってしまった。地元のコーデネイター役の方と相談をして早めに調査を切り上げた。

カナダ調査の都市は、なるべくエドモントン、サスカツーン、そしてバンクーバーに限定、集約している。その理由は、同じ都市に何回も足を運ぶことによって、その都市の状況や生活の背景が自ずと見えてきて、調査内容も、早く深く理解ができること。そして地元の協力者も「あー、いつものあの佐藤さんねー」ということで、かなりのわがままも聞いてくれるようになるからである。これまでの私のカナダ調査は、調査住宅や施設の居住者も含めれば述べ２００人を超える協力者によってサポートされた。

当然のことであるが、「国際交流の基本はやはり人」であることを感謝の意をこめて、改めて思うのである。

ときには、「北海道は日本ではない」という発想も

カナダの都市にあっては、ショッピングモールやリゾート施設が大きなアトリウムでまるごとカバーされている。約30年も前から「寒さを忘れる冬の生活の工夫」が大胆に試されている。建築物においては、恵まれた自然環境との共生を成功させ、しっとりと地域風土に根付いているようにみえる。そして住宅にあっては、冬期間「家の中いつでもどこでも、寒さを感じさせないこと」が標準仕様になってから約40年。カナダは、冬を快適にすごさせる生活環境造りのノウハウの宝庫といえる。国じゅうが寒いカナダ。一方北海道は、日本の一部であって島じゅうが寒い。環境整備の差はいまもって、なかなか縮まらない。

イギリス人は、ヨーロッパをいろいろな面でいつも強気でコントロールしている。しかしながら、自分の国にとって都合の悪いときは「わが国は、ヨーロッパに含まれない」と言うそうである。わが北海道人も、何か問題に直面したとき、すこし発想を変えて「北海道は日本ではない」という前提に立って考え直すことが、時には必要かもしれない。

現状を見ると、都市施設にあっては大通りを中心に、寒冷地に最適といえる地下街を整備した。が、その後何年たっても、誰が見ても重要な都市軸である札幌駅から大通りまでがつながらない。建築物においても、東京や大阪と同じデザインのものが「北国らしさ、北海道らしさ」を無視するがごとく乱立・謳歌している。そして住宅にあっては、寒冷地住宅から北方型住宅へと呼称が変わり、かすかにではあるが独自の文化のにおいが感じられるようになった。が、依然として「おもちゃ箱をひっくり返した家並み…」がそのほとんどを占めている。

具体的には、お役人が中央官庁と渡り合うとき「経済基盤は、冬の快適さから始まる。」と強く主張し、またデザイン教育の理念を構築するとき「雪景色に似合う素材や形。」を原点に据え、そして居住者自身に「ここに北海道らしい定住文化を築くのだ。」という意識を明確にもち示す。そうしていたならば、北方圏諸国にすこしは自慢のできる北海道になっていたかもしれない。

まだ、おそくはない。本格的に日本人が定住し始めてから１３３年。ときには「北海道は日本ではない」という発想をもって、いろいろな問題に対応すれば２００年を待たづとも「日本人らしい北方圏文化」が、ここ北海道にしっかりと根をはり、芽生え、定着するであろう。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

地球の上の方で

家具デザイナー
伊藤 千織

いつのことだったかある席でのこと。話が北方圏のことに及んだ時、ご一緒した女性に「北方圏ってなんですか?」と尋ねられ、さてどう説明しようかと考えた。するとそばにいた人がすかさず一言。「要するに、地球の上の方同士で仲良くしようってことですかねー」なるほど。地球の上の方。せめて「北の方」と言ってもらいたいところだが、思わず笑ってしまうわかりやすい説明。この的を射た表現が妙に気に入ってしまい、それ以来時々思い出している。

北欧狂いの両親のせいで、子供の頃から家にはときどき背の高い金髪の外国人が出入りし、札幌オリンピックでは訳もわからずフィンランドの応援旗を握らされていた。そんな訳で、私が物心ついたころには「北方圏」やら「北方圏センター」という言葉は我が家では一般名詞化していたが、あまりに身近すぎて私自身は実は大して興味もなかったし意味もよくわかっていなかったのが正直なところである。それがなんとなく実感をともなって改めて理解できるようになったのは、10年程前に2年間デンマークに留学してからのこと。

それをきっかけに北欧各地の人々と生活を通してふれあう機会が多くなったからだ。明るい夏を楽しんだり長い冬を工夫したり…、実際住んでみてどうやら子供の頃から聴かされていた北欧のいろいろな話はウソじゃないらしいということも知った。時を同じく留学していた九州出身の友人にとっては、北の国の気候は寒くて暗くてつらいものだったらしく、しょっちゅう風邪で寝込んで

雪像彫刻家たちと
（ノルウェー、リレハンメルで）

はめそめそしていたが、私にとっては外国というより「なんか北海道っぽいぞ」と、まるで違和感なくすんなり北欧の生活に溶け込めることができたように思う（逆に九州にその友人を訪ねた時には、今度は私が外国に来たような思いがしたものだが）。たかが気候風土とはいえ、ずいぶんとそこに住む人の気質や暮らしにも影響するものらしい。そういえば人のテンポのゆるさも何となく北海道人に通ずる部分もあるし…。

ノルウェーや長野で開催された国際雪像オリンピックや各地の競技会などのお手伝いを通じても、様々な北の国の人々と出会うよい機会となった。彼らは北欧各国をはじめカナダ・アラスカ・日本・中国、遠くは南米からなど、世界各地から集まり転戦する芸術家集団。雪のある所ならどこへでも出かけていってあっという間に素晴らしい雪彫刻作品を作り上げる。リルハンメル大会などは、ノルウェー人の自国の文化と北方の民・サーミ人文化への誇りと敬意が、色々なかたちで感じられる素晴らしい大会だった。雪像競技会の面白さは作品もさることながら、参加者が世界中から集まって来て製作期間の数日間の間に和気あいあいとした交流が生まれるところにある。しかし、この一見ばらばらな人々の集まりをくくるキーワードは一体何だろう。国は違っても雪を踏みしめるギシギシという音に共通の懐かしさをもっている地域の人々。ふと、そうかこれも「北方圏」ということなのかなと思った。そう考えると北方圏という世界の見方はかなりスケールが大きくて面白い。

亜熱帯の沖縄を含む長い日本の中にあり、同時に横に広がる北の国々とも共感を感じられるという縦横の文化のクロスする北海道のような場所に住んでいる私たちは、一粒で二度おいしく実はとてもラッキーかもしれない。せっかくだから、もっと上の方同士仲良くしなくちゃもったいない。そのためにも、北海道ならではのユニークな存在である北方圏センターにはいつまでもがんばっていただきたいと思う。

さて私事になるが、2年前に亡くなった父・隆一も、大学での授業や講演・著作などを通して北方圏交流に関わらせていただき、北方圏センターには大変お世話になった。

書斎にあったものを整理していて気づいたのだが、そこには北海道・北欧そして北方圏に関わる本やスライド写真などが大半を占めていた。北海道という地域への愛着と誇り、北の生活文化を創造しようという思いが、残されたものの中から感じられた。高度成長期～札幌オリンピックから、色々な意味で北海道のいわば「青春時代」と本人の働き盛りの時期が重なり、また数多くのよき仲間と出会った。そのようなめぐり合わせの中で、沢山の方々と一緒に活動し、北方圏や北の暮らしなどを北海道の人々に紹介することの一端を微力ながらお手伝いできたことは、本人にとって大変幸せなことだったと思う。

情報化社会で日本中が画一化される中、自分も含めて若い人が今、北海道の文化や生活をよりよくしようと本気で理想を描いているだろうかと自問自答してみる。その父が、生前最後に立ち寄った場所は、奇しくも北方圏センターであった。すっかり痩せてしまった父に、旧知のセンターの方々が代わる代わる握手をして優しく声をかけてくださった様子が忘れられない。用もないのにセンターに顔を出すのが大好きだった。お世話になった関係者の皆さまには、この場をお借りしてお礼申し上げたいと思います。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

アルメフォースご夫妻のこと

旭川大学教授
川村　喜芳

学生時代、スウェーデン人宣教師の家庭で通訳のお手伝いをしていたことがある。在日スウェーデン福音宣教会（Swedish Evangelical Mission in Japan）という教団が苫小牧で活動を始めることになり、室蘭のアメリカ人宣教師から紹介されて引き受けたものだ。高校三年生の冬だった。

初めて宣教師館を訪ねたのは一九五一年の十二月。落成したばかりの真新しい宣教師館は岩倉組に特別に注文して造らせたという北欧風の本格的な寒地住宅で、すきま風の入る家でストーブを囲んでいた私には、別世界を訪れた感じだった。

それから毎週土曜日、学校が終わるとそのまま室蘭から汽車で苫小牧に行き、土曜の夜と日曜の午前、午後、三カ所の集会で通訳をし、日曜の夜帰宅するという生活が続いた。合間に手紙や地元紙に寄稿するコラムの翻訳などもした。

高校三年の冬というと受験勉強の追い込みに入る時期だが、こんなことで土日は全く勉強できなかった。試験に落ちたら、その時はその時と、あまり気にもしていなかった。のんびりした時代だった。

四月から札幌で寮生活をすることになり、大学の四年間は毎週札幌と苫小牧の間を通った。勉強が忙しくなり、後を引き継いでくれる人を探したが見あたらず、結局、道庁に入って一九五八年、香港の貿易事務所に赴任するまでこの仕事を続ける結果になった。

宣教師アルメフォース夫妻と筆者（1952年頃、大学生当時）

宣教師はエリック・アルメフォース氏。スウェーデン南西部の港町イエーテボリのご出身で、当時、五十歳前後というところだったろうか。善良で温厚な紳士で、動作はゆったり、話し方も穏やかで訥々としゃべるという感じの方だった。奥様のお名前はエルサ。いくつか年上の姉さん女房で、ご主人とは対照的に活発な方だったが、人情の厚い、涙もろい方で、話しながら時々、大きな目からポロポロと涙をこぼされることもあった。仲の良いご夫婦で「エリック…」「エルサ…」と互いに呼び合っていた声がいまも耳に残っている。

日曜午後の宣教師館でのフルコースの正餐は、寮でろくなものを食べていなかった私には最高の楽しみだった。

ある日、デザートに見慣れない食べものが出た。茶碗に牛乳を入れ、台所の日の当たる場所で発酵させた豆腐のようなものに砂糖をかけて「サワー・ミルクです」といって食卓に出されたのだが、その異様な味に吐き出しそうになり、何とか一口だけ飲み込んだ。それがヨーグルトというものだと知ったのは、それから何年も経ってからだった。

朝食は、「ポリッジ」というお粥に牛乳と砂糖をかけたものかコーンフレーク、それに半熟卵、果物に紅茶などだったが、卵は三分の一か四分の一くらいのところをナイフでスパッと切り落として卵立てに置き、柔らかい黄身をスプーンですくって食べる。

卵を食べながら時々エルサ夫人が子供の頃の想い出を話した。幼い頃、朝食に半熟卵がつくのは父親の食卓だけで、ナイフで切り落とした白身のところを貰って食べるのが楽しみだったという。世界一豊かな国と思っていたスウェーデンにも、そんな時代があったのかと不思議に思った。

ある日、何かの都合で食事の支度が出来ず、夕食を食べずに札幌へ帰ったことがある。「寮では相変わらずライスとミソスープ（味噌汁）とダイコン（たくあん）しか食べていないのでしょう。札幌に着いたら、これでちゃんと栄養のあるものを食べるのですよ」と言いながらエルサ夫人がポケットに千円札を押し込んでくれた。翌週、何を食べましたかと聞かれ、駅前の食堂でカレーライスを食べました、と答えたら、カレーライス？と言って苦笑していた。カレーライスは当時、一杯百円もしなかったはずだ。ケチな男だと思われたかもしれないが、貧乏学生が一回の食事に千円もかけるなど思いもよらないことだった。

七年間スウェーデン人の家庭に出入りし、スウェーデン語の学習には最高の環境にいながら、結局英語だけで通してスウェーデン語は覚えなかった。

今でも覚えている言葉は「タック・ソ・ミュケット」と「スィット・スティラ・ポ・ストゥール」の二言だけ。「どうも有り難う」と「椅子の上に静かに座っていなさい」という言葉である。「静かに座ってなさい」というのは、アルメフォースご夫妻が帰国された後、交替で来日されたエリクソンご夫妻がいつも坊やのハンス君に言っていた言葉だ。

スウェーデン語には濁音が少なく、独特の歌うようなイントネーションがあって、フランス語ほど洗練されてはいないが、聴いていて耳に心地よい言葉である。

六年前、初めてスウェーデンを訪れ、ストックホルムに三日滞在した。当然のことだが、周りにはスウェーデン語が溢れていた。四十年ぶりに聞く懐かしいスウェーデン語の響きだった。

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

「北方圏」から知恵を頂いて

元北星学園大学講師
伊藤 祐紀子

「〝ホッポウケン〟ってどんな犬ですか〟と聞かれましたよ」というお話があったのは、北方圏交流推進協議会の席上でした。この協議会は、北海道が「北方圏構想」を打ち出してから4年後の昭和50年に作られたもので、経済、国際交流、生活文化などのグループに分かれていました。私は昭和58年まで生活文化グループに属して、「北国にふさわしい生活とは何か」についていろんな勉強をさせて頂くことができました。毎回、目からうろこが落ちる思いで、出席するのが楽しみでした。その頃まだ資料の少なかった時代に、北方圏諸国の情報を伝える「北方圏」は貴重な存在でした。

委員の中にはフィンランド通だった故伊藤隆一先生をはじめ、北国の研究や北方圏での生活体験が豊富な方々が多くいらっしゃいました。北の国々から多くの生活の実例を引いて北海道の現状と対比し、これからのあるべき生き方を考え、広めようという理想を持つ諸先生でした。そうした広い視野も体験もない私が一番痛感したことは、私たちの生活がいかに本州志向であるか、北海道との気候風土の違いも考えず、ただ東京の真似をしていただけなのだということです。北海道の風土が生み出した産物を活用し、この気候に適した家や生活スタイルを自分たちの基準で作って、真に豊かな生活をしなければならないという、北海道の暮し方の根本概念が確立された時期でした。

概念が出来上がり提言としてまとめただけでは、毎日の生活は向上いたしません。北海道の「北方圏構

JICA日本語クラス 南米と東南アジアからの研修生

想」を生活面で具体化していくために、まず冬の食生活を豊かにしたいと思いました。幸い北海道から助成をいただき、ジャガイモ料理の紹介として、ドイツ人の主婦を呼んで道内11市町村で料理講習会を行い、それを料理カードにしてお配りすることができたことは嬉しかったです。また〝冬を楽しく〟の構想にひかれて、初めてクロスカントリースキーに挑戦して夢中になったり、「北方圏」の住関係の論文に啓発されて、窓と断熱と地下室にこだわった自宅を建ててもらって大満足をしたりと、私の個人生活の中でも北方圏構想が一つずつ実現して行きました。

社会的に見ても、ここ数年来マンションや家の広告にはセールスポイントを「収納部分」や「断熱」においているのが少なくありません。また、地場産品を使った料理のレシピも溢れんばかりに目に入ります。衣生活の方はさすが個性と流行が最優先なのか、冬のハイヒールや寒風の中のなま足スタイルもお目にかかりますが、がっちりした滑らない靴、温かいパンツルックが優勢です。これらは北方圏調査会時代に、北国の生活関係の集まりでは機会あるごとに訴えられていたテーマだったと記憶しております。北方圏調査会から北方圏センターへと名前は変わっても、目的は変えることなく追求されてきた「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」の諸々のご活動の成果が根付いた証と思います。

平成８年には私にとってまた新たな北方圏センターとのお付き合いが始まりました。それはＪＩＣＡの研修生への日本語教育が始まり、北海道国際センター札幌へ通うことになったのですが、その管理運営は北方圏センターだということで、浅からぬご縁を感じました。それと同時に北方圏のみではなく広く世界を対象の国際協力に取り組む北方圏センターの大きな飛躍を感じました。私たちの「北海道日本語教育ネットワーク」も事務局とリソースセンターを北方圏センターの一隅に置かせていただき、活動の拠点となっております。国際理解の重要性がさけばれる時代に、相互理解の基本のひとつである言語の問題、日本語教育にいち早くご理解を示してくださったことに感謝と敬意を表するしだいです。

日本語教師として外国人留学生に接していますと、私たち日本人が留学生の間に差別をつけて接しているのではないかと反省することがあります。本当に小さいことかもしれませんが、パーティーをするとき、私立大学より国立大学の留学生に招待は集中し、アジア系より欧米系の学生が喜ばれることがあります。これは日本人がもっている価値観を反映していることなのではないでしょうか。国際理解を進めるとき、私たちの中にあるこんな壁を取り払うことも大切な運動ではないでしょうか。世界の人々との偏見のないお付き合いのためにも「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」が新しい風を起こしてくださることを期待しております。

北海道の飛躍を目指して「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」のさらなるご健闘をお祈り申し上げます。

JICA日本語クラス“和室を体験する”

創刊30周年記念企画「北方圏と私」

私と中国のかかわり

―10年の活動を省みて―

江別日中友好の会会長
長谷川 享

私の中国との交流のはじまり

私が北海道から派遣されて、中国黒竜江省ハルビンの大学に赴任したのは1989年10月のことで、6月の天安門事件があって間もない時であった。その頃のハルビン市民の生活レベルは、かつて私たちが経験した戦後の貧困からやっと抜け出した昭和30年初頭の生活を思わせるものであった。

大学は建物こそ天安門の楼閣を思わせる威容ではあるが、教室の中は教材一つ無い状況であった。学生たちと云えば、濃緑色の軍服まがいの服を着、教科書に弁当箱と箸の入ったビニール袋を手にしたスタイルであった。だが、授業は朝8時から夜8時までの過密ダイヤの中での凄まじいまでの学習意欲である。この熱意が私の中に中国の新しい息吹を感じさせ、彼らに触発された私は、この意欲に何かで応えようと思い、帰国後早速行動した。

江別日中友好の会設立

まだ中国情報は少ない時であった。まず中国滞在中の写真を50枚余りに整理して、「中国ハルビンの生活」写真展を開いたところ、500人余りの来場者があり、関心の深い反応に驚いた。この写真展がきっかけで、20人が発起人となり、「江別日中友好の会」の設立となった。1992年のことである。

設立の基調としたことは、主義主張は抜きにして、日中の庶民同士が生きていく生活の中から生まれたお互いのつながりをもとに、さらに一

「日中大廟会」民族衣装ショー。日中双方の文化を持ち寄ったお祭り（2000年12月、江別コミュニティーセンターにて）

般市民にも呼びかけ、「草の根の交流」を合い言葉として発足したものである。

10年間の交流活動から

当初は新年会や野外パーティーなどの交流会をもち、互いの親睦親善を中心としての活動を行ったが、文化の質的交流の欲求が高まり、百聞は一見にしかずと、中国文化研修旅行が毎年行われるようになった。その旅は研修を主体にした手作りのもので、観光の他に小学校や大学訪問を組み入れて、交流を行った。特に印象深いものとしては、桂林からバスで1時間半、山峡の村、資源県少数民族苗族村がある。谷間の棚田水田の続く、のどかな田舎道を走り、さらに1キロほど歩いてやっと西嶺小学校、30人ばかりの粗末な服装の子どもたちと先生、そして遠慮がちに遠巻きの村人に出迎えられた。校舎の中は薄暗く、土間に並ぶ机と長イスは年輪が浮き上がり穴ぼこ、天井の穴からは光が射している。だが、食い入るように黒板を見上げる子どもたちの素直で、汚れの無い心を写す鏡のような瞳があった。

このように取り残された貧困の少数民族の村で、人間性を失わず生きる村人や子ども、教師の姿に接し、決して甘い同情や感傷ではなく、みんなの心の中に貧しさにめげず、真っ当に生きる人間の姿が焼き付いたことは確かである。

一方、中国を知る活動として、講演会やシンポジウムをもった。その中で印象に残るものといえば、中国留学生を講師として行ったシンポジウム「中国民族文化に学ぶ―わが郷里を語る―」がある。中国の6民族（満族、チワン族、モンゴル族、ウィグル族、朝鮮族、漢族）のパネリスト、それぞれ独自の民族文化や生活、地域や民族が違っても、互いに理解し合って仲良く暮らしている少数民族の話などを語り、聴衆に感銘を与えた。

また、「中国文化へのいざない」と題した全5回シリーズの文化講座―①中国歴史のあらまし②ことばの散歩③民衆の楽しみ④食文化―豚と羊―⑤民衆のこころ、は奥深い悠久の中国文化はもとより、その中で日本と中国に共通する文化と思われるところは多いが、半面、全く異なる文化も多いことに気付かされた。

このような今までの交流のあり方から、さらに積極的に発展して行ったのが「日中大廟会（だあみょうほい）」である。中国庶民の祭りである「大廟会」を模して、日本側と中国側（中国総領事館・中国留学生学友会・中国文化サロン）双方がそれぞれの文化を持ち寄り、一般市民も巻き込んだ交流の場としたものである。会場には食文化の出店を始め、華麗な民族衣装ショー、民族芸能、民族品即売、その他多彩な出し物があり、一般市民250余人を交えて大いにぎわった。このイベントは、これまでの交流をもとに、さらに発想を新たに、双方の文化を持ち寄り、一般市民参加での文化交流の行事へと発展させたものとして評価している。

これからも「草の根交流」を

中国は永遠に私たちの隣国である。互いの間に紆余曲折の歴史と交流はあったが、何れがどのような立場にあろうと、仲良く、尊敬し合い、助け合い、長短相補い合って発展する人間的間柄でありたいと考える。

私どもの会としても世の時勢にとらわれることなく、初心である住民レベルの「草の根交流」の輪を広げる活動を続けたいと思う。

創刊30周年記念企画・特別寄稿

北方圏フォーラム子供環境会議

北海道総務部知事室国際課主査
江本 健道

保護区域を視察する参加者や関係者

「北方圏環境会議」の報告書を掲載する「北方圏」第11号（1975年4月1日発行）

一、北方圏フォーラム

今回、この紙面をお借りして、昨年カナダ・アルバータ州で開催された表題の「子供環境会議」（ユース・エコ・フォーラム）についてご紹介をさせて頂きますが、その前にまず、読者の皆様に、「北方圏フォーラム」について若干のご説明をさせて頂きます。

この組織は、昭和四九年に北海道の提唱により札幌市で第一回目が開催された「北方圏環境会議」に端を発し、平成三年に米国アラスカ州アンカレッジ市で設立総会が開催され、同市に事務局を置く姿で誕生したものです。主に北方圏地域における複数の国々の地方政府や自治体で構成された非営利組織で、地域に共通する課題や地域に影響を与える世界的規模の問題の解決を図るために、各地域が協力して取り組んでいくことを目的としており、北海道地区が発信地となっている「北方都市会議」と「寒地開発に関する国際シンポジウム」の両組織とも連携をとって活動をしています。

主な活動としては、①北方圏地域での地域政策決定のための情報・意見交換②域内での重要課題の解決のための共同プロジェクトの推進③域内住民の声の国際機関等への反映を挙げることができます。現在、組織には北東アジア、北米、ロシア、北欧の十カ国二五地域が加盟しており、その中で、北海道は設立当初からの主要構成員として重要な位置を占めています。

二、優先プロジェクト

この組織活動の中でも、特に重要なものは、「優先」と「推奨」に分けられる「環境、経済、社会文化等のプロジェクト活動」であり、今回はその中から、優先プロジェクトの一つである「北方圏地域の環境教育」と、そのプログラムの一つである「子供環境会議」についてご紹介いたします。

このプロジェクトは、平成一二年のスウェーデン・ルレオで開催された会議において、北海道・黒竜江省・アルバータ州の三地域共同事業として北海道から提案され、そこで了承された結果、事業が実施される運びとなりました。このプロジェクトでは、天然資源に恵まれた北方圏地域における開発行為に対して、環境破壊を防ぎ、将来に向けて環境保全に努めるために、二一世紀を担う子供達に環境教育を行うことで、「過酷な自然環境の下で、生態系の微妙なバランスの上に成り立つ北方圏地域の環境の保全について理解を深める」ことを目的としており、この実現のために、①「ユース・エコ・フォーラム（域内生徒による環境会議」の開催②「エコ・ハンドブック（教育活動で使用する教材）」の作成を事業計画の主要プログラムとして盛り込んでおり、このうち「フ

参加者たちのワークショップ

子供環境会議の参加者たち

ォーラム」は昨年十二月二日～五日の期間、カナダ・アルバータ州エドモントン市で開催されました。

三、ユース・エコ・フォーラム

この会議は、当初は昨年の九月十五日～十八日にかけてアルバータ州ヒントンの同州環境トレーニングセンターで開催される予定でしたが、米国で発生した「同時多発ゲリラ事件」の影響で、日程と会場が大幅に変更されました。それでも、北方圏七地域から十八名の「少年環境大使（年齢十三～十六歳）」として選抜された少年少女が参加して、四日間に亘る会議と分科会における活発な討議や環境活動を通じて環境問題を学ぶとともに、貴重な経験を得て環境に関する諸問題を認識した結果、会議終了後、「北方圏フォーラム・子供環境会議宣言」を採択しました。

この宣言は、将来の北方圏地域における環境政策に積極的な影響を与えることが期待される注目すべきものであり、次にその内容についてご紹介をしたいと思います。

（一）環境関心声明　参加者は北方圏の環境について注目したいくつかの点について声明を載せましたが、この中では、①廃棄物処理問題に係る不十分なリサイクルシステムやゴミ処理場の問題②エネルギー問題に係る大気・水質汚染問題や資源消費の問題を取り上げています。

（二）ビジョン・ステートメント　参加者は北方圏地域の環境の将来構想として、①「住民に対する環境教育の推進」②「住民による4R活動（減少、再利用、リサイクル、回復）の実践」③「住民によるエネルギー節約と環境保護の推進」を提唱しています。

（三）活動宣言　参加者は北方圏地域全体の環境を保護するための具体的な活動を提案しました。それは、①環境教育の推進（児童・生徒への環境教育による将来の環境保全政策に理解、適応可能な住民を育てる）②環境に関わる立法及び政策の推進（リサイクル経済活動の推進の為の法律等の整備、環境保護保全行為違反者に対する罰則の強化、観光業による環境破壊の防止、エネルギー及び資源消費と環境保全の調整を図る等の目的を達成するための立法・行政の充実）③環境保全研究の推進（環境保全のための新エネルギー開発及び資源保全の為の研究促進とそのための地方政府、住民、企業等の支援体制の強化を図る）④住民関与（住民個人が環境保全を重点にした経済活動を実践する社会を創造する）という具体的な内容を宣言に盛り込み、将来の北方圏地域での環境政策の一つの指針となる提言を行いました。

（四）地域別活動宣言　さらに、宣言の最後として、参加者の各地域における「地域別活動宣言」を表明しています。ここでは、それぞれの地域固有の環境問題や政策に関わる内容が盛り込まれていますが、北海道からの参加者は、黒竜江省、ラップランドの代表等とともに、①住民による4Rの推進②ゴミ捨て防止キャンペーンの実施③ゴミ袋使用数の減少④公共交通の利用増加、そして⑤児童、青年による環境会議の開催を宣言として盛り込みました。

以上、昨年開催された「北方圏フォーラム子供環境会議」についてご紹介をしてまいりましたが、地球の中でも、多くの自然と資源が残された私たちの北方圏地域において、将来に向けて、この「子供環境会議宣言」が実現され、我々住民が積極的に環境保全に取り組み、この豊かな環境が永久に保護されることを北方圏に住む一人の住民として願うとともに、微力ながら環境保護のために役にたちたいと思っています。

創刊30周年記念企画・特別寄稿

北方都市市長会議の20年

その成果とこれから

札幌市総務局国際部交流課北方都市市長会担当係長

角田 貴美

第１回北方都市会議（札幌）1982.2.7～10

北方都市市長会議は、本年2月に青森市で開催された第10回会議で20周年を迎えた。そこで、この機会に、これまでの北方都市市長会議の足跡を振り返り、今後の展望についても併せて考えてみたい。

お互いの知恵と経験を分かち合う北の連帯

札幌市をはじめとする北方都市では、積雪、寒冷といった厳しい気象条件のため、市民生活に与える制約も大きく、一般の都市問題に加えて解決しなければならない北方都市特有の課題を多く抱えている。こうした課題を解決し、冬も快適に過ごすことができる都市を創造していくためには、気候・風土が似ている世界の北方都市が手を結び、互いの知恵と経験を分かち合うことが必要である。このような観点から、札幌市は、北方都市の代表者が一堂に会し、様々な情報や技術の交換を行うことを目的とする北方都市市長会議を１９８１年に提唱した。翌82年2月には第1回会議が札幌で開催され、6カ国9都市の市長が、北方都市の交通問題や芸術・文化・スポーツなどについて意見交換を行った。この第1回会議を通じて、積雪、寒冷という厳しい自然条件を北方都市だけが持つ利点と捉え、〝冬は資源であり財産である〟という新しい発想が北方都市の間に芽生えたことは大きな成果であった。

その後、この会議は、中国の瀋陽、カナダのエドモントン、ノルウェーのトロムソ、カナダのモントリオール、米国のアンカレッジと開催地を変えながら継続して開催され、北米、ヨーロッパ、アジアの北方都市を結ぶ新たなネットワークが形成された。

また、１９８８年に開催された第3回エドモントン会議からは、経済関係者による国際冬の見本市と学術関係者による冬の都市フォーラムが、「ウインターシティーズ・ショーケース」という名の下で、市長会議と併催されるようになり、今やヒト、モノ、技術、情報が行き交う北方圏における冬の最大規模のコンベンションに発展してきている。

会員制の導入とネットワークの強化

前述したとおり、これまでの会議を通じて北方都市間に独自のネットワークが形成されたわけであるが、それを更に強固なものにするととも

第10回青森会議ウインターシティーズ・ショーケース2002

第10回青森会議2002.2.7～2.10右から佐々木青森市長、ワーチアンカレッジ市長（次期市長会議開催市）桂札幌市長（北方都市市長会会長）

に、個々の都市の利益のみならず、北方圏全体の発展ために北方都市が連帯して行動することを目的に会員制の組織化を図ることとし、1994年に北方都市市長会を設立した。会長には札幌市長が選出され、札幌市に事務局が置かれることとなった。

北方都市市長会議は、北方都市市長会の主要事業として、その後も2年毎に開催され、カナダのウイニペグ、中国のハルビン、スウェーデンのルレオとキルナで会議が開催された。

これまでの会議では、都市計画、冬の観光資源開発、リサイクル、雪対策と市民参加、自然災害対策などについて、市長同士が先駆都市の知恵と経験を共有し、〝冬も快適なまちづくり〟へのヒントや厳しい気象条件を克服する手立てを学び合ってきた。

専門分野の調査・研究

話は少し前後するが、1990年にトロムソで開催された第4回会議からは、行政実務者や技術者が専門的な技術・情報について調査、研究を行うための機関として小委員会が設けられ、これまでに冬季都市環境問題、リサイクル、観光促進、経済振興などをテーマに調査、研究が行われた。現在は雪対策小委員会、自然災害対策小委員会、持続可能なまちづくり小委員会、テロ対策小委員会が設置されており、それぞれの小委員会を担当する事務局都市が中心となって専門的な視点から独自の活動を行っている。

21世紀の扉を開いた第10回青森会議

本年2月7日から10日まで、「豊かな北の暮らしを育む～環境・文化・生活」をメーンテーマに、第10回北方都市市長会議が青森市で開催された。21世紀最初の会議となったこの青森会議には、13カ国28都市から市長、副市長などが参加した。

●市長会議

「Sustainable Winter Cities 21（21世紀における持続的発展が可能な冬の都市）」をテーマに開催された市長会議では、北方都市の自然環境やライフスタイルなど、冬の都市という地域性を踏まえながら、北方都市が持続可能なまちづくりを進めるためには、どのような政策を行うべきか、様々な分野で意見交換を行った。また、北方都市市長会の更なる発展のため、北方都市市長会の活性化についても意見交換が行われ、「組織の活性化」、「既存事業の活性化」および「新規事業の創造」という基本方針に基づいて活性化を図っていくことが決議された。近年、新たに北方都市市長会に加入する都市がある反面、大・中規模都市の退会が相次いでおり、20年という時間の経過とともに、加入している都市も当初ほど積極的な活動が見られなくなったという現状を会員都市間で確認し合うとともに、魅力ある北方都市市長会の創造を目指して更に活性化を図っていくことを20周年という節目の会議において合意できたことは非常に意義深いことであった。

●ウインターシティーズ・ショーケース

国際冬の見本市には7カ国から72の企業と団体から出展があり、商談件数も2000件以上にのぼった。また、冬の都市フォーラムには11カ国59都市から3500名の参加があり、エネルギー、まちづくり、生活文化、交通などをテーマに講演、質疑応答が行われた。

●共同アピール

今回の青森会議では、共同アピールという形で会議の成果を発表し、「北方都市市長会は、北方圏のすべての人々に、持続的発展が可能な都市の建設に取り組むことを呼びかけること」と、「〝冬は資源であり財産

である〝という北方都市市長会の基本理念を再確認し、その活動を活性化させるため、協力し合い、最大限努力すること」が全会一致で採択された。これは、北方都市市長会議では初めての試みであり、21世紀の扉を開く市長会議にふさわしいアピールと言えるであろう。

これまでの成果と時代の変革

第1回北方都市市長会議から数えて20年、これまで〝冬も快適なまちづくり〟を実現させるための様々な技術や情報を北方都市間で共有してきた。例えば、札幌市におけるスパイクタイヤの導入は北方都市市長会議での議論が大きな役割を果たしており、その結果、15年前の初冬や春先に比べ空気が格段にきれいになった。また、街灯のナトリウム灯化、歩くスキーコースの常設なども北方都市市長会議の大きな成果であった。それまで、我々が考えてこなかった、気が付かなかった視点でものを見、考え、そして冬を意識したまちづくりを行うことができるようになったと言ってもよい。しかしながら、20年という時間の経過とともに北方都市市長会を取り巻く世界の環境は大きく変わってきた。ヒト、モノ、サービスなどの国境を越えた移動が地球規模で拡大し、情報通信分野の革新的変化に伴いそのスピードは日々刻々と加速化している。このようなグローバリゼーション、高度情報化の急速な進展により、国際社会の相互依存性が高まり、世界のあらゆる情報が個人レベルでリアルタイムに入手することが可能となった。このような国際社会の加速度的な変革の中で、国際組織である北方都市市長会のネットワークも新たな局面を迎えており、新しい時代に即した新たな展開が求められていると考えている。

北方都市市長会のこれから

20年を経た今でも〝冬は資源であり、財産である〟という当初の基本理念は決して色あせてはいない。問題は、その理念を21世紀の国際社会に受け入れられる手法で具現化させていくことであろう。今後は、会員都市が協力し合いながら北方都市市長会の活動を更に活性化させ、北方圏のみならず、世界に向けてその活動の成果を発信していけるような組織にしていきたいと考えている。

(URL：http：//www.iamnc.org)

海外研修の団員を募集しております

㈳北方圏センターでは北海道内の青年を海外へ派遣し、現地視察や関係者との意見交換などを通じて、国際的な視点を生かした豊かな地域づくりを進める人材を養成します。

区分	国際交流研修	国際協力研修
派遣先	カナダ・アメリカ	タイ・ベトナム
派遣期間	10月1日㈫～10月12日㈯　12日間	10月23日㈬～11月1日㈮　10日間
派遣人員	各12名　（団長団　2名　団員　10名）	
応募資格	○年齢20歳～45歳の北海道在住の方 ○事前研修に参加できる方	
募集人員	4名　（団員10名のうち、4名を募集）	5名　（団員10名のうち、5名を募集）
参加者負担金	平成13年度に実施予定の本事業が同年9月11日に発生した米国同時多発テロ事件により中止したことに伴い、平成13年度に決定した団員を優先して選考した結果、定員に満たなかったため、一般公募により、団員を補充する。	
参加者負担金	19万円	10万円
応募期限	7月15日㈪	
応募窓口	㈳北方圏センター交流部 TEL011－221－7840 URL：http：／／www.nrc.or.jp/ E－mail：exch@nrc.or.jp	
研修内容	○IT化への取り組み ○高齢化社会に対応した福祉サービス ○市民参加のまちづくり	○JICA事業の取り組み ○NGOの活動状況
訪問都市	●サンフランシスコ ●シアトル ●トロント ●ボストン ●ニューヨーク	●バンコク ●ハノイ ●ホーチミン

＊多数のご応募をお待ちしております。

ぬくもりおはよう

ぬくもりのページにご参加ください。

毎日新聞では、毎週月曜日におじいちゃん、おばあちゃんとお孫さんとの愛とぬくもりを込めたメッセージの『紙上交換日記』を展開しています。

春風さん一家に決定!!

応募方法

おじいちゃん・おばあちゃんのお写真と、可愛いお孫さんのお写真、そして、おじいちゃん・おばあちゃんからお孫さんへのメッセージとそれに対するお孫さんからのお返事をご用意ください。毎日新聞にて、紙面交換日記として、掲載させていただきます。

詳しくは、毎日新聞販売部（011・281・5234）までお問い合わせください。

毎日新聞社

0120—468—012（ふんふ マイニチ）

■受付時間 午前9時30分～午後7時まで。■日曜・祝日は除く。

「Hoppoken」の30年、表で見る

号　数 ＊は主な記事	編集発行人 （89号から発行者）
1972・11　創刊号	**山中文夫**
＊北方圏に燃える日本列島（日ソ経済関係の展望など）	
75・1　10号	
＊新連載　青い大地　新しいシベリア	
75・4　11号	
「北の花」が登場、現在まで続く最長寿の連載もの	
＊座談会　北方圏リサーチセンターを考える	
75・7　12号	**宮嶋勲に交代**
＊特集　北方圏をおおう異常気象　低温期は続くか？	
77・7　20号	
（創刊５周年だが、特に銘打っていない）	
＊ワイド特集　北海道の地域暖房を考える	
78・4　――㈳北方圏調査会が改組し、㈳北方圏センター発足――	

創刊号

第10号

私と「Hoppoken」誌

札幌市中央区　無職　山内英世（70）

北電東京支社に勤務していたとき、北方圏誌が送られてきていた。北海道のことや北方圏諸国の情報が満載されていて、興味深く読んでいた。札幌の本店に戻っても、幸いにも引き続き読む機会に恵まれ、愛読していた。

たまたま、友人が北方圏センターに出向した。彼に北方圏センターへの入会を勧誘された。かねてから北方圏誌を通じて北方圏センターに親しみを感じていたので、早速入会した。以来、北方圏誌は自宅に送られてくるようになったが、読み終わっても捨ててしまうのが惜しくて保存してある。

読者としての付き合いだけでなく、何度か私の随筆を掲載してもらった。また、一九八九年には図らずも北方圏センター主催のアラスカ招待旅行に当選し、アラスカを訪ねた。そのときの旅行記も北方圏誌六十九号に掲載された。

「Hoppoken」誌と誌名は変わったが、興味深い内容は変わらず、引き続き愛読している。

空知管内長沼町　農業　池川義雄（93）

昭和四十七年十二月、札幌駅の売店で私は創刊号を発見した。列車の中で読んで、その記事にはソ連関係のことが出ていた。翌日、北方圏調査会を訪ね、山中事務局長にお会いして、過去二回、私の生産した種薯をソ連に送ったが、その後何の通報もないことを話した。山中さんは在札ソ連領事館に電話された。すぐ来てもよいとのことで、二人は直行した。ロマノフ領事さんとお会いして、協議した。結果は種薯をソ連に送って試作することと、堂垣内知事とポリヤンスキーソ連農業大臣との間で、農業交流団を結成することが決定した。昭和四十九年八月、北大の村山教授を団長として、塩田、横川、池川がソ連を訪問してソ連の各官庁や植物学者と交流し、さらに各地の農業試験場を見学した。昭和五十一年八月、ソ連からビサレフ団長一行四名が答礼団として来道され、交流の目的を果たした。昭和五十三年八月、池川を団長として北方圏センターの協力によって北欧各国との技術交流を実現したのである。

創刊三十周年夏季号をお祝い申し上げます。

78・5　23号

「海外レポート」の前身「北方圏各地からのたより」が登場する

＊座談会　新発足した「北方圏センター」に期待する

78・8　24号　橋本禮三に交代

＊夏に鍛える…冬型シーズンへ発想転換

79・7　28号　佐藤直一に交代

＊特集　完全週休二日制で余暇の過ごし方がこんなに変わる

80・1　30号

北方圏センターを訪れた人たちの言葉の端をまとめた

「さるうん」新設。現在まで「SALOON」として続く

＊80年代の課題　冬と雪と寒さへの挑戦

82・7　40号

（創刊10周年だが、特に銘打っていない）

＊特集　スウェーデンの経験から何を学ぶか

85・1　創刊50号記念特別号

＊特別企画　大使からのエッセイ－北方圏の冬に寄せて－

第20号

第30号

「時代の先駆的役割を担って」

元北方圏センター参与　佐藤　直一

私が本誌に関わったのは1979年（昭和54年）の夏号（28号）からで、道からの出向で北方圏センター発足1年後の事務局長となり、編集・発行人という仕事を初めて経験することになったときからである。以後、退任の90年（平成2年）春までの11年間、実質的な仕事はほとんど出版部が負っていたのだが、各号の編集会議に出て、熱い議論を重ねた思い出が今でも生々しく甦ってくる。

就任後ほどなく、私は当時の東条猛猪会長から一つのサゼスチョンを受けた。それは、「北方圏センターの活動は、道民に身近な切り口を取り上げて、具体的な中身で〝北方圏〟を示していく必要がある」というものであった。〝身近な〟問題は北海道に住むわれわれの衣食住にある。なかでも最も基本になるのは〝住〟の問題である。それまでにも本誌では「寒地住宅」の特集を組んで好評を得ていたので、早速29号でスウェーデンの事例にも触れ、本道の住宅の改善キャンペーンを張った。次の年からは年間テーマを決め、道民生活に身近な問題として冬の衣料、暖房、冬のスポーツと、矢継ぎ早にテーマを重ねたのだが、これには定期刊行雑誌としては邪道だという内部の異論もあった。

しかし、それまでの本誌のキャンペーンが住宅産業を刺激し、彼らの北欧視察を誘っている事情に力を得て、邪道を承知のうえで、たびたび住宅問題を取り上げた。本誌のねらいは、北方圏の国々がいかに優れたアイデアと技術を駆使し、寒地での生活を快適なものにしているかを具体的に紹介しながら北海道が取り組むべき課題を論じる、というところにあった。

一方、本誌以外のメディア、例えばグラビア誌、視察レポート集、北方圏紹介映画などで各国の実情を紹介したり、海外の専門家を招いての講演会・セミナーも相乗効果を生んで、このあたりから本道の住宅も着実に改善されてきたことは確かなことである。いまは、あの時とは状況が一変したので、本誌の関心も異なるのは当然であるが、本誌が一時代の先駆的役割を担った歴史も銘記されてよいのではあるまいか。

87・4　59号

中面にカラー頁が登場する

＊新連載　北方圏の魚たち、理想的な北国住宅パートⅢ

87・7　60号

（誌齢15歳だが、特に銘打っていない）

＊特集　心の国際化をめざす

88・1　62号

カラー「北の自然」が初お目見え

＊新春鼎談　北海道の活性化と北方圏交流

88・4　――北方圏センター発足10周年――

89・4　67号

「北の自然」がシリーズ化する

＊特集・貿易　本道経済自立＝構造改善、活性化への道

89・7　68号

「Mr．ターノフのちょっと気になる」登場

＊特集・貿易　果敢な海外進出企業の頼もしい先例に学ぶ

第40号

創刊50号記念特別号

季刊誌「北方圏」の表紙づくり

北方圏センター事業部長　新井　進

本誌が誕生したのは、昭和四十七（一九七二）年十一月。季刊誌であるとともに社団法人・北方圏調査会の機関誌としての役割も担っていた。それから三十年、表紙の一二〇枚の写真には、それぞれに北方圏構想と国際交流のさまざまな思いと歴史が刻まれている。

《タイトル文字》

タイトル文字はまさに思想なり、イメージを表すものだが、本誌はこの文字を三回変えた。

初代の『北方圏』は、北への意識と情熱を表現している。豊かな自然と豊富な資源を有する北に広がる大地（ユーラシア大陸・北米大陸）との経済交流を目指したものであった。「北」と「方」の文字は画数が少ないが「圏」の文字は画数も多く〝くにがまえ〟で普段はなかなか使われない文字なので、デザインは優しいようで難しいかったという。北への志向を台形の形でまとめられたどちらかと言えば角張った、固いイメージだった。〔創刊号～二五号〕

二代目は、同じ漢字でもスーボという書体。「圏」の文字に工夫が加えられ、四季に合わせ、また、表紙に

２号（1973年１月１日発行）
30年の歴史の中で、唯一合成写真で表紙を飾った１冊

25号（1978年10月20日発行）
創刊当初からのタイトル文字、表紙写真のコンセプトは、この号を最後に変わる

26号（1979年１月１日発行）から圏に特徴を持たせたタイトル文字に改められ、表紙は北方圏で暮らす人々の楽しい生活ぶりが登場する

90・1　70号

＊新春対談　北海道とアルバータ・姉妹提携調印から10年

90・7　72号　山本孝に交代

＊北方圏セミナー　いま注目の男女平等オンブズマン

92・7　創刊20周年記念特別号

＊北方圏各国　大使からのメッセージ

94・1　86号

現在の「新・北の美」の前身「北の美」が道立近代美術館の協力でスタートする

＊新春対談　北海道とロシア関係を展望する

95・1　90号

「ルーツで語る北海道の人物」「北の街角」登場する

＊特別企画　北海道－カナダ・アルバータ州姉妹提携15周年記念

95・6　――定款の一部変更、南米・東南アジアへの事業拡充――

96・4　――JICA北海道国際センターの運営管理を受託――

第60号

第70号

使用される写真に合わせて、色が乗せられた。〔二六号～一〇〇号〕

そして、三代目は現在使用している文字。誌齢が創刊二十五年、一〇〇号を数え、そろそろ国際語にもなってきた感のある〝ホッポーケン〟を、筆によるローマ字で表現することとし、書家の加藤幸道氏（毎日書道展審査会員）に依頼した。まさに国際交流の一層の拡大に思いが込められたものであった。〔一〇一号～〕

《表紙写真》

北方圏構想の推進という耳慣れない、しかも俗に言う〝固い〟内容を盛り込みながらも、北海道では初の海外事情紹介の本誌であっただけに、表紙の写真には、北方圏諸国の生活感あふれるものを選んだ。とは言え海外旅行など一般市民にはほど遠いものだっただけに、取材や仕事でカナダやアラスカ、北欧などに行った方々から写真をお借りした。〔創刊号～二五号〕

一時、専門のライブラリーからの借用もあったが、やがて、本誌の取材のために派遣されたり、各種の交流団・調査団・派遣団などの一員として参加した当センター職員の撮った写真が表紙になった。これを『北方圏』の表紙にと意気込んだわけではないが、その時その場に居合わせなければ撮ることができない風景である。中には読者から「これを是非に」と送っていただいた写真もある。

北方圏の豊かな季節の彩りの中で過ごす人々、その生活や楽しさを表紙で取り上げることを主眼とした。〔二六号～九〇号〕

そして、九一号からは、北方圏センターを訪問してくださった、北方圏諸国からのゲストの方々にご登場をいただくことになった。

誌齢25歳を契機に、101号（1997年10月6日発行）からタイトル文字がローマ字に改められる

91号（1995年4月5日発行）から、表紙は北方圏センターを訪れるゲストの中から選ばれるようになる

97・4　99号

漫画「そのうちロシアへ行く君へ」始まる

＊特集　北方の古地図～エゾが世界地図上の大国であった頃ほか

97・7　創刊100号記念特集号　　曽根勇治に交代

＊座談会　夢ふくらむ自治体の国際交流

97・10　101号

題字を「北方圏」から「Hoppoken」に変える

＊転換期のサハリン～期待の石油・天然ガス開発～

創刊20周年記念特別号

98・3　――地域国際化協会に認定される――

98・4　103号

「世界はひとつ 民俗学の周縁から」が始まる

＊北極海を初横断した探検家ナンセン　氷と闘う三年間の記録

98・7　104号

＊北方圏センター20周年記念鼎談 センターの役割と本道の国際化

第90号

創刊号の志

当時、北方圏調査会長で北海道知事の堂垣内尚弘氏は、今日の巻頭辞に当たる頁に「北方圏へのグロバリゼーション」と題して次のようにつづっている。少し長くなるが、引用しよう。

「われわれは今まで狭い地域のなかで物事を考えすぎていなかっただろうか。北海道を、北海道のなかでのみ捉え、いろんな議論をしていなかっただろうか。北海道を日本のなかの北海道として、さらに世界のなかの北海道として捉えれば、その思考もおのずから異なったものがあろう。（略）。こんにち国際化時代といわれながらも、国々はそれぞれの国境や、政治体制や社会構造の違いという壁をもっている。それはインターナショナルに考えているからで、グローバルに眺めれば、そこには国境も政治社会体制の相違もなく、ただ太陽系の惑星としてのみ存在するのである。そうした発想の転換こそが私が主唱してきた〝北方圏構想〟であり、〝北方圏へのグロバリゼーション〟といった志向に、その基調がある。（中略）」とし、その上で、創刊の目的を「こんど〝クォータリーマガジン・北方圏〟を創刊するのも、そうした〝北方圏へのグロバリゼーション〟がネライなのである」と、結んでいる。

以後本誌は、この発想の転換を促す、北方圏諸国の情報を紹介する情報紙としての先兵の役割を果たしていくことになり、北国向きの住宅・暖房・衣料・スポーツ等のキャンペーンを張っていく。（出版部）

第10号（昭和47年２月25日付）。欄外は「北方圏調査会報」から「北方圏ニュース」に変わっている

98・10　105号

「石になった生き物」に代わり、「こんにちはイランカラプテ」が連載に仲間入り

＊トナカイ遊牧民、カザフスタン印象記

2000・1　110号

＊新春対談　独自のニューフロンティアスピリットをつくろう

00・4　111号

「アングル ドロミティ渓谷の四季」が前号までの「アングル 光と遊ぶ彫刻」を引き継ぎ、シリーズ化

＊アラスカ観光に挑む　トーテムポールの人びと

00・7　112号　林敏明に交代

＊オーロラ　宇宙への窓、福祉を支える環境政策

01・4　115号

中面のカラー面は残し、色上質紙を廃止

＊環境モデルパーク「CAT」

02・7　創刊30周年記念号

第100号

第110号

定価の変遷

創刊以来８年間、３００円（１９７４年９月発行の９号のみ特例で５００円）を守ってきたが、１９８０年春、31号（昭和55年４月10日発行）から４００円になった。当時の編集後記は、「二度にわたる石油危機、これに伴う諸経費の高騰で、現行価格では円滑な編集が困難になったため、やむなく減ページとともに価格改定に踏み切ったわけである」としている。

しかし、４００円時代は長くは続かず、１９８２年春、39号（昭和57年４月25日発行）から５００円に。「印刷・用紙をはじめとする諸経費の全面的高騰により、現定価での製作が困難になったためである」と、ほぼ同様な理由を挙げている。

消費税３％が導入された１９８９年（平成元年）４月の67号から５１５円。さらに消費税５％に伴い、97号（１９９７年４月７日発行）から５２５円（本体価格５００円）。５％の時の編集後記には、「ご承知のように、四月から消費税が三％から五％に上がりますが、小誌の本体価格は据え置きます。ただ、定価は五百十五円から五百二十五円に改定となります。ご了承ください」（原文のまま）とある。（出版部）

「Hoppoken」誌の前身、「北方圏調査会報」創刊号（昭和46年４月25日付）

北欧から探る北海道活性化のヒント

PART2

北海道東海大学国際文化学部北方圏文化学科教授
川崎 一彦

前号（Part1）では、日本とは対比的に元気で、最近世界的に注目されている北欧諸国の経済や企業のパフォーマンスを見てきた。

今回のポイントは、その背景と要因である。ここでは、好調さの要因を、マクロの政策理念、そして個別の政策の両面から考えたい。

〈明確な政策の理念、目標と手段〉

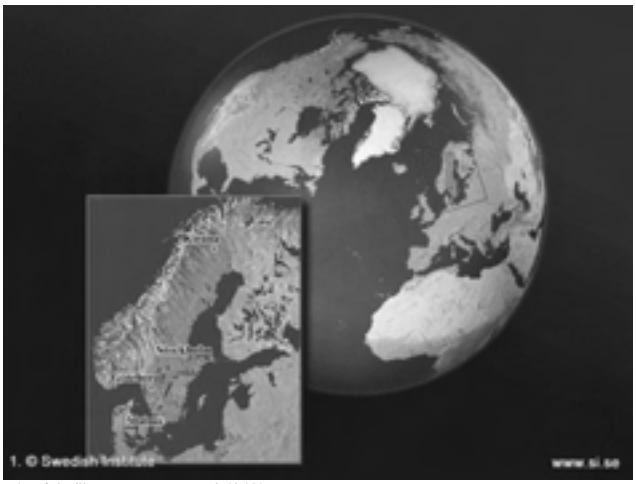
北欧と日本の大きな違いの一つは、北欧では政策の理念、目標と手段が明確であることだ。

北欧では、「三段階の民主主義」といわれる政策を進めてきたが、自由、平等とともに、安心感（トリッグヘート）は北欧型民主主義の重要な価値を構成している。

北欧の選挙の投票率は、世界最高水準である。個人の支払う税金が極めて高いにも拘わらず、政治や行政に対する信頼感が高い背景には、スウェーデンでは1766年から憲法で保証されている情報公開の原則、オムブズマン制度、地方分権政策などがあろう。

その他、教育（国民高等学校はフリースクールの元祖、発達しているリカレント教育）、男女共同参画（国会議員の4割以上が女性）など、明解な理念を持ち、北欧の社会で機能している側面は21世紀の日本の主要課題の多くにヒントを与えてくれる。

北欧型社会の重要な政策目標の一つは**福祉社会**の維持である。米国などのアングロサクソン型の政策モデルは、市場原理至上主義で、福祉政策については自助努力が基本である。それに対して北欧型の福祉社会モデルは、普遍的な社会保障制度、セーフティーネットが用意されている。日本の政策は戦後一貫して米国の方向を向いてきたが、21世紀に日



（写真提供：スウェーデン大使館）

本が目指すべきは本当に市場原理至上主義の政策モデルかを問う識者も多い。

〈産業が福祉の糧〉

北欧諸国は世界一と言われる福祉国家を築き上げてきたが、半世紀以上にわたる福祉社会建設の方法の理論は、次のように単純明快なものであった。

産業の育成・発展により、完全雇用と高水準の所得が保障される

⬅

高水準の所得が保障されて初めて個人の高い税負担が可能となる

⬅

これにより高水準の福祉制度が財政的に可能となる

以上のような「産業こそ福祉の糧」との考え方の下に、北欧では一貫して極めて資本主義的な、企業優遇政策をとってきたといえる。その例は（1）企業優遇税制（法人税率は先進国中最低水準）、（2）緩い独禁法による集中の直接規制、等に顕著であった。

その結果、前回見たように、小国ながら北欧諸国はグローバル企業を多数輩出している。ITの分野でも最先端で、最近の総務省の調査結果では、インターネットの普及率はスウェーデン、アイスランド、デンマークが世界のトップ3で、日本は16位に甘んじている。（www.soumu.go.jp/s-news/2002/020521_1）

また北欧では福祉を含む社会制度は**持続出来る**（sustainable）システムでなければならないと考えられている。そのためには経済成長はもちろん必要だが、かつての米国型の大量生産大量消費、使い捨て型社会に対する反論は強い。原発廃棄、デンマークの風力発電、リサイクルなど循環型社会が志向されている。

経済活性化の個別の政策事例としては、北欧型のサイエンスパーク、就学前からの「起業家精神教育」などの独自のシステムをここでは取り上げたい。

そして、北欧では、福祉と経済の関係について、以下のように明快な方法論を展開してきた。

〈重要な地方の大学〉

北欧の大学はすべて国立で、重要な国の政策の手段でもある。大学の研究の質は高い。スウェーデンの研究開発費の対GDP比は世界一である。人口あたりの学術論文の数は、北欧3カ国が世界のトップにある。

戦後地域開発の戦略として、地方にとくに工科大学が立地された。国立大学であっても「地域貢献」は当然のことと疑問視されたことはない。

また北欧では地方分権が進んでいる。北欧でも産学連携、新企業創出の鍵として、サイエンスパークに欧州ではもっとも早くから力を入れてきた。北欧のサイエンスパークは、とくに地方の新設大学に隣接して、地方自治体が積極的なイニシャチブをとって建設されたケースが多い（フィンランドのオウル、スウェーデンのリンチョーピングなど）。

〈北欧型ベンチャー輩出システム〉

わが国でも大学からの新事業、新企業輩出に対する期待が大きい。政府は昨年、大学発のベンチャー企業を3年間で1000社にする（2001年8月までの実績は251社）、などの具体的目標を掲げた。

少しだけ先を見る もっと先を読む。

激しい時代の流れに対応し、もっと先を読みながらお客さまへアドバイス。
最新技術がすべてではなく、長年培われてきた、たしかな技術とお客さまに対する
真心のこもったおつきあいを築いております。

SINCE 1896
sando

山藤印刷株式会社
063-0051 札幌市西区宮の沢1条4丁目16-1
TEL(011)661-7161 FAX(011)661-7173
東京営業所／TEL（03）3668-2711
千歳営業所／TEL（0123）26-3555

日本における大学発のベンチャー創出の仕組みは米国を参考にしているケースがこれまでは大半である。しかし、北欧では米国型とは違うシステムを持っており、日本でも、地方においては、むしろ北欧型の方が参考になる、と私は確信している。

米国型のサイエンスパークからのスピンオフ企業は、革命的技術をベースにしている場合が多い。したがって、経営者も最先端の研究者でなければならない。スタンフォード大学の遺伝子組み換え技術のように、当たれば利益は大きいが、当たらないリスクも大きく、莫大な投資を必要とする。日本でブーム的なＴＬＯ（技術移転機関）も米国型の大学からの技術移転の支援形態である。

これに対して北欧型の大学からのベンチャー企業は、応用技術をベースにしているケースが多い。いわば、ナンバー2でもグローバルなビジネスが出来ることを証明しているのである。経営者は工科大学の修士レベルの技術者が多い。アプリケーション技術をベースにしているので、投資も相対的に少額で済み、投資リスクも小さい。サイエンスパークでは技術移転よりも、起業と雇用創出を目的とし、起業の様々な段階で支援政策をとっている。起業支援ではなく、起業家支援である。

これらの結果、スウェーデンでは技術志向型の新規企業の中ではスピンオフ企業が16％を占める。

米国型と北欧型サイエンスパークの相違

	米国型	北欧型
技術ベース	革命的技術	応用技術
目標	leader	follower
経営者	研究者	技術者
リスク	リスク大	リスク小
支援形態	ＴＬＯ	起業家支援

〈フィンランド、オウルのサイエンスパーク〉

人口５１８万人のフィンランドには、既に国内19カ所にサイエンスパークがあるが（www.tekel.fi/eindex.htm）、タンペレ大学のソタラウタ教授の研究によれば、オウルのサイエンスパーク「テクノポリス」は、欧州でも最も成功している事例である。テクノポリスは１９５９年に設立されたオウル大学に隣接して、北欧初のサイエンスパークとして82年に発足した。現在１２０社のスピンオフ企業が入居している。成功の背景は「隅々まで理解されている戦略」にある、という。

〈幼稚園からの起業家精神教育〉

もう一つ北欧の起業支援策で特徴的なのは、フィンランドのバーサ市で始められた「幼稚園からの起業家精神教育」である。

フィンランドでは、１９８０年代から、起業家精神は内的と外的に分けられるようになった。

外的起業家精神は独自のビジネスをスタートさせ、経営することであり、日本や米国などで一般的に起業家精神と言われているものである。

一方、内的起業家精神は、起業家特徴または外的起業家精神の前提条件で、具体的には、創造性、柔軟性、活動、勇気、イニシャチブとリスク管理、方向性、協調性、ものごとを達成するモチベーションなどを意味する。内的起業家精神の豊かな児童は、創造的で、勇気があり、目的意識が明確で、オープンであり、協調的で、責任感に富み、根気強い。自信をもち、他の子供ともうまくやっていける子供である

フィンランド文部省は、就学前から起業家精神教育を導入する必要性を、「21世紀の産業社会では職業生活でも常に変化を受け入れざるを得ない。その対応の準備は不可欠である。今後の新たな雇用機会は大企業や公共部門から中小企業にシフトする。」と説いている。実際フィンランドでは、90年代以降、雇用の形態も急変している。民間だけではなく、官公庁でも、「プロジェクト雇用」といわれる短期の雇用形態が、急増している。このような状況では、内的起業家精神は、起業するしないに拘わらず、21世紀の社会には全国民に必要な資質と位置付けられて、その育成教育は、就学前から始める必要があるとのコンセンサスがあるのだ。

バーサでは内的起業家精神と外的起業家精神の両方を実施している。就学前および初等教育では内的起業家精神教育が中心であり、高学年、中等高等教育に移るほど外的起業家精神教育の内容が多くなる。

強調されるのは、「from teaching to learning（教える教育から学ぶ教育へ）」、また「内容よりも方法」である。ＯＥＣＤ（経済協力開発機

バリスカ中学校マルティモ校長
（後ろは生徒が運営しているキオスク）

ビレクラ幼稚園

バリスカ中学校授業風景

フツキ小学校授業風景

構）が昨年末に発表した、世界主要22カ国の15歳の生徒を対象にした学習到達度の比較調査では、読解力でフィンランドが世界一位であった。

起業家精神のもっとも重要な資質の一つは創造性であり、日本においてもフィンランド以上にその早期の教育が必要なことは言うまでもない。バーサモデルを知り、日本の教育改革のヒントにするために、東海大学知的財産権教育研究グループは、今年の11月末に、バーサから関係者を2名招聘し、札幌で講演会、学校訪問、デモ授業、意見交換などを実施する（特許庁の受託調査）。

今回Part2は北欧の経済のパフォーマンスが好調な背景を探った。次回最終回は北欧の経験から北海道の活性化へのヒントを考えてみたい。

〈主要参考文献〉

『大学における知的財産権研究プロジェクト報告書』（特許庁受託調査）東海大学、2002年
川崎一彦「北欧型産学官連携モデル」「InterLab」2002年3月号
川崎一彦「国際競争力の背景としての北欧企業の経営スタイル」「ジェトロセンサー」2002年6月号

サマージャンボ宝くじ

1等・前後賞合わせて　3億円
2等　　1億円

発売期間　7月22日(月)～8月9日(金)
抽せん日　8月20日(火)

（別称・市町村振興宝くじ）
売上益金は市町村の住みよい
街づくりに役立てられています。

財団法人北海道市町村振興協会

アルヴァー・アールトの住宅

北海道展を開催して

北海道の建築、生活文化をより豊かにするために

北海道展実行委員会委員長　圓山　彬雄

オープニングレセプション　フィンランド大使ご夫婦来席

昨年、フィンランドの建築に詳しい北海道東海大学の伊藤大介先生のもとに届いた、アルヴァー・アールト財団から「日本で、『アルヴァー・アールトの住宅展』をやれないだろうか?」という問い合わせが、この展覧会の始まりである。早速、日本建築家協会の北海道支部に、北海道で開催できるだろうか?と持ちこまれた。フィンランドの気候、風土が北海道に似ているので、フィンランドの建築を勉強する人も多いし、建築家アルヴァー・アールトを尊敬する建築家も数多くいる。そのうえ、18年前には、「アルヴァー・アールト展」を開催した経験もあって、即座に準備委員会がつくられた。

今回は、「住宅」を中心に展示するので、一般の多くの人に「アルヴァー・アールトの住宅」を身近に感じて欲しいと考え、札幌だけでなく、道内各地で開催したいと、いくつかの支部や都市に声をかけた。その結果、帯広、釧路、旭川、函館で開催できることになり、いよいよ、実行委員会がつくられた。北海道の中で、最も熱烈な「アルヴァー・アールトの信奉者」であると思われていた私に、実行委員長のお鉢がまわってきた。

北海道展の実行委員会の活動が始まり、4月13日のオープニングを皮切りに、札幌展は4月26日まで、帯広展は5月2日から5日まで、釧路展は5月8日から11日まで、旭川展は5月25日から6月8日まで、函館展は6月13日から18日までと道内を巡回することとなった。

建築家アルヴァー・アールト

アルヴァー・アールトは、フィンランドの生んだ世界的に有名な建築家である。いわゆる近代建築の三巨匠といわれるアメリカのフランク・ロイド・ライト、フランスのル・コ

オープニングレセプション　カンテレ演奏

ルビジェ、ドイツのミース・ファン・デル・ローエと肩をならべる建築家である。

20世紀になって、新しいコンクリートや鉄やガラスという素材とそれを利用する技術が進歩して、合理的な建築、いわゆる近代的な建築が建てられるようになった。そんな初期の頃に、ヨーロッパのはずれにある小国フィンランドで、近代建築の見本のような建築を造って、世界の注目を浴びたのがアルヴァー・アールトである。それは、針葉樹林の中にまったく装飾のない、ただ求められる機能に素直に従っただけの、シンプルで美しい機能的な病院・パイミオ・サナトリウムである。

しかし、近代建築の思想が世界に広がり、各地に近代建築が建て始められる頃になると、彼は次第に路線を変えるようになる。単純な形態で、四角四面な硬い感じのする近代建築に疑問を感じるようになり、もっと自由な開放された曲線を用いて、壁や天井さえもゆるやかな曲面に造り始め、近代的でありながら、優しさのあふれる空間を創るようになる。

機能的で合理的な近代建築を信じた彼が、何故、そのような情感あふれる、豊かな空間を創造するようになったのだろうか。おそらく、彼の育った、フィンランドの環境―極北の気候のなかで見るオーロラや白夜、手つかずに残された深い森林と果てしない無数の湖沼―風景が、彼の心の奥に広がっていたからに違いない。フィンランドの風景が、彼の独創的な空間を造りだしたに違いない。

パイミオ・サナトリウム

私が、アルヴァー・アールトの作品に触れたのは、今から三十年前で、クルトウーリ・タロという文化施設であった。ゆるやかな曲面を描く外壁は、煉瓦に覆われ、重々しい圧倒的な存在感を示していた。道路に沿って掛けられた長いポーチの屋根をくぐり、小さな入り口を入ると、その内部は真っ白であった。白く塗られたコンクリートの壁が、柔らかな曲面を持って立ち上がり、そこに入った人は誘われるように、いくつもの階段に導かれ、知らぬうちに美しい白いメーンホールに招き入れられる。ホールの壁は、天井にまっすぐぶつかるのではなく、そのまま滑らかに天井になってしまっている。初めて体験する空間だけれども、包み込まれるような優しさと美しさに満ちた、爽やかな安らぎをおぼえる空間であった。それまでには見たこともないような、アルヴァー

KYOWA PRINTING

質の高い「ビジュアル・コミュニケーション」をささえる商業印刷専門企業――

企業と生活者を結ぶ
協和印刷株式会社
〒063-0834 札幌市西区発寒14条14丁目2番50号
TEL(011)666-1641・FAX(011)669-2332

展示会場風景　家具・ガラス器・照明器具・模型

まず、そのたおやかな空間を造り上げる建築的、芸術的な才能にすっかり感動した。同時に、フィンランドという、きわめて寒い気候の中で、建築をつくるための技術的な面でも斬新な手法を試し、成功していることに驚かされた。三十年も前に、断熱材を建築物の外側に設けて、主要な構造体を外部の空気にさらさないという方法―外断熱工法―を既に採用していたことである。この技術は、北海道でも最近ようやく理解されはじめたもので、今でも北海道の模範となる建築である。

アルヴァー・アールトの住宅

北海道と同じような人口（520万人）と自然環境の中にあって、フィンランドの風土に適した建築を創り続けたアルヴァー・アールトには、公共建築以上に魅力的な空間を内包した、いくつもの住宅がある。近代建築の始まった頃は、近代的な空間にふさわしい家具や照明器具がほとんど無かったので、建築家が、空間にふさわしい家具や照明器具を自らデザインし、製作させていた。アールトも、彼の優しい空間にふさわしい美しい家具や照明器具を生み出し、彼の空間をいっそう、優しく、美しく、豊かなものに仕上げていった。その家具や照明器具の置かれた空間は、まさしくアールトの空間として完璧なものとなっていった。そこで暮らすために必要なものすべてが、彼の空間のなかに用意され、彼の空間哲学が実現されている。

札幌展の開催

展示計画や実際の展示作業には、フィンランドのアルヴァー・アールト財団の方から、展示する写真と模型を制作した写真家ヤリ・イェッツォネン氏が来道し、指導してくれたので、安心であった。展示されるものは60点を超え、輸送重量2トンを超えるパッケージが、フィンランドとアラスカから届けられ、「アルヴァー・アールトの住宅」北海道巡回展が札幌から始まった。

札幌会場は、北海道大学のご厚意により、昨年完成したばかりの遠友学舎を借りることができた。シンプルなつくり方ではあるが美しく、北の国らしい透明感のある爽やかな建築なので、アルヴァー・アールトの建築作品の展示には、全くふさわしかった。

アルヴァー・アールトの設計した住宅16作品は、写真のスクリーンと模型によって紹介し、その他、彼のデザインによる椅子・テーブル15点、照明器具5点、花器16点を加えて、会場の構成そのものが、「アルヴァー・アールトの空間」を想像させるように創った。

わたしは、アルヴァー・アールトの住宅を学ぶと同時に、アルヴァー・アールトの住宅を生んだフィンランドの社会的、文化的背景を紹介し・アールトの豊かな感性によってしか造れない空間が、そこにあった。

4C

カラー印刷では、青・赤・黄・黒の4つのカラー（4C）が基本となって、美しい色彩が創り上げられます。そして、常にクライアント（Client）の立場でものを考えるということ、コミュニケーション（Communication）を深めること、クリエイティブ（Creative）であり続けること、時代のニーズをキャッチ（Catch）する視野の広さと先見性を養うこと――。印刷媒体の新しい可能性を追求する私たちの基本姿勢も4Cです。

株式会社 須田製版

本社／札幌市西区二十四軒2条6丁目 (011)621-0275
旭川支社・苫小牧支店・東京営業所・滝川営業所・アドセンター

展示会場風景　写真パネル

たいと考えた。札幌会場の遠友学舎が、新渡戸稲造の創設した遠友夜学校を記念して造られたことから、夜6時から始まるセミナー「13回連続夜話」を開催した。その中には、アールトの建築や住宅を始めとして、フィンランドの文化を代表する作曲家シベリウス、世界的な口承伝承の叙事詩カレワラの紹介、民族楽器カンテレの演奏や現在のフィンランドの社会を知るセミナーを入れた。また、アルヴァー・アールトと同じように、風土に根ざした住宅を創ろうと頑張っている北海道の建築家や家具デザイナーの作品を紹介するセミナーも加えて、好評であった。

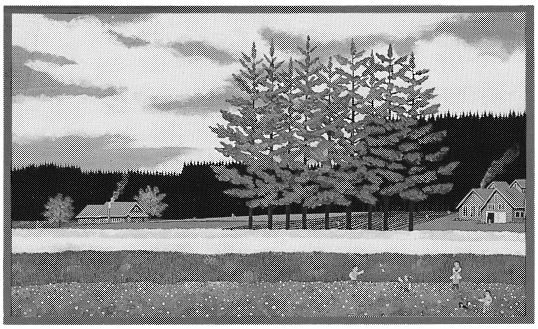
4月13日、フィンランド大使夫妻を迎えてのオープニングセミナーとレセプションは、感動的なカンテレの演奏を背景に展開され、会場の爽やかさもあいまって、大変親密感のある、魅力あふれるものとなり、それに続くセミナーに弾みがついた。それ以降は、連日100人を超える参加者に恵まれ、札幌の展覧会では、述べ3000人近い参加者に楽しんでもらえた。連続して行われたセミナーの後、スナックアンドドリンクの時間を取ったが、セミナーの内容を身体にしみ込ませるのには、たいそう有効で好評であった。

札幌が4月26日に終了し、5月2日から5日までの帯広展では、参加者が350名近く、5月8日から11日までの釧路展では、参加者が400名近くとなり、これまでに約4000名近くの人に見てもらった。5月25日から6月8日までの旭川展、6月13日から18日までの函館展でも、さらに多くの参加者があった。また、この展覧会は、本州に渡り東京、熊本などを巡回することとなった。

「アルヴァー・アールトの住宅」は、建物として考えるというより、文化的な生活を支えるためのものとして考えることを強く示している。住まいが、単なる生活を入れる器ではなく、そこで営まれる生活文化こそが、住宅の質を高める力があると主張している。このような視点でつくられた「アルヴァー・アールトの住宅」を知ること、見ることは、北海道と同じような自然環境の中にあって、如何に質の高い生活文化を展開させているか学ぶことである。アルヴァー・アールトがフィンランドという生まれ育った環境の中に、その美しさを創り出す根源を見つけ出したように、北海道に暮らす人たちも、同じように美しいものを創り出す根源を見つけ出せれば、これからの北海道の建築文化、生活文化を、より豊かなものにできるに違いない。参加したすべての人が、これらの展覧会で得た知識と感動を持続させていきたいものである。

尚、この展覧会を開催するに当たっては、フィンランド大使館を始めとして、多くの団体の御後援、さらに多数の企業の方々と数多くの個人の方からの御厚情と賛助を頂きました。ここに、無事に開催にこぎ付け、何とか成功裏に終了できたことを報告すると同時に深くお礼申し上げます。

悠久の時を贈るパストラルアートコレクション・イルミナ



「イルミナ」グッズは、
北の田園風景を金井英明が
ファンタスティックに描いた
作品を金井印刷が
デザイナーブランドにしたものです。

● 取扱商品/レターセット・絵ハガキ・ファンシーノート・メルヘンカード・プリントアート他

● 取 扱 店/丸井今井大通館B1・新千歳空港店、札幌プリンスホテル売店、ニセコ東山プリンスホテル他

PASTORAL FANTASY illumina SAPPORO

HIGH TOUCH PRINT ART MEDIA
其水堂金井印刷株式会社
開発事業部
〒003-0803
札幌市白石区菊水3条4丁目4-18
Tel (011)832-8191㈹

阿蘭陀北方圏

北方の言葉と結びつかないイメージの中に

国立極地研究所北極圏環境研究センター助教授
伊藤 一

観念的北方圏があってもおかしくない

オランダ（阿蘭陀）北方圏の紹介をする。ある国の北方圏とは、その国の北部を指す。あるいは、その国が北極圏深くに位置していれば、国全体を地球北方圏の一例として紹介することもできる。国外であっても遠く北極圏で国を挙げての活躍をしていれば、その様子もその国の北方圏と呼んでよい。これ以外にも、その国独自の観念的北方圏というものがあってもおかしくない。

オランダは、日本への来訪が当初南国バタビア（現在のインドネシア）経由であったことから、南蛮と呼ばれていた。国のイメージは、どちらかと言うと南方である。北方という言葉とは結びつかない。実際、オランダはヨーロッパの中央部に位置する温暖な国である。歴史上、北極圏内に領土や植民地を持ったことはない。現在も、国外の北極圏で活発に活動しているわけでもない。小さい国であって、国土は南部と北部に分割するだけの長さがない。そんなオランダに果たして北方圏はあるのだろうか？

北方圏という言葉は快い響きを持っている。そこでの主役は北という方角が務めている。「北方」は赤道から遠ざかる方向である。しかし、赤道も経緯度も知らない昔の人々は、生活と結びついた形で、測地学とは無関係に、北方を定めなければならなかった。実際、いろんな形で「北」が定められている（注）。そのうちでも、代表的な方位の定め方は、そちらへ進めば進むほど寒くなるような方角を北とするものであろう。

いくつか例外がある。ここでは話を北半球に限定している。それでも、北へ進めば暖かい、つまり北の定義と矛盾するケースがいくつか見かけられる。

一例を挙げる。ドイツは南北に長い長方形の形をしている。日本とほぼ同じ面積である。ただ、幅が広い分だけ、長さは日本より短い。南北方向の長さは850kmである。全体に高緯度にずれているので、直接の対応は難しいが、あえて日本で言えば、稚内～仙台あるいは青森～大阪ぐらいの長さに国土が展開している。このため、南部と北部とでは寒暖の差がある。

南ドイツは寒く、北ドイツは暖かい。日本人の普通の感覚とは反対である。冬の月平均気温は2度ほど異なる。氷点を挟んだ2度であるため、南ドイツと北ドイツとでは積雪量（有無）にちがいがある。冬の景色がまったく異なる。北ドイツでは地面が剥き出しになっていても、南ドイツは雪景色に覆われている。南が寒いのは、大陸性気候のためである。北が暖かいのは、海の影響である。その海も、また、単調に暖かいわけではない。

北ドイツは大西洋とバルト海に面している。ドイツ語ではそれぞれ「北海」、「東海」と方角を付けた名称で呼ばれている。ここでも、北海は暖かく、東海は冷たい。冬の東海が硬く凍結していても、北海沿岸は一冬中暖流に洗われていて、海面に氷を見かけることはない。

両海は、実際には東西に配置され

オランダののどかな風景は、生活に溶け込み、チーズ用の飾りまな板にまで描かれている。

ている。西側の暖かい海を西海と呼ばず、敢えて北海と呼ぶところに、「北」という単語が、(ドイツ人にとっては)「暖かさ」という概念を内包しているのではないかとさえ想像する。

暖かい北ドイツの西隣に、オランダという国がある。九州ぐらいの国土面積に、これまた九州の人口ぐらいの数の住民が住む。人口密度350人／平方kmは、ヨーロッパでは抜き出（い）でた首位である（モナコなど微小国を除く）。日本の人口密度（310）さえ凌いでいる。しかし、「混みあった国である」という印象は算数の詐術である。実際にオランダへ行ってみると、住民の数は思ったよりも少ない。町を歩いていても、あまり沢山の人には出会わない。決して、群集を目にすることはない。人口の過密を肌で感じることはない。

オランダには山がない。周辺部に標高300m程度の丘陵が見られるだけで、全国土が平地であると言ってよい。使用が困難／不可能な山地の面積を除いた平地1平方kmあたりの人口密度を計算して、他国と比較してみると、オランダは首位の位置を脱落し、はるかに下位にランクされる。

平地でも、砂漠やツンドラでは作物が実らない。「耕作可能な平地あたり」という条件付きの計算をすると、世界ランクでも低人口密度国になるかもしれない。オランダは広々とした国であると言って、まちがいではない。

オランダは温暖な北ドイツのすぐ隣に接する国である。しかも、比較的寒冷な東側ではなく、より温暖な西隣である。高い緯度にもかかわらず、気候は快適きわまりない。人口あたり広大な、この国は土壌までもが植物育成に適していて、豊かな国である。

北極開発の栄光
―北東航路と捕鯨―

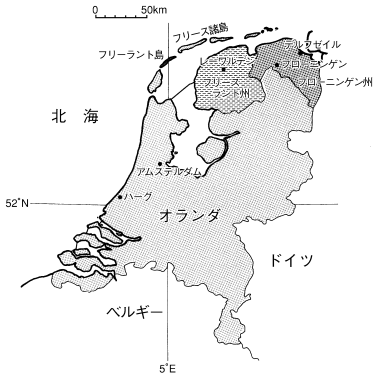
過去を眺めてみよう。今から、1万5千年ほど前には、現在のオランダの地はツンドラであった。石器を手にした祖先はトナカイの狩猟で生計を立てていた。典型的な北方圏文明の萌芽期である。その後、徐々にヨーロッパの気候が良くなった。今のオランダ人に、この時代の北方圏文化は直接伝わっていない。

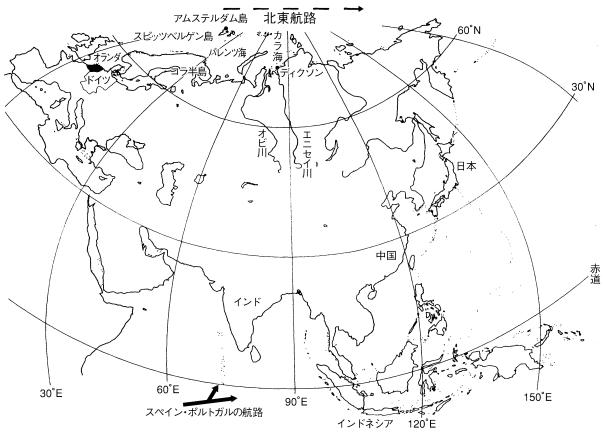
いったん北方圏と縁が切れたオランダが北極での活動を始めるのは16世紀の後半になってからである。1万数千年のギャップがある。本来豊かな国オランダが、敢えて不毛の北極地域に興味を抱いたのには理由がある。当時の世界情勢に半ば強制されたためである。大航海時代には、貿易を振興しない国は一流ではないという風潮があった。一流国になりたいという沽券だけではなく、貿易はきっと実利をもたらすにちがいないという欲望もあった。

しかし、貿易には実行上の障害があった。先進国であるポルトガルとスペインが世界の海上を制覇していた。新参諸国は自由に船を進めることができない。敵の軍艦が待ち受ける海を通っては、香料や茶の待つ中国、インドまで無事に航海できない。輸送手段がなくては、貿易など絵に描いた餅である。

新参国イギリスとオランダは、手に手を取って、あるいは競い合って、新しい海上ルートの開発に努めた。ユーラシア大陸の南側ではなく、北側を通ってアジアへ向かおうという企てである。北東航路の開発として知られている。

1594年出発のウイリアム・バレンツ指揮の調査船団が、オランダの北東航路開発第一陣であった。





北極の小島・アムステルダム島は、オランダの捕鯨基地として賑わっていたが、今はそのなごりもほとんど残っていなくて、ひっそりとしている

スピッツベルゲン島は、大昔にバイキングが発見したが、バレンツが再発見するまで、長らく忘れられていた

バレンツの名前は、現在もヨーロッパの北に位置する浅海の名称として残されている。民間では、オリバ・ブランネルが1584年、国に先駆けて探検を開始している。以降100年近い期間にわたり、公私取り混ぜて多数の調査隊が北東航路開発のために派遣された。

それ以前に、オランダはロシア北岸西部との通商路を確保していた。この区間は北東航路の西側入り口にあたる。つまり、北東航路の一部については、ある程度の調査が済んでいたことになる。スカンジナビア半島の東隣コラ半島に、1565年には既にオランダの商業基地が設けられていた。そこから東方へ、オビ川河口までの海路も開拓され、1580年にはブランネル自身が、最初のオランダ人としてオビ川河口まで航海している。

1675年に実施されたコルネリス・ピェールツ・スノップベルガーの航海を最後として、オランダは北東航路開発から手を引く。目的が達成されたための企画終了ではない。いずれの調査隊も北東航路を開通できなかった。カラ海から東へは、どのオランダ人も船を進めることができなかった。

中止の理由は、1588年のスペイン無敵艦隊の敗北に象徴されるように、海上の勢力バランスが徐々に変化したことにある。オランダも17世紀後半には南方のルートを自由に使用できるようになっていた。今や南方の海上覇権者となったオランダは、北東航路を必要としなくなったのである。

オランダの調査隊はアジアへの航路は開発できなかったが、幾多の地理学的知見を収集した。中でも、バレンツによるスピッツベルゲン島の再発見（1596年）が代表的なものである。そして、1607年、英国人ヘンリー・ハドソン（後述）がこの島の沿岸に多数の鯨が棲息することを見つけて報告した。ただちに、スピッツベルゲンは捕鯨基地として賑わい始めた。

オランダ人は、北東航路の開発と並行して、捕鯨活動に活躍した。航路の開発に熱意が失せ始めても、捕鯨産業だけは以前にも増して活発に続けられた。

今も、スピッツベルゲン島北岸、北緯80度の小島には「アムステルダム島」という名が残っている（もっとも、都市名を直接命名に使ったわけではない。船名「アムステルダム号」にちなんでいる）。アムステルダム島はオランダの大捕鯨基地であり、連日捕鯨船の運び込む鯨が岸に山積みにされていた。

鯨は少子であり、成長も遅い。母鯨を全部獲ってしまえば、海に鯨はいなくなる。17世紀後半には、スピッツベルゲン周辺には鯨がいなくなった。結果として捕鯨産業は消滅した。オランダ人捕鯨業者は故郷へ帰った。これをもって、オランダは北極での活動を一切終了した。以降現在に至るまで、この国が再度北極に興味を示すことはなかった。

オランダは、アメリカ大陸側の北極探検には、最初から冷淡であった。英国人ハドソンは母国に探検資金を見つけることができず、オランダ商人から遠征資金を得た。ハドソンも1607年に出発した当初は北東航路を目指したのだが、転進して西へ向かい、北米にハドソン川とマンハッタン島を発見したのみである。途上、スピッツベルゲン周辺の鯨を見つけたのは、余禄であった。

ともかく、ハドソン隊への資金提供が、北米北極の開発に関して、記録に残る唯一のオランダの貢献である。

なお、マンハッタン島にはニュー

第１回北極年にオランダが観測を担当したディクソン基地は、今でもロシア北極開発の拠点として活用されている

・アムステルダムという町が建設され、オランダの北米進出の拠点となった。後に英国に奪われ、都市名もニュー・ヨークと変更された（１６６７年）。ハドソンが北極開拓史に名を残すことになったのは、ハドソン湾（現カナダ北極）の探検（１６１０年出発）であるが、これにはオランダは資金を拠出していない。

１６７５年以降オランダが北極開発から遠ざかっているというのは、国の事業としての話である。現在に至るまで、個々のオランダ人は様々な形で、北極に関連する業務に携わっている。グリーンランドに、ロシア北極に、スピッツベルゲン島に、北極圏での研究や調査を続けている。特筆すべきは、１８９２～９３年の第１回国際北極年に、ロシア北極のディクソン基地（エニセイ川河口にある小島）での観測をオランダが担当したことである。世界中にたった12箇所しか設置されなかった北極観測基地の一つを、北極に疎遠であるオランダが引き受けたのである。大国の義務と感じたのであろうか。立派な行為である。

北海道に似た雰囲気の北部２州

現在のオランダはいくつかの州に分かれている。北端にはフリースラント州とフローニンゲン州とが並んでいる。アムステルダム（オランダ王宮所在地）やデン・ハーグ（政府機関所在地）の人々にとって、北部２州は地の果てである。異なった文化の下、別の言語を話す、別の人種が住んでいる、と思っている。そんな僻地はオランダではない。ヨーロッパでさえない。遠く離れた北の方にあって、そこはもう北極と変わりがない、と思い込んでいる。

小さい国である。電車でも、自動車でも3時間も走れば、国の中心部から北部のどこへでも行ける。そこには、特に変わった人が住んでいるわけでもない。平凡なオランダ人が普通に暮らしている。現実は、オランダ人自身の抱く北部２州の歪められたイメージとは異なっている。そして、もちろん、オランダ人はこの誤謬（ごびゅう）を認識している。

イメージは、北部オランダについての偏見である。作為的な偏見である。悪意の無い差別、つまりジョークである、とされている。

フローニンゲン州の州都はフローニンゲンという町である。そこには州や町と同名の大学もある。この大学に、冗談に基づいたとしか思えないが、オランダ唯一の北極研究所が設置されている。研究所へ行けば、北極開発におけるオランダの栄光が記録に残されている。現在実施されているオランダ人研究者による北極研究の成果が集積されている。小規模な大学の資料としては、質・量ともに立派なものである。

海岸へ出ると、沖には千島列島（のような列島）が伸びている。列島中でもフリーラント島は、もっとも自然状態の保存が良い。細長い島で、平面形状がエトロフ島に似ている。砂浜を散歩していても、人には出会わない。波と無数の鳥だけが視界にある。エトロフ島の浜を歩いている（私は未経験）ような気がする。（話を誇張している。実際には、成因が異なるため、島の地形は千島列島の島と大きく相違し、平坦である。島の寸法も異なる。オランダの方がずっと小さい）。

そういうことも含めて、オランダ北部の雰囲気は、北海道に似ている。酪農が盛んである。北海道にいるのと同じような牛が牧場で草を食んでいる。圧巻は馬である。ばん馬で活躍する、黄金色のタテガミをしたプルトンが、あちこちに放牧されている。もちろん、こちらが本家である。

フリースラントとフローニンゲンの北部２州こそ、オランダでは名実ともに北方圏である。北方圏という言葉は快い響きを持っている。オランダ北方圏という一見奇妙な表現も、こうして眺めてみると、響きだけではなく、内容的にも興味深い。

オランダには確かに北方圏があることがわかった、と結んでおく。どんな国にも必ず北方圏が存在する、とまでは言わない。

（注）北の定義、つまり方位の定め方について、興味がある方は小文「地名シベリア」（伊藤一、２０００年、雪氷、62巻第４号、ｐ３８７－３９２）を参考にしてください。手近でご覧になれない方は、ご一報ください。別刷りを差し上げます。

北の街角30

平島實氏が所有する土蔵

札幌市東区北十四条東十六丁目一番地、地下鉄東豊線環状通東駅で下車、環状道路を東に一丁ばかりの所に、ぽつんと建っている。

土蔵の四方は空き地で、その周りを歩くことができ、土蔵は今、玄関を閉ざし、利用されていない。鳩たちの住み家で、白いフンが散在している。

明治三十年代に建てられたもので、優に百年以上経っている。北側の土壁の一角が破損して穴が開き、二十センチの厚さの土壁が露出しているが、重厚感をみせている。

土壁をかこむ「格子入れ下見」板で化粧され、軒は七、八十センチ、突き出て傘の代役を思わせている。屋根上の一本の棟材は空へ向かって勇姿をみせている。

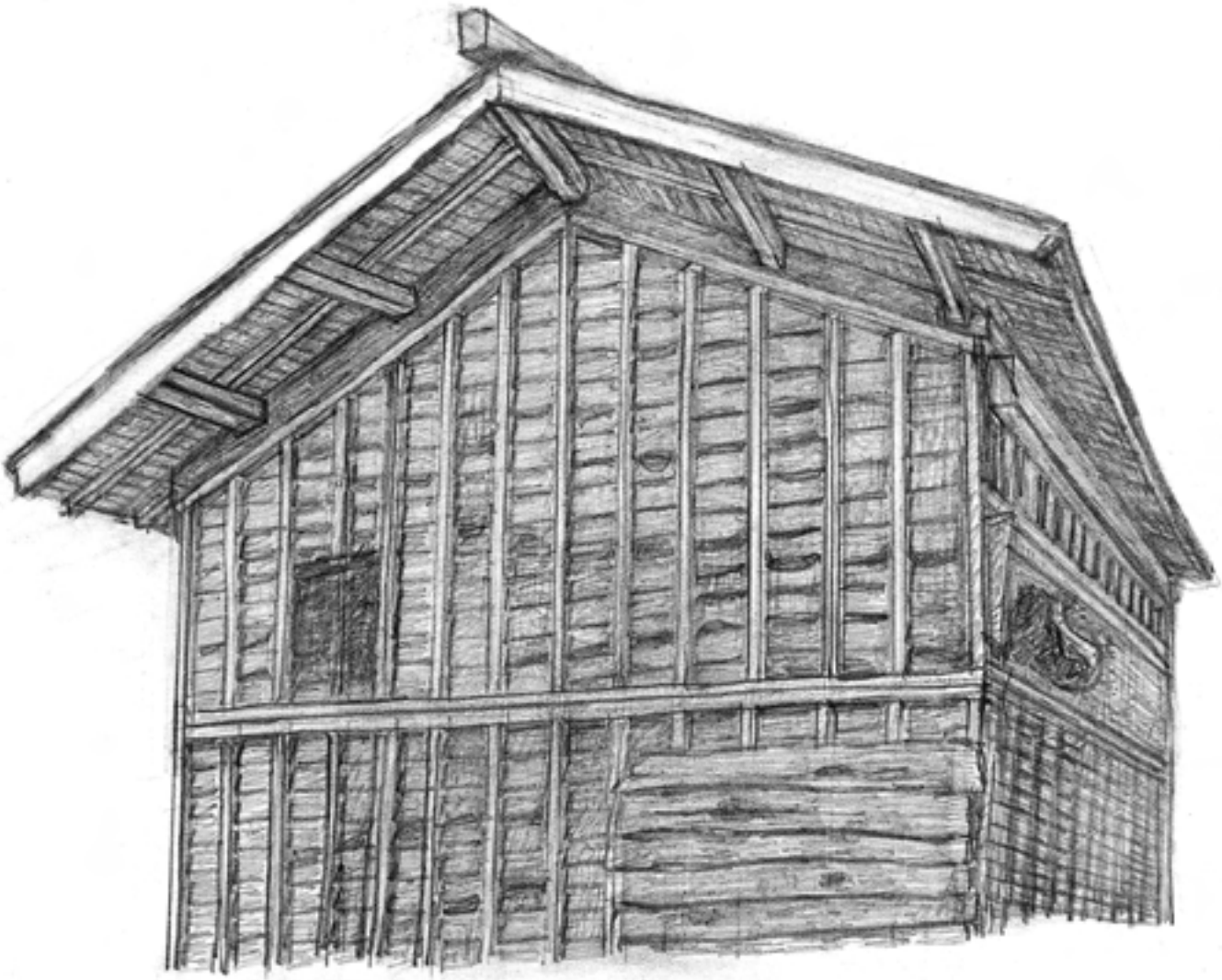
札幌軽石、レンガ倉庫は見かけるが、土壁の蔵はめったにお目にかかれない。デッサンは、建て増し部分をはぶき、蔵本体を描いた。外回りは四・九メートル×五・六メートル、約十坪内外の二階建てである。

長野県諏訪出身の武井惣蔵は、明治十五（一八八二）年、三十四歳でこの地（旧札幌村）へ入植する。「札幌黄」と呼ぶ玉葱栽培に取り組み、玉葱の創始者的存在であった。小樽、石狩の道内はもちろん道外へも販路を拡大し、明治三十六（一九〇三）年には露国ウラジオストクまで輸出、好評を博したと言われ、玉葱の本場を宣揚した人物である。

惣蔵は出身地から大工棟梁を呼び、出身地そのままの建築様式で、住宅と土蔵とを廊下で結んで建てたという。

惣蔵の分家、武井宗平から三代目、武井隆氏は兄とともに祖父の地を訪れたとき、その土蔵と平屋住宅の同様式を見とどけている。惣蔵は玉葱の貯蔵庫として建てたように思われるが、隆氏は家財道

絵と文　画家・大久保 一良



具を収納したのではなかったかと。

土蔵の東隣に平屋がある。平島宅である。平島夫人は、この平屋の住居は蔵と同時に建築されたという。住宅の改築を、ある大工棟梁に相談したところ、棟梁は壊すことはない、修繕すれば今後百年は大丈夫と言い、一部手直しはしたが、健在の住宅だ。

この大工棟梁によると、土蔵は建材が道産の松、一部桂材を使用し、最高の技術を持った本州の大工職人が建てたもので、札幌で現在、そうした技術者は皆無であるとの返答であった。

この地域は慶応二（一八六六）年、大友堀で知られる大友亀太郎が箱館奉行から開墾掛かりの任命を受け、九戸三十五名の移民と入植した由緒ある所。彼の役邸は、明治二（一八六九）年、札幌開府の指揮者・島義勇が石狩御手作場として利用したといわれている。

この大友役邸は、今、平島宅と土蔵が建つ場所でなかったかと思われるのである。

北海道新聞創刊60周年記念

ゴッホ展

Vincent & Theo van Gogh

7月5日(金)～8月25日(日)

開館時間＝9:30～17:00（入場は16:30まで）
会期中の各金曜日は9:30～19:30（入場は19:00まで）
休　館　日＝毎週月曜日

「麦わら帽子をかぶった自画像」1887年
所蔵：ファン・ゴッホ美術館（フィンセント・ファン・ゴッホ財団）

北海道立近代美術館

〒060-0001 札幌市中央区北1条西17丁目 TEL:011-644-6881

「子守女（ルーラン夫人の肖像）」1888／1889年 所蔵：クレラー・ミュラー美術館

観覧料（税込）
一　般1,200円・高大生700円・
小中生500円（10人以上の団体は各1,000円、600円、400円）

お問い合わせ
北海道新聞社事業局
文化事業グループ
〒060-8711
札幌市中央区大通西3丁目6
Tel.011-210-5731
Fax.011-210-5734

ゴッホ展ホームページ
http://www.aurora-net.or.jp/gogh/

主催／北海道立近代美術館、北海道新聞社、北海道文化放送、道新サービスセンター、道新スポーツ、エフエム北海道、北海道新聞情報研究所、ゴッホ展実行委員会
後援／北海道、札幌市、札幌市教育委員会、NHK札幌放送局、北海道都市教育委員会連絡協議会、北海道町村教育委員会連合会、北海道小学校長会、
北海道中学校長会、北海道高等学校長協会、北海道特殊学校長会、札幌市小学校長会、札幌市中学校長会、札幌市立高等学校長会、北海道PTA連合会、札幌市PTA協議会
協力／JR北海道、KLMオランダ航空

〈国際交流・協力の拠点〉

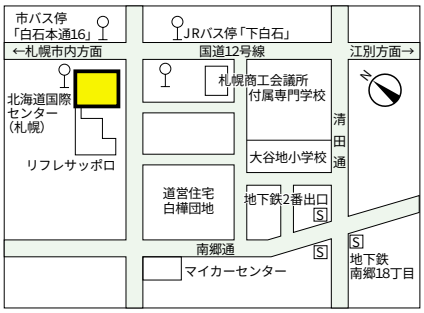
北海道国際センター

北海道国際センターは、開発途上国の技術研修員（国造りの中核となる技術者や行政官）の受け入れに加え、地域の国際交流の活動拠点として平成８年４月にオープンしました。

会議室やセミナールームなどは、国際理解を深めるために、国際交流・協力団体の皆さんや、地域の皆さんにご利用いただいております。（有料：問い合わせは各国際センターへ）

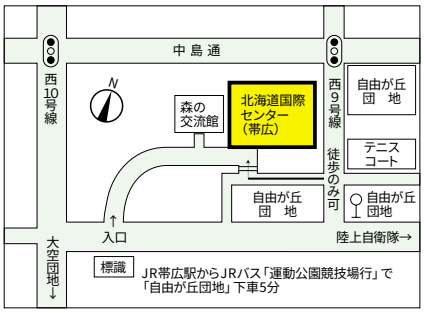
また、食堂や図書資料室は、どなたでも自由に利用できますので、気軽においでください。お待ちしております。

国際センター（札幌）



北海道国際センター（札幌）
札幌市白石区本通り１６丁目南4番２５号
TEL 011（866）8680　FAX 011（866）8425

国際センター（帯広）



北海道国際センター（帯広）
帯広市西２０条南６丁目１番地２
TEL 0155（35）2161　FAX 0155（35）2213

（北方圏センターは、北海道国際センターの管理運営を委託されています）

北の自然⑥⓪

ウトウ

日本海の羽幌沖に浮かぶ天売島は、昔からオロロン鳥（ウミガラス）をはじめとした海鳥の繁殖地として有名だ。しかし、オロロン鳥はかつて1万羽近くが生息していたというのに、今では数十羽に激減してしまった。その代り、ずっとオロロン鳥の陰にかくれていて目立たなかったウトウが海鳥のエースとして躍り出た感じである。その数、何と数十万羽。文字通り地中に直径30センチ、深さ2メートル位の穴を掘ってそこを巣にする。巣の集中する島の先端部には無数の穴が開いている。うっかりそんな場所へ足を踏み入れようものなら穴だらけでとても歩けたものではない。

陽が沈み始めると、海から湧くが如くウトウがエサをくわえて戻ってくる様は、壮観のひと言である。こんな光景は夏休み前の子育て期なら当たり前に見られるのだが、この時期、島を訪れる人はそれほど多くはない。観光客が押しかける8月に入ると、ほとんど見られなくなる。最高に素晴しい光景を目の当りにしたいのなら、生き物のペースに合わせなくてはならないという一例であろう。

文・小川　巌
写真・山田　良造

アングル ⑩

ドロミティ峡谷の四季

ドロミティ峡谷有数の景勝地・ミズーリナ湖（L・Misullina）に向かう途中、標高2775mのマウント・クリスタリーノ（M・Cristallino）の山麓を走り抜けると、目の前の広がった草原に放牧された牛の群れに出合った。カラン、カランと周囲の山々に音を響かせながら、首に鈴をかけられた牛たちの草を食む東アルプスならではの牧歌的な情景に心なごんだ。

撮影・文／綿引　幸造

ドロミティ（Dolomiti）峡谷
イタリアの最北東部に連なる2000m級の切り立った山々が迫り、エメラルドグリーンの水をたたえる湖が点在する、自然美あふれる景勝地

SAPPOROの熱い7日間

2002FIFA WORLD CUP™ KOREA JAPAN札幌開催

21世紀最初のサッカー・ワールドカップ（W杯）は、日韓共催で5月31日開幕し、6月30日にチャンピオン国を決め、閉幕した。

大会期間中、札幌でも3試合（1日、3日、7日）が行われ、大勢の外国人サポーターらが、この国際観光都市を訪れた。街の中心部・大通公園、試合会場の札幌ドーム周辺など、さまざまな場所で、さまざまな時間に、国境を超えた交流の輪が広がった。

（写真提供は毎日新聞北海道支社報道部写真課。撮影は竹内幹、西村剛、石井諭の各記者）

試合開始前からボルテージの上がるエクアドル人サポーター＝札幌ドーム前で６月３日

肩を組んで互いの健闘を誓い合うアルゼンチン（左）とイングランド（右）のサポーター＝大通公園で６月６日

「チョンマゲ」ヘアスタイルのイングランドサポーター＝札幌ドーム前で６月７日

英語で問いかけする女子中学生たち＝大通公園で５月31日

茶道で日本文化を体験するドイツ人サポーター＝大通公園で５月31日

記念写真の求めに気軽に応じ、子供を抱き上げるドイツのサポーター＝大通公園で６月１日

民衆音楽「エル・アグアカテ」に合わせ、エクアドル人サポーターのリードで踊る日本人サポーター＝大通公園で６月３日

タクラマカン砂漠横断探検隊

ラクダを友に、欠乏とスリルと冒険に充ちた30日

北見市在住　坂東商店代表取締役　坂東　招造

今年1月13日からほぼ1カ月をかけ、中国・新彊ウイグル自治区のタクラマカン砂漠約462キロをラクダと徒歩で横断した。これは、その冒険記である。

探検家・スウェン・ヘディンに倣い

私は今、76歳。出発前に、多くの人に「あなたはなぜ砂漠に行くのですか」、また「76歳にもなって大丈夫ですか」ともよく聞かれたが、私はその都度返答に困り、言葉を濁し笑っておりました。振り返って見れば、私が30歳半ばのころ、今から42年ほど前に、スウェーデンの地理学者で探検家のスウェン・ヘディンの中央アジアでの探検記を、車のラジオで聞いた。その中で、ヘディンは1895年5月、タクラマカン砂漠のホータン河付近で灼熱の高温と極度の乾燥による決定的な水の欠乏により、2人の部下と引き連れて行ったラクダや馬全部を死なせ、凄惨なキャラバンの壊滅を招いたことを知った。また、中央アジアにはシルクロードという美しいところがあることも知り、その時から私も中央アジアのシルクロードを旅してみたいと思い続けていた。

時代はずっと新しくなり、1999年1月8日付けの北海道新聞で日中共同によるタクラマカン砂漠探検隊員募集の記事を読み、私はすかさず申し込みを済ませた。その年の6月、探検隊（成田正次隊長、兵庫県在住）と共に車5台で、さまよえる湖として世界的に有名なロプ・ノール付近の砂漠をチャルクリクからミーランを経て敦煌莫高窟に至る探検に参加した。真夏の気温は40度から45度まで上昇し、地表砂の温度は60度から70度まで上がり、水欠乏攻めに合った。ランドクルーザーで砂丘を走行するのだが、私が乗った4号車と後続の5号車が砂に埋まり、もがいているところに3号車が救出のため引き返して来た。その3号車もやがて砂に埋まり、脱出に苦労をしているところに先発の1号車と2号車が引き返してきてくれたが、その1号車と2号車も砂に埋まり、やがて全車5台とも砂の深い蟻地獄に陥り、大変な苦労を経験した。

その時、砂漠の旅は自分の足とラクダによるほかはないのだと感じた。昔の探検家、ヘディン同様にラクダによる旅を行ってみようと、帰国してから成田隊長に進言をした。隊長は、それは危険きわまりないことですよ、と。もし実施に踏み切るなら十分な調査と研究が必要ですね、と即答を避けておりましたが、半年ほどしてから「坂東さん、ラクダによる旅を考えてみようではありませんか」と連絡があったので、その時より実施に向け行動を起こしたのが、今回の旅の始まりだった。

私は、以前よりも紀行文など関係する本を読み、実際の極地冒険家の講演等も聞き、それらを参考にしたり、北見市内の北海学園北見大学の2人の教授に現地の気候風土、経済、地形等を、また中央アジアの研究に詳しい奈良女子大学教授の研究室を訪れ、地球の緯度経度について、またキロ数の数値の求め方、砂丘の状態、水脈の探査等の知識の指導を受けた。3教授の説明により、寒さへの防備が一番大切であること

を知った。

私はまず第一番に11月末から12月末まで10日間、火気のないテントでの耐寒訓練と睡眠時の寒さの体験を十分に行ってみた。また地吹雪（ブリザード）の訓練も、昔南極観測越冬隊が訓練を実施した斜里郡小清水町の濤沸湖原野で行った。その結果、普通の寝袋では寒さに耐えきれないので極寒地用の軽量で、高額ではあるが、保温性の高い寝袋を用意し、人工衛星を利用したGPS（全地球航空測位システム）、双眼鏡、地図等全般の装備にも細心の注意を払い、学術的な研究と周到な準備を整え、多少の出費も惜しまず万全を期した。

なぜ、冬の寒い時期に砂漠に出かけるのかと疑問を抱く人もいると思うので、少し記しておこう。

現地はまったくの大陸的な気候が特徴で、3月から4月はコンロン山脈、天山山脈、ボグダー山脈の5000～6000メートルの高い山から吹き下ろす季節風で砂が舞い上がるが、この砂嵐が吹くと一寸先もまったく見えなくなり、ラクダの足跡も人間の足跡も砂で消され、方向を見失うのである。現地ではこの砂嵐をカラブラン（黒い砂嵐）とも云っている。近ごろ、北海道にも黄砂が舞い飛んで来るが、その黄砂の製造どころで、立ち入るのには大変難儀となる。5月から9月までの夏は極度の乾燥と灼熱な高温で水の補給が極めて困難で危険である。それに引き替え11月から2月までは極寒の地ではあるが、比較的風が穏やかで快晴の日が多い。風が少ないため砂の舞い上がりが少なく、見通しが良い。冬はダニ、蚊、サソリなどの害虫もいないうえ、何と云っても最も良いのは水の消費が夏の4分の1もあれば済むので、砂漠の旅は冬が一番安全ということである。

水不足と高く深い砂山に翻弄され

かねてからの打ち合わせ通り、輪台（村の名でルンタイ）付近の北緯40度55分、東経84度15分に、ラクダ使い14人（中国の少数民族で遊牧民のウイグル人）とラクダ75頭が集合していた。直ちに砂漠行の積荷を終え、これより30日間の見知らぬ砂漠へと、到着目的地のアルガン村（北緯40度10分、東経88度20分）目指し、南東へ直線350キロ、実働

遠方を探察する副隊長（筆者）

462キロを行進するのである。

実際砂漠に来たならば、まず第一に毎日毎日、迫り来る寒気の来襲である。氷点下15度～32度の寒さで、隊員の中に指、耳、鼻等に軽いながらも凍傷になった者が現れた。次に我々の行く手を阻むのは累々とした高くて柔らかい深い砂山で、高さは30～90メートル、8階～25階のビルほどで、一番急なところで斜度50度ほどであった。高い砂山を登り終え、これで終わりと思えば、また次々と大ビルが見渡す限りで、ビル街の連続である。その登る辛さは想像もつかなかった。砂丘の様子の一例として出発してから5日目の日記帳を開いてみよう。

1月17日（木）曇り、気温マイナス14度。朝食メニューは、おかゆ缶詰、クラッカー、センベイ。

「我々はこの日、最も辛い日となった。ますます高まるばかりの砂山へと入り込んで行った。キャラバンは歩一歩、無限にわずかずつ前進して行き、ラクダが倒れて、その荷を積み替える時、あるいはひどく険しい砂丘の背に出くわした時、休息がとられ、一時的ではあるが、ラクチンラクチンのような気になる。砂の峠はますます高く、絶望的な不安な感情を覚えてきた。私は2度と再び平地へ出られるあてのない砂漠へと、いよいよ深く迷い込んで行くために全力を尽くして砂丘をはいつくばっているような気持ちとなってきた」「夕食後、今日の砂丘の行進のため疲労困憊して、だれもかれも死んだように眠った」

このような砂漠の登りが毎日続くのであった。それに決定的な水の欠乏による恐怖感を覚えた。人間の水は確保されているが、ラクダ75頭に与える水の欠乏であった。ラクダには4日に1度、水を与えなければならず、平らなところで積荷がなければ10日間ほど水を飲ませなくとも生きるということは知っているが……。

ここでキャラバンの構造を記そう。

日本人隊員19人、うち女性3人。日本人カメラマン1人。中国人隊員5人の合計25人。日本人はテントの設営、中国人は食事の支度。ラクダは1人に3頭を必要とするので、25人分75頭。先頭は副隊長の私であり、指揮を執るのである。次に中国隊リーダーの王威さんで、あと各自が隊列に入り、最後が日本隊隊長の成田正次さんである。

ラクダに積荷をして高い砂山や柔らかい深い砂地を歩くことは、1週間ぐらいが限度であった。ラクダ引きのリーダーは、積荷をしてこんなに高くて深い砂山を登った経験は今までに一度もなかったし、これからもおそらくないであろう、と云っていた。1週間ぐらい経ったころからラクダの歩行が鈍くなり、座ったら立ち上がろうともしなくなるのが現れ始めた。このような時は、荷を強いラクダに積み替えするのだが、強いラクダも自分一頭が精いっぱいである。ラクダだけではない。日中両隊員も疲れ果てている。

緩んだ砂丘の尾根の斜面を歩くと、一足ごとに滑り落ちるのではないかと思い、50メートルほどもある砂の谷底へ落ちないように頑張るのは大変であった。砂漠越えのうちでも最も困難なものの一つであった。私は今はもう疲れて、苦しみは十分味わい尽くしていた。これからも25階のビルを登らなければならないと思うと、ただ一刻も早くここから逃げ出して文明と休息がほしかった。でも25階ビルはまだまだ続き、南へ北へ西から東へと高い砂山を幾重にも幾重にも乗り越えて水の出そうなところを探し求めるのである。

ラクダにはもう11日間、水と草を

高さ90メートル、斜度約50度。四つんばいになりながらの登り。ここにいるのも地獄、去るのも地獄……

のびて立とうとしないラクダたち

与えていない。水の有りそうなところで砂を掘り、多少水が出たならばラクダ引きのリーダーを呼び、水の善し悪しを見てもらうのだが、塩分濃度が高くて、ラクダの飲み水にならないのだ。また水が有っても流れ水でないため腐っていて飲み水にならない。ラクダはもうすっかり弱り切って（ここで）倒れたならば、キャラバンも先に記した探検家スウェン・ヘディンと同じ結果になりかねない。ただ水を求めて、予定もしない里程をさまよい歩き、さんざん波瀾の多いビルを登り降りした。

強いストレス、6人がリタイア

このころより隊員の中から寒さと砂丘の登り降りの辛さで、不平や文句を言う人が現れ始めた。その不平や文句をあおり立てる人も現れ、水を求めてさまよい歩いた時も、隊長と副隊長の無計画さだ、そのために高い砂山を余分に5～6日も歩かされ疲れ果てたのだと、酷評されののしられた。私たちは、今ここで言い訳を申せば煽動する人たちの火に油を注ぐようなもので、何も説明せず、腕を組み、じっと我慢をしていた。隊の組織団結（チームワーク）を図るには我慢が絶対に必要であった。不平を言われた方たちの中には観光半ば、冒険ツアー気分で参加された人もいたようであった。寒さのため、夜は十分眠れず、砂山の歩行の困難によるストレスがたまり、旅の辛さに耐えきれず、途中の集落（チケンリク）から女性2人を含む6人がリタイアし、任務の終わったカメラマンを加えた7人が帰国した。

私はその夜、寝袋の中で、リタイアする人が出て残念でなかなか寝付かれなかった。朝目が覚めて、どうしよう、これ以上リタイアする人が増えたらどうしよう、と心配でならなかった。朝の時間だというのに、暗い外、風はなく、空気は乾燥していて、キラキラ輝く星を見つめているうちに、東の空が少し白んできた。ふと見ると、毎朝の行事であるウイグル人（熱心なイスラム教徒である）が、西の彼方、メッカに向かいお祈りを捧げている。このイスラム教徒も生きるため、多少の危険があっても1500キロも西の彼方（ダリヤブイ村）からラクダを引いて来て、今日一日の無事と生きることの喜びを神に感謝し礼拝をしているのではないか。

私は寝袋の中で思った。リタイアする人が出るほど苦しい旅ではあるが、ラクダ引きのように明日に向かって強く生きて行くのだと思い、この探検を完遂し、生きて我が家に帰るのだという気持ちが一層強く増した。その時、星を眺めていた目はギラつき、唇をギュッとかみしめ、両手を固く握り締めていた。もうどうにもならないほど、全身が張り切り、寝てはいられない。この日は特にしばれのきつい朝であったが、寝袋から這い出し、昨夜の野火のところまで行き、火を赤々と燃やし、炎をじっと見つめて過ごしているうち、ふと気付いた。それは残った13人全員が探検を完遂させ、生きて我が家に帰れると。それは帰国した7人分の水と食糧全部が残ったからだ。

ここで砂漠での食事のメニューを記しておこう。

餃子食器一杯に約10～12個の餃子が一食分。餃子は5日に一食くらい出た。そのほかは、ほとんどクラッカーなどの携帯食か非常食であった。非常食のコメと豆のおかゆ缶詰1缶にソーセージ2切れほど。上等食の一つカップラーメン、これはお

熱心なイスラム教徒のラクダ引き。夜明けの礼拝（寒い朝であった）

昼のひと時。携帯食のクラッカー、センベイを食べながら

いしい。日本にいたときはおいしいとは思わなかったが、こんなにおいしいものはないくらいであった。次にナン。これは固いパンで、水に浸して柔らかくして食べるのである。次はクラッカー、センベイ、次はチョコレート。以上のようで、何とか命をつなげる程度の食事であった。野菜類、特に青物と魚はまったく食べなかった。

少年二人も苦しい旅を完遂する

砂漠は惨めで苦しいところばかりでない。王子様とお姫様が金と銀の鞍に乗って見知らぬ遠い国からはるばる旅のラクダが行く、夢のような、絵にも描けないような、美しい風景もしばしばあった。それからまた、私たち一般社会では見る機会のない、まったく人跡未踏の地に、大きくなるのに千年、立ち枯れして千年、朽ちて千年という大木が、千古斧を知らず、原始の姿そのままに立ち枯れして水枯れの旧河川跡等に残り、荒涼とした砂山が美しく染める大自然の迫力に圧倒されつつ、思わず目が潤んでしまう光景もあり、欠乏とスリルと冒険に富んだ探検を味わうことが出来た。

残った13人全員は辛くとも苦しくとも、文句不平一言も云わず、砂山をヘトヘトに、疲れながらも足を引きずってでも歩き続けた。その中には女性1人と16歳と19歳の少年もいた。出発当初は少年の中に弱々しくて旅の完遂は出来るかどうか大変心配であったが、やっとの思いで足を引きずりながらも逞しく付いて来ており、この少年たちも忍耐と協調性とチャレンジ精神を体験して、10〜20年後には大きな思い出となり、人生の良き経験者となることと思った。

16歳の少年は初めお父さんが参加の予定であったが、仕事の都合で参加が出来なくなり、お父さんはその夢を託したのであった。少年は、学習は遅れても取り戻すことが出来るが、このたびの経験は2度とチャンスは巡ってこないので、学校に許しを得て参加した。また19歳の少年は職業訓練生であるが、新聞でこのたびの探検を知り、チャンスは2度とない、苦しみと困難はきっとあろうが、そういう冒険も長い人生には良いのではないかと思い、お金は社会へ出て一生懸命働いて返す約束でおばあちゃんから借りて参加したのであった。

到着目的地のアルガン村が双眼鏡の中、5〜6キロ先に見えた。だが、歩るけども歩るけどもなかなか近くにならない、もうこのころになった

探検終了時のよろこび

ら普通歩行速度の半分にも満たなくなっていた。休んでは歩き、歩いては休むの繰り返しだ。

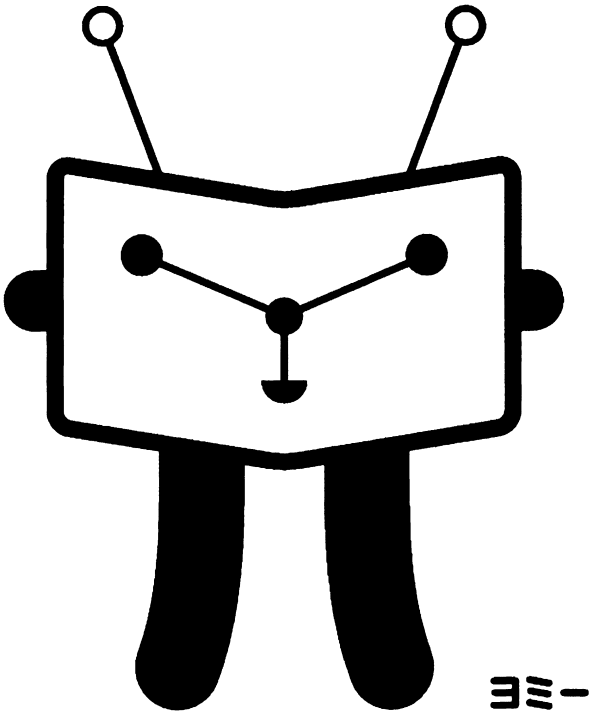
2月11日、ついに到着した。アルガン村は30戸ほどの土と粘土で造った小さな家がパラパラと、侘びしそうな食堂2軒あり、いかにも寒々とした寒村であった。

先に到着していた中国隊は爆竹を大いに鳴らし、我々の到着を祝ってくれた。文化も宗教も言葉も超越した到着であったので、その喜びはひとしお深いものがあり、うれしくてうれしくて涙の出るほど喜び合ったのである。私が国を出る時に用意した日本国旗と紙で作った中国の国旗（日本の国旗とまったく同じ大きさのを作った。同じ大きさにしたのは国旗の大小で民族間に嫌な思いをしたくなかったからだ）を掲げた時は、中国隊員は自国国旗に大きな誇りを持って涙を流さんばかりに感激してくれた。

中国側隊長、王威さんと日本側隊長、成田正次さんが事故もなく無事到着の喜びの言葉を語り、全員で探検の完遂を喜び、日中友好親善を祈念して両国の国旗に深く礼をし、万歳三唱して探検の旅を終えた。

日本で最も読まれている新聞です。

たしかメディア
読売新聞



ご購読申し込みと転居先への配達は

フリーダイヤル（通話無料）　ゼロ ゼロ ゼロ ゼロ　やっぱり1番

0120-0000-81

※コンビニエンスストア「ローソン」店内の『ロッピー』（ローソン・オンライン・ショッピング）も、ご購読申し込みにご利用いただけます。

「Yomiuri On-Line」 http://www.yomiuri.co.jp/

小学校でYOSAKOIを披露する（カナダ・サスカツーン）

中学校で折り紙を指導する
（カナダ・サスカツーン）

わがマチの国際交流■北広島市

サスカツーンの さわやかな風を感じたい

カナダ・サスカチュワン州サスカツーン市■

昭和63年、当時の竹下首相が「自ら考え自ら行なう地域づくり」事業、いわゆる「ふるさと創生1億円」事業を提唱しました。北広島市ではそれを受けて、21世紀のまちづくりに向けた人づくりに活用しようという基本目標を掲げ、平成2年に「ひろしま人材育成委員会」を発足させました。国際交流事業に取り組んだきっかけは、その委員会事業における3本柱の一つが「豊かな国際感覚を持った人材の養成」であったことです。

カナダ・サスカツーン交流事業の始まり

国際交流を始めるにあたり、北方圏センターから、当初2つの都市を紹介していただきました。一つは、アメリカ・マサチューセッツ州アマースト市。こちらは、「青年よ大志を抱け」という言葉で有名なウイリ

スクールバスで移動中
（カナダ・サスカツーン）

ホストファミリーとレストランで食事（カナダ・サスカツーン）

高校の卒業ダンスパーティーに参加する
（カナダ・サスカツーン）

アム・S・クラーク博士の出身地です。実はこの言葉、当市内で発言されたものであって、ゆかりが深いのです。そしてもう一つが、当市と同じ北方圏に属するカナダ・サスカチュワン州サスカツーン市でした。

平成3年10月、町民（当時広島町）6名が、それらの都市を訪問しました。アマースト市は、ボストンから車で西へ2時間。期待に胸をふくらませました。しかし、当時は既にクラーク博士から5代を経ており、その直系はただ一人の女性となっていました。交流事業に関しては、その女性への負担、そして日本でのクラーク博士の業績を知る市民も少なくなっていたことから、あえなく断念しました。

一方、北緯53度、カナダ中央部に位置するサスカツーン市では、教育長をはじめ教育委員会の方々、先生方、全校生徒、その父母までが温かく一行を迎えてくれました。子供たちが一生懸命に歌い、演奏してくれた曲は、国や人、人種や言語を超えて団員の胸を熱くしました。また、ホームステイを通じても、人々の素朴な温かさが強く感じられ、この訪問により、すばらしい交流ができるものと確信しました。このときお世話になったサスカツーン市在住の高谷邦夫・尚子夫妻には、それ以来ずっと交流の架け橋としてお手伝いいただいており、本当に感謝しています。

さて、その翌年、平成4年4月には、早速カナダ側から高校生11名、教師2名が来町しました。一行は、町内の家庭にホームステイしながら日本の文化や教育にふれ、楽しい5日間を過ごして行かれました。

広島町からサスカツーン市へ、生徒が初めて旅立ったのは、翌平成5年4月のことになります。町内6つの中学校から6人、3つの高校から6人、それに引率の先生などを加えた16人の訪問団でした。生徒たちは、全員で大学やカナダ・インディアン記念公園などを見学したり、それぞれが分かれて学校訪問を行なったり、また、ホストファミリーと買い物に行くなど、様々な交流を行いました。このときは、4日間という短い滞在でしたが、多くの感動と優しさを感じて帰ってきました。

以降、隔年で相互に交流を重ね、現在までに受け入れが6回（カナダの生徒89名）、派遣が5回（北広島市の生徒72名）にまで発展しています。

静かに、しかし急速に発展するサスカツーン市

カナダ中央部に位置するサスカツーン市の始まりは、19世紀後半にさかのぼります。当時、ユートピアを探し求めていた一開拓者集団によって拓かれた町が、現在では人口約21万人というサスカチュワン州で最大の都市になりました。大平原の中に造った人工湖を中心としたまちづくりが行なわれています。

日照は年間2381時間あり、カナダでは最も長くなっています。気候は寒暖の差が激しく、夏の高温時には30度を超える日がある反面、冬場は氷点下30度にまで下がります。低温期に強風が吹くと、体感温度は氷点下40度以下にまで下がるといい、極寒への近さを感じます。今年について言えば、5月中旬に入っ

てようやく暖かくなってきたそうです。しかし、風の強い日にはまだ、ジャンパーやフリースなどの防寒着がないと、寒くて外は出歩けないとのことです。

とはいえ、四季の色合いがくっきりと感じられ、大自然に抱かれたとても素晴らしい街です。春になると大平原にびっしりと小麦が蒔かれる、豊かな穀倉地帯でもあります。鉄道が敷設されてからは、穀物の積み出し地点として栄えてきました。それに加えて、近年はハイテク産業の新進工業地域としても発展しています。大学を始め、博物館、美術館、図書館等の教育文化的施設も整い、深い緑とゆったりした川の流れが象徴的な街並みです。サスカツーン市は、そんな静かで落ち着いた街でした。

生徒の頼もしい言葉

平成7年のサスカツーン訪問団に参加した大曲中学校の斎藤麻美さんが、その時の思い出や体験した感動を披露しました。舞台は「青年の主張」石狩支庁地区大会。「カナダの学生は、はっきりとした自分の考えを持っている。私も親から信頼される人間、国際人としてしっかりと自立した人間になりたい」と主張しました。言葉を慎重に選びながら、自分の意見を堂々と述べる姿に、満場の拍手が贈られました。

サスカツーン市へ行くまでに

派遣団員の選定は、中高生への一般公募で行なっています。平成13年度の派遣にあたっては、12名の募集に対して30名もの応募がありました。交流事業への人気は高く、ほぼ3倍という高倍率になったことは驚きでした。応募については特に女生徒が積極的で、8割を超えていました。選定の基準としては、交流することへの意欲・積極性に重点を置き、面接により決定しています。

晴れて派遣団員となった生徒たちには、様々な事前研修が待っています。まずは、コミュニケーション能力を向上させるための英会話研修。これは、前年の12月から出発する5月までの半年間に計9回行いました。さらに、日本文化を再確認し紹介するための研修として、折り紙、紙芝居、習字、けん玉など。また、派遣中に披露するＹＯＳＡＫＯＩソーランや盆踊りなどの練習も行ないました。

これらの研修は、学習としての準備ということにとどまらず、一緒に行動することで生徒たちの仲間意識を深めていきます。当初は初対面で緊張していた生徒たちも、しだいに打ち解け、なごやかな雰囲気へと変わりました。そこからまた、団員としての強い自覚と責任も生まれ、サスカツーン市でのすばらしい交流につながるものと考えています。

サツカツーン市での交流

（平成13年・5回目の派遣）

平成13年5月25日（金）、いよいよ派遣当日です。団員は、男子2名、女子10名、指導員2名の総勢14名。途中、バンクーバーでの市内観光、また、グランビルアイランドやキャピラノ渓谷の見学を経て、翌日の夕方、無事サスカツーン市に到着しました。そこからは、エーデンボーマン高校の生徒さん宅で、待望のホームステイです。団員は、一人一人分かれて宿泊し、ホストの高校生と毎日一緒に登校します。高校では、日本語クラスの授業に参加、ゲームやクイズなどで楽しく交流し、またたくまに仲良くなりました。小学校では、けん玉、折り紙、紙芝居などを披露し、とても喜ばれました。一日一日が短く、あっというまに〝お別れパーティー〟がやってきました。皆で練習してきたＹＯＳＡＫＯＩソーランを、お揃いの法被で踊り、大いに盛り上がりました。帰国の朝は、ホストファミリーまで寝坊してしまい20分遅刻の団員に、ハラハラさせられるオマケ付きでしたが、6月2日（土）、全員元気に帰国しました。

北広島市での交流

（平成14年・6回目の受け入れ）

今回、サスカツーン市からの来訪は、2週間の長旅になりました。先に富山県高岡市で交流を行ない、北広島市に到着したのは4月6日（土）のことでした。引率の指導員2名は、相当疲れた様子でしたが、生徒たちは満面の笑みを見せてくれました。

カナダからの渡航費用は、生徒たちの自己負担。小遣いも含めて30万円程度を用意しているようです。以前は、すべて生徒自身がアルバイトなどで稼いだお金で参加していたとのことで、そのバイタリティーに驚きました。ただ、最近は両親や祖父母から、少なからず援助を受けている生徒も多いようです。

カナダの生徒もやはり今時の高校生、日本の伝統文化よりも、むしろカラオケやボウリング、そしてショッピングを楽しんでいました。中でも「キティちゃん」などのキャラクターグッズは大人気で、新しい時代の文化交流を考えるヒントになるのではないかと感じました。

また、事前の打ち合わせでは、和食、特に寿司や天ぷらは好きな生徒が多いと聞いていましたが、実際に用意してみるとあまり箸が進まないようでした。これは、おそらくカナダで食べられる寿司は、カナダ向けの味にアレンジされたものになっているからでしょう。韓国と日本ではキムチの味が違い、インドのカレーと日本のそれが別物であることと同様なのだと思いました。こんなことを知ると、こちらの勉強不足も痛感します。

今回の生徒たちに感心したのは、自由に行動しながらも、集合時刻にはきちんと集まることでした。また、日本人らしい長めの挨拶に、通訳が付いて更に長くなっても、真剣に日本語を聞き取ろうとしていました。そして、私たちと目が合うと、にっこりと笑顔を見せてくれ、すがすがしい交流ができました。

ホストファミリーとのフリーデイには、石屋製菓のチョコレートファクトリーや札幌ドーム、伊達時代村など、それぞれいろいろなところに連れて行ってもらったようです。

本禄北広島市長を表敬訪問（H14・4・8）

北広島西高校生徒との記念写真（H14・4・11）

札幌日本大学高校バスケット部との記念写真（H14・4・11）

北広島芸術文化ホールでのさよならパーティー（H14・4・11）

最後に

「ひろしま人材育成委員会」の事業として始めたこの交流も、その解散にともない、平成12年からは「北広島国際交流協議会（事務局：北広島市教育委員会）」が引き継いで進めています。

21世紀を担う子供たちが、高校生という最も多感で好奇心に満ちているこの時期に、直接の交流を通してお互いの国を知り、まちを知り、人を知るということは、貴重な体験になると思います。北広島市では、こうした交流が国際社会を理解する上で、大変重要なことと考えています。

カナダ・サスカツーン市は、高校の授業で「アジア研究」の一環として日本語の学習を行なうなど、日本との交流に大変積極的です。また、ホストをしてくださる家庭も、みな温かく、自然に受け入れてくださるなど、良好な環境が整っています。当市としては、今後もこの交流事業が継続され、更に絆が強まっていくことを願っています。そして、お互いの高校生が近い将来において、国際交流の一翼を担う人材へと成長することを期待しています。

JICAの「都市型水質汚濁検査技術II」コース

チリ、ボリビアフォローアップ調査に同行して（ボリビア編）

北方圏センター国際協力部　新矢　泰久

写真１　海抜3,700㍍に位置する首都ラパスの町並みを眺望して

霧に覆われたチリのサンチャゴの街を後に、調査団は、次の目的地であるボリビアへと向かいました。日本を出発する前の予備知識として、ボリビアが高地にあり、高山病に注意が必要とのことは知っていましたが、実際、首都ラパスの空港に到着して、ここが海抜約４０００㍍の場所にあり、迎えに来ていたＪＩＣＡの現地職員の方からまず注意されたのは、「ゆっくり行動するように」と言うことでした（**写真１、写真２**）。ボリビアでの１日目、２日目は土、日曜日に当たり、体調を整え、鋭気を養うはずでしたが、ラパスの街を少し見に行く、と言ってもサンチャゴのように治安は良くないとのことで、服装もラフに、高価な物は持ち歩かず、時計も外しホテルを出ました。

ラパスの街は、空港より若干低い海抜３７００㍍に位置しており、坂が多いため、高地での坂の上り下りを少ししただけで疲れ、息も上がってしまいました。体内に蓄えていた酸素も切れ、頭もぼーっとしてしまい、集中力もなくなってきた感じです。この高地に順応するには数週間必要と思いましたが、順応する前に出発です。

宿泊したホテルの近くに日本人会館があり、その中に日本料理店がありました。１日目、２日目ともに、食欲もわかないことから麺類で済ませ、高地では心臓への負担や酔いが早いことからアルコールも控えました。夜は眠りが浅く、頭痛でよく目覚めました。深呼吸を繰り返して眠りにつくありさまです。これが高山病なのかと思いましたが、やはり一番辛かったのが、頭痛です。日本か

写真３　帰国研修員との面談（手前からMs.Silvia、Ms.Jaencarla、Mr.Ramiro）

写真２　街中でよく見かける露店とショールに帽子をかぶった女性

ら頭痛薬を持参していったので、服用後は痛みも治まり、問題なく活動でき、非常に助かりました。

３日目、ＪＩＣＡボリビア事務所を表敬しました。次に、ＳＮＡＰ（ボリビア国の公務員の人事管理を担当）を表敬しました。ここでは、研修参加に際しての問題点として、研修コースの枠に限りがあること、多くの国の組織が民営化され、公務員を参加させることが困難になってきていること、語学力の低さが挙げられました。

次に、住宅生活基盤省を訪問しました。ここでは、ボリビア国の上下水道の概要について説明がありました。上水道は、大きな都市では整備されているが、水質管理が課題であり、小さな都市では整備されておらず、安くかつ簡易な技術が必要とのこと。下水道は、全ての都市に共通の問題であり、河川の汚染はひどい状況にあること。ラパスには下水処理場がないこと。簡易で安価な技術へのニーズが高いことが強調されていました。その後、ラパスから車で30分ほどの場所にある民間の下水処理場を視察しました。非常に簡易な処理施設ですが、当国の状況に対応した安価で簡易な技術でした。

午後には、飛行機で約30分ほどのコチャバンバへと向かいました。コチャバンバは、海抜約２５００メートルにあり、到着後は嘘のように頭痛も解消し、睡眠もとれ、食欲も回復しました。

４日目、帰国研修員Mr.Ramiroの所属先であるＳＥＭＡＰＡ（コチャバンバ県の上下水道を管理している組織）を表敬訪問しました。次いで、３名の帰国研修員Ms.Silvia、Mr.Ramiro、Ms.Jaencarlaと面談を行いました**（写真３）**。午後からは、公開技術セミナーを開催しました。藤田晃三団長（札幌衛生研究所長）、山本正昭団員（同研究所水質環境係長）による講義に続き、当コースの帰国研修員Mr.Ramiro、Ms.Jaencarla他１名の発表がありました。本セミナーは、コチャバンバ帰国研修員同窓会によりアレンジされ、関係機関、学生等の参加により約90名の聴衆が集まり、盛会でありました。

５日目、ＳＥＭＡＰＡの管理する下水処理場を視察しました。簡易な施設で、広大なラグーン（潟）があり、滞水と沈殿等により処理を行っており、ラグーン内の堆積物が過去15年間で１度取り除かれたが、微量しか堆積していなかったため、その後は行われていないという**（写真４）**。次に、あと１つ浄化処理施設を視察し、ボリビアでの用務をほぼ終了し、午後には再度、飛行機でラパスへと戻りました。

６日目、ボリビアの日本大使館を表敬訪問し、続いて、ＪＩＣＡ事務所に行き、調査結果の報告を行いました。これにより、ボリビアでの用務をすべて終了しました。

このようにして、チリ、ボリビアへの約２週間にわたる「都市型水質汚濁検査技術Ⅱコース」フォローアップ調査の同行を終えたのでした。

同行余話としては、チリとボリビアの両方で、乗っていた自動車が故障にあったこと、飛行機が定刻に飛ばないというアクシデント（この地では日常茶飯事とは聞いていたが）にあい、コチャバンバで２時間遅れの出発、帰国時のサンパウロでの乗り継ぎも２時間以上の遅れで出発といった具合に、いつ飛ぶのか分からずにひたすら待つということを経験しました。日本では考えられないことが、ここ南米大陸ではおおらかに時間が過ぎていくことを実感したのでした。

写真４　SEMAPAの管理する下水処理場の広大なラグーン

ルーツで語る北海道の人物

第三十回

岸本 良信（苗字研究家）

大名を襲撃した義士相馬大作

文政四（一八二一）年四月二十三日、秋田藩領の橋桁山（現在の秋田県大館市橋桁）を登る二人の男がいた。山中は樹木が笠のように茂り、獣道の陽光を遮っていた。昼なお暗く、ただ虫の鳴き声だけが響きわたっている。行く手をさえぎる藪を払い、思い詰めた顔で黙々と登る男は相馬大作こと、下斗米秀之進将真（三十三歳）である。身分は盛岡浪人。後ろに門弟の盛岡藩士関良助（二十二歳）が従っていた。頂上にたどり着いた二人は、じっと身を潜め、静かに来る時を待った。すでに死ぬ覚悟はできていた。

相馬大作

しばらくすると、近づいて来る大名行列が見えた。弘前藩主津軽寧親の一行である。その行列が彼らの真下を通った瞬間、地面に埋めておいた地雷が炸裂した。慌てふためく眼下の武士たちには目もくれず、秀之進は構えた鉄砲の銃口を寧親の乗る駕籠に合わせ、ゆっくりと引き金を引いた。バーンと乾いた銃声が山あいの谷間にこだまする。弾丸は正確に駕籠を貫いた。関は山を下り、駕籠の中を改めようとしたが、秀之進は「これで目的は達せられた」と言って引き留めた。これが世に言う「相馬大作事件」である。この義挙は赤穂浪士以来、武士道の精華に飢えていた人々をいたく興奮させ、一流の国学者である藤田東湖（水戸藩）や吉田松蔭（長州藩）も賛辞を惜しまなかった。近代には講談や映画にもなっている。

しかし、事件そのものは失敗に終わった。秀之進が腕を見込んで仙台から連れて来た刀鍛冶の大吉が裏切り、弘前藩に通報していたからである。驚いた弘前藩は寧親の参勤交代の帰路を鄙道に変え、本道を進む駕籠の中には誰もいなかった。しかし、秀之進はそのことを知っていたのかもしれない。だが、それでも良かったのだ。なぜなら秀之進の本意は寧親を撃ち殺すことではなく、天下に南部武士の意地を示すことだったのだから。そのために不意打ちという卑怯な手段を嫌い、秀之進は事前に天誅を加えるという主旨の果たし状を弘前藩に送り付けていた。本当に暗殺を考えている者はそんなことはしない。この果たし状によって弘前側の警備は極めて厳重なものとなり、とても数名で藩主寧親を暗殺できるような状況ではなかった。

南部家と津軽家の確執

そもそもこの事件の遠因は盛岡藩と弘前藩の根強い敵対心にあった。これを盛岡藩側からみると、弘前藩祖津軽為信への憎しみということになる。戦国時代まで津軽地方は南部氏の支配地であったが、盛岡藩祖南部信直が家督を相続するころには、南部氏の派遣代官であった津軽為信が半独立の態度を示し、天正十五（一五九〇）年には密かに小田原の豊臣秀吉に拝謁し、津軽四万七千石の大名として認められてしまったのだ。それを知った南部側は強く抗議したが、逆に秀吉の怒りを買い、引き下がらざるを得なかった。

以来、盛岡の藩主も武士も農民も、弘前藩と津軽衆を不倶戴天の宿敵とみなし、幼少の

ころから何度も為信の悪行を聞かされて敵愾心を植え付けられた。その怒りを南部家は石高が津軽家の倍以上であることと官位が上席だという優越感で、どうにか慰めてきたが、南部利敬の時代、そのプライドがぐらつき始める。ライバルの津軽寧親が蝦夷地警備の功績により十万石に加増されたのだ。官位も利敬と同列の侍従になるという噂が流れた。石高は南部も同じ功績により二十万石となったため抜かれる心配はなくなったが、官位のほうは並ばれる公算が高まった。もし寧親が侍従となれば、江戸城では同じ部屋に座らなければならない。これが利敬には悔しくてたまらない。日々、「旧家来の津軽と同席などできようか」と不満を口にし、ついにはストレスで病気に罹ってしまった。これがまた利敬の大きな心痛となる。もしも、このまま自分が亡くなれば息子は無官。同列どころか、憎っくき寧親の下座に座らなければならない。そんな煩悶のなか、寧親侍従昇進の報が届けられ、利敬は「南部には一人の義士もいないのか！」と遺言のように叫び、三十九歳の若狭で悩死した。

蝦夷地探検と謎の絵図

この利敬の遺言に応じたのが下斗米秀之進である。秀之進は盛岡藩士宗兵衛の二男として福岡村（現在の岩手県二戸市）で生まれた。幼いころから武芸を好み、択捉島の南部陣屋にいた叔父の寛左衛門からは南下するロシアの脅威や珍しい蝦夷地の風俗を聞かされて育った。十八歳になると、父が兄を廃嫡して自分に家督を譲るという話を伝え聞き、出奔。江戸に出て旗本夏目長右衛門信平の家来となり、夏目が通っていた実用流平山行蔵の道場に入った。武芸には天性の才能があったとみえて、わずか二年で平山門下四天王の第一に数えられ、夏目の媒酌で芳子（夏目家臣松川氏の娘）と結婚。師の平山からも北方の危機論を強烈に教え込まれた。二十六歳のとき父病気の報に接して帰郷。本家の土蔵を改修して私塾を開き、まもなく金田一前平に「兵聖閣」という本格的な道場を作った。秀之進の噂を聞いて近在から入門を志願する者が列をなし、その数は二百人以上に達した。なかには後に終生の愛弟子となる関良助もいた。また盛岡藩主の利敬は、この兵聖閣に密かに資金援助を与えていたという。その恩に報いるため、秀之進は一命を賭して津軽寧親襲撃を決意したのである。利敬が待ち望んだ「たったひとりの義士」となるために。

しかし、この事件には別の側面もある。それは私怨を超越した憂国的精神とでも言うべきものである。秀之進の心中には、大事件を起こして世間の耳目を自らに集め、風雲急を告げる北方警備の重要性を人々に知らしめたいという真の動機があったという。それを裏付けるように秀之進は、夏目が松前奉行となった文化十四（一八一七）年十一月、夏目の協力で親友の細井萱次郎（赤穂義士堀部安兵衛の友人。また我が国で初めて「測量」という言葉を作った儒学者細井広沢のひ孫）と共に蝦夷地を探検している。そのときの詳しい踏破ルートは、秀之進が書いた「遊北日抄」という紀行文が明治時代に紛失したため明らかではないが、この旅に持参したとも、翌年五月に帰国後自ら描いたともいう二枚の絵図が二戸市の呑香稲荷神社に伝えられている。このうち、「松前総絵図」と名付けられたものは、類図がほとんど無く、学術的にも大変貴重なものだ。

もう誌面がないので、秀之進の最後だけを書き加えておこう。事件後、江戸に上った秀之進は相馬大作と名を改め、堂々と道場を開いた。講談などでは、この相馬大作という名のほうが有名になっている。十月には関良助と共に捕らえられ、「花は散り　葉は木枯に　落ちてこそ　誠のさまを　あらわしにけり」という辞世の歌を残し、実に潔く小塚原の露と消えた。享年三十四歳であった。

なお、この原稿を書くにあたって、秀之進の研究家であり、ルーツを同じくする札幌市在住の下斗米哲明氏から膨大な資料とご助言を賜ったことに深く感謝いたします。

「松前総絵図」

世界はひとつ
民俗学の周縁から
アイヌについて④

北方圏センター調査委員
山中 文夫

アイヌ・モシリ（北海道）に安東盛季が入部した1443年から、榎本武揚が手を挙げ、蝦夷地を北海道と呼ぶようになった1869年までの426年間に、アイヌの武力行使が三度あった（その他小競り合いを除く）。それはコシャマインの乱、シャクシャインの乱、クリシナの乱と呼ばれているが、これは日本的呼称であり、アイヌ側からみれば、主権回復のための、正義の戦争だったといえよう。

コシャマインの乱は、アイヌが長い間住んでいるところへ、和人が勝手に乗り込んで来たことに対する背和的戦闘行為であり、シャクシャインの乱の場合は独立戦争的性格をもっているといえよう。しかもこの二つの戦いは、最も規模が大きく、組織的で、アイヌ・ウタリ（同胞）多数が同時に決起した。

それというのも松前藩の進出はもとより、鷹・砂金・魚類・林産など豊富な資源を狙う一旗組をはじめ、なかにはあぶれ者など、いわゆる〝わたり者〟が混じっており、それらから貴重な資源を乱獲されれば、アイヌの経済生活に重大な脅威を与える。そのうえ人種差別的行為に辛抱できなくなって決起した〝アイヌの主権回復戦争的性格〟さえもっている。

コシャマインの和人排除戦争

一般にコシャマインの乱と呼ばれるアイヌと和人の戦闘行為は、2回起こっている。それぞれ年号を冠して康正二年の乱（1456年）、長禄元年の乱（1457年）と呼ばれている。

コシャマインは東部の酋長と伝えられているが、その東部のどこなのか、はっきりしていない。西蝦夷地セタナの酋長でユーラップ（八雲）に居を構えていた（小説・コシャマイン記）とあるほか、余市説、千歳

DISPLAY
展示・装飾・サインー企画・製作
株式会社 マルヒラ
〒060-0823 札幌市中央区北3条西20丁目 北3条MMビル1F (011)612-5010

説などある。

ことの起こりは、新羅之記録にあるように、「乙孩与鍛治論劇刀之善悪価而鍛治取劇刀突殺乙孩依之夷狄悉蜂起」、また大内余庵の「子細やあらん。鍛治が磨けし刀もて酋長を一刀に刺し殺しぬ。この遺恨によって蝦夷人ども党を結び、ここかしこに蜂起して、凡そ五十日ほど戦闘止まらず、これがため人民多く死す」とある。

つまりアイヌの酋長が研ぎに出したマキリの値段が高いのか安いのか、研ぎ方が悪かったのか、それとも態度が悪かったのか、その理由はよく分からないのだが、つまり鍛冶屋に研ぎに出した刀のことから口論になり、和人の鍛冶屋がアイヌの客を一刀のもとに、斬り殺したことに端を発し、〝もう辛抱できん〟と怒ったアイヌたちが一斉に蜂起した。この時殺されたのは松前旧事記では乙孩（子供）とあり、東蝦夷夜話では酋長となっている。どちらが正しいのか分からない。

コシャマインはその東のアイヌの酋長であった。そこへシャモ（和人）が大きな顔をして入り込んで来て先住者たちを尻目に、あたかも自分の領土であるかのように振る舞うのに、憤懣をもつのは当然である。そのうえ言葉が通じないという悪条件が加算されているのだから、始末が悪い。こうした者たちが混在し、意志の疎通もなく、文化の相違などが決定的な戦争への途へ突入させたのである。殺されたのが酋長であれ、子供であれ、それは単なる火付け役的存在にすぎず、早晩戦争になる条件が整っていたといえよう

蜂起したアイヌたちは暴徒となり、東蝦夷地（下の国）から西蝦夷地（上の国）まで波及し、多数の和人が殺害された。当時、和人は西は厚沢部川から東は塩首岬までの間に住んでおり、東部というのは長万部という説が強い。八雲の落部説もある。これらに住んでいた和人が犠牲になったとされる。

「アイヌたちは東は胆振の国鵡川、西は後志国の余市間の夷衆悉く蜂起した。至るところで略奪、放火、惨殺した。このため和人たちは西は花沢城、東は時の大館目指し、どっとばかり散じたのである」（松前史物語）。

アイヌの反乱・武田信広―白山友正著―では「東は胆振の鵡川、西は後志の余市間のアイヌが悉く蜂起した。いたるところで略奪、放火、虐殺があり、和人は花沢城さして、東は時の要塞地である大館を目指してどっとばかり、逃げ散じた」と、松前史物語を引用して述べている。

このあとアイヌたちは一次休戦して、それぞれの冬の支度のため、それぞれのコタンに帰っている。彼らは川を上ってくるサケやマスを捕らねばならないし、冬籠もりのための準備があり、それぞれの生活を犠牲にできないのであった。つまり康正の乱はアイヌの勝利で一旦（約50日）

D.Mの取扱いは、すべてSMS札幌メールサービスにおまかせ下さい。

あらゆるニーズに迅速にお応えいたします！

■ダイレクトメールの発送処理
- 宛名筆耕、宛名印刷
- ラベリングマシンによる宛名データー貼付
- 封入、封印　●帯封掛
- 郵便料金減額作業
- 市内特別郵便の処理、各局発送
- リストカード作成
- 顧客カードの管理、保管
- その他、DM作業全般

■商品管理、梱包、発送
■サンプリング及び宅配
■リスト
■プレミアムキャンペーンの応募郵便物の整理、集計及び発送
■街頭配布

■その他、セールスプロモーションのあらゆる作業をいたします。

ダイレクトメール総合代理店
SMS株式会社 札幌メールサービス
〒065-0022 札幌市東区北22条東1丁目
☎(011)704－2111(代)
FAX(011)704－2121

も憤りをいだき、自殺したる蝦夷もありという。窮鼠猫を咬むのたとえ、恐れざるべけんや」（東游雑記・天明四年＝1784年）とあるが、それより3世紀近く古い時代の東アイヌたちは狩猟・漁労を生業としているが、戦闘力は強く、ブシ矢という毒矢（トリカブトを塗った矢）をもちいる。松前史はそれを次のように説明している。

夷人の木弓、名づけてクウという。是夷狄第一の兵器たれば、常に身にはずさずしてこれをたずさゆる。平常弓を左手ににぎり、矢を右肩に負う。各自自ら弓箭を製作し、毒薬を調合す。その製法は家伝ありて先祖より伝来せり。うんぬん（後略）とあり、トリカブトである。

幕を降ろすのである。

昭和十年に発表された鶴田知也の小説「コシャマイン記」には、コシャマインは瀬棚町の酋長として登場し、大活躍する。

「西の蝦夷は従順なり。東の蝦夷は豪強なり。拙々愚かなる様なれども、死を極めて甚心剛也といえり。あしく取り扱いなば、後には心ひがみて、害あるべしと思はる。近き頃

1450年ころ、函館の東から上ノ国に至る海岸沿いに和人が多くの館（城）を築いていた。このうち新羅之記録などにある城は（志苔、箱館、茂別、中野、脇本、穏内、覃部、大館、称保田、原口、比石、花沢館）とくに道南12館という。これら館主は1440年前後に本州から渡島したとされ、その多くは津軽安藤氏の諱の一字（季）を冠している。これは新羅之記録が、下国安藤氏の津軽敗走・夷島への渡島を1443年とし、松前氏初代武田信広を、下国宗家を継いだ安藤政季の婿と強調しているように、鎌倉時代以来、夷島代官の職にあった安藤氏の存在を強く意識していることに関係している。また、これらの館が河川や港湾を擁する所に立地していることから、この期の道南地方は津軽十三湊（とさみなと）安藤氏を介して若狭・近畿地方への夷島物産の供給基地であるとの位置付けもされている（よみがえる北の中近世―掘り出されたアイヌ文化―北海道大学）。

翌長禄元年五月十四日、勢いに乗ったコシャマインの指揮下にあるアイヌ軍は大挙して箱館城を陥れ、この城を本拠として、他の城もねらっ

営業ご案内

ご結婚内祝、お中元、ご出産内祝、ゴルフコンペ賞品、御祝、
お歳暮、セールキャンペーン用品、快気祝、芸事発表会、
訪販用品、社内の運動会、誕生祝、展示会ご来場記念品、
ごあいさつ用品、ご新築内祝、ご進学内祝、ご婚約記念、
落成記念、永年勤続、忌明志、年末あいさつ用品、
お買い上げ記念品、ご来店記念、誕生祝、ご拡売感謝

Gift Plaza ミスト Premium & World Goods 記念品の総合商社 株式会社美図濃
札幌市中央区大通東7丁目水野ビル TEL.011-231-6612 FAX011-271-1132

ていた。これに対し、蠣崎季茂の養子になった若狭国小浜に生まれた武田信広は、七重浜でこれを迎え撃ち、コシャマイン親子の首を上げるのである。この戦い（長禄の乱）を北海史談（千葉稲城）は次のように書いている。

五抱え大の七重樹（とちのき）、天を覆うて影暮らし、時人神樹と称して近づかず。信広単身その洞に潜む。相原政胤別に百余人を率いて芦萩の内に隠れ、醜夷館を空しうして、信広を追ひたる虚に乗じ、不意に箱館を襲うて奪い取らんと謀りしなり。長幹漆髯、燃ゆるが如き眼光は狂える豺狼のごとし（中略）信広、力五人を兼ね射は神を得たり。六鈞の強弓に矢をつがえ瞳をこらして、その来るを狙う。胡奢魔允（コシャマイン）矛を小脇に抱ぬえて神樹の前、百歩のところに至る。一箭ひょうと鳴って飛ぶこと雷火のごとく、避くるいとまもあらばこそ、胸を貫かれてどうと倒る。

父酋長驚きて身を転がせんとする。そのとき早くかのとき遅く、弓勢余りて、胡酋の股を挫く。父子重なり合うて倒れ、鮮血りんりとして若草を染む。信広蝦夷をつくすはただこの一挙にありとなす。太刀を振るいて踊り出づ。胡酋怒れる眼爛々たり。愛児の仇思いしらさんと、深手をおえど矛をとりて立つ様また万夫不当の勇姿。一進一退相打つこと頃刻胡酋けん足してなお屈せず。（中略）信広奮迅卑酋を斬ること二、胡酋気力衰え躓き倒れついに斬らる。時に長禄元年六月二十日。（松前家記による）

コシャマインを討った信広は、蠣崎季繁の養女を迎えて室となし、新居を天ノ川の北に築いて移り住んだ。これが州崎の館で、現在の砂館神社の付近だといわれている。

＜参考文献＞「コシャマイン記」鶴田知也（日本文学社、昭和13年）「森と湖のまつり」武田泰淳（新潮社、昭和30年）「シャクシャインが哭く」三好文夫（潮出版、昭和47年）「アイヌ民族抵抗史」新谷行（三一書房、昭和47年）

www.dioce.co.jp

企業の情報や商品告知を無料で掲載!!　企業 ←→ ユーザー　北海道の便利情報を即座にゲット!!

dioce［ディオス］は、企業とユーザーを結ぶインターネットサイトです。
道内企業の様々な情報や商品告知を**無料掲載・紹介**しています。
プロモーションの一手段としてご活用ください。

ディオス・コールセンター開設
道産市場の掲載について・イベント告知について
ディオスについて・無料勉強会について
※北海道ならどこでも無料勉強会に参ります。予約優先。
0120-823-556

ディオス・インターネット・ラーニングセンター
・シニア向けラーニングセンター　気軽にインターネットを初めパソコンを修得。
・レンタルスペース　インターネットがやり放題。勉強も、資料集めもここでOK!!
・パソコンレスキュー　いつでも、困ったら即電話！即解決！
011-778-9980

札幌大同印刷株式会社
本社・製造部　〒004-0003 札幌市厚別区厚別東3条2丁目　TEL.011-897-9711　FAX.897-9715
営業本部　〒062-0905 札幌市豊平区豊平5条5丁目　TEL.011-823-6115　FAX.823-8049
企画室dio　〒064-0807 札幌市中央区南7条西1丁目（リバーサイド第2弘安ビル4F）　TEL.011-562-1270　FAX.562-1280

Mr.ターノフの ちょっと気になる・・・

●連載／第49回 W杯、いかに終えたか

「ファンビレッジ」でサポーターの若者たち
（６月７日・大通り公園６丁目）

大通り公園でくつろぐサポーターたち

６月７日の朝、いつものようにCNNテレビを見ながら朝食をとっていたら、突然大通公園（！）からのレポートが始まりました。CNNは世界の大都市を映し出すネットを持っていますが、今まで札幌が写ったのを見たことはありませんでした。しかし、画面の中でレポーターの背後に写っていたのは紛れもなく見馴れたあの大通公園の噴水でした。

前日、私はその大通公園でW杯ファンビレッジに集まっている人々を眺めていました。酔っぱらった外国人が騒ぐのではと心配されていましたが、みんな行儀が良く、トラブルの片鱗さえ感じさせませんでした。にもかかわらず、信じられない数の警察官が公園内を巡回していて、まるで札幌が戦闘地域にでもなったかのような光景でした。

サッポロを世界に知らせる絶好の機会でしたのにW杯を迷惑なこととととらえた人が多かったようです。開幕前から、W杯期間中は海外からの友人と連れだって、例えばススキノへ飲みに行っても店に入れてもらえないだろうという話が囁かれ、実際、"外国人お断り"の張り紙が貼られていた店も少なくなかったようです。「日本語が話せない為、云々」と書かれていたといいますが、それが入店拒否の理由というのはおかしく、醜い差別行為であったと思います。私自身はニュージャージー州からW杯見物にきた友人を、長年のつきあいのあるマスターが経営しているススキノの小さなレストランにつれて行きましたが、友人は、家庭的で気さくな店の雰囲気と料理を楽しみ、マスターや相客と一緒に写真を写したりと、その夜はちょっと国際的な、いつもの札幌、北海道の雰囲気になりました。

残念ながら、サッポロは、今回のW杯開催でなぜかネガティブな面をさらけ出して、世界中のメディアの批判を浴びました。イギリス紙「ガーディアン」は、「サッポロ、ファンに冷たい歓迎」と大見出しを打ち、次のように続けていました。「日本と韓国のほかの開催地では市民や企業が訪れるファンを歓迎する旗や看板を立てているのに、この日本の北の島では何らの歓迎のしるしも見られない。W杯を地元を売り込む機会とは捉えず、むしろ厄介ものと見なしている」と。また、８カ月の幼児をつれたカナダの女性が幼児のチケットを持っていないという理由でドームに入れなかった話が何日間もインターネット上で流れていました。こうしたことが札幌で起きたことを恥ずかしく思います。

そんな中で、すてきな人たちに出会いました。大通公園のベンチで隣り合わせたお年寄りが、私に「ようこそ」と日本語で、次にためらいがちに英語で「Welcome（ようこそ）」と言ってくれたのです。言うか言うまいか迷ったあげく、思い切って声をかけてくれたのでしょう。彼は「W杯を見に来たのか？イギリスのサポーターか？」と私に聞きましたので、「いえ実はアメリカ人で、もうずっと札幌に住んでいます」と答えたところ、その人は謝りました。私は、謝る必要などありません、こうして声をかけていただいて嬉しかった、と話しました。

もう一人は女性で、狸小路の近くの雑貨屋で買い物をしていた時、すっと近づいて来ました。私に笑顔を向けて、きれいな英語で「イングランドとアルゼンチンは良い試合でしたね」と。「はい。あなたもご覧になったのですか」という私に「えぇ、もちろんです」。彼女に「ありがとう」と言って、自分が長いこと札幌に住んでいるアメリカ人だなんて野暮なことはもう言いませんでした。もう一度、話しかけてくれたお礼を言いたいと思って姿を探しましたがもういませんでした。

W杯３試合があった札幌の１週間を通じて１万人以上の外国人がきたそうですが、深刻な事態は一度もありませんでした。おかしかったのは、海外から来たフーリガンとでも思わせたかったのか日本語訛の英語で「金を出せ」と店先で強盗をしようとした日本人がいたことです。店員によれば、この男は、英語の語順を取り違えて「Give Money Me！（金出せ、私に）」と叫んだとか。あとはイギリス人ファンがサッカーのユニフォームを盗んで逃げようとしたことと、コンビニ強盗が１件でしょうか。試合終了後にけんか沙汰も１件あったそうですが、それは酔っぱらった日本のファン同士だったと報道されていました。

ところで、これまで見るスポーツとしてはサッカーは最も退屈だと思っていた私が、毎日テレビの前に座り込んで、一日２試合、それも初めから終わりまでしっかり楽しんでいたのです。サッカーファンに鞍替えしてしまったのか？いぇ、そうは思いません。私が楽しんだのはドラマです。「イングランド対アルゼンチン」、「日本対ロシア」、いずれの試合もまさにドラマでした。今回、日本代表を応援する自分に日本人の心があることを強く意識しました。６月10日、月曜日の朝はひどく疲れていました。その原因は、前夜、対ロシア戦で日本代表を応援し、叫び続けていたためでした。

札幌にあたっていたスポットライトが消え、いつもの生活に戻りました。悪者はいわれていた海外からのサポーターではなく、チケット販売に不手際を見せたFIFA、おおっぴらに外国人を閉め出した飲食店、必要以上にフーリガンの不安を煽り海外からの観戦客を大歓迎する機会を札幌市民から奪ってしまったメディアなどだと思います。今回W杯で札幌にやって来た外国人の一人でも多くが、知人のマスターや大通公園に居たお年寄り、明るい声で笑顔を向けてくれた女性のようなすてきな市民に会えたことを願っています。

こんにちは
イランカラプテ

自立へのチャレンジを共有

道都大学札幌キャンパス教養部教授

飯部 紀昭

交流会でふれあいの日々を語るカン・ジェスクさん（右端）

日韓共催のサッカー・ワールドカップ大会まで１カ月を切ってから、テレビも新聞も前触れがにぎやかになってきた（今号刊行時にはチャンピオン国は決定しているけど）。そんな折り、日韓の市民レベルで、ささやかながら感動的なふれあいがあった。

韓国から障害者13人と介助者を含む27人が来札、６日間にわたって札幌の障害者団体「いちご会」のメンバーと交流したのである。主な舞台は、「いちご会」が25年かけて行政や協力者に訴え、一昨年４月、手稲区宮の沢に建設した社会福祉法人「アンビシャス」であった。ホームで生活する20人、通所の20人、それにデイサービスに訪れる障害者たちにとって、いや、むしろ初めての長旅を克服してやってきた韓国の障害者たちにとって、数日の体験は思い出を超えたものとなった。

「アンビシャス」の目指すところは自立へのチャレンジ。工房で陶器づくりや木工に励み、パソコンを習う。何より、障害を受け入れながら、したいことをする。マチへ出かけ、買い物や映画を楽しみ、旅行をし、スポーツにも挑戦する。絵やアート作品を施設内のギャラリーに展示する。もちろん介助のヘルプを受けながらだが、洗顔、トイレ、入浴、料理、着替えなどの日常生活にも真剣に取り組む。介助は「すみません」と云ってしてもらうボランティアではなく、専門のケアスタッフやカウンセラーがいる。代表の小山内美智子さんは、車イスで何度もスウェーデンを訪れ、大学の教壇にも立つ。北欧や米国の自立した障害者から勇気とエネルギーをもらった小山内さんが、今度はアジアの仲間たちにお返しをする番だ、と昨年、韓国で講演、今回は日本に招いた。

韓国側のコーディネーターは、私とも縁浅からぬカン・ジェスクさんであった。カンさんは日韓の歴史問題や韓国内の米軍基地、ベトナム戦争で犯した韓国軍の罪過、北朝鮮への人道支援などに取り組む市民団体「平和・連帯」の代表でもあるが、私にとっては心優しい通訳さんというべき人である。

カンさんは昨年秋にも、「アンビシャス」で講演して小山内さんと友情を深めた。韓国の障害者を取り巻く環境は厳しい。施設自体が少なく、多くの障害者は家に閉じこもり、親たちの負担も大きい。親たちは子どもを世間の目にさらすことを恐れている。「だから、アンビシャスやいちご会に学ぶことは大切なのです。自立生活への目を開いてくれ、希望を与えてくれるのです」とカンさんは云う。

滞在中、日韓の障害者たちは、施設内のカラオケルームで歌い、料理や入浴を共にし、生け花や茶道を試み、車イス・ダンスを楽しんだ。「何もかもが感動的でした。この経験は韓国の障害者自立運動に結びつくと思います」と、最後の夜の交流会で、カンさんは滞在を支えてくれた人々に語った。

カンさんらは10月中旬、札幌で開かれるDPI（障害者インターナショナル）の世界大会に再訪する。世界の2000人の参加者にまじって、日韓の障害者たちの瞳は一段と輝くことだろう。

北の花

ウイキョウ

魚のハーブとして重宝される

戦後、体調をくるわせ実家にいたころ、欲しければ掘って行ったらと云うので、隣家からウイキョウの大きな株を運び、植えたことがある。戦前、富良野は道内の薬草栽培の先進地で、そのウイキョウもそこから流れ出た片割れ。これがウイキョウとの付き合いの始めだった。

その後、ギリシア神話でプロメテウスが火をウイキョウの茎の中に隠して持ち出し、人々に大きな恩恵をもたらしたこと、マラソン競技の語源の古戦場・マラトンはウイキョウの一大群落地で、ウイキョウそのものの名だったことを知った。

一方、昭和四十九年、日ソ農業技術交流で訪ソ、国営農場視察後の意見交換を兼ねた昼食会で、肉料理の後の意味からか、ウイキョウが出された。その量の多さ、またロシア人の食べ方のすさまじさに驚いた。まあ、私の実生活でのウイキョウとのかかわりは、この程度のものだった。

その出目はギリシア神話から分かる通り、地中海沿岸から中近東地方の原産。これら地域では早くから利用され、最も古い栽培作物ともみられている。薬になり、食用になり、万能の働きをするからだった。甘い芳香は、草体に三〜五%含まれるアネトールという精油の働きによるもの。この成分は特に種子に多いとされ、これから製したウイキョウ油は古来、サラダやケーキ、チーズ、リキュールなど食品類の着香料に用いられてきた。

薬としては強壮、健胃、痰切り、駆風（腹のガス抜き）に使用、殊に強壮剤としては古代ローマで戦闘士がこれを愛用して元気もりもりになり、闘牛士も常用、牛を倒した者は力の象徴としてウイキョウで作った冠で頭を飾ることが許されたとされる。

こうしたこともあって次々と利用を広げ、シルクロードを通り、五世紀には中国に到達、日本には九世紀に姿を見せていたという。九百三十年代に出来た、我が国最初の辞書・倭名類聚抄には懐香、和名久礼乃於母と記載され、国内各地に広がった。

なかでも調理用に利用されたのが、この拡大に大きな役割を果たしてきた。ギリシアでは古くから金曜日の夜、これで魚を煮て会食する習慣があったという、中国では魚の調理に不可欠の食材とされた。これで煮ると、新鮮さを失った魚も忽ちその本来の食味を取り戻すとされている。魚から出る肉汁の脂肪分を分解し、不用の臭気、その他を消すためらしい。この結果、ウイキョウは魚のハーブともいわれ、重宝されてきた。

話変わって、ウイキョウは人との付き合いが長いため、迷信に、生活に、多くの民俗を生み、育て、残してきた。ヨーロッパにはウイキョウを見て、採らない者は悪魔だとの諺があるほど霊験あらたかな植物。そうかと思うと、この草をいぶすと妖怪を呼び寄せ、この種を播く者は悲しみの種を播くようなものといい、中世の社会では魔法使いのお気に入りの草だったとされる。

また欧米の教会では、つい最近まで断食の際に必ずこの種子を口にし、空腹のひもじさをまぎらわしたとされる。

ところで、ウイキョウの語は純然たる中国語。漢字では肉類の味を回復するハーブのためか、草冠に回復の回を書き、ウイキョウと読んでいる。茴をウイと発音するのは唐音での読み方で、これはこの植物が唐時代に伝来したことを示すものとされる。漢語では懐香と書き、正確にはクヮイキョウと読むそうだ。

セリ科ウイキョウ属の多年草で、茎は二十本ほど株立ちし、草丈二メートルほどの勇壮な姿になる。小葉はアスパラガスの葉に似て糸状、八〜九月、枝先にセリ科特有の複散形花をつけ、小さな薄黄の五弁花を多数つける。

学名はフォエニクルム・ウルガーレ、英語ではフェネル、ロシア語ではフェンヘリという。

「原色牧野植物大図鑑」から

北方圏センター・法人会員紹介

㉙

ホクレン農業協同組合連合会

「農と食」の総合生活産業を目指し

政府は、当面のわが国の食料自給率を現在の四〇％から四五％に引き上げる計画だ。しかし、北海道だけでみると、食料自給率は約一八〇％であり、いうまでもなく、わが国最大の食料基地である。ホクレン農業協同組合連合会（以下ホクレン）が扱う農畜産物の販売高は全国の一〇％以上を占め、関連物資の購入を含めた扱い高は一兆三千億円を超える。海外農産物の氾濫や消費者志向の変化に対応しながら、ホクレンは、〝農と食〟を軸にした総合生活産業を目指す。

ホクレンが石狩港新港西に建設していた国内最大の精米工場ホクレンパールライス工場が完成して、六月一日から操業を始めた。年間一三万五〇〇〇トンの玄米を処理することができる、原料搬入から商品配送までの全行程をコンピューターでコントロールする、最新鋭の工場だ。

ホクレンは、平成一二年十一月、これまでの主力工場であったパールライス砂川工場に、国際品質保証規格「ＩＳＯ９００２」を取得している。「きらら３９７」「ほしのゆめ」など、道産米の品質向上が全国で評価されつつあるなかで、このところホクレンは、販売促進、精米加工分野など道産米対策の強化が際立っている。

◇　◇　◇

北海道農業は、昭和四十年代からの減反政策や海外農産物の輸入などの外圧にさらされながらも、わが国最大の食料基地として業容を高めてきた。

平成十二年度の数字で、総農家数が六万九八四一戸で全国の二・二％ながら、耕地面積は一一八万五〇〇〇ヘクタールで全国の約四分の一。一戸当たりの経営耕地面積は全国平均の一三・三倍。

農畜産物の生産は、米、小麦、大豆、ばれいしょ、ビート、牛乳のほか、各種野菜で全国一の生産量を誇り、農業粗生産額も昭和五九年から十七年間連続一兆円を超えている。

ホクレンは、全道の地域農協、専門農協で構成する生産者団体で、生産物の販売事業、関連物資の購買事業を中心にした経済活動を行っている。都道府県レベルの農協経済連としては全国一のスケールを持つ。販売、購買を含む扱い高は、平成十三年度で一兆三八六四億円で、これに次ぐ長野、鹿児島の三倍以上、全国平均の七倍以上というガリバー的存在だ。

昭和五二年四月からは、当時の太田寛一会長が全農会長に就任するなど、一貫してわが国の農協活動をリードしてきた。

しかし、扱い高の推移は、平成一〇年度をピークに頭打ちが続く。これは、この二、三年、米価の低迷や輸入農産物の影響による野菜関係の低落傾向が響いている。

ホクレンの事業は最近、社会情勢、消費者志向の変化に対応したグローバル化、細分化の一方で、新規事業など関連会社など駆使して、事業のすそ野を広げているのが特徴だ。

企業概要

所 在 地　札幌市中央区北４条西１丁目３番地
創　　立　大正８年４月
代 表 者　矢野征男代表理事会長
出 資 金　214億円
職 員 数　2,049人
事務所・施設　78カ所
売 上 高　約１兆4,000億円
事業内容　農畜産物の販売および関連事業

◎米穀事業本部

北海道米は生産量が全国一。一戸当たりの作付け面積も約五ヘクタールで全国平均の約五倍。冷涼な気候を生かした低農薬クリーン栽培と、大規模で生産性の高い栽培体系の優位性で、「安心」「美味」「低価格」な米の安定供給がホクレンのキャッチフレーズ。特に、安定供給に成果を発揮するのが広域産地の形成。主要産地に大型ライスターミナルを配置し、均質な米の大ロット供給に役立っている。

また、米の食味向上を追求して、ホクレンは、平成九年度産米から、「高品質米仕分集荷・販売」に取り組んでいる。米の整粒歩合、タンパク含有率などに、北海道独自の基準を設け、府県のブランド米に匹敵する高品質米の実現を目指したものだ。この取り組みは年々効果を上げ、道民が府県米でなく、北海道米を食べる割合が上昇している。

◎農産事業本部

農産物の安全性を生産段階から管理する「クリーンＤＯ」事業は、平成一一年度から取り組んだ事業。農薬使用回数をその地域の平均より二分の一にすることを目安に、ホクレンが資格認定し、生産方法を指導・管理する。スーパー、飲食店チェーンなど顧客の注文を受けて、年度初めに作付け面積などを決める。

平成一四年度は野菜などを中心に、取扱高を前年度より約一割増やし、七万トン強を確保する。雪印グループの食中毒や牛肉偽装事件に端を発した道産農産物への不信感を払しょくする狙いもある。

その一方で、消費者志向を産地、生産者に働きかける取り組みを強めながら、コープこうべと提携して、安全な食物を提供する「フードプラン事業」も定着してきた。

また、外食や調理食品利用が増えた消費者志向にシフトして、食品加工分野への進出が目立つ。石狩野菜センターの、貯蔵、選別、パッケージ、カットの一貫加工を行う総合システム、山梨県でのばれいしょサラダの生産、三笠市での冷凍ピラフ生産などは、付加価値を高めた道産農産物の需要拡大が狙いだ。

◎酪農畜産事業本部

販売取扱高の四〇％以上を占める酪農畜産部門は、米、野菜と並ぶ最重点分野。ホクレンは、指定生乳生産者団体として、道内で生産される生乳を受託し、各乳業会社に販売する。酪農家とともに、生菌数を一ミリリットル当たり一万以下に減らす努力を続け、現在では北海道の生乳のクリーンさは世界でもトップレベルになった。近年府県への移出が増えたため、生乳をフレッシュなまま届ける輸送体制を強化している。不祥事で経営にダメージを受けた雪印乳業への支援も始めた。

全国から注目される「産地型和牛中心市場」の十勝枝肉市場、道産高質牛「ＤＯ ＢＥＥＦ」、高質ＳＰＦ豚の普及事業も成果をあげている。

◇　◇　◇

ホクレンは、扱う農産物の七〇％を道外地域で販売している。その最前線で営業活動を展開しているのが、東京、仙台、名古屋、大阪、福岡と全国にシフトした道外ネットワークで、その司令塔を販売統括本部が担う。

特に、一層の道産品道外売り込み強化のため、平成一二年度から同本部の組織、機能が拡充された。大消費地のニーズを生産者にじん速にフィードバックさせる機能を強めながら、一方、業態ニーズに合わせた産地紹介にも力を入れる。

また、国際見本市への参加、香港やシンガポールなど東南アジアでの見本市、ＮＨＫなど電波媒体を使っ

た食のフエア企画、全国デパートとの共催イベントなど、道産品のＰＲを多彩なイベントで展開、さらに、平成一二年からは道産品を紹介するホームページも開設した。

地元札幌では、秋の味覚を消費者に届ける恒例のホクレン大収穫祭が今年で三一回目を迎える。

生産物の販売、関連物資の購買という本体事業のほかに、ホクレンが展開している関連事業は多岐にわたる。

農協が併設するＡコープ事業をはじめ、米、麦、青果物卸、農機具、飼料、輸送、貿易、情報サービス、食品加工など、周辺事業を担う約四〇社が協同会社グループを形成する。

このなかには、ホクレンショップを展開する㈱ホクレン商事、農家向け肥料を扱うホクレン肥料㈱など、地場業種ではトップクラスの企業もあり、また、東京以北最大のフロアを持つホクレンホームセンターや小樽の「ふうど館」、札幌の「北の菜路季・大地」などのレストラン事業、消費者に直結した事業も展開する。協同会社グループ全体の年間売り上げは、平成一〇年度で三〇〇〇億円を超えた。

平成一三年三月、ホクレンと北海道漁業協同組合連合会（ぎょれん）が協定を結んだ事業提携も順調に推移している。従来も両者は年間一億円ほどの取引があったが、この関係強化によって、生協、量販店などお互いが道外に持つ販売チャンネルを活用して販路拡大を図るほか、Ａコープの約三〇〇店、ぎょれんの店舗約三〇店でも〝地産地消〟の拡大に努めていく。

提携第一弾として、共同事業の宅配頒布会「うまいもの倶楽部」を昨年六月からスタートさせたほか、共同開発で「鮭ポテト」、「ホタテコロッケ」などを新商品化した。

ホクレンが道外に移出している農畜産物は年間七〇〇〇億円を超える。その安定した物流を目指したのが、平成五年に導入した「ほくれん丸」である。

釧路港と茨城県・日立港を結ぶ海上ルートに、「ほくれん丸」、「第二ほくれん丸」を就航させ、生乳をはじめ、農畜産物を載せて両港を二〇時間で結ぶ。特に、平成九年からの二船体制は、懸案だったデーリー（毎日）運行を実現して、安定した供給実績が本州ユーザーから高い評価を受けている。

収穫する農業から創造する農業を目指して、土づくりから商品開発まで、ホクレンが誇る研究開発機能を集約しているのが農業総合研究所だ。

農業団体の都道府県レベルでは日本一の組織と内容を持つ。昭和一〇年、組織の前身北海道信用購買販売組合連合会の野付牛薄荷工場内の研究室として発足したのが最初だ。

研究所（札幌市中央区北六東七）は食品と作物生産の二研究室と研究企画課があり、長沼と恵庭に農場がある。

最近では、野菜王国北海道を支えるための野菜生産の省力機械化、食料品の品質向上のための安全性、品質評価、バイオテクノロジーによる育種素材作出などの研究に成果が目立ち、注目されている。

◇　◇　◇

ホクレンの沿革は、大正八年四月、小樽市に設立された「北聯」が購買事業を始めたのが最初。同一一年には事業所を北海道庁内に移し、道庁管理のもとに業務を再開。昭和一〇年代後半には北農設立、北購連、北販連の設立、同二九年には北海道経済農業組合連合会設立などの組織変遷を経て、同三四年、現在のホクレン農業協同組合連合会に組織再編、改称された。

同四〇年代からは東京事務所をはじめ、道外の拠点を拡大して全国的な販売事業を本格化。また、事業の拡大に伴い、事業本部制を敷いて、施設、機構を拡充。その後も多様な事業に参入、関連会社、関連事業の展開を通じて業容を拡大してきた。

昭和五五年にはホクレンビル（札幌市中央区北四西一）を新築、平成五年に東京支店ビルを新設した。

近年ホクレンは、周辺事業の拡大を含め、〝農と食〟を中軸にした総合生活産業を目指しているように見える。その依って立つ立場は生産者だが、ターゲットは消費者である。

このため、地域、住民に密着した還元事業にも力を入れている。札幌市民に毎年大好評のホクレン大収穫祭はすでに定着したが、ほかに、ホクレンクラシックスペシャルと銘打った札響演奏会、ホクレン合唱団の市民演奏会、各種スポーツ、文化事業への共催協力、さらには、優秀農業者や農業の応援団を顕彰する「ホクレン夢大賞」事業など数多い。また、優秀マラソン選手を輩出した伝統の女子陸上部の活躍は有名だ。

INTERVIEW

「安全・安心」の商品提供へ一層努力

ホクレン会長

矢野 征男氏

昭和54年５月から芽室農協組合長、平成11年６月からホクレン会長。現在、全農理事、㈶日本豆類基金協会理事長ほか道内の農業関係役職多数。日本農業賞、黄綬褒賞受賞。川西農高卒業。芽室町出身。64歳。

北海道農業は、全国シェアで農家戸数こそ二％ほどですが、農業粗生産高は十一％を超えるわが国最大の食料基地です。

しかし、昨年の北海道農業は、思いもよらぬＢＳＥの発生で、大きな打撃を受けました。消費者の皆様方にも、不安を与える結果となりましたが、食肉の流通にあたっては、ＢＳＥの検査が実施されており、安全な牛肉だけが市場や店頭に出される体制になっております。

ホクレンとしては、信頼回復のために、全組織を上げて取り組み、全国の消費者の皆様方に、「安全・安心」の商品を提供して、クリーンな北海道の農畜産物のイメージアップを図るべく努力を続けていく決意です。

ホクレンの取扱高は、販売、購買を含め順調に伸びてきたのですが、ここ二、三年は米をはじめとする農畜産物の価格の低迷、輸入農畜産物の影響により、一兆四千億円程度で頭打ちになっています。

生乳の生産量は、ここ一、二年は前年度実績を維持するのがやっとの状況であり、稲作地帯も転作の小麦、大豆などが米に代わるような生産力になっていません。畑作地帯では根菜類が減少傾向で、麦が増えているなど、北海道全体の生産基盤がやや弱ってきたように思います。

さきごろ、食料自給率を十年間で四五％にするために、国内生産を高めていくという基本方針が出ました。まだ一年ちょっとですから具体的な政策はこれからでしょうが、現実には、米がたまたま数年前から豊作が続いて過剰になり、米価が下がりました。そこへ民間流通を導入したということで、価格がさらにダウンし、稲作農家が厳しい状況にあります。一方で最近では、中国や東南アジアから、野菜など安い農産物がどんどん入ってきました。新農業基本法で、自給率向上という目標ができて、十年先の北海道独自の生産目標、努力目標を立てていますが、スタートしたところでちょっとつまづいているというのが現実です。

北海道の農業粗生産は一兆一千億円といわれ、それに付加価値を高める加工分野などを含めるとかなりの金額になります。ホクレンは、その北海道の農業生産の七割以上を道外で販売し、消費していただいております。海をわたって、文字通り青森から沖縄まで、全国に北海道の農畜産物を売っています。

さきごろ、沖縄の米卸会社である沖縄食糧さんが、北海道の「ほしのゆめ」を一〇〇％使用して、オリジナル商品「テイスティ・ホワイト守礼」をつくったところ、大変な人気を呼んでいるということで、喜んでおります。

そういう嬉しい話もありますが、ただ、いまは大変な不景気でデフレ傾向も続き、消費が伸びません。さらにもうひとつ、私どもが気にしているのは、食品加工の空洞化が起きていまして、どんどん海外に進出して、安い土地を使い、安い労働力、安い資材を使って、安い製品を輸入しています。

ホクレンとしてもいままでお付き合いいただいてきた野菜専門の市場とか問屋、メーカーとの取引を強化するとともに直接ユーザーにも提案し、努力をしなければならないと思っております。

加えて昨年からは、ぎょれんさんとも提携関係を結ばせてもらいました。北海道の農業と漁業が手を組んで、それぞれの持つ顧客や全国の消費者に向けて、相互のブランド品を協同で販売することにより、北海道のイメージアップと道産品の消費拡大を図ろうというのが狙いです。

今後ますます海外との競合、ほかの産地との競合が厳しくなってきますから、場合によっては差別化商品なども、ニーズに応じて生産していかなければならないでしょう。また、北海道の農畜産物はなんといってもクリーンがセールスポイントですから、今後も減農薬栽培や国産粗飼料確保に向けた取り組みなどで、安全、安心志向に対応した生産、販売を拡大していくつもりです。

「Hoppoken」誌創刊30周年記念 暑中御見舞い申し上げます

学校法人浅井学園
理事長・学長
浅井幹夫
〒069-8511 江別市文京台23番地
TEL(011)386-8011
FAX(011)387-1542

EC英会話
株式会社 EC
代表取締役社長
市川唯行
本部 札幌市中央区南一条西五丁目 プレジデントビル3F
オフィス 東京・長野

株式会社 小川組
代表取締役
小川為之
北見市幸町六丁目五番七号

株式会社 山二工業
代表取締役会長
川岸温
古宇郡泊村大字茅沼村字南坂ノ上5番地6

社団法人北海道ハイヤー協会
会長
安斎允
札幌市中央区南八条西十五丁目

学校法人 札幌大学
理事長 伊藤義郎
札幌大学
札幌大学女子短期大学部
学長 山口昌男

NESSA・北欧社会研究協会
会長
尾谷正孝
〒002-8055 札幌市北区篠路町福移一四七-三
あいのさとアクティビティセンター内
TEL〇二-七九二-四二六四

財団法人 北海道青年会館
理事長
河野順吉
〒060-0806 札幌市北区北六条西六丁目三ノ一
TEL(〇一一)七二六-四二三五
FAX(〇一一)七二六-四二三六

社団法人 北海道開発技術センター
会長
五十嵐日出夫

株式会社 伊藤組
社長
伊藤義郎
札幌市

日本労働組合総連合会
北海道連合会
会長
笠井正行
〒060-0004 札幌市中央区北四条西十二丁目
ほくろうビル

北海道中央バス株式会社
取締役会長
菊池正平
小樽市色内一丁目八番六号

丸駒建設株式会社
取締役社長
生駒武
旭川市四条西五丁目

三陽印刷株式会社
代表取締役社長
岩田守二
札幌市西区西町北十五丁目
電話 〇一一-六六一-二三一一

ハーモニックカンパニー
HOKUSHIN
もっと技術を語りたい
北辰土建株式会社
代表取締役専務
鴨下公一
〒090-0030
北海道北見市北10条東4丁目1番地
TEL(0157)24-8624(代)
FAX(0157)61-2097
E-MAIL:hokushin@cocoa.ocn.ne.jp

未来に輝く田園文化福祉都市
栗沢町
空知郡栗沢町東本町二十一番地
http://www.dosanko.co.jp/kurisawa/
E-mail kurisawa@dosanko.co.jp

「Hoppoken」誌創刊30周年記念 暑中御見舞い申し上げます

株式会社 東急コミュニティー
取締役社長
黒川康三
東京都世田谷区用賀四丁目十番一号
世田谷ビジネススクエアータワー

旭プリント株式会社
代表取締役
佐藤浩
札幌市西区発寒一条四丁目
電話(〇一一)六六六-四〇四〇

丸彦渡辺建設株式会社
代表取締役社長
庄司元信
〒〇六二-八六一七
札幌市豊平区豊平六条六丁目五番八号
電話(〇一一)八一一-八二二一
FAX(〇一一)八四一-〇三四三
URL:http/www.marihiko.co.jp/

財団法人 スウェーデン交流センター
理事長
手取貞夫
〒061-3777 石狩郡当別町スウェーデンヒルズ・ビレッジ二丁目三番一
電話(〇一三三)六-二三六〇

毎日新聞社
代表取締役社長
斎藤明
取締役北海道支社長
大西康文
札幌市中央区北四条西六丁目一

株式会社 道南土木
代表取締役
佐藤義春
桧山郡江差町字東山六二五番地

株式会社須田製版
代表取締役社長
須田幸男
本社 札幌市西区二十四軒二条六丁目
TEL 〇一一-六二一-〇二七五

社団法人 北海道治山協会
会長
寺島光一郎
札幌市中央区北四条西五丁目

株式会社 電通北海道
代表取締役社長
齋藤光夫
札幌市中央区大通西五丁目

山藤印刷株式会社
代表取締役社長
山藤敬一
札幌市西区宮の沢一条四丁目十六-一

北海道日興通信株式会社
代表取締役社長
間猛
札幌市中央区大通東七丁目
十二番地三十三

株式会社 パブリックセンター
代表取締役
戸沼礼二
本社 札幌市中央区北一条東一丁目
明治生命札幌ビル

道都大学(紋別キャンパス)
社会福祉学部
道都大学(札幌キャンパス)
美術学部
経営学部
学校法人 北海道櫻井産業学園
理事長 総長 **櫻井淳**
〒061-1196 北広島市中の沢
☎(011)372-3111

鹿追町
〒081-0292
河東郡鹿追町東町1丁目
15番地
☎01566-6-2311

北海道フィンランド協会
会長
武井正直
札幌市中央区北二条西三丁目
札幌第一ビル内

社団法人 北海道舗装事業協会
会長
中山健三
札幌市中央区南二条西五丁目六番地
メゾン本府四階
電話(〇一一)二二二-一九二一

「Hoppoken」誌創刊30周年記念 暑中御見舞い申し上げます

萩原建設工業株式会社
取締役社長 萩原一男
本社 帯広市東七条南八丁目二
電話(〇一五五)二四一三〇三〇番
FAX(〇一五五)二二一〇五二二番

北海道東海大学
国際文化学科
―日本初、日本唯一―
北方圏文化学科
学長 光澤舜明
www.htokai.com/hoppou/
☎011-571-5111

東亜道路工業株式会社
北海道支社
取締役支社長 宮下正之
TOA
ISO 9002 認証登録
札幌市中央区南一条西十二丁目新永ビル
電話(〇一一)二八一一六八一一
FAX(〇一一)二八一一四六〇三

学校法人 北海学園
理事長 森本正夫
〒062-8605 札幌市豊平区旭町四-一-四〇号
TEL〇一一-八四一-一一六一

スウェーデンハウス株式会社
代表取締役社長 羽山定克
札幌市中央区南十九条西九丁目二番二十八号
ニューロイアルビル二階
TEL〇一一-五一三-一八八一

幌村建設株式会社
代表取締役 幌村春雄
専務取締役 幌村司
本社 三石郡三石町字蓬栄126
電話(01463)3-2031
札幌支店 札幌市清田区清田7条3丁目24-5
電話011-886-4275

日興美装工業株式会社
代表取締役 宮嶋政幸
BK
本社 〒〇〇一-〇〇一九
札幌市北区北十九条西四丁目
日興美装ビル
電話代表(〇一一)七二六-八一六一番

株式会社ドーコン
代表取締役社長 柳川捷夫
札幌市厚別区厚別中央一条五丁目四番一号

株式会社 北海道新聞社
代表取締役社長 東功
札幌市中央区大通西三丁目六

北海道青年団体協議会
会長 本田徹
〒060-0806 札幌市北区北六条西六丁目
道青会館内
電話(〇一一)七四六-二一一八
FAX(〇一一)七四六-二一一九
Eメール doseikyo@saturn.plala.or.jp

社会福祉法人 札幌協働福祉会
理事長 森克之
札幌市厚別区もみじ台西六丁目
一番三号

株式会社 遊佐組
代表取締役 遊佐隆
本社 中川郡池田町字西一条一丁目

北海道ノルウェー協会
札幌市中央区北十二条西二十丁目
高橋水産株式会社内

技術と信頼で明るい未来を創造する
宮坂建設工業株式会社
代表取締役社長 宮坂寿文
本社 〒080-0014 帯広市西四条南八丁目三番地
TEL〇一五五-三二-九一五一

(社)北方圏センター
会長 泉誠二
副会長 斎藤明
佐々木隆人
武井正直
中田和子
長沼憲彦
東功
藤田恒郎
南山英雄
副会長兼専務理事 町田真英
常務理事 曽根勇治

そのうちロシアへ行く君へ…

ナカムラ ジュンコ

※！あくまでウワサです!!

創刊30周年記念企画

「海外レポート」寄稿者によるインターネット会議

「北方圏」時代からの長寿コラム、「海外レポート」の寄稿者にインターネット上で一同に会していただき、日頃の執筆の苦労話やご意見を語っていただいた。（まとめ・文責　出版部　能村優子）

出版部　みなさん、こんにちは。毎号お世話になり、感謝しています。このたび「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」誌創刊30周年記念号の企画の一つとして、「インターネット会議」を考えました。実は、「海外レポート」は以前から、人気のあるページのひとつでもあり、長期にわたって海の向こうから毎回寄稿してくださっている皆さんから、テーマの選定や取材、執筆に当たってのご苦心、小誌への思い、要望、意見等をお聞かせ願いたいと思ったのです。また、北方圏交流、国際協力を推進するうえで「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」誌を役立たせていくにはどうすれば良いかなど、ご提言、アイデア等々、お話していただければと思います。

◎寄稿のきっかけは？

出版部　あらためてバックナンバーを紐解いてみますと、第23号（１９７８年春号）に4名の方々による「北方圏各地だより」が初登場しています。そのお一人が「海外からのたより」の時代を経て、現在の「海外レポート」まで寄稿を続けて下さっているカナダ・サスカツーン市にお住まいの高谷さんです。ゆうに20年を超す長期にわたってお書き下さっているわけですが、寄稿のきっかけはどういうことだったのですか。

高谷　そうですね、移民として再度カナダに渡ったのが１９７６年ですから、そのくらいになります。北方圏センターが北方圏調査会といっていた頃で、先年亡くなった伊藤隆一さん（北海道教育大学名誉教授、北海道フィンランド協会前理事長）の紹介で、毎日新聞北海道支社の故宮嶋勲さんから依頼を受けて寄稿したのが最初でした。はじめは主人が頼まれたのですが、結局私が書くことになりました。

出版部　みなさんは必ずしも北海道のご出身というわけではなく、いろいろな経緯で寄稿をお願いするようになったと聞いています。母国の一番北の端の北海道の一出版物に長期にわたって寄稿して下さっていることの感想などをちょっと聞かせて下さい。黒澤さんはいかがですか。

黒澤　わたしが北方圏に掲載させていただく機会となったのは、ラトビアと草の根の文化交流を深めている北海道・東川町のラトビア交流ボランティアの会の方から、ここに投稿してみてはどうかと勧められたことが始まりでした。93年当時、このような小さな埋もれたような国でなんとなく自分の居場所に不安を感じていたころでしたので、それは嬉しく思いました。それ以来、読んでいるよ、と時折言われることがあると、改めて嬉しく思うことがあります。北方圏への寄稿は、わたしが慣れ親しんでしまったようなこの環境を、少し突き放して見ようと努力する貴重な機会となっています。

出版部　そうでしたね。東川町とラトビアとの交流のおかげで私たちはラトビアという国を知ったように思います。

小野寺　「北方圏」の名前はお聞きしていたので、デンマークに来る前、問い合わせの手紙を事務局に送ったのです。その時出版部におられた新井進氏から記事を書いてほしいと依頼がありました。1年くらいでいいのかと思っているうちに、早くも10年以上たってしまいました。

出版部　小野寺さんのお名前は90年の冬号（70号）から見えています。ほぼ現在のラインアップになったのは92年夏号（80号）あたりからで、それが創刊20周年記念号でしたから、皆さん、ほんとうに長ーいお付き合いをしていただいています。ところで、皆さん同士が実際にお会いになる機会はほとんど無いと思いますが、鈴木さんは仕事先でノルウェーの木村さんとお会いになったんですよね？

鈴木　私の投稿のきっかけは、１９８８年くらいだったでしょうか、札幌と東川町（！）から氷の彫刻家の方たちが十何人見えまして、その時この方たちを招いた製氷会社に頼まれて通訳したことです。その

作者のパウルズ大臣（当時）の伴奏でラトビアのヒット曲「百万本のバラ」を熱唱する歌手の加藤登紀子さん（東川町で）

方たちの彫った作品が、中に人が入れるほど大きいお城や恐竜などそれは素晴らしいものだったので、記録しておきたいと思い、文章にまとめてミシガン州の東京事務所に送ったところ、この事務所で当時の「北方圏」を購読していて、そちらに送ってくださったのが最初の記事になりました。それからノルウェーの木村さんとお会いしたのは、英国のシェフィールド市で国際英日翻訳者通訳者会議が開かれた時のことです。木村さんはお写真どおりのニコニコ顔で、すぐわかりました。それから実際には会っていないのですが、主人の退院後に書いた記事に対して小野寺さんが心温まる手紙を寄せてくださいまして、まるでお会いしたような気がしています。

出版部　鈴木さんは75号（91春）からご登場でした。こうして寄稿スタート当時のお話を伺うのはたいへん興味深いです。鈴木さんも東川町がご縁だったのですね。ところで小野寺さんと藤倉さんは、ウァソン海峡架橋ができて一段と近くなったのではないかと思うのですが。

小野寺　残念なことに一度もお会いしたことがありません。住んでいる町からは、フェリーで20分でスウェーデンへ行けるのにめったに行きません。近くて遠い外国です。藤倉さんのスウェーデンからの記事を拝見すると、デンマークと似ているようでもやはり違うなあと思います。日本人は北欧というと、北欧3国の文化をぼんやり思い浮かべ、白樺の木が生えてる国を想像しているかと思います。どうでしょうか？

出版部　おっしゃるとおり、日本から見ますと十把一からげで「北欧」になってしまいがちです。それだけに実際にそれぞれの国に暮らしている方々からのレポートというのは貴重だと思います。

藤倉　私が「北方圏」という名を耳にしたのは当時在スウェーデン大使館勤務だった友人のA氏の転勤前のお別れ会でした。日本人会の機関誌の編集長だったので、人が集まるところではいつも「記事収集」の下心があり、口癖は「しめきり」だった（笑）ような気がします。その機関誌に「スウェーデンの思い出」を書いて欲しかった私と、北方圏に「スウェーデンの日本人会について」書くよう依頼されていたけど、アラブの大使館に転勤してしまう友人が、お互いに記事を書く仕事を交換した（笑）のが始まりでした。その時は北方圏を読んだことがなかったので、「しめきり」は一回だけのものだと思っていたのでした。ノルウェーの木村さん、デンマークの小野寺さんの海外レポートを拝見して感じるモワッとしたスウェーデンとの共感。北欧の隣人なんだあ、と感じます。

黒澤　私はフィンランドも含めて北欧を捉えていますが、「海外レポート」欄にフィンランドからの便りがないことが、ちょっと残念です。

出版部　そうなんです。何かご縁がないというか。

黒澤　フィンランドは、王国である北欧3国とは民族的な感性が違うとか、サウナの伝統を考えればむしろロシアやバルト3国と共通する部分があるのではないかとか、知らないなりにいろいろ想像しています。バルトの国々については日本人もその他の大部分の国々も、「バルト3国」とひとくくりに捉えていると思います。バルト3国に対する政治・経済協力に積極的でバルト3国側にとっては力強いパートナーである北欧諸国の一般の人々から、バルト3国はどういうふうに見られているのかちょっと興味あります。話がそれますがこの場をお借りして、ぜひ北欧の皆様にお伺いしてみたいと思いますが。

小野寺　以前、フィンランドにフィンランド人の知り合いがいて、訪ねたことがあります。フィンランドは北欧3国とは、言語、民族が異なっていますので、表面的に似ているようでやはり違う感触がありました。特にデンマークの風土の温和さと比較して、国土面積、自然の過酷さが違います。バルト3国は、デンマーク人にとっては、旧ソ連の一部だった国、これから経済発展する国と言う印象です。その3国の違いはわか

っていないと思います。というより旅行してみようか、などの関心がないのです。デンマーク人は太陽を求めて、南下したがる傾向が強いです。ただ、エストニアは、13世紀にデンマークが短期間征服した国です。この闘いでデンマークの国旗が天から降ってきたという伝説があります。デンマークはバルト海の環境保全などに技術協力をしています。私もバルト3国は漠然とあるだけで、黒澤さんの記事を通してラトビアの情勢を教えてもらっています。

藤倉　スウェーデンでは、ノルウェー、デンマーク、フィンランドとアイスランドも入れた5カ国を北欧と言っています。オリンピックの時に応援しあうとか、この辺りがスウェーデン人の意識の上でも兄弟なんだと思います。同じ北欧内ではお互いの国の言葉は多少理解できるのに、フィンランド語はスウェーデン人にはチンプンカンプンです。でも、フィンランドにはスウェーデン語を母国語としている地域があるとか、フィンランド語とハンガリー語、そして何故か日本語は同じ言語ルーツを持っていると聞いたことがあります。そのせいかどうかは分かりませんが、フィンランド人の中には「カウコ」とか日本人みたいな名前の人がいたりしますよ。「ヒロコやアヤコやアツコ」なんてフィンランド男性がいるかも…という印象です。小野寺さんも言われていますが、私の住んでいる町はスウェーデンの東海岸、バルト海側に位置しているので「環境、交通、産業経済、政治」での協調体制がとられているバルト海を囲んだ国（リトアニア、ラトビア、デンマーク、ポーランド、ロシア、スウェーデン）の地域内でもあるんです。お互いクシャミの届く距離だとは思うのですが、バルト3国は旧ソ連に一度のみ込まれて今また自由を獲得した国という印象で、そこでの生活についてはほとんど何も知らないのが現状です。旅行者があまり行き来しないのも原因だと思います。

出版部　バルト3国については、北方圏センターの会員以外では知っている人は少ないかもしれませんね（笑い）。観光の面では、外国の伝統のある街のたたずまいというのは日本では根強い人気がありますから、今後バルト3国への人気は上昇すると思います。

◎テーマ選びのご苦労は？

出版部　みなさんは毎号、「締め切り、締め切り」と催促されながらどのようなことを伝えたいと思われて執筆されているのですか。ご苦労話の一端をお聞かせ下さい。

黒澤　特別に何かを書くということが苦手なので、ネタ探しといったようなこともしませんが、ラトビアについて、できるだけ人の顔が見えるような、身の回りのことで、ふと気が付いたこと等を「締め切り…」のお声が掛かるころに（笑）、一息で書くのがいつものことになっています。「旧ソ連の国」のイメージを払拭しようと頑張っているこの国では、例えばケータイ電話を4人に一人が使っているとか、ドイツのIT技術の下請けをしているとか、ミラノ・ファッション界で活躍しているモデルがいるとか、他の国（「旧ソ連でない国」）にとっては当たり前のことがここにも当たり前にあることに、結構意外性があるのかもしれないと思うのです。また、この国特有の豊かさは、旧ソ連であったまさにそのことに付随してあるのだと、私には思えますので、「高度に社会福祉が発達した」北欧諸国や、「高度に資本主義が発達した」北米大陸の国には絶対にないであろう〝柔軟さ、頑なさ、おもしろさ、カオス、人情〟を伝えることができたら！と、それが私の目標であり課題です。

出版部　締め切りについては、毎号、そろそろ来て欲しいな、という頃になるとご機嫌伺いのメールが行くのにお気づきですか？（笑）。ラトビア便りを読んでいると、「えぇーっ、そうなんだ」と感動することが多いです。おかげでずいぶんラトビア通になったような気がします。ラトビア政府観光局から黒澤さんに感謝状の一枚くらいいただけてもいいのではないかと思います。

鈴木　私にとって難しいのは、多くの方がアメリカにいらっしゃったことがあって、しかも日本のどの新聞もアメリカについての記事が第一面に出ることです。「何だ、アメリカのことなら分かってる」と思われる中で、「アメリカといっても広うござんす、東西海岸のことはともかく、アメリカ人が一番アメリカ人らしい中西部（実はこれぜんぜん真ん中でも西でもなく、昔の東海岸、すなわちニューイングランド地方から見れば、という歴史的な言い方が今まで残っているんですが）には意外と知られていないことがあるのですよ」と申し上げたくて、米国北端の州の一つからせっせと書いているわけで

す。幸い私は通訳者という職業柄、普通では行けない所に行く機会があります。それを利用してずいぶん記事を書いています。カナダも近くて今夜は食事はカナダに行こうか、なんていうことも良くあります。トロントやナイアガラまでも4時間しかかかりません。田中勉さんとは本当にお近いわけで、いつかお会いしたいと思っています。

出版部　メディアに現れないローカルなアメリカというのは興味がありますね。

鈴木さんと木村さん（英国・シェフィールド市の会議で）

藤倉　私はスウェーデンの典型的な中都市で仕事をし、往復計二時間の通勤をして、人口１５００人位の海辺の町で生活しています。この狭い田舎の世界ばかりを書くことにちょっと抵抗があった時期がありました。が、結局は自分自身が感じたことや知ったことや不思議に思ったことしか書けませんし、普段から周囲のスウェーデン人と私自身の感じ方の違いみたいなものが面白いと思っているので、それを意識化しようとはしています。時には統計数字を調べたり、正確な名前や場所を調べたりすることもあるので、北方圏に書いていなければ知らなかった事もあります。「これもスウェーデン！」という気持ちで今は送らせていただいています。私はどちらかというと「市場に行って新鮮な野菜を見てから今晩の献立を決める」みたいなやり方でしか書けないようでもあります。皆さんは私のように今日の献立が決まらないようなことはありませんか（笑）？

小野寺　皆様それぞれネタ探しにご苦労されていらっしゃること、同感です。デンマークで聞くアメリカのことは、ＮＹやワシントン中心の政治、経済がらみのもの、アメリカ映画ばかりですので、鈴木さんの原稿にはニュースにはならない平凡な日常の記事があるので面白いと思います。日本では、デンマークというと高福祉、アンデルセンの童話の国、高級陶器のイメージや情報が先行しています。というより日本の新聞にとりあげられるニュースなど年に1回くらいでしょうか。私も、自分が興味を持つ題材やニュースに取り上げられない、なりそうにもないあたりまえのことなどをお知らせしたいと思います。文章にならなくても臨場感を感じるため現場には足を運びます。

出版部　「現場へ足を運ぶ」というのは大変なご尽力だと思います。皆様から送られてくる写真を拝見すると、「あぁー、わざわざ写真を撮りに行って下さったのだ」、ということがよくわかります。

高谷　長期にわたっていますので、ネタ探しということになると、私自身の日常の変化の中で、自然体で、その流れを綴っていこうと心がけています。その中でも、日本に紹介したいカナダのライフスタイルを取り上げているつもりです。身近なカナダ人を取材し、紹介し、お礼に記事の載った「北方圏」誌をあげるととても喜ばれます。日本語は読めなくても、自分の写真が載っていますので十分価値のある宝物になっているようです。

田中　私の「海外だより」の初掲載は19年をさかのぼる昔になります。当時のセンター専務理事、故気境（きざかい）公男さんにお会いしました。きっかけは１９８０年のトロント市の日本語学校と北海道雨竜町立雨竜小学校の姉妹校縁組だったと記憶しております。気境さんとは82年にトロント市でお会いし、翌年、今度は私が札幌で北方圏センターを表敬訪問した折に「（北方圏誌に）書いてみましょうか」と私の方から申しました。この席には懐かしい、あの佐藤直一事務局長も同席されていましたが、私の申し出に一瞬ためらいのような雰囲気が流れたのを覚えています（笑）。どの程度の筆力のあるものか分からない相手からの申し出ですから、それも無理からぬことでした。この19年間に出版部長さんも武藤さん、新井さん、木村さん、そして新庄さんとバトンが渡りましたが、いずれのお方についても懐かしい思い出が甦ってまいります。

出版部　覚えています。44号（83夏）

でした。カナダがあの片足のランナー、テリー・フォックスさんの偉業を国を挙げて称えたという記述を鳥肌がたつ思いで拝読したのを思い出します。田中さんはどういう観点で原稿を書かれているのですか。

田中　カナダは西から東まで4時間半もの時差がある途方もなく広大な国で、それぞれの地方が育む人と文化も異なります。高谷さんが中部のサスカチュワン州から、私がオンタリオ州から発信を続けても、とてもこの国を隈なくカバーすることは不可能です。その辺のもどかしさがあるのですが、これからは他州へも目配り、気配りをするよう心がけてみましょう。

黒澤　「北方圏」を読むようになって、北方圏の範囲の広さ、幅の広さを知るようになり、その地域の奥行きの深さに驚いています。単純に「北の地域の国」のことだと考えていましたが、どこからが「北方」なのかという捉え方は随分リラティヴであることを学んでいます。一括的な「北方」の枠にこだわらない柔軟で内容豊かな「北方圏」を、毎回楽しんでいます。出版部はいろんな北方に関する記事の編集をなさっていると、北方圏に共通することにお気づきになることがあるのでしょうか？

出版部　「北方圏地域」とはどこからどこまでですかと、よく聞かれたものですが、北緯何度から北とかの線引きではなくて、雪と寒さがキーワードなんです。その雪と寒さが負の財産であった北海道の生活向上、意識改革をしようというのが北方圏構想で、気候・風土の似た北欧やカナダの先進事例に学ぼうということになったわけです。当初、「北方圏」誌の使命はそうした記事を掲載して広報普及することでしたので、寒い所の話題というのは頭ではなく体感気温的に理解できるところがあるような気はします。

岡田　ネタ探しの苦労はみなさんにもおありだったのですね。私の場合は自分から何かを探して書くというよりは何か自分に書けるものが流木のように自然にやってくるのを待っているような感じです。ですから、私が一番新入りなのですが、4年も続いているのが自分でも不思議なくらいです。北海道新聞の伊東正剛元ハバロフスク特派員が私の知らないうちに当時の木村出版部長に紹介してくださったのがレポーターに加えていただいたきっかけです。初めのうちはワープロもファクスもなく小学生の使うノートの細かい桝目にシャープペンシルで一字一字埋めていき、消しゴムで直し書きあがったものを日本へ行く知人に託し投函してもらいました。それからワープロに替え、つい半年ほど前にパソコンを使い始めて、今回のインターネット会議にも参加できたというわけです。藤倉カールソンさんが日本人会の機関紙のことを書いておられましたが、私も今年の初めから日本人会会報を発刊し「六花」と名づけました。原稿の受け取りや編集にはパソコンが便利で、日本総領事館のＨＰにも掲載していただいています。

出版部　そうでした。距離的には近いはずのハバロフスクからの原稿がモスクワ経由で届いたこともありましたし、どこかで行方不明になって最終的にはご実家のお母様にまでご心配いただいることがありました。それも2、3年前のことだと思うと、今では原稿も写真も電子メールで送ってもらえるというのは隔世の感があります。

◎北海道、ホッカイドウ…

黒澤　さきほど、「雪と寒さが負の財産」という話がありましたが、ラトビアやかつて生活したことのあるロシアでは、雪（といっても北海道や日本の本州の山々ほどの積雪量はラトビアにはありませんが）と寒さに対して、毎冬に構えながらも、やはり本格的な本来の積雪や寒さに恋いこがれているようでもあります。「今年は悪い冬だった」といえば、生ぬるい寒さのベタ雪のことで、「昔は厳寒の冬があった」と懐かしそうに語ります。海岸散歩をこよなく好むここの人々は、冬になっても、零下10～15度の中で、顔をリンゴ色に真っ赤に染めながらも、雪と氷でカチカチの海岸線を延々と歩いていく。これを初めに体験したときは、この人々の感覚はどうなっているんだ!?と全く理解できず、凍えながら頭の中でブツブツ文句を並べ立てていたものです。でも、その後にひと休みするカフェで飲むホットワインの効くこと。実は、このひと休みの充足感を味わうための前座が、凍え散歩なのです。

出版部　黒澤さんや高谷さんが原稿に凍るような冬の厳しさなどをお書きになっているのを読むと、「北海道は北方圏じゃないね」と思ったりします。ただ、明治時代に本州各地から入植してきた私たちの数世代前

の人たちにとっては、地球温暖化による今の暖かさ分を差し引いても現在では考えられない過酷な環境だったわけで、やはり「冬は耐えるもの、しのぶもの」だったのではないかと思うわけです。北欧やカナダの住環境を学び、板張りの家から断熱材や複層ガラスに守られた家になるまで優に100年かかりました。それが今では、各地で雪まつり、冬まつりが開かれて、暖かい地方からの観光客も来て、クロスカントリースキー

「市場」、北欧イメージのひとつ。ヘルシンガー市で（写真提供：小野寺さん）

や犬ぞりレースの人気が高まり、北海道のカーリング選手が冬季オリンピックに出たり、北海道の冬も様変わりしたものと思います。

小野寺　黒澤さんや能村さんがおっしゃるように、北方圏に共通しているのは、寒さ、雪です。一昨年あった北海道放送の特別番組取材でも取り上げられた、寒さ、雪対策は北方圏諸国がエネルギーと知恵をしぼって解決した自然問題です。私の出身地は新潟県の海岸地方です。家の作りは東京と変わらず、あるいは昔風な夏向きに作られているので、かえって新潟の冬はデンマークの冬より寒いと思います。雪を克服するのは最新式の除雪機械や地下水で解決できるようになりましたが、暖房は各部屋に石油ストーブやヒーターがあるだけ。石油ストーブの寒さ対策は根本的に一時しのぎであって、断熱材、複層ガラスなどの取り組みが遅れていると思います。デンマークの家はいかに寒さをしのぐかが最大の問題です。昔の写真を見ると、かなり雪が積もっているし、海峡が凍結した時があります。このところ暖冬で雪もほとんど積もらず（2～3日で消える）、気温がそれほど零下になることがありません。今住んでいる家も窓を複層ガラスにしたので、暖房代が節約できるようになりました。こちらにも寒い日や雨の中散歩している人たちいます。家に帰れば、暖かい居間で暖かいコーヒーが飲めるからこそ出かけていくのです。

黒澤　北海道には北海道にしかない住まい方や人のこだわりの少ない考え方とか、北海道らしさを感じています。ラトビアから北海道に行く交流は、雪氷祭り等を含めて、この国から日本に行く絶対数からすると少なくないのですが、彼らは東京や京都と比べて北海道に親しみを感じるようです。それは、森林や川、田園風景などが似ているためでもあり、また、北海道にアイヌ民族がいてラトビアの少数民族リーヴ人に比較されるあたりにも理由があります。「北海道の人はとびっきり可愛い！」と世界中を演奏で飛び回っているバイオリニストのバイバ・スクリデさんが絶賛しているように、親しみの湧く交流が実現できるところのようです。お高くない、気取らない、という印象があるんですね。

藤倉　嬉しいですねえ…。そうなんです、北海道らしさ、沢山あると思います。黒澤さんのおっしゃるような北海道の人々の特徴は北海道と接点を持っている外の人たちが感じることが多いのでしょうね。その意味でも北海道を訪ねる人や組織がスウェーデンからも増えてその特徴（文化！）を感じてくれる機会が多くなるといいなあ、と思います。

◎「Hoppoken」誌への期待

出版部　この機会に、「Hoppoken」誌への要望、意見をちょうだいできたら嬉しいのですが。

鈴木　意見ということではないのですが、感想を少々。視覚型の人間としては、写真やグラフィック（地図など）が沢山入っているのは嬉しいことです。普段通訳の仕事の勉強で文字ばかり接しているので、写真とその下の説明書きがいつもすぐ目に入り、そこが面白いと記事全体を読むと言うのが私の癖です。特にカラーはいいですね。でもカラーはやはり高いんでしょうね（笑）。雑誌の大きさも手ごろで気に入っています。私は歴史や考古学が好きなもので、例えば、アイヌ民族の歴史とか、言い伝えとか、非常に楽しく読ませて頂いています。北海道開拓史なども読んでみたいものです。それから自画自賛ぽいですが、海外レポ

ートは世界各地の北方圏の暮らしぶりがわかり、とても面白いと思います。横書きにしたのもいかにも海外からしくて、いいですね。

黒澤　私も同感です。「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」誌にカラー写真と写真や図解が多いことで魅力的で読みやすく、親しみやすくしていると思います。表紙については、少し前までの号を見ると今のような人物の直立写真ではなくて、建築とかもありましたね。人物の全面直立型も、飾らなく自然体であっていい、とも思いますが、ときにはなにかひとひねりあってもいいのではないかなあ、という気もします。例えば演奏家が来た時であれば演奏風景のショットとか、留学生であれば留学風景とか、その人の活動の背景がわかるような…。

好きなページは、いつもいつかは行きたいと思っているドロミテ渓谷の美しい写真、ロシアについてのマンガ、アイヌ民族について、そして編集後記を楽しみにしています。

現場へ（小野寺さん）

田中　「海外レポート」の執筆にあたっては取材から原稿にいたるまで、自分なりに最善を尽くしているつもりですが、要は記事内容がどれだけ読者の興味をひくことができるか、でしょう。欠伸をさせるような一人よがりを避けたいのですが、これがなかなか難しいのです。読者層はずいぶん幅が広いはずですから、視点の定め方にも気を使います。どう切り込むかです。同じ食材を使っても料理法はいろいろありますからね。内容的には、政治、経済、教育、文化、歴史、スポーツ、と何でも揃うコンビニ・ストアみたいなもので、結果的に「広く浅くの何でも屋」になってしまっているのが、さて、いいのかどうかです。筆があまり政治的に踏み込んで、出版部に「これ、どうしましょうか?」と頭痛の種を提供してもいけませんので、私本来の辛口クリティシズムのスパイスは控えめにしております。記事に対するポジティブ、ネガティブのフィードバックを欲しいとは思います。苦心といえば、季刊誌であるということが常に念頭から去らないことです。1月冬季号の締め切りは11月末ですが、季節がらみの記事ですと「秋も深まり、やがてジングルベルの響きが…」といった記事がお正月の冬季号に出たのではしらけますし、北海道の紅葉期10月にこちら8月の真夏の話題もためらわれます。従って季節を先取りして書くようにつとめますが、写真まで先撮りできないのが苦しい所です。写真をふんだんに、という編集方針は新井出版部長の時代に確立されたものだと思います。機関紙のような愛想のなさを避けるための改善策のひとつとして成功していると思います。ただ表紙について申しますと、世界の北国の街頭風景などをフィーチャーした、ずっと以前のものを私は懐かしく思い出します。個人の好みかも知れません。この2、3年の表紙の人物写真は、確かにセンターにとっては大事なお客様なのでしょうが、全体的な内容とつながる必然性が希薄に感じられます。また、失礼な批評になりますが、雑誌の顔とも言うべき表紙写真にしてはバックが真っ白だったり、レンガ壁だったりでちょっと…。

小野寺　北方圏センターの会員でない方が見ると、さまざまな内容の記事があるのにやはりお堅い雑誌と言う印象を受けるようです。公的な団体が出す出版物ですから、編集があまりにもくだけてもいけないでしょうし、面白みに欠けてもいけないというバランス感覚が要求されるのだと思います。その点、海外レポートの記事は、対照的にくだけた内容なので読者に人気があるということが理解できます。表紙は、2、3年の周期で変わりますね。表紙に登場するゲストの方の写真は、表紙の顔になりえる方、そうでない方がありますね。写真のとり方も専門の方に頼むと、顔の表情に変化が出て良いかもしれません。

出版部　表紙は歴代の編集長にとって頭の痛いところです。黒澤さんから示唆をいただいたようなコンピューターグラフィクスによるデザインものとか、いろいろ案はありました。ずっと続けていた北方圏各地の暮らし、風物に取材した写真は、収集、所蔵してきた当センターのライブラリーにもはやストックが無くなったという現実的な問題もあります。

小野寺　「Ｈｏｐｐｏｋｅｎ」が札幌市内の書店で売られているのなら、北方圏に興味のない未知の読

「Hoppoken」誌に載ったことが職場の広報誌にのった郵便配達の人と高谷さん

者、会員を開拓するためにも、思わず引き込まれてしまうよう魅力のある表紙（なかなかむずかしいです）が欲しいです。もうひとつ北方圏に興味のある会員や道外からの記事があってもいいのではないでしょうか？海外レポート筆者に（毎回一人ずつ）カラーページをあてがい筆者の町紹介とかはどうでしょうか。私はいつも北海道の美術館所蔵シリーズや例の漫画を楽しみにしています。いつか他国の美術館所蔵のシリーズが企画されれば、デンマークの美術館所蔵シリーズを書いてみたいです。

出版部　毎回お一人ずつカラーページに皆さんの町とか、美術館の所蔵作品の紹介とか考えてもみませんでしたが、良いアイデアですね！

高谷　寄稿のおかげもあって、北方圏センターを通して、いろいろな方が見学に見えたり、国際交流のお手伝いをしたり、ＳＴＶ（札幌テレビ放送）やＮＨＫが取材に見えたりと有意義で貴重な経験がたくさんできました。編集長が何人か代わりましたが私は首にもならず書き続けています。今後ともどうぞよろしく。

出版部　かえって私どもこそお世話になってきました。一昨年もＨＢＣ（北海道放送）のシリーズ番組の取材ではほぼ全員の皆さんのご協力をいただきました。こういう協力依頼がくると、「海外レポートは読まれている！」ことを実感します。

田中　私の今年の初夢はこうでした。現在海外レポート執筆に携わっている全員が札幌に集結して意見、情報の交換をするというものです。往復の旅費は有り難くも北方圏センターが負担することになり…、こんなユメ、センターにとっては悪夢でしょうね（笑）。

出版部　素敵な初夢を見てくださったのですね。もしかするとこの30周年記念の予感がおありだったのでは（笑）。実はこの企画の発端は、藤倉さんとのメールのやりとりの中で、出版部が北欧のどこかの町、北米のどこかの町に赴いて、それぞれ皆さんに集まっていただいて話ができたら良いですね、と冗談話をしていたら、30周年企画の編集委員会が開かれて、この企画が浮上しました。みんな、同じことを考えていたのですね。日々ご多忙な皆様ですが、どうぞこれからも「締め切りは…」のメールにめげずにご寄稿下さいますようお願い致します。この会議にご参加いただきありがとうございました。

＜出版部あとがき＞

この対談は、インターネット上でアクセスできる「掲示板」を開設し、寄稿者8名と出版部がそこに意見などを書き込む形式で実施しました。つい2カ月前までは「掲示板？何のこっちゃ」という状態だったのが急転直下編集に使うことになって、当初担当者は脂汗、冷や汗タラタラでした。寄稿者の皆様には、各国のＩＴ環境の違いや、日々ご多忙な中を慣れない「掲示板」に多々書き込みして下さったことにお礼を申し上げます。たくさんいただいたご意見、ご批評などを今後の糧にいたします。

読者の皆様は、このあといつもの「海外レポート」が続きます。どうぞゆっくりお読み下さい。

Marketing Communication
ERG
株式会社 マーケティング・コミュニケーション・エルグ
〒060-0062 札幌市中央区南2条西6丁目 南2西6ビル8階
telephone 011-221-2522　facsimile 011-221-6121

サンチョ・パンサの帰郷

ロシア・ハバロフスク市在住　岡田 和也

３月から４月にかけて休暇を日本で過ごしてきました。ハバーロフスクは、行くときは一面の雪でしたが、戻ってくると雪も溶けていて、今、キッチンの窓からはエゾノウワミズザクラ（チェリョームハ）の若葉や５月９日の戦勝記念パレードのリハーサルに向かう深緑色の装甲車が見えます。一度スキンヘッドの３人の若者が見えたときはひやりとしました。とうとうここにもネオナチが現れたかと。

さて、今回は、シベリヤ抑留体験のあるH氏賞受賞詩人、石原吉郎の詩集のタイトルを拝借しました。１年か２年に一度くらい日本の空気を吸いに行きますが、旧友や親戚などに会うと、そんなに長く休みが取れるのか、と不思議がられ、うらやましがられもします。社会主義体制が消滅し、計画経済から市場経済に移行しているロシヤですが、今も国民は長期の休暇（オートプスク）をごくあたりまえのように享受しており、経済的にすこし余裕のある人は、国内のサナトリウム（サナトーリイ）へ出かけ、東南アジア、トルコ、キプロス、カナリア諸島など、国外へ足を伸ばす人もいます。ソ連時代は何かの代表団の一員としてならともかく、庶民が国外に出かけることはまず考えられませんでしたが、今は民間の旅行代理店がたくさんあり、お金さえあれば自由に国外旅行を楽しむことができます。

ロシヤの国家公務員扱いの私の場合、休暇はたっぷり取れるものの、賃金は日本と比べ格段に低いので、日本滞在中は、余計な出費を抑えるためにほとんど実家に引きこもって暮らします。そんな中、近所の方々が連日のように穫れたての野菜や時にはタケノコや混ぜご飯まで分けてくださり、北海道の知り合いの方がおいしいキララ米、じゃがいも、玉葱などをどっさり送ってくださるときには、日本の味もさることながら、人の情けのありがたさがひとしお身にしみます。また、今回の帰省中には、町の神社で中学時代の級友にばったり出会い、地元の伝統文化を継承している姿に感銘を覚えたことでした。

さて、ふだんマイクの前ではしゃべっているくせに、人前で話しをするのがまるで苦手な私ですが、隣町に住む知り合いの大学の先生から、お寺で「気になる異文化交流」なる座談会をやるから何かしゃべってほしい、と云われ、断り切れず、車で連行されました。会場は埼玉県蓮田市の天台宗慶福寺。参加者は20名ほど。なぜかジンギスカン鍋が始まり、紙コップに酒が注がれ、ぐっとリラックスムードに。途中から、選挙を控えた現職の女性市長Hさんも参加。座長のK先生が「世界で一番むずかしい言葉は秋田弁でしょう。な、け（さあ、食べ）」。日本に招かれ、慶福寺の仏塔の壁画を描いている敦煌美術研究院の若い画師と助手の方々は「日本はとても優しい。日本は緑がきれいで自然が美しく、経済的にハイレベル」。前衛舞踏家土方巽の日本で唯一の像の制作で知られる立体造形家Sさんは、戦後アメリカの軍政下におかれた故郷、奄美諸島の当時の惨状を紹介。夫君の勤務地ベトナムを訪れた際の印象を語った江差出身のNさんは「あちらでは無条件に優しく迎えていただきました。日本での自分のこれまでの外国人に対する狭量な態度が恥ずかしくなりました」。プロのカメラマンでカトリック信者、国際文化交流やホームステイ活動に献身されているMさんは「国際交流は言葉でなくとも身振り手振りで大丈夫。人はみな天からさずかった同じひとつひとつの命なのです」。おしまいにK先生が「今ふと、アメリカのフォーク歌手ジョーン・バエズの、こんな歌の一節が浮かびました。自分が幸せでなくて他人を幸せにすることはできない……」。

私はなぜか、「めをほそめみるものなべてあやうきか　あやうし緋色の一脚の椅子」(村木道彦）という他人に教わった短歌を声に出してから、友人から伝え聞いた昨今の日本の「精神的ホームレス化」のこと、暮らし向きはあまりパッとしなくとも悠々と地に足をつけて生活を楽しんでいるように見えるロシヤ人たちのノンビリズム（紋別の流氷博士、青田昌秋さんの造語？）などについて、しどろもどもにしゃべった後、持ってきた古い同人誌を開き、若かりし頃に訳したロシヤの吟唱詩人ブラート・オクジャーヴァ（1924〜97）の「ぼくの人生」という次のような詩を朗読しました。

はじめての恋、それは胸をひりひりさせる
２度めの恋は、初恋にこだわっている
そして３度めの恋は、
鍵が鍵穴のなかでふるえ、
鍵が鍵穴のなかでふるえ、
スーツケースを手にしている

最初の戦争は、だれのせいでもない
でも２度めの戦争は、だれかが悪い
そして３度めの戦争は、
ぼく自身の罪だ、
ぼくの罪、
それはみんなが知っている

はじめのうそで、朝焼けにもやがかかる
次のうそで、酔っぱらいがふらつきだす
そして３度めのうそ、
それは夜より黒く、
それは夜より黒く、
戦争よりもこわいのさ

５月９日、詩人の誕生日に、モスクヴァの古い通り、アルバート街で、ブロンズ製のオクジャーヴァ像の除幕式が、詩人の人柄を映すように、ごくしめやかに行われました。

キッチンの窓から・冬
（母親を乗せた橇を戯れに牽いていく子供）

キッチンの窓から・春
（戦勝記念パレードのリハーサルに向かう軍用車両）

無形文化財「小久喜の獅子舞」を保存する大塚秋男さん
（埼玉県白岡町・久伊豆神社で）

座談会「気になる異文化交流」
（埼玉県蓮田市・慶福寺で）

吟唱詩人ブラート・オクジャーヴァ

日本着想庭園
デンマークの日本庭園

デンマーク・ヘルシンガー市在住　小野寺　綾子

デンマークでも、最近は値段や品質はさておき、町の大手スーパーでミニ盆栽やパックに入った寿司が買えるようになりました。園芸店では、セメント製の日本風の灯篭（ベトナム製？）や「もみじ」を売っています。デンマーク人が日本風な庭園作りを有料で一般公開しているところも数カ所あります。このようにゆっくりながら保守的なデンマーク人に異文化が、ただの物珍しさではなく、深い関心をもたれて少しずつ受け入れられてきています。

雑誌社に勤めるカメラマンのカール・ラウンさん（62歳）は1996年、自宅に長年の夢であった日本庭園を作りました。

盆栽の趣味があったラウンさんが日本庭園に興味を持つようになった動機は、1981年に仕事の招待で初めて日本を訪れ、京都の旅館に泊まった時忘れられない体験をしたからです。ラウンさんは夜遅く旅館に到着したため、暗くてあたりが全然見えませんでした。翌朝旅館の女中さんが、宿泊している部屋の障子を開けると、目の前に美しい庭が現れたのです。このショックともいうべき日本庭園を見た時の強烈な感動が、その後の日本庭園への感心に発展していきました。

デンマークの典型的な庭は青々とした芝生の周りに花壇が作られ、主に宿根草やバラ、石楠花（しゃくなげ）などが植えられています。隣家や道路の境目は、生垣で仕切られています。夏期に太陽の下で食事や日光浴を楽しむためテラスが欠かせません。

コペンハーゲン郊外の閑静な住宅地にあるラウンさんの庭は、玄関の前庭や家の後ろにある大きな回遊庭園を含めて約800平方㍍です。庭に大小の庭石が配置され、あたりには白い小石が敷き詰められています。所々につつじ、低い松、楓などが生けこんであります。小さい池にはカモのつがいが定住しています。石と石の間から、前に花壇だったとき植えたチューリップの残りが今でも出てきてご愛嬌です。庭を造って６年目なので、植え込みのつつじや松、苔が十分に成長していません。そのせいか全体に石と植え込みがしっくりいっていないので、石が目立つ石庭という印象を受けます。非常に男性的な庭です。庭は完全に日本庭園ではなく、借景に見えるデンマークの家、庭園を造る前の大きな木もあちこちに残してあるので和風デンマーク庭園です。

庭の仕事をしているのは、何事も器用なラウンさん自身です。奥さんのボーデルさんはその様子を見守っています。近所の人も次は庭がどうなるのか興味津々です。玄関横から裏庭に続く中門を建てたのもラウンさんです。庭内で重い石を吊り下げて運搬する道具も自分で設計して、鉄工所で作ってもらいました。これまで庭作りに掛かった費用は、６万クローネ（約100万円）は下りません。私が訪れた時、玄関横に「延段」と呼ばれる長い石畳を作るため、大小の石を並べる作業をしていたところでした。これが完成すると、６年がかりのの庭工事が終了します。

ラウンさんはこれまで取材仕事やプライベートの旅行で日本を５回ほど訪れています。昨年11月にボーデルさん、２人の息子と一家で行き、紅葉が鮮やかな京都、米子にある庭を楽しみました。その時の旅行でお気に入りの庭は、京都の苔寺、金閣寺などです。居間にはその時撮った写真が何枚も飾られていました。

デンマークで本格的な日本庭園を造るのはなかなか難しいです。何げない石一つをとっても、デンマークには山や川がないので、庭石を確保するのが悩みです。庭石はノルウェーやスウェーデンなどから輸入している状態です。

1991年に日本庭園に興味を持つデンマーク人が「日本着想庭園」(Japansk inspirerede Haver）という会を発足させ、今年４月に10周年記念を祝いました。会員は日本庭園を趣味としているデンマーク人で、南スウェーデンのスコーネ地方の人を含めて約500人います。平均年齢は40−50代。会員は毎年増加の傾向にあります。会の活動はユトランド半島、シーランド島に分かれて定例会を開き、会員の庭を相互訪問、庭木の選定、庭作りの講習会などを行っています。

年に４回発行される「NIWA」という雑誌の内容は非常に専門的です。たとえばシダの種類と育て方に始まり、茶室、生垣の作り方など多様です。表紙などにはラウンさんが国内や日本で写した日本庭園の写真が使われています。

「日本着想庭園」の由来は、デンマークで日本庭園を作る場合、デンマーク人は日本人がもっている庭作りの裏にあるもの、言いかえれば日本の哲学、文化の背景がありません。そのかわりデンマーク人は日本庭園からインスピレーションを受けた庭園を作り、主に石や木のバランスを楽しんでいます。デンマーク語ですがホームページがありますのでご覧ください。(http : //www.niwa.dk)。

デンマークでは日本庭園より盆栽のほうが歴史は長く、年に一度展示会をしています。これもデンマーク語ですがホームページで活動の様子を写真で見ることができます。(http : //www.bonsai.dk)。

中門と手前の池

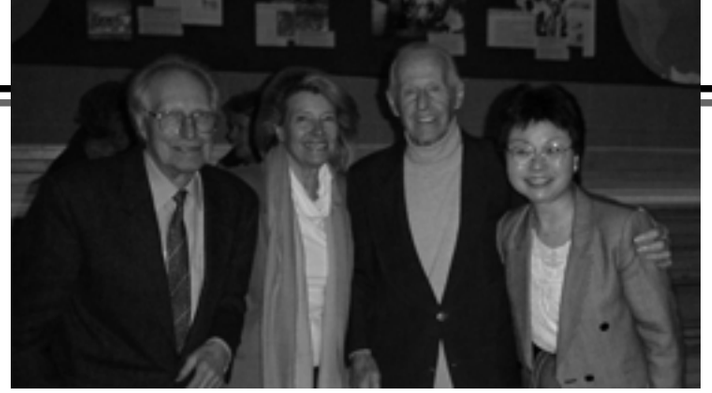
道路に面した庭

日本庭園を作る前の様子

ご自慢の庭を背景に立つラウンご夫妻

紅葉が美しい玄関前庭

年４回発行される会報誌「NIWA」



トール・ヘイエルダル氏と奥さんと、コンチキ号の仲間であり、元博物館長でもあるハウグラン氏

聖堂で、王女様のご結婚式があり、おめでたいことが続いた５月でもありました。

ストライキの花盛り

労働者の賃金や休暇や労働条件改善のための賃金交渉が毎年５月１日前後から始まり、その後次々と続くストライキ。これは、当国ではマスコミも大いに報道し、例年のことなので当然のように考えがちなのですが、今年のように実際に自分の生活にも直接関連してくると、その影響の大きさを感じずにはいられませんでした。病院の看護婦さんたちに続き、五月前半はホテル従業員のストライキでホテルも閉鎖され、それが16日に解除されると、直後に市の公務員ストライキ。そして、これが一応避けられると、次は新聞記者で、不動産広告が主で記事やニュースのまったくない新聞が約10日間届けられました。その後は食品関連業界の従業員が交渉中だそうです。ストライキで勝ち得たものは、大幅な年間給料値上げや休暇日数増加や夜勤手当増加、といろいろあるようです。けれども、人権のインフラがかなり整備されたノルウェーに住み、発展途上国に比べて労働条件にかなり恵まれた人たちが、自分たちの給料や地位や条件改善のみのために戦って社会の機能の一面を停止するかわりに、失業者が増大する世界情勢の中、もっと何か他の分野で連帯して活動すべきではないだろうかとも思いました。でもやはりこれも市場経済と豊かさの象徴なのかもしれません。

人類的視野の歴史観とトール・ヘイエルダル氏

海洋学者で探検家でもあり考古学者でもあったノルウェーの英雄、トール・ヘイエルダル（Thor Heyerdahl）氏。彼は、仲間とともにバルサ材のいかだ「コンチキ号Kon-Tiki」で太平洋をわたり、パピルスの葦船「ラー号Ra」や「チグリス号」で海洋を横断し、世界の文明間の交流が先史時代に葦船を利用した移住によりなされたという説を実証しました。彼のドラマチックな探検と国境を越えた偉業を伝える本は世界各国で翻訳され、多数の映画や番組にもなっています。

海を愛し、海とは人間や社会や文明を隔てるものではなく、むしろ文明間の交流の通路であり幹線道路なのだと考え、それを身をもって実証した現代の人、ヘイエルダル氏は、バイキング・スピリットの典型としてのノルウェー人です。また彼は世界的視野で考え行動し実行して結果を出す人でもありました。ユネスコ（UNESCO）等の国際交流の分野でも貢献し、若者たちの国際教育と交流を重要視した独特な教育理念を持ち、世界に10校ある国際高校組織（United World Colleges Movement）も支援されていました。

近年の活動は考古学発掘が中心で、南米のツクメでインカ文明の遺跡発掘や、イスラム教系統治のインド洋の島でヒンズー教系統や仏教系統の文化の影響の考古学研究、それに将来の壮大なプロジェクトとして先史時代の北欧のルーツを求め、ロシアのロストフ研究所と協力して黒海近辺での考古学的発掘と研究を進めることになっていました。北欧神話の主神で知恵と戦の神「オーディン（Odin）」の根源がむしろトルコに近いロシア側にあるのではないか、という可能性を探り検討する本を、ヘイエルダル氏は最近共著で出版し、３月にその新しい説を大学図書館の大講堂での公開講演で提示されました。大学側の言語学者や宗教学者等の専門学者の批判は厳しかったのですが、私は邪馬台国のなぞを解明するような、国際的・学際的な大きなビジョンのドラマと夢のある説だと思います。

ヘイエルダル氏はその後まもなく４月上旬に入院された後亡くなられ、26日に国葬が行われました。主教ストールセット氏による国葬式典に、王室、首相、政府代表、ご家族・友人・知人・仲間や文化人等がオスロの大聖堂いっぱいに集まり、テレビ放送もされました。信念を行動に移し、実現する勇気の持ち主で、新しい世界観・歴史観をつねに模索し開拓精神に満ちた氏は、まさに「ノルウェーの地球人」でした。

オスロの五月

ノルウェー・オスロ市在住　木村　博子

萌黄色の白樺ではじまった初夏、と思いきや、すばらしい晴天の後は雨続き。５月30日には霰まじりのみぞれが降り、気温も23度から６度の間を激しく変動した不思議な５月でした。そのあとは20度を超える真夏の天気。かつて10年前、まだ息子が小さかった頃、マイナス25度が２月に２週間以上続いて市内あちこちで水道管破裂のニュースがあり、それに続いて６月から８月まで夏中ずっと11度で、その間Tシャツを着たのは３時間だけ、という年もあったのを思いだしました。最近は冬も夏も暖かく、オゾン層や地球温暖化等の地球環境問題が実感として身近に感じられるようになりました。茶色い日焼け肌がステータス・シンボルで美の要素であった数年前までは、街中のフログネル公園内の芝生は日光浴の人々であふれていましたが、近年はこれもめだって少なくなりました。

タクシーも白樺の小枝と小さな旗で着飾ります

王様と王妃様をお迎えする学校の子供たちと地区の人々

この日のために民族衣装を着たおばあさん

じゃがいも競争

家族も友人も全員が民族衣装のブナード

アヒルつりをする子供たち

この日のために

国民の祝日、５月17日の憲法記念日の例年の式典の後、王様と王妃様が私たちの地区においでになられました。ご訪問されたのは学校と高齢者ホームとでしたが、途中で車を降りられて、子供たちに話しかけ握手しながらそこまで歩いて行かれました。お迎えの男性のオスロ市長と女性の区長さんも民族衣装姿でした。この日のために、地区の人たちは家も庭も特別きれいにして旗で飾り、民族衣装を着て小旗を手に持ってでかけました。我が家でも外をきれいにするため、庭掃除や芝生刈り、雑草抜き、窓拭き、ベランダ掃除、そして自動車は二回も洗車、と大変でした。マーチにかかせない子供たちの楽団の収入のため、各学校ではエプロンをかけたパパやママがバザーイベントとしての「アヒルつり」や輪投げ、コーヒー・ケーキの販売等でがんばり、地区全体がお祭りのような雰囲気になり、みんなで楽しみました。さらに５月24日にはノルウェー中部のトロンハイム市にあるニダロス大

マスカラの強み?

ラトビア・リガ市在住 黒沢　歩

ブレイン・ストーム

例年５月下旬のヨーロッパ歌謡コンクール「ユーロヴィジョン」。コンクールの順位は本戦でも予選でも、テレビ視聴者による電話投票で決定される。２年前のラトヴィア代表だった男性５人のポップグループ「プラータ・ヴェートラ（英語訳でブレイン・ストーム）」は、３位入賞を果たして国外進出の鍵をつかんだ。ラトヴィア人の「プラータ・ヴェートラ」が予選突破したときの国内支持率は、ロシア人歌手のマリヤ・ナウモヴァとに二分されて接戦だった。ウラ話では、「ラトヴィア代表はラトヴィア人であるべきで、ロシア人であるはずがない」という意図的な支持率調整があったとまでささやかれるほどで、マリヤの人気はこの“負け”を機に一層上昇することとなった。背景には、ロシア人、ベラルーシ人、ウクライナ人その他のロシア語を話す人口を約40%も抱えているという、ラトヴィアの特異な民族構成がある。

ポップグループ「プラータ・ヴェートラ」

Pirmdiena, 2002. gada 27. maijs
RB Ziņas

EIROVĪZIJAS GAVILES

新聞「リーガル・バルズ」

聖なるマリヤ

今年のユーロヴィジョンは、お隣エストニアの首都タリンで開かれた。ラトヴィア代表は、２年前の屈辱を覆して国内最高支持率を得たマリヤ。そして、そのマリヤがなんと優勝！まったく予想外に期待や前触れもなかったこと。早速お祝いに花束をもって駆けつけたラトヴィア大統領は「彼女の勝利を私は予測していましたよ」とは言ったものの、そんな予測はどの歌謡評論家もしてはおらず、「よくて６位止まり」といったところだったのだ。

降って湧いたようなこの朗報に、いきなりラトヴィアでは、「聖なるマリヤよ、よくやった！」とか「ありがとう、マリヤ！」と称賛の言葉が浴びせられ、驚きの表現「神に感謝！」とまで聞こえてくると、まるでラトヴィアはいきなり敬虔なキリスト教徒の国となったよう。当のマリヤは、優勝後の第１声で「優勝しちゃって政府に悪いことしたわね」と、さすが見通しは早くも現実的。優勝者の出場国は、来年のユーロヴィジョンを実施する権利を同時に得ることができる。でも、そのためには、政府として多額の実行予算を確保する必要があるから、なかなか頭を悩ますところ。

社会統合のモデルに？

マリヤ・ナウモヴァは、彗星の如く現れた歌手ではない。女優を母にもち、本人は５歳のときから芝居の舞台で子役を演じている。彼女の舞台上での堂々とした映えを、経験と実力が支えている。彼女が主役を演じるミュージカルは常にチケット完売で、オペラ座の舞台では、シャンソンばかりをフランス語で歌うコンサートが好評を得た。常に上昇志向の努力型実力派。素顔の普段着は見過ごしてしまいそうなほど自然体で気取らないが、化粧をして舞台に上がると一変して、大きい舞台を泳ぐように活きる。

優勝したマリヤの歌“I wanna"は、ユーロヴィジョン（国際）受けを狙ったテンポの早い英語の歌で、マリヤの持ち歌の中でもっとも彼女らしくない歌と演出なのだそうだ。だれが聞いても確かに単純すぎる。そういうところに本人にもなんらかのわだかまりを感じているのか、優勝翌日には、「これからのユーロヴィジョンは、母国語で歌って民族的アイデンティティーで勝負すべき」と意見した。ラトヴィア国籍をもったロシア人のマリヤは、流暢にラトヴィア語を話すことでも、ロシア語とラトヴィア語の両方で歌うことでも民族的壁を越えている。「ラトヴィアには、ラトヴィア人とロシア人との民族問題などない。民族的・社会的な統合に成功している国だ」との政府のアピールに、マリヤはユーロヴィジョン優勝でもってこいの広告塔となった。

赤い花は抗議の印し

同じように、予想外・予定外にラトヴィアの名を世に知らしめた女性がいる。昨年11月にチャールズ英皇太子がラトヴィアを訪問した際に、皇太子の顔を赤いカーネーションでぶった地方都市に住む16歳の女子高生アリーナだ。すぐに捕らえられた彼女は「英国がアフガニスタンへ武力を行使したことへの抗議の意志を示したかった」と、堂々と雑誌インタビューでも答えている。彼女は大きな罰も受けずに済んだけれど、早速将来の議員候補だとささやかれるほど、国内に名が知れた。この事件は途端に世界中のメディアの注目を浴びたから、アリーナの功績は、政府が国家予算を当ててあの手この手でがんばっているラトヴィアという国の広告事業を、たった３本の赤い花でやりのけてしまったことにある。世界中の新聞に載った彼女の行為のショットは、絵画になってどこか外国の美術館に展示されているらしい。そして、アリーナもまた、意志固そうなキリリとした印象を与えるのは、どうもあの目のあたりの化粧にあるような気がする。とにかく女性の元気が目立つお国柄。彼女たちの化粧の濃さは、エネルギーのシンボルででもあるかのようだ。

英皇太子の頬をピシャリと

高度化･多様化するニーズに高次元で対応。
トータルに“印刷”の未来を追求しています。

急速に進化するテクノロジーと、多彩なプリンティング･ニーズに応えるため、
クリエイティブの領域までをカバーするトータルな事業展開を通して、
スピーディに正確に、そして高品質な商品を提供。
つねに”印刷”の可能性を真しに追求しています。

龍文堂印刷株式会社

〒006-0832 札幌市手稲区曙2条5丁目2番54号 TEL(011)682-1451(代)･FAX(011)694-4406
デジタル事業部／〒060-0002札幌市中央区北2条西13丁目1番IHSビル2号館3F
東京営業所／〒105-0012東京都港区芝大門1丁目4番4号ノア大門410号室 TEL･FAX(03)5401-2870
函館／〒040-0022函館市日乃出町28番2号 TEL(0138)53-2231･FAX(0138)53-4355

「ミートアンドポテト」地域とバレエクラス

アメリカ・デトロイト市在住
鈴木・マイヤーズ＆アソシエーツ㈱社長　鈴木いづみ

ここ20年、アメリカ人の体重は著しく増え、なんと米国は世界一のデブ国という不名誉な第一位となってしまいました。その中でも一番太っている人の多いのが、いわゆる中西部、即ち我が州ミシガンを含むアメリカのハートランド（心臓部）です。そして高血圧、糖尿病、心臓疾患など、成人病患者の数でもこの地域は群を抜いています。その理由は端的に言えば食事の質と車偏重文化ではないでしょうか。

この地域は「ミートアンドポテト」、即ち牛肉とポテトを中心にしたたんぱく質、油脂分、炭水化物の多い食事で知られています。分厚く中が真っ赤なステーキ、バターとサワークリームをたっぷりかけたベークトポテト、それに茹で過ぎの野菜を少々というのが典型的な夕食です。朝食からして、レストランに行くと「ステーキと卵料理」、「ファーマーズオムレツ」(ポテト、ピーマン、玉ねぎ、チーズなどが沢山入ったオムレツで、使う卵の量は通常３つ)「ベルジアン・ワッフル」(ホットケーキの種をグリッドの入ったワッフル型で焼き、その上に生クリームとシロップ付けイチゴを山のように乗せたもの）などを置いていないところはありません。つまりどれもこれもコレステロールの塊のようなものです。

これでも昔はこの辺の人達は皆農家でしたので、朝早くから日暮れまで野良仕事をしていたわけですが、もうそんな仕事はなくなりました。農家を続けている人達も巨大なコンバインや飛行機を操縦するのがせいぜいの運動でしょう。このあたりは工場で働いている人達も多いのですが、相次ぐ作業改善で昔に比べずっと楽な作業になっているのは間違いありません。オフィスワーカーに至っては、自宅のガレージで車に乗り、オフィスの駐車場に車を留めて、エレベーターで自分の階まで上がり、後は一日中コンピューターの前で仕事。外食も、買い物も、殆ど歩く必要がありません。銀行もファーストフードもドライブインで、車から降りる必要もないという便利さ。自動車産業の中心であるこの地域では公共の乗り物も殆ど発達していませんので、日本では当然の、駅での階段の昇降や駅から目的地までの歩行といった運動も全くありません。家に帰ればテレビの前で自らジャガイモ（カウチポテト）となり、コーラを飲みながらポテトチップを口に運ぶ、といった具合です。これではいけないと自覚した人達は体重減量のクラスやジムに通ったり、トレッドミルを買ったり、ジョギングをしたり、ということになります。

大きなステーキとポテト

かく言う私もミシガンに住んで二十余年、全く周囲の環境になじんで生活しています。つまりどこに行くのでも車で行かざるを得ず、会社やお店の駐車場では入り口に一番近い所を選び、エレベーターを愛用して、オフィスではコンピューターの前で長時間を過ごすという生活です。食べ物の点では肉より野菜が多い点はいいのでしょうが、何と言っても弱点は甘いものに目がなくて、必ずデザートをしっかり食べることでしょう。それでいて体重の方は幸い二番目の子を20年前に産んで以来変わっていません。この秘訣はひとえにバレエのお稽古によるものだと思います。日本も近年バレエが盛んになり、大変喜ばしいことですが、アメリカでもバレエを含め、ダンスはとても盛んです。

クリスティーナ先生と私

上級クラスの生徒たち

私の通っているスタジオのバレエの先生はブラジルのバレエ団の元プリマバレリーナだったクリスチーナ・カミュエラという方で、珍しいのは大人だけを対象に教えていることです。そしてもう一つの特徴は、日本人の生徒が多いこと。私の行っている上級クラスには４人、そして初級中級クラスには何と10人以上日本人が通っています。これは人口300万を超える大デトロイト圏に１万人足らずの日本人しかいないことを考えると、非常に高い確率です。おかげで近頃は先生も日本語を覚えて「カカトマエニ！」「オシリイレテ！」とか日本語で注意の言葉が飛んできます。

これに加えて生徒の年齢層も非常に幅広く、通常なら大人のクラスといっても30歳台がせいぜいなのですが、ここでは週末や休み中に来るティーンエージャーから上は70歳を超えるグランマまで来ています。40歳以上、50歳以上の女性が沢山いて（私もそうなのですが)、しかも皆週に２回も３回も、長い人は10年以上続けているのですから、大したものです。バレエは非常に激しい運動で、持続力も必要です。私のような歳でも出来るのは、最初に柔軟体操を行い、次にバーにつかまって両足を床につけたままゆっくり膝を曲げ伸ばしするプリエから始めて、足を高く投げ上げるグランバットマンまでのルーチンを終え、それからセンターに出て又ゆっくりなテンポのアダジオから最後のグランドワルツ（大きなジャンプ）に至るまで、実に体系的に人間の体の理にかなってクラスが構成されているからだと思います。もう舞台に出る気もチャンスもないわけですが、音楽にあわせて体を動かすことの楽しさといつまでも向上したいという意欲に燃えて、皆レッスンに励んでいます。

初級クラスのレッスンの風景

カナダの平原州に住んで

カナダ・サスカツーン市在住　高谷　尚子

バンクーバーの海岸で。岩に止まっているのはオオアオサギ（大青鷺）

バンクーバーの海岸（５月中旬）

文部科学省の推奨もあるのでしょうが、このところ、日本で学位を取った日本語を話す外国人が、カナダにも増えてきました。

先日の雛祭りには、カナダで初節句を迎えるバングラデシュ、中国、ガーナ、韓国の子達が我が家に集まりました。来たばかりで、英語は話せず、日本語が達者で、民族衣装に身を固め、肌の色も顔つきも違うのに、日本語でワイワイガヤガヤ、それは、見事なものでした。中国人や、韓国人は、母国の大学で、日本語を専攻した人も多く、読ませても、書かせても、喋らせても、完璧で、創造的な判らない日本語を話す、今の日本の若者に聞かせたい程です。私は、英文科出身ですが、私の英語は、彼らの日本語ほど、優秀ではありませんでした。カナダの大学で学ぶ日本人も沢山いますが、その英語の基礎力は、彼らの日本語の基礎力に負けそうです。ずーと前にお知らせした列車事故で、大怪我をした日本人女性も、事故補償が解決するのに、５年間も要し、その間、音楽セラピストの資格を取るべく、カナダに残って、勉学を続けていましたが、「英語はまだまだ…」と嘆いています。カナダの大学生の勉強ぶりに脱帽しています。自ら、学費を稼ぎ、寸暇を惜しんで、卒業を目指しているせいかもしれません。日本語の達者な親に育てられた外国人の子は、何語で育っていくのかわかりませんが、何となく、表情が日本の赤ちゃんに似ているのは、気のせいでしょうか。

国際色豊かな雛祭り。みんな日本語が話せます

赤ちゃんといえば、生後７カ月までの乳幼児と母親が一緒に参加する、「ペアレントトーク」というクラスがあります。保健士さんと組んで、週一度２時間、６回に亘って開いていますが、子育てに戸惑い、同じ悩みを持つ若い母親たちには好評で、終わっても、交流が続き、また、保健士さんが、身近な相談相手と感じる効果もあって、異国に生きる若い母親の孤独をも慰めています。側に助けてくれる親も親戚もいないのですからまさに孤軍奮闘です。

私は、カナダの平原州に住んで、28年が過ぎましたが、孤軍奮闘の子育ては終わっても未だに、海の無い暮らしに慣れません。磯の香りや潮騒の音が恋しくて、海を見ると、どんな悩みも消えて行く感じがします。幸い末娘がバンクーバーに住んでいますので、陣中見舞い方々、５月の海を訪れました。サスカツーンはまだ霜が降りたり、雪がちらついたりしていましたが、バンクーバーは、すっかり初夏で、緑と花がとても綺麗でした。

義妹が、先日、焼尻島でみたという、アマ鷺の仲間の青鷺が、初夏の海を愉しんでいました。こちらでは、グレートブルーヘロンと言います。別行に４日ほど滞在して戻ってきましたが、帰宅の日は、砂塵の風速45㍍にという酷さでした。地面や畑の砂塵が強風に舞うのを、ガスティウィンドといいますが、竜巻、雹も含めて、それは、ここでの孤独感をいや増します。北海道でも平野の中の町には、同じ様な現象があるのでしょうね。でも風のない穏やかな日は、小鳥が賑やかに囀り、庭を駆け巡って、明日の活力を与えてくれますから、いかなる地にあっても、人生そんなに捨てたものでもありません。

隣人の一人が、庭を殆ど使って、大きな池を作り、蓮を浮かべ、鯉の稚魚を泳がせています。冬は零下40度にもなる所ですが、稚魚は暖房の無い車庫の樽の中で、生きていたそうです。水の音は、海同様、心をなぐさめてくれます。我が家も池こそありませんが、小さなツクバイのセットを買って、水を循環させ、音を愉しんでいます。池には、たくさんの小鳥も来るそうですが、カラスが彼らを狙って困るので、アイスホッケーのネットを囮として好物の餌を入れ、捕まえようとしていますが、カナダでも日本に負けない位、カラスは賢く、決してネットには近づかないそうです。日本で見たカラス退治の番組で、カラスは、ゴミの中から賞味期限の新しい物を選ぶほど賢いとありましたが、その話をして、隣人たちと次の対策を練ったりしましたが名案はありません。万国共通の悩みがここにもありました！

赤ちゃんを抱いて母親教室に集まる

５年ぶりに列車事故の示談が解決。白髪の女性は90歳

隣家の庭。芝生の代わりに人工池

ケベックってどんなとこ?

カナダ・オンタリオ州在住 田中　勉

旅のすすめ

長年、日本人団体観光客専門のツアーガイドを務めていると、ちょっと信じてもらえないようなエピソードが集積する。客を空港に出迎えて話すうちに、どうやらカナダとアメリカの地理的な位置関係、つまりどちらが北にあるのかすらご存知でない人がいたり……。ま、それは昔のこと。ガイド仲間がたむろして退屈をしのぐこのテの話のタネはさすがにこの10年ぐんと少なくなった。

英国系とフランス系が抗争を繰り返したカナダの歴史と、その必然的な妥協策である二言語主義、あるいは多民族国家を支える多様性文化主義などについての基礎的な知識を持ってこの国を訪れる人も増えてきた。生半可なガイドのおしゃべりでお茶をにごして済ましそうとすると恥をかきかねない。

本欄では政治経済の中心地トロントを抱えるオンタリオ州をこの国の心臓部と心得て「海外レポート」を書き送ってきたが、「カナダから……」をうたいながら発信基地に偏りがあってはなるまい。そんな反省をこめて今回はケベック州の観光紹介としよう。

田舎がいい

車でオンタリオ州からケベック州へドライブ旅行をすると、州境で道路標識が上下逆転する。観光客なら、突然、異境に足を踏み入れたような心地よい戸惑いを感じるかもしれないが、フランス語のできないオンタリアン（オンタリオ州民）にはそんなロマンチックな旅情が湧くかどうか。

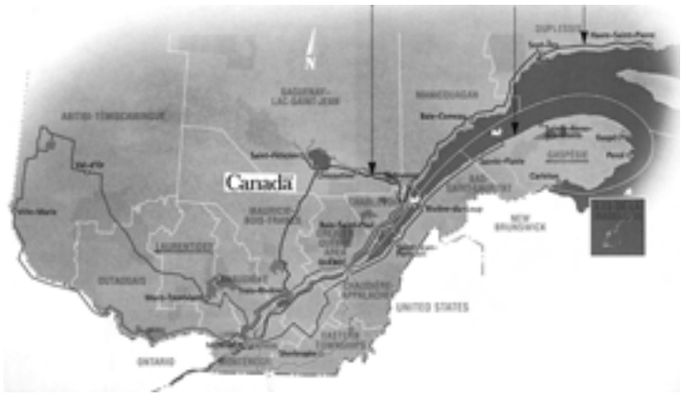
日本国土の約４倍の面積を持ち、フランス語住民が80%を占めるケベック州には、言語はもちろん、宗教、生活習慣から思考のパターンにいたるまで、他州とは異なった文化がある。それを「海を渡ったフランス」と理解するのは誤りで、ヨーロッパの血に北米大陸のおおらかさがブレンドされ、融合してケベック独特の文化が花開いたというのが正しい。

州最大の都市は人口285万のモントリオールで、北米のパリなどと呼ばれて都会派にはお気に入りが多いが、土の匂いのする本当のケベックを味わうには都会の喧騒をあとにして“田舎”へ出るのがいちばんだ。

セントローレンス河沿いに

悠久の流れが陽光を照り返しながら北行するセントローレンス河の中州に浮かんだ中の島・オルレアン島に渡ると、18世紀にタイムスリップしたようなノルマンディーの田園風景がのどかに広がる。土地のレストランに入ると、オーナーの大家族が総出で迎えてくれ、郷土料理を煮炊きする厨房にまで案内してくれる。ただし言葉はフランス語、いやケベック語オンリー。分からずに聞いていてもフランス語とは異なった語感だ。

大河をまたいで州都ケベック・シティの対岸はガスペ半島と呼ばれる。日本人観光客にはなじみの薄い土地名だが、燃えるように真っ赤な太陽が昇る所、という意味がこめられているという。ここにも文明に毒されない昔ながらのケベックが今も息づいている。



北米五大湖の水を集め、やがて大西洋に注ぐセントローレンスの河流

大西洋の潮の匂いが漂い、真紅の太陽が村々を染めるガスペ半島

ナイアガラとはまた異なった景観モンモランシー瀑布

1995年、州独立の是非を問う州民投票では大多数が賛成票を投じたケベック色の濃い土地柄だけに、英語だけではちょっと肩身の狭い思いがする。何しろカナダに生まれながら一生英語を口にしない人も多いというひなびた田舎だ。３、４日をかけて漁村から漁村へと片言のフランス語を操りながら半島一周を試みて人情の温かさに触れるのも得難いひと夏の経験になるだろう。

観光の視点からは季節外れになるが、ケベックの冬もまたファンタジックに訪問客を魅了する。分厚い毛布を膝にかけて馬車を走らせると、雪の中から顔を出した彩り豊かな民家の屋根やとんがり帽子を突き出したカトリック教会の雪化粧が旅人をおとぎばなしの世界にいざなってくれる。

早春３月も下旬になるとセントローレンス河の解氷が始まる。遥か上流から辿り着いた流氷がぎっしりと幅広く帯状に移動するさまはまるで陸地が悠然と動くようだ。オホーツクのそれとはまた異なった幻想的な眺望が展開する。

滝と高原と

ナイアガラ瀑布の盛名に隠れてその名さえ知られていないが、モンモランシーの滝も一見の価値がある。ケベックの町からセントローレンス河沿いの10㌔下流に位置して84㍍を落下する大瀑布だ。ロープウエーを利用して俯瞰するのもよいが、高所恐怖症の人はひと思案、といったところ。厳寒期には凍結してロックならぬアイスクライミングもできるというのだが…やってみる気はさらさらない。

田舎はお気に召さない都会派には、すでにたいていの観光コース・メニューに織り込まれてはいるが、モントリオール北郊のローレンシャン高原が文句なしのお薦めだ。なだらかな稜線を描く山々と点在する湖が夏のゴルフ、釣り、冬のスキーといったアウトドア・スポーツの場を提供し、モントリオールっ子のリゾート地人気番付のナンバーワンで、水上飛行機から望む錦秋の景観は終生忘れ得ない感動を刻み付けてくれるだろう。

ケベック州観光案内といいながら、あえて周知の観光地モントリオールやケベック・シティの街中を素通りした。触れ合いの旅を求めるならカナダの周辺部へ足を延ばしてほしい。観光客に知られない本来のケベックがそこにある。

幸せをテーマに創造性豊かな商品開発を目指す企業集団です。
◆喫煙具販売　◆観光みやげ品製造卸　◆ノベルティ・プレミアム企画製作
◆特殊印刷／平面印刷・曲面印刷・転写印刷・陶器（焼付）印刷・香料印刷
MARCHAN CO.,LTD.
株式会社 マルシャン
本社営業部／〒003-0021 札幌市白石区栄通８丁目４－11
TEL（011）852－8233㈹・FAX（011）855－3463
特殊印刷部／〒003-0021 札幌市白石区栄通８丁目４－11
TEL（011）852－8236・FAX（011）855－3463

ブルース・フェスティバル

スウェーデン・ティンメナッベン在住 藤倉・カールソン・篤子

ライラックが重そうに咲き乱れる頃になると、「四季がはっきりある国で暮らせる幸せを感じる…」と言う人が必ず何人か身近にいます。それを聞いたアフリカ出身の外国人が「白い冬と緑の冬の他にもまだスウェーデンには季節があるの？」と真面目に聞いたという笑い話があります。

私の住むコミュニティーの春の最大イベント、ブルースフェスティバルが毎年５月末にあります。地元出身のブルースバンドの「市民にブルースを聞いて欲しい、本物を聞かせたい」という熱意が実ってスタートした歩行者天国コンサートです。ボランティアを総動員して始まった15年ほど前と比べると、毎年トップクラスのミュージシャンを招いても商業的に採算も取れてきたと聞いています。しかし、プロジェクトは生き物のようなところがあり、素晴らしい企画でも毎年同じように続けると何故か飽きられてしまうことになります。マンネリ化させずに、特色のある企画を長期にわたって美味しく熟させ続けているこのブルースフェスティバルは、「ブルースおたく」とでも言える人たちの満足を知らない工夫の賜物と思っています。我が家では毎年この日にバーベキューを開幕するのが慣わしで、友人たちと朝までお祭り気分を楽しんでいます。

ガラス村の工房音楽コンサート

地方の知恵と努力で長続きしている地元色の濃い音楽祭、他にも身近なものには「ガラス王国音楽フェスティバル」などもその一つです。スウェーデン南部のスモーランド地方には大阪－名古屋間ほどの距離に十数のガラス工場が点在し、ガラス王国と呼ばれています。オレフォースやコスタボダなどのブランドは日本のデパートなどで見かけた方もいるかも知れません。ガラス窯の熱や職人の汗の染み付いたガラス工房で行われるジャズコンサート、ブラスバンドやミニオペラも少し毛色が変っています。肺活量の大きい吹きガラスの職人がラッパを吹いているのかも…と思っていた私でしたが、そうではなく働く場所で手の届く距離で聴く本物の音楽会は地元の人たちにも根強い人気があり、前売りチケットがなかなか取れなかったくらいでした。もう一つ風流で見逃せない定期音楽会に「カルマル城の昼下がりコンサート」があります。カルマル城は歴史的文化財でもありますが、城そのものを見学させるだけでなく、コンサート、小寸劇、お祭り、卒業式、お城の中の教会では冠婚葬祭、他にも展覧会やクリスマスメッセなどにもフル活用され、市民の文化会館的な役割にも特別な環境を提供しています。立ち消えていく大きなフェスティバルや催しがある中で、コンサートホールに聴衆が出かけていくのではなくて、身近な環境に音楽の方を移動させるローカルな音楽祭が生き生きしています。

ブルース一色のメンストロース

６月のサッカーＷ杯開催の前、「日本と韓国」はここでも大変な注目を浴びていました。スウェーデンAリーグには14のプロリーグがあり、私の勤務地にある“カルマルFF"もAリーグで戦っています。カルマルには実はスウェーデン最強の卓球チームもあり、何度も世界チャンピオンになったJ-O・ワルドナーを筆頭として、全国ランキングのトップ10の選手のうち５名を占めています。しかし、卓球チームの世界を股にかけた勝利を冷静に喜ぶ市民が、カルマルFFの国内リーグ戦の勝敗には熱狂することもしばしば、サッカーは物静かなスウェーデン人の血もかきたてるようです。カルマルFFが戦った翌朝は職場でも男子どもが朝からワイワイ井戸端会議をやっていますし、彼らの眉毛の角度と笑い声が前日の勝敗を正直に語ってくれます。ワールドカップ中は有給休暇を取った人もいますが、事前の読みでは「７人に１人が仕事をずる休みするだろう」とも言われていましたので、「多少の風邪では休めんぞ…」と思っている人が沢山いました。

W杯開催前の紹介記事

また、ワールドカップに先駆けて大勢のジャーナリストが現地へ出かけ、この春は日本を紹介する番組がたくさん放送されました。そのせいで、私が知らないような日本のことを妙に細部にわたって知っているスウェーデン人も増えました。社会問題に関心がある人が多いので、日本についても普段からよく色々聞かれます。今月受けた一口質問で異色なところでは、漫画、結婚式のウェディングケーキ、忠犬ハチ公、日本の嫁姑問題、回転寿司でしょうか。

サッカーの話題で「日本」という名前が出る度にスウェーデン人が真っ先に、そして繰り返し思い出すことがあります。古い話ですが、戦前の1936年、ベルリンオリンピックでのこと。スウェーデン自慢の最強チームが当時ノーマークだった日本チームに２対３で負けた試合のことです。日本では「1936年にスウェーデンに勝った喜び」なんて一度も聞いたことがないというと、「それを聞くのはなお辛い・・」と冗談ですすり泣く振りをする人もいます。今は亡くなった当時の名アナウンサーの超有名な絶望的口調、「日本人が走る！日本人が跳ねる！！（何処にパスしても）ピッチ中どこもかしこも日本人だらけ！！！」、スウェーデン人でこれを知らない人はいません。ぬるい温泉にゆっくり入いるような気持ちの良さで毎回聞いている私です。またその後スウェーデンは日本と1995年まで試合をしたことがありませんが、1995年、1996年と続けて同点で引き分けています。「1936年のプレッシャーか！」と騒がれたことは言うまでもありません。

札幌タイムス

地域に、暮らしに密着。
新時代を切り開く、
札幌タイムス。

ご連絡先
0120・4946・54（よくよむ いいよ）
地域に根ざした、情報発信
㈱北海道21世紀タイムス

平成14年度　事業計画

区分	助成対象 事業名	助成対象 主催者	助成額（千円）
文化	「北東アジア・米国学生集中講座2002」	財団法人　札幌国際プラザ	200
	2002年世界砂金掘り浜頓別大会	世界砂金掘り浜頓別大会実行委員会	200
	北方民族文化の比較研究に関する国際シンポジウム開催事業	財団法人　北方文化振興協会	300
	国際交流のつどい「フィヨルドに抱かれたノルウェーの自然と生活文化」	北海道女性国際交流連絡協議会	200
	カナダ・ヘイルツック・インディアンと共に歩む	先住民族国際交流協議会	100
	札幌アーティスト・イン・レジデンス	札幌アーティスト・イン・レジデンス実行委員会	150
	とかち国際現代アート展デメーテル関連イベント「カサグランデ&リンターラによる北方圏の旅報告会」	とかち国際現代アート展実行委員会	150
	北海道・サハリン州姉妹友好都市代表者会議文化交流 学校法人宮島学園ファッションドレスメーカー専門学校創立65年海外文化祭典	北海道日本ロシア協会	350
経済	平成14年度ロシア人企業研修生受入事業	稚内商工会議所	300
学術	国際シンポジウム「わたり鴉のアーチ／ジェサップ北太平洋調査の検証」	国際シンポジウム「わたり鴉のアーチ」実行委員会	250
	第18回北方圏国際シンポジウム　オホーツク海と流氷	北方圏国際シンポジウム実行委員会	210
	北太平洋国際フォーラム2002	社団法人北太平洋地域研究センター	700
	日ロ北海道極東シンポジウム	日ロ北海道極東研究学会	300
生活	北海道における広域行政、市町村合弁の調査研究	社団法人　北方圏センター	300
教育	第18回北太平洋サケ学習国際事業	北海道サケ友の会	350
	「北方四島」の海の自然の豊かさを通しての日ロ両国民交流促進に関する事業	北の海の動物センター	300
	教育交流活性化支援事業	社団法人　滝川国際交流協会	300
福祉	デンマーク高齢者福祉委員会招聘事業	北欧社会研究協会（NESSA）	100
親善	余市・イースト・ダンバートンシャイア姉妹都市提携５周年記念事業	余市町国際交流推進協議会	180
	友好都市提携30周年記念第８回平和に関する日ロシンポジウム	北見日ロ親善協会	150
	札幌国際親善の集い『キルギス共和国文化交流』	札幌国際親善の集い	300
	合計	21件	5,390

及事業（同プロジェクト実行委員会、200）㉒第１回国際アイスアリーナオペレーションズセミナー（同実行委員会、200）㉓ポートハーディ職人招聘事業（ポートハーディ交流協会、100）＝第１次決定分

㉔北方民族文化の比較研究に関する国際シンポジウム開催事業（財団法人・北方文化振興会、200）㉕第４回『ゲーテ「野ばら」を歌う会』海外演奏交歓会（ゲーテ「野ばらを歌う会」、200）㉖NPO認証記念「日・ロ合同セミナーinプラザ」及び「日・ロ国際コンサートin札幌」（北海道国際音楽交流協会（ハイメス）、150）＝第２次決定分

27芸術の国ハンガリーにふれる国際交流のつどい（北海道女性国際交流連絡協議会、150）28札幌・ヘルシンキ青少年研究グループ交換事業（同実行委員会、200）＝第３次決定分

平成14年度　収支予算（単位：円）

［収入の部］

科目	予算額
基本財産運用収入	6,938,000
運用財産運用収入	6,645,000
積立金取崩収入	634,000
前期繰越収支差額	5,794,504
収入合計	20,011,504

［支出の部］

科目	予算額
交流事業助成費	8,000,000
管理費	8,879,000
人件費	7,541,000
事務費	1,000,000
退職手当積立金	338,000
予備費	3,132,504
当期支出合計	20,011,504

平成14年度北方圏交流基金理事会

北方圏交流基金理事会

財団法人・北方圏交流基金の平成14年度理事会が５月16日、札幌市中央区の札幌プリンスホテル国際館「パミール」で開かれた。

理事９人が出席（他に委任状15人）、同月９日開催の評議員会で承認された平成13年度事業実績、同収支決算、平成14年度事業計画、同収支予算の４議案を原案通り承認した。また、改選期を迎える全評議員(11人)を引き続き選任したほか、任期満了を迎えた全顧問(7人)も満場一致で承認した。

会長あいさつ

北方圏交流基金の運営に当たっては、金融不安や低金利が続く中で、比較的高金利で運用してきた北海道債や札幌市債の償還時期を、この１～２年の間に迎えます。確実で有利な運用を心がけ、事業資金の確保に努めてまいりたいと考えております。また助成につきましても、できるだけ多くの団体に助成出来るよう知恵を出しながら努力してまいりたいと考えております（要旨）。

平成13年度事業実績（カッコ内数字の単位千円）

①陶芸と写真による創造的ワークショップ「炎への参加と写真文化による芸術保存」交流事業（北海道東川ラトビア交流協会、200）②「北東アジア・米国学生集中講座2001」(財団法人・札幌国際プラザ、300)③ソングスミス少年少女合唱団受入事業（網走・ポートアルバーニ姉妹都市交流協会、150）④日中国際シンポジウム（札幌学院大学、200）⑤第100回記念カナダスクール（講演会）開催事業（北海道カナダ協会、140）⑥伏見中学校とマッケンジー中学校との交流及び記録集の発行（伏見マッケンジー交流会、250)⑦北海道合唱団第８次海外公演「ヤロスラヴリ公演」事業（北海道合唱団、150)⑧姉妹都市サマーランド市との文化交流事業（豊頃町国際交流協議会、300）⑨札幌アーティスト・イン・レジデンス(同実行委員会、150）⑩「北日本の５人の作家達」5 Artists From Northern Japan（北日本国際美術交流実行委員会、250）⑪21世紀サハリン州へ向けて、日本・北海道文化の発信 日ロ友好文化祭典（北海道日本ロシア協会、250）⑫北海道・内蒙古民間国際交流展「書のもたらす絆展」(白月会、100）⑬平成13年度ロシア人企業研修生受入事業（稚内商工会議所、300)⑭北太平洋国際フォーラム2001第13回北太平洋学術交流会議・北海道（社団法人・北太平洋地域研究センター、800)⑮国際教育フォーラム2001「北東アジア 人々のくらしと歴史」(同実行委員会、180)⑯サハリン州テイモクスク市郷土博物館長らの招聘と学術講演会の開催並びに講演録出版事業（財団法人・北海道北方博物館交流協会、200）⑰北方圏の湖沼環境保全を目的とした生物指標としてのマリモの有効性と利用に関する国際ワークショップ（阿寒マリモ自然誌研究会、250）⑱第17回北方圏国際シンポジウムオホーツク海と流氷(同実行委員会、240)⑲極東ロシアの経済及び交通・通信に関する専門家招聘事業(日ロ北海道極東研究学会、150)⑳「高度情報化社会における地方自治体としての取り組み」調査研究（社団法人・北方圏センター、300)㉑平成13年度バリアフリーアドベンチャー普

平成13年度　収支決算（単位：円）

[収入の部]

科目	予算額	決算額
基本財産運用収入	8,235,000	8,284,024
運用財産運用収入	6,702,000	6,693,418
積立金取崩収入	634,000	634,000
前期繰越収支差額	4,446,229	4,446,229
収入合計	20,017,229	20,057,671

[支出の部]

科目	予算額	決算額
交流事業助成費	10,000,000	6,260,000
管理費	8,879,000	8,003,167
人件費	7,541,000	7,165,104
事務費	1,000,000	500,063
退職手当積立金	338,000	338,000
予備費	1,138,229	0
支出合計	20,017,229	14,263,167

育成支援事業(第11回)＝北海道からの委託事業として、ロシア極東の３地域から企業経営者を受け入れ、市場経済システム等についての理解を図ることを目的に、本道の経済・産業の現状や技術などを研修するために講義や企業視察等を実施する②北方四島交流（日本語習得研修)受入事業(第２回)＝北方四島交流北海道推進委員会からの委託事業として、北方領土問題解決に向けての環境づくりを図るため、日本語の習得を希望する北方四島住民を日本に受け入れ、日本語の習得を図ると共に日本社会や生活、日本文化の体験を通じて､相互理解と友好親善を深める。

国際交流団体との連携

①国際交流団体活性化促進事業＝地域の国際交流団体の活性化を図るため、地域の国際交流団体と教育現場が連携し、学校の総合学習の時間等において実施する国際理解教室の開催に対して助言、指導を行いながら、国際性豊かな視野の広い人材を育成するとともに、ネットワークの形成を図る②国際交流団体連絡会議＝道内の国際交流団体と意見交換しながら北海道の国際化を推進するとともに、各団体間の連携を図る。

国際協力事業

①文献、パソコンネットによる情報収集＝国際協力関係機関や団体が発行する定期刊行物をはじめ、国際協力に関する文献、開発途上国の国情、開発プロジェクトなどに関する出版物の収集のほか、インターネットを活用して国際協力に関する情報を幅広く収集し、各種照会、相談等に応じる②国際協力セミナー＝国際協力に対する意識を啓発するため、開発途上国の事情や国際協力活動の役割などに関するセミナーを開催する③国際協力推進団体懇話会＝道内で国際協力活動を行っている団体についての情報収集やその関係者との意見交換を行い、各団体間の連携強化等を図る④国際理解促進事業＝次代を担う少年少女の国際理解を深めるため、地域の中学生等を北海道国際センターに招待し、施設見学や国際協力、開発途上国に関する講演を行うとともに国際センターに滞在する研修員との交流事業を実施する⑤自治体職員協力交流事業＝総務省が進める自治体職員協力交流事業の一環として、北海道からの委託を受け、海外の地方自治体の職員を研修員として受け入れ、北海道が有する行政手法や技術等を習得してもらうことにより、諸外国の人づくりや地域発展に貢献するなど国際協力を進めるとともに研修員の出身地域との新たなる交流や友好親善を図る⑥北海道海外技術研修員受入事業＝北海道（外務省補助事業）からの委託事業として、開発途上国から技術研修員を受け入れ、途上国が必要とする技術の習得及び道民との交流を通じて、研修員の国の経済開発と国際友好関係の増進に貢献する人材を養成する⑦サハリン北海道人会子弟等技術研修生受入事業＝サハリン北海道人会支援事業の一環として、北海道からの委託を受け、サハリン州から技術等の習得を目的とする研修生を受け入れ、サハリン州の次世代を担う子弟の育成を図ることにより、北海道人会を支援し、サハリン州との交流を推進する。

国際センター運営事業

①国際センターの施設管理＝施設の適正な運営管理を行うため、宿泊及び研修に伴う施設の利用計画等の作成を行うほか、その維持管理業務を行う②研修の実施＝JICA研修事業の受託に伴う研修カリキュラムの効果的な実施について、受入機関との調整等、研修の進行管理を行う③研修関連業務の実施＝受け入れ研修員に対するブリーフィング、オリエンテーション及び日本語研修を企画、実施するとともに、研修活動及び滞在生活の円滑化を図るため、地域住民や小中学生等との交流を主体とした福利厚生事業を企画、実施する④図書資料情報整備＝北海道国際センター(札幌)図書資料室の管理運営業務を受託し、図書資料の収集、整理、保管のほか、図書資料や国際協力に関する各種情報の提供業務を行う。

平成14年度　特別会計収支予算（単位：円）

[収入の部]

科目	予算額
施設借上料収入	83,554,000
施設利用料収入	163,748,000
負担金収入	29,628,000
研修等収入	168,682,000
研修事業収入	91,498,000
研修付帯事業収入	77,184,000
前期繰越収支差額	0
収入合計	445,612,000

[支出の部]

科目	予算額
管理費	57,000,000
運営費	283,889,000
研修費	104,723,000
研修事業費	72,475,000
研修付帯費	32,248,000
当期支出合計	445,612,000

南米諸国に移転する。

出版事業

①季刊誌「Hoppoken（北方圏）」を119号から122号まで４回発行する。うち120号を創刊30周年記念号とし、特別企画記事を掲載する②国際協力情報紙「であい」を25号から28号まで４回発行する③「2002年報」を発刊し、会員などに配布する。

講演会等事業

《国際会議》

第18回北方圏国際流氷シンポジウム＝北海道と北方沿岸諸国の冬に共通するテーマである流氷と気象に関する学術研究の国際シンポジウムを同実行委員会（紋別市等）と共催する（２月・紋別市）。

《講演会等》

①国際理解講演会（北方圏センター25年記念）＝北方圏センター発足25年を記念し、本道の国際化の一層の推進を図るため、市町村の協力を得ながら国際理解や国際交流、国際協力と地域の役割等についての理解を深める講演会を開催する②国際交流定例懇談会＝北海道国際女性協会と共催して北海道在住及び来道の外国人をゲストに、国際交流定例懇談会を開催する。

交流事業

①留学生交流支援事業「留学生ふれあいトークin北海道」＝道内の大学等に学ぶ留学生に対し、道内の市町村を２泊３日の日程で訪問する小旅行をアレンジし、本道の自然・風土・産業に対する理解を深めてもらうとともに、地域の人々との交流、親善を図る②国際交流ふれあい事業「留学生ふれあい交流in北海道」＝道内の各地で四季折々に繰り広げられる地域イベントへ、留学生の参加を促し、ホームステイなどを通じて地域の人々との交流を図るとともに、当該地の人々にあっては異文化の理解と国際交流を身近に感じてもらうため、㈶中島記念国際交流財団の支援と㈶日本国際教育協会、開催地の市町村、国際交流団体等の協力を得て開催する③北海道海外派遣事業＝生活環境、地域文化など諸外国の先進事例について、現地視察や関係者との意見交換などを通じて、本道との差異や取り組み方などについて研修するとともに、NGOの支援状況や青年海外協力隊などの国際協力の在り方について理解を深めることにより、地域における国際化の促進と国際協力の推進に資する。具体的な事業として▽国際交流研修＝派遣国・カナダ、アメリカ、派遣人員・12名（団長団２名、団員10名）、派遣期間・12日間▽国際協力研修＝派遣国・タイ、ベトナム、派遣人員・12名（団長団２名、団員10名）、派遣期間・10日間④アルバータ州青年研修受入事業＝北海道の姉妹州であるカナダ・アルバータ州から青年１名を受け入れ、道内の教育機関等での研修を通じて、学術・専門知識の習得を支援することにより、北海道とアルバータ州との交流の一層の促進を図る（４月から１年間）⑤通訳ボランティア派遣事業＝道内市町村、国際交流団体等に「通訳ボランティア派遣事業」の周知を図り、交流会やイベントなどの交流事業における活用を促して、地域の国際化の充実に努める⑥湧別クロスカントリースキー大会＝第18回湧別原野オホーツク100kmクロスカントリースキー大会実行委員会と共催し、北海道在住外国人の参加をアレンジして、地域イベントに協力する⑦北海道外国訪問団受入事業＝ブラジル移住者の子弟を受け入れ、父祖の地への訪問や本道青年との交歓・交流をはじめ、教育・文化施設の見学、ホームステイなどを行い、本道とブラジルとの友好親善と相互理解を深める

北方圏交流研修事業

①ロシア極東の企業経営指導者

平成14年度　一般会計収支予算（単位：円）

［収入の部］

科目	予算額
会費収入	37,000,000
補助金収入	230,297,000
北海道補助金	180,284,000
その他補助金	50,013,000
負担金収入	7,478,000
施設利用料収入	8,000,000
事業収入	125,276,000
調査研究収入	2,700,000
北方圏誌収入	7,250,000
北方圏交流研修収入	22,642,000
海外研修員受入事業収入	61,012,000
地元施設利用料収入	21,740,000
国際センター情報整備事業収入	9,932,000
積立金取崩収入	2,954,000
雑収入	500,000
前年繰越収支差額	10,088,783
収入合計	421,593,783

［支出の部］

科目	予算額
管理費	182,962,000
事業費	238,131,000
情報収集提供事業費	16,657,000
調査研究費	3,900,000
北方圏誌費	12,900,000
出版費	1,000,000
講演会等費	2,820,000
交流費	33,159,000
北方圏交流研修費	16,891,000
国際センター利用促進費	83,554,000
国際協力推進費	6,888,000
海外研修員受入事業費	60,362,000
予備費	500,783
支出合計	421,593,783

上一枝氏［カラ（西アフリカ農村自立協力会）代表］、第２部トーク＆アメリカンドラムミニコンサート「アフリカの音楽と暮らし」出演者：いいだともき氏［ジンベインストラクター］、樋口竹広氏［青年海外協力隊OB］）▽２月23日・NGO活動環境整備啓発セミナー＝共催：外務省（第１部テーマ「ODAとNGOの連携」講師：奥村彰大氏［外務省経済協力局民間援助支援室事務官］、第２部テーマ「NGO・NPOのマネジメント～課題解決の手法～」講師：川北秀人氏［IIHEO（人と組織と地球のための国際研究所）代表］）

⑶国際協力推進団体懇話会＝道内で国際協力活動を行う諸団体と意見交換し、活動等について相互理解を深めるとともに連携強化を図った（札幌　６月６日　18団体、２月23日　10団体）。

⑷国際理解促進事業＝次代を担う少年少女の国際理解を促進するため、地域の小中学生や教師を対象に北海道国際センターの研修員との交流事業を実施した（札幌国際センター４回。うち地方開催３回（北村、積丹町、静内町）・意見交換会及び交流会１回）、帯広国際センター６回（中学校２回・小学校２回・国際理解集会２回）。

⑸自治体職員協力交流事業＝海外の地方自治体職員を研修員として受け入れ、北海道の行政事務や技術を習得させ、受入対象国の人づくりや地域の発展に貢献するなど国際協力を進めるとともに、受入対象国との新たな交流や友好親善を図った（総務省所管の協力交流事業　１カ国１名・６月～12月・６カ月間・中国）。

⑹北海道海外技術研修員受入事業＝北海道（外務省補助事業）からの委員事業として、開発途上国から技術研修員を受け入れ、途上国が必要とする技術の習得及び道民との交流を進め、途上国の経済開発や人材育成に貢献するなど国際協力の推進を図った（７カ国13名・６月～３月・10カ月間・ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、チリ、ブータン、ネパール、中国）。

⑺サハリン州北海道人会子弟等技術研修生受入事業＝サハリン州から技術等の習得を目的とする研修生を受け入れ、同州の次世代を担う子弟の育成を図ることにより、北海道人会を支援し、サハリン州との交流を推進した（２名・６月～３月・10カ月間）。

国際センター運営事業

⑴国際センターの施設管理＝施設の適正な運営管理及び維持管理業務を行った。

⑵研修の実施＝JICA研修事業の受託に伴う研修カリキュラムの効果的な実施を図るため、受入機関との調整及び研修の進行管理を行った（受託研修コース　札幌国際センター14コース、帯広国際センター12コース）。

⑶研修関連業務の実施＝JICA研修関連業務の受託に伴うブリーフィング・オリエンテーション・日本語研修及び福利厚生事業を随時実施した。

⑷図書資料情報整備＝北海道国際センター（札幌）図書資料室の管理運営業務を受託し、図書資料の収集、整理、保管のほか、図書資料や国際協力に関する各種情報の提供業務を行った。

平成14年度事業計画

会員の拡大

北方圏諸国などとの交流を積極的に推進するとともに、各種事業の充実強化を図る。特に、地方での事業開催を進め、道民の理解と関心を高めて会員の拡大に努める。

情報収集提供事業

①北方圏諸国を始めとする情報、文献・資料、視聴覚資料を中心に、引き続き収集・整備を図る②北海道国際情報ネットワークとして開設した北方圏センター・ホームページを積極的に活用し、国際交流、国際協力等の各種情報の収集と提供の充実を図る。

調査研究事業

①道内主要市協賛調査＝北海道における広域行政、市町村合併の調査研究」②日本エネルギー経済研究所委託調査＝「北東アジア地域の国際天然ガスパイプライン敷設の可能性調査」③北海道／マサチューセッツ州・科学技術研究交流事業＝IDB・MIF（米州開発銀行・多数国間投資基金）を活用し、米国マサチューセッツ州の研究機関等との共同研究の成果を中

平成13年度　特別会計収支決算（単位：円）

[収入の部]

科　　目	予算額	決算額
施設借上料収入	91,929,000	90,220,136
施設利用料収入	180,984,000	174,652,782
負担金収入	32,367,000	31,383,509
研修等収入	187,898,000	189,525,141
研修事業収入	101,665,000	104,751,463
研修付帯事業収入	86,233,000	84,773,678
前期繰越収支差額	0	0
収入合計	493,178,000	485,781,568

[支出の部]

科　　目	予算額	決算額
管理費	65,000,000	50,797,753
人件費	65,000,000	50,797,753
運営費	306,183,000	315,345,413
運営管理費	306,183,000	315,345,413
研修費	121,995,000	119,638,402
研修事業費	80,529,000	84,798,974
研修付帯費	41,466,000	34,839,428
支出合計	493,178,000	485,781,568

生した米国における同時多発テロ事件により中止した。

北方圏交流研修事業

⑴ロシア極東の企業経営指導者育成支援事業（第10回）＝北海道からの委託事業として、ロシア極東の沿海地方、ハバロフスク地方、サハリン州から「観光業」の関係企業経営者及び幹部８名を受け入れ、経営等に関する講義主体の東京研修（通商産業省主催）４日間を経て、北海道の観光や観光開発に関する講義、企業等への視察・訪問等の研修を実施した。また、ロシア極東地方の観光の現状について理解を深める「ロシア極東観光トーク・イン」を開催して、道内企業と交流を図った（９月23日～10月８日）。

⑵北方四島交流（日本語習得研修）受入事業＝北方四島交流北海道推進委員会からの委託事業として、北方領土問題解決に向けての環境づくりを図るため、北方四島在住ロシア人10名（国後島４名、択捉島４名、色丹島２名）を札幌に招いて日本語の習得（合計150時間）を図るともにホームステイや市内視察、地方での国際交流団体との交流を通じて日本の社会や生活にふれ、さらに書道、茶道、折り紙、押し絵なども体験し、日本文化の理解を促し、相互理解と友好親善を深めた（５月18日～６月28日）。

国際交流団体との連携

国際交流団体連絡会議＝国際交流団体間の連携を深めることを目的に、各団体の活動状況などの報告や意見交換の会議を２回開催した。第１回は、網走地区内の国際交流団体７団体９名の参加を得て開催した（11月15日　北見ビッツアークホテル）。第２回は、石狩地区、空知地区、胆振地区の国際交流団体11団体17名の参加を得て開催した（12月１日　石狩市総合保健福祉センター）。

国際協力事業

⑴文献、パソコンネットによる情報収集＝国際協力関係機関や団体が発行する定期刊行物をはじめ、国際協力に関する文献、途上国の国情等に関する情報収集を行い、各種照会等に対応するための整備を行った。

⑵国際協力セミナー＝国際協力活動促進のため、NGOの代表者等を講師に招いてセミナーを開催した。▽10月21日・アフリカを知るセミナー（第１部講演会「私のライフワーク：マリ共和国の人々と共に歩み、学ぶ日々」講師：村

CREATIVE AGENCY
uniFast® CO.,LTD.
東京本社・札幌支店・大阪支店・福岡支店
ユニファースト株式会社®
セールス・プロモーション、グッズ企画、設計、制作
SAPPORO OFFICE
9FSAPPORO BLDG.3 NISHI, KITA2JYO CHUO-KU, SAPPORO-SHI,HOKKAIDO, JAPAN 060-0002
☎011-241-6333
Ⓕ011-241-6300
HEAD OFFICE
3-4-3ASAKUSABASHI TAITO-KU,TOKYO, JAPAN 111-0053
☎03-3865-1066
Ⓕ03-3865-0187
札幌支店
〒060-0002　札幌市中央区北２条西３丁目札幌ビル９Ｆ
TEL011-241-6333（代）FAX011-241-6300
東京本社
〒111-0053
東京都台東区浅草橋3-4-3
TEL03-3865-1066(代）FAX03-3865-0187

平成13年度　一般会計収支決算（単位：円）

[収入の部]

科　　目	補正後予算額	決　算　額
会費収入	40,000,000	36,918,992
補助金収入	172,724,000	166,876,412
北海道補助金	168,658,000	164,003,000
その他補助金	4,066,000	2,873,412
負担金収入	5,843,000	5,603,559
施設利用収入	10,000,000	7,442,200
事業収入	146,851,000	140,767,288
調査研究収入	7,347,000	7,347,000
北方圏誌収入	8,357,000	7,047,471
北方圏交流研修収入	26,505,000	21,645,376
海外研修員受入事業収入	69,155,000	66,294,033
地元施設利用収入	25,875,000	28,821,136
国際センター情報整備事業収入	9,612,000	9,612,272
積立金取崩収入	2,954,000	2,954,000
雑収入	1,800,000	1,494,574
収入合計	391,996,195	373,881,220

[支出の部]

科　　目	補正後予算額	決　算　額
管理費	140,359,000	134,988,193
事業費	250,637,000	228,804,244
情報収集提供事業費	19,514,000	18,647,891
調査研究費	7,356,000	7,028,948
北方圏誌費	14,031,000	13,223,727
出版費	1,214,000	973,471
講演会等費	4,416,000	2,727,102
交流費	17,524,000	9,912,146
北方圏交流研修費	21,188,000	15,467,018
国際センター利用促進費	91,929,000	90,220,136
国際協力推進費	5,060,000	5,059,772
海外研修員受入事業費	68,405,000	65,544,033
予備費	1,000,195	0
支出合計	391,996,195	363,792,437

族が、砂川市民おどり（パレード）に参加し、１泊２日のホームステイ、ジャリン子（子供）国際交流、ソバ打ち体験など通して、市民との交流や相互の理解を深めた（８月24日～26日・砂川市）②留学生ふれあい交流inサンタランド＝苫小牧市、北見市、帯広市の大学に学ぶ９カ国32名の留学生が、広尾町民と共にイルミネーションも豊かに幻想的に飾られたサンタランドでのクリスマスツリー点灯式へ参加し、道立広尾高校生徒会との交流、サンタ・キャンドルの製作体験、広尾町海洋水族博物館等の視察・見学を通して、町民との交流や相互の理解を深めた（11月16日～18日・広尾町）で開催した。

⑶留学生フォーラム「北海道へのメッセージ」～北の大地の留学生から～北海道内の大学等の高等教育機関で学ぶ留学生が一堂に会し、留学生相互の交流と道民の留学生への理解を深める機械とするため、道内12大学・２高専に学ぶ12カ国１地域26名の留学生の出席を得て、北海道で過ごす留学生活の意義や隘路、北海道への提言などについて話し合うフォーラムを、㈶中島記念国際交流財団の支援と㈶日本国際教育協会の協力を得て開催した。（３月21日～24日・北方圏センター）

⑷アルバータ州青年研修受入事業＝北海道と友好提携関係にあるカナダのアルバータ州から青年１名を受け入れ、北海道大学工学部等での研修を通じて、学術・専門知識の習得を支援することにより、北海道とアルバータ州との交流の一層の促進を図った。

⑸ボランティア通訳者登録事業＝道内各地で開催される交流やイベントなど、各種交流事業において地元の人々と外国人との交流の媒体となる英語、ロシア語、中国語の通訳ボランティアの登録を継続するとともに、今年度は英語２名、ロシア語５名、中国語１名を、各地で開催された交流事業に派遣した。

⑹第17回湧別原野オホーツク100㌔クロスカントリースキー大会＝同実行委員会と共催して、北海道在住外国人（留学生を含む）４カ国１地域20名の参加をアレンジし、地域の国際交流事業に協力した（２月23日～24日）。

⑺北方圏センター会員の北欧４カ国派遣＝北方圏センター会員２名をノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマークの北欧４カ国に派遣した（８月21日～29日）。

⑻北海道海外派遣事業＝北欧、カナダ（国際交流研修）及び東南アジア（国際協力研修）地域に派遣予定していた北海道の青年の海外派遣は、平成13年９月11日に発

講演会等事業

《国際会議》

第17回北方圏国際シンポジウム「オホーツク海＆流氷」＝紋別市、オホーツク海・氷海研究グループと共催して、アメリカ、ロシア等７カ国25名の海外研究者と国内の研究者を招いて、海洋及び流氷、氷海に関する国際シンポジウムを開催した（２月24日～28日、紋別市民会館・紋別市文化会館）。

《セミナー・講演会等》

⑴国際理解講演会　講師：金美齢氏［評論家］＝北海道の国際化の推進と道民の国際意識の向上に寄与することを目的に、苫小牧市（共催：苫小牧市、苫小牧国際交流関係連絡協議会、後援：北海道）と静内町（共催：静内町、静内町教育委員会、後援：北海道、静内姉妹都市交流委員会、静内インターナショナルクラブ、静内ライオンズクラブ、静内ロータリークラブ、国際ソロプチミスト静内）の２カ所で開催した（２月14日・苫小牧グランドホテルニュー王子／２月15日・ウェリントンホテル静内）。

⑵地球市民国際理解講座＝国際理解、国際交流、国際協力などをテーマとして、市町村及び同教育委員会、国際交流団体と協力・連携して６カ所①「国際協力って何だ」講師：立石善裕氏［JICA青年海外協力隊OB］＝７月27日・長万部町学習文化センター②「世界の文化は多種多様です」講師：ハワード・ターノフ氏［北海道医療大学教授］＝11月15日・北見ビッツアークホテル③「これからの国際交流について」講師：宮下孝之氏［外務省国内広報課長］＝12月１日・石狩市総合保健福祉センター④「発想の転換が地球人を育てる」講師：デボラ・デビッドソン氏［翻訳家］＝２月１日・美瑛町民センター⑤「発想の転換が地球人を育てる」講師：デボラ・デビッドソン氏［翻訳家］＝２月２日・朝日町サンライズホール⑥「スペインと日本との生活・文化の違い」講師：エンカルニータ荒井氏［スペイン語講師］＝２月20日・中頓別町民センター＝で開催した。

⑶NIRA研究報告シンポジウム＝平成13年度に実施した、NIRA（総合研究開発機構）助成研究「生態系を活かした循環型社会の構築」の研究成果について、調査研究の主対象地域となった浜中町で、町民を対象にシンポジウムを開催した（１月31日・霧多布湿原センター）。

⑷国際交流定例懇談会＝北海道国際女性協会と共催して、北海道在住及び来道の外国人をゲストに招き、国際交流定例懇談会を５回開催した(北方圏センター会議室)。

交流事業

⑴留学生交流支援「ふれあいトークin北海道」＝北海道で学ぶ留学生への交流支援事業として、道内各地域の人々との交流や地域の自然や産業・文化への理解を深めるため開催した。札幌市及び札幌圏、苫小牧市、深川市の大学等に学ぶ留学生３カ国27名が参加し、「北海道立青年の家」(深川市）と「国立大雪青年の家」(美瑛町）で、深川のYOSAKOIチームとの交流、七宝焼の創作体験やフロア・カーリングなど、また、優佳良織工芸館や富良野ワイン工場の見学を通して、北海道への理解を深めた（10月26日～28日・深川市、美瑛町)。

⑵国際交流ふれあい事業＝北海道で学ぶ留学生が道内各地の地域イベントへ参加すると共に、地域の人々との交流と相互理解を図ることを目的として、砂川市（共催：砂川市国際交流ふれあい事業世話人会、後援：砂川市、砂川市教育委員会）と広尾町（後援：広尾町、広尾町教育委員会）の２カ所①市民おどりふれあい交流inすながわ＝札幌市内の大学等に学ぶ６カ国１地域28名の留学生とその家

屋外広告業許可第571号
大型サイン・ネオン・内外部各種サイン・企画・設計・施工
サイン＆ディスプレイ
UNITY AD
有限会社 ユニティ・アド
〒065-0010 札幌市東区北10条東6丁目15―9　1番館1404
TEL・FAX　011―733―6855
Email：unity-ad@ex.me-h.ne.jp

平成13年度事業実績

会　員

平成12（2000）年度末の会員は、個人854、法人・団体1,262、計2,116であったが、平成13（2001）年度末現在では、個人799、法人・団体1,201、計2,000となった。

情報収集提供事業

⑴北方圏地域に関する図書、各種資料の収集、整備を引き続き進めた。また、各種視聴覚資料・教材の収集整備に努め、会員の利用に供した。⑵「北海道国際情報ネットワーク」として開設した北方圏センターのホームページ（http://www.nrc.or.jp/）は、アクセス件数が平成14年３月末日で約38万７千件に達した。特に国際交流・協力に関する各種データや在住外国人向け情報等に関心が高い。また「外国語が使える病院編」のiモード版や新コンテンツの追加に伴い、トップページ他をリニューアルした。さらに、このホームページを紹介するリフレットを作成し、会員をはじめ国際交流・協力に関わる機関や団体等に配布した。

調査研究事業

⑴道内主要市協賛調査：「高度情報化社会における地方自治体としての取り組み」をテーマに地方公共団体のIT化への取り組みや対応策等について、内外の先進事例を調査し、今後の方策やあり方、提言等を報告書にまとめた。⑵NIRA（総合研究開発機構）助成研究:「生態系を活かした循環型社会の構築」をテーマに「浜中町」という特定地域の一次産業（酪農、水産、林業）における生物とそれらをとり囲む環境との循環システムについて考察し、農村型地域循環システムの総合評価を行い、生態系を活かした循環型社会の構築に必要な要件や今後の課題について検討。⑶JICA委託調査:「北海道の地域技術リソース（農協の役割）」＝前年度の委託調査「農業を中心とした地域振興の事例調査」で、農業を基幹産業とする北海道内市町村の「農協・JA」が農家の経営や生活の中で地域農業や農産物加工等、地場産業の振興を通じて地域の経済・社会の発展に大きく貢献をしていることが明らかになったが、更に深化させるため引き続き北海道の農業や地域の振興に農協・JAが果した役割や機能等について調査研究を行った。⑷MIFプロジェクト：米州開発銀行（IDB）、多数国間投資基金（MIF）を活用し、米国マサチューセッツ州内の研究機関と道内研究機関との共同研究の成果を中南米諸国へ技術移転する事業として、新たなテーマや対象国について、米国・マサチューセッツ・センター・オブ・エクセレンス（MCE）及び米州開発銀行と引き続き協議した。

出版事業

⑴北方圏地域を中心とした諸外国の生活、文化、経済、学術など様々な分野の交流情報を紹介する季刊誌「Hoppoken（北方圏）」を115号から118号まで各3,700～3,800部発行し、会員のほか全国の国際交流団体や道内の大学図書館、市町村などに贈呈した。⑵国際協力や途上国に対する道民の理解を促進するために、北海道国際センターや道内の国際協力団体の活動などを紹介する季刊紙「であい」を21号から24号まで各3,000部を発行し、道内の国際交流・国際協力団体や関係地方公共団体に配布した。⑶北方圏センター、北方圏交流基金の組織概要や事業内容などをまとめた「2001年報」を3,500部発行し、会員のほか関係団体、当センターの来訪者などに提供した。

企業の販売促進をサポート！

プレミアム・ノベルティ
その他ギフト用品・カレンダー
うちわ・タオル・企画、制作

TOMITA.corp

創業大正14年　株式会社　丸富　富田商会

〒060-0041　札幌市中央区大通東5丁目4富田ビル　TEL.(011) 231-4824　FAX.(011) 222-4854

平成14年度北方圏センター総会

北方圏センター総会

社団法人・北方圏センターの平成14年度総会が５月16日、札幌市中央区の札幌プリンスホテル国際館「パミール」で、会員136人、委任状1090人が出席して開かれた。泉誠二会長のあいさつ（要旨参照）の後、報告、議事に入り、学校の総合時間等に実施する国際理解教室の開催に対し助言、指導するなどの「国際交流団体活性化促進事業」等を盛り込んだ14年度事業計画案、４億2159万円余の一般会計など14年度収支予算案のほか、13年度事業実績、同収支決算がそれぞれ承認された。

また、新たな理事に佐々木正丞（北海道瓦斯社長）、森孝志（朝日新聞北海道支社長）、町田真英（前北海道企業局長）の３氏、監事に高橋茂氏（北海道体育協会専務理事）が選任された。町田氏は北方圏センター副会長兼専務理事に就任、２年間副会長兼専務理事を務めた齋藤靖士氏は退任した。

総会に先立ち開かれた理事会で辻井達一理事が、センターの図書資料室を有効に活用し、学生ら若者を会員に取り込む積極的な方策を図るよう提案。曽根勇治常務理事も「若者に対する図書資料室の利用提供を考えたい」と応えた。

会長あいさつ

新たな世紀がスタートして２年目、国際社会の相互依存関係が一層深まり、世界の動きが地域社会にも直接大きな影響を及ぼしてきております。このため、道民一人ひとりが広く世界に目を向け、国際社会のインパクトを積極的に生かし、地域の活性化を促していくことがますます必要になってきております。

北方圏センターは、青年の海外派遣や国際理解講演会の開催、地域の人々と留学生とのふれあい事業をはじめ、開発途上国からの技術研修員の受け入れなどを通して本道の国際化の推進に取り組んでまいりました。本年度から、小中学校で総合的な学習の時間が導入されるのを機会に、次世代の担い手の育成にも取り組み、市町村や地域の国際交流団体と提携して地域国際化協会としての役割を果たしてまいりたいと考えております。財政的、体制的に厳しい環境にありますが、引き続き事業を推進出来るよう創意工夫を重ねてまいりたいと考えております。（要旨）

平成14年度親睦パーティー

恒例の会員親睦交流パーティーが、総会後の午後５時半から開かれた。

在外公館からの来賓として魏能濤（ウェイネンタオ）在札幌中華人民共和国総領事館領事、V.N.ノソフ・在札幌ロシア連邦総領事館副領事が出席。また、顧問の堀達也知事も顔を見せた。約160人の出席者は会食をしながら歓談し、会員招待旅行（北米３大自然紀行ナイアガラの滝とカナディアンロッキー＆グランドキャニオン８日間」）の抽選会も楽しんだ。

なお、招待旅行には山内英世さん（札幌市中央区）と高見道成さん（帯広市）が、８月30日から８日間のツアーに参加する。

会員親睦交流パーティー

招待旅行を射止めた山内英世氏（左）

「であい」25号発行

北方圏センターの国際協力情報紙「であい」の25号が、６月５日に発行された。

今号から表紙のデザインを一新したほか、国際協力や国際理解への熱意が一段と高まることを願い、新たに道内の小・中学校等にも配布することになった。特集は、国際協力事業団(JICA)北海道国際センター(札幌)図書資料室紹介。

ご希望の方は、当センター出版部まで。無料。

４月12日

カナダ・アルバータ州青年研修生
みな・ジュディ・吉開さん

北方圏センターが支援している、北海道の姉妹州、カナダ・アルバータ州からの青年研修生として来道した。青年研修制度は、同州から専門的な学術・技術等の習得を目指す青年を受け入れ、本人の希望に合わせて研修プログラムを組むなど支援しているもので、約１年間、北海道で研修する。

両親とも北海道にゆかりが深く、みなさんは北海道で生まれて幼い時に両親と共に移住した。空知管内におばあちゃんもいて、「北海道に来たのはこれで４回目くらいです」。カナダで教育を受けたが、日本語補習校で日本語を学んでいるので言葉にはまったく不自由はない。

ボランティアや作業交換システムなど都市のコミュニティー活動に関心があり、今回は北海道大学の大学院で研究生として学ぶ。

４月22日

リーダーMr. Lasse Molin（会社社長、ヘルシンキ西北ロータリークラブ代表）、ニナ・ロヒコスキさん（経済、ビジネスを修了。25歳）、タイナ・カーサライネン（ハイテク関連企業の広報、広告を担当。31歳）、トゥオモ・ルンニキヴィ（医師。27歳）、ベンジャミン・グリペンベルグ（財政コンサルタント。27歳）
表敬訪問

札幌西北ロータリークラブ（井口光雄会長）とフィンランド・ヘルシンキ西北ロータリークラブとの中堅ビジネスマン研究交流事業（クラブGSE交流事業）で来道。一部ホームステイもしながら札幌を中心に様々な産業分野を視察、研修した。

表敬を受けた齋藤副会長兼専務理事（当時）が、エネルギー分野の調査研究に始まり、生活分野においても北欧など各国の先進事例を学んできた北方圏構想の現在に至るまでの経緯を説明したが、逆にフィンランド側からはこれだけの人口をもつ北海道の事例に自分たちも習うべきことも多いというエールが返された。

団長以外は、全員、北海道を含めて日本は初めてということで、若いエネルギーで見聞を深めた。２週間の研修期間中、週末を利用してクロスカントリースキーや層雲峡温泉などでくつろいだ時間も過ごした。

５月15日

大使(左)、専務理事(右)

クリスター・クムリーン
駐日スウェーデン大使
エーランド・リングボリィ
スウェーデン文化交流協会専務理事　表敬訪問

㈶スウェーデン交流センターの2002年度理事会・評議員会出席のため、来道。エーランド・リングボリィ専務理事が、理事会・評議員会後に行われた講演会で「スウェーデン文化交流協会と国の繁栄のためのスウェーデンモデル」と題し講演。大使らは、同会の会場が当センターの国際会議場だったため、会議の合間に、齋藤副会長兼専務理事と懇談した。

編集後記

◇創刊30周年記念号をお届けすることができました。協力いただいた多くの方々に感謝し、今はホッとした気持ちでいっぱいです。編集作業段階で、それこそ創刊号からこれまでの小誌を繰ってみましたが、ある時期まではっきりした目的意識に支えられた、時々の編集者たちの熱い息吹を感じました。省みて……。

「新しい風を起こしてくれることを期待する」、また「30年を区切りに新しい世紀に対応できるような変身ないしは脱皮を期待したい」などの励ましを、これからの糧にして、と気を引き締めます。

◇特別企画の「留学生フォーラム」は、誌面の都合から、膨大な発言を割愛せざるを得ませんでした。長尺の、まだ手の入らない全文を読んでいるうち、生活習慣の違う、つまりは文化の違う国で暮らす留学生の必死さや哀愁に触れた気がして、胸に迫るものがありました。削り過ぎて、巧く伝わっているでしょうか。

◇同じく道内大学生らの「異文化理解」は、多少コンセプトに曖昧さがあったものの、結局、「異文化を理解することの本当の意味」に行き着いた気がします。「個人一人一人の関係の積み重ね」とする若い人たちの意見に耳を傾けながら、臈長けた（？）中年は僅かばかりの経験を嵩に、利害がぶっかった時は、などと挫くような感想を抱きましたが、やはり基本は「相互信頼」かと、共感するところ大です。

◇今年は、日中国交正常化、沖縄返還から、それぞれ30周年でもありました。（新）

◇幸運にもW杯で札幌開催の１試合を見ることができた。札幌はいろいろな意味で沸いた。

その直後、親しかった従姉が急逝した。生前の意志を尊重し花に囲まれた音楽葬で見送った。

今原稿書きの合間にふっと窓の外に目を向けると、二つの音が私の脳裏に交錯する。静かな斎場の空間を満たしたショパンやリストのピアノ曲、その途切れるかのように続いていくピアニッシモ、そして札幌ドームでイングランド・サポーター席から沸き上がってきた雄叫びと鳴動。相対する音が耳から離れない。

切なく忙しい６月であった。（優）

Hoppoken 北方圏

第120号

定価525円（送料240円）
（消費税込）

会員無料配布

二〇〇二年七月五日発行（年４回・季刊）
発行所　札幌市中央区北三西七（道庁別館）
㈳北方圏センター　☎221－7840
発行者　林　敏明
制作　㈱電通北海道
印刷　山藤印刷株式会社
購読御希望の方は郵便振替で。
一年二、一〇〇円（送料別）
郵便振替口座　〇二七八〇－二－二四二一一

会員募集　お知り合いに入会をお誘い下さい

北方圏センター（会長・泉　誠二）は、北国にふさわしい北海道の生活、文化、産業を育てあげるべく、会員の会費で運営されています。

●法人及び団体の年会費　１口１万円

●個　　人の年会費　１口５千円

ご連絡いただければ、申込書用紙等をお送りいたします。ご入会は、電話でもお受けいたします。

北方圏センターへの入会は……

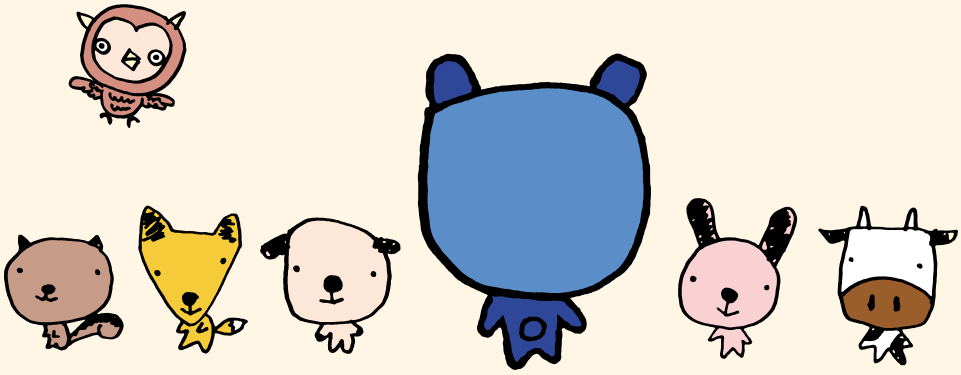
北方圏センターの趣旨や活動に賛同される方は、どなたでも会員になれます。

（会員の特典）

シンボルマークの会員証とバッジ、季刊「北方圏」誌（新しい情報）、年報、資料冊子等の無料配布。ホームページの特別検索利用。北方圏案内パンフレット類の贈呈。外国事情、図書資料の利用。ラウンジの利用。調査報告書等出版物の特価頒布。法人会員の施設利用料割引。懇談会、セミナー、外国人との交流、視察旅行等参加ご案内。視察訪問先等の情報提供など。

何よりも北国の暮らしや産業を豊かにする活動に参加し、ともに育てあげていこうというお気持ちでのご入会をお待ちしています。

社団法人 **北方圏センター**
〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目（道庁別館）
☎(011)221-7840　FAX(011)221-7845
ホームページ　http://www.nrc.or.jp　E-mail　glpn@nrc.or.jp（総務企画部）



だ〜れだ？

ほっくーです。

はじめまして
ほっくーです。
明日のこと、
暮らしのこと、
これから私たちと
ごいっしょに。

HOKUYOファミリー
ほっくーと仲間たち

北洋銀行

季刊 北方圏 第120号
平成14年7月発行（北方圏センター（札幌市中央区北3条西7丁目）発行人／林 敏明
定価525円（本体500円）

まるごと安心北海道を、もっと食べよう。

北海道育ちは、新鮮、安全、クリーン。

食卓に並ぶカレーは子供も大人にも人気のメニュー。実はこのカレーこそが、まるごと北海道の味わい。じゃがいも、たまねぎ、にんじん、などの生産量は日本一を誇り、お米のおいしさもトップクラス。牛肉や豚肉といった畜産物は安全な飼育環境のもとではぐくまれ、おいしさにも定評があります。こうした安全で良質な農畜産物は、北海道ならではの広大な大地とさわやかな気候、そして、きれいな水といった恵まれた自然環境のもとではぐくまれています。また、農薬の使用量は他府県平均の半分以下となっています。「身土不二（しんどふじ）」という言葉をご存じでしょうか。地元で育ったものを食べることは、新鮮で安全、そして身体にも良いという考え方です。そこで身近な場所でとれた農畜産物をすすんで食べようという「愛食運動」が全道で広がっています。地元の農畜産物を食べることは、北海道農業をもっと元気にすることにもつながります。だから私たちみんなが道産品にこだわり、「愛食」をひろめていくことが大切なんですね。もっと「愛食」を合言葉に、北海道育ちを食べよう。

北海道

試される大地 北海道